
MAINE TRAFFIC

紫電改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAINETRAFFIC

【Nコード】

N0514X

【作者名】

紫電改

【あらすじ】

静岡県に住む鉄道大好き少年。この小説は彼の生きがいをも小説にしたものです。

中学生の彼の心が回り始める。

目標は・・・一人前の運転手。

なおこのシリーズでは岸川高校鉄道研究部のエピソードです。

1列車 鉄道少年（前書き）

この小説はフィクションです。

なお、鉄道に興味のある方にはこのことを頭の中に入れて読んでいただければ幸いです。この小説には現実と違う個所がございます。どうかご了承ください。

1列車 鉄道少年

僕は静岡県に住んでいるどこにでもいる中学3年生。スポーツは全くダメ、勉強はできるとは思いたくない少年である。そんな自分であるが、一つだけ自分を輝かせることができるものがある。それは鉄道である。

僕の将来はもう決まっている。それもそこ以外考えてもない。だが、そこへ行くためには高校をかまさなければ行けないことも分かっている。もちろんその高校生活にも鉄道が絡んだ方が面白いと思っているのは事実。そのためにはどこに行ったらいいものがずっと考え悩んでいるが、めったにパソコンでそんなこと調べていない。だが、暇があると自分の家にある離れにこもって、模型で遊んでしまっている。中学3年生の6月となれば、僕は最悪の中学生かもしれない。いや、そうに違いない。

と、ここまででは前ふり。ここから本題に入るのだが、まだ自分の名前を言っていなかった。永島智暉^{ながしまともむね}。これが僕の名前である。

6月8日。今日は久しぶりにフリーな日だ……。久しぶりというのはウソ。本当は毎日フリーなのだ。いつものように離れに行つて模型を走らせている。言っていなかったが、僕の離れに展開しているのは新幹線と複々線の在来線が走っている鉄道模型。周回の大きさは実物にたとえて10キロぐらいになるといふほどの大きさ。車両は別の部屋に置かれている。ここには折りたたみケースに入つた鉄道模型が30箱入っている。内訳は22箱が父のもの。3箱が祖父のもの。2箱が従兄のもの。3箱が自分のものだ。レイアウトは大きすぎだし、車両は持ちすぎではと思つているかもしれないが、自分の持っている量などまだひよこ。いや、卵にもなっていないかな……。世の中にはそう言う人もいるくらいだ。ここで前述した通りの時に遊んでいる。もちろん、やっていて飽きたことは一度もない。

遊んでいると離れのドアが開く音がした。顔を上げてみると女の子がそこに立っている。僕と顔つきはよく似ている。

「ナガシィ。6月14日に岸川きしかわっていう高校で文化祭があるんだけど、見に行かない。」

第一声はこれか……。彼女は坂口萌さかぐちもえ。僕の理解度が一番いい人だ。

「ええー、文化祭。行くの面倒くせえじゃん。」

「そう言うと思ったよ。……でも、これ見たら行くっきゃないでしよってなると思うな。」

「どういう意味だよ。」

聞き返すと萌もえは何のためらいもなくモジュールを置いている長机の下をくぐった。ためらいがないのは当然だろう。小学校の時はほぼ毎日。中学になってからだ土日ほぼ毎回と多いからだ。僕の近くまで来ると、手に持っていた岸川きしかわ高校のパンフレットを差し出した。受け取って中をサラサラつとみてみる。するとあるところが目にとまった。

「でしょ。」

「……。」

「ねっ。だから行こうよ。絶対満足できること間違いなしだから。確かにそうなのだが。この手の部活があるというのは今初めて知ったことだ。」

「よしっ。決めた。行こっか。……で、何日だっけ。」

「忘れるの早いねえ。6月14日。パンフレットの裏に書いてあるけど、遠江急行えんきゅうの涼ノ宮すずのみやか遠州鉄道えんてつの助信すけのぶから行くのが近いんだって。どうする。」

「じゃあ遠州鉄道えんてつで行って遠江急行えんきゅうで帰ってくる。」

「なんでもいいよ。そこは任せる。」

「つかその文化祭何時から始まるんだよ。」

「あっ、言い忘れてた。9時からだよ。それで終わりが15時。」

「15時終わんのかよ。もうちょっと長くやれよ。」

「まあ、そこ文句言ってもしょうがないし……。じゃあ行くって

ことでいいね。」

言い終わるとグルッと部屋の中を見まわした。ほぼ毎日来ている状態で見るものなんてないはずなのだと思うっている人は分かっている。この部屋にあるのは鉄道模型のモジュールレイアウト。つまり探しているのは・・・。

「ナガシイ。あすこに走ってる寝台特急何。」「北斗星」・・・じゃないか。「さくら」かなあ。それとも「あさかぜ」。

目的のものを見つけて僕に問いをした。

「「出雲」だよ。」

「えっ、「出雲」。」

今度はじっくり見て、走っているものを確認する。その姿がはつきりしてくると、

「あっ、ホントだ。よく見たら24系引っ張ってたのがEF66じゃなくてEF65だった。」

「だろ。EF66とEF65じゃまず見た感じが違うんだから。」

「そう言われればそうでした。EF65は箱っていう感じだもんね。その箱っていう感じで赤いのがEF81だけ。」

「・・・そんな感じでいいよ。」

立って、長机の下をくぐって車両庫のほうへ歩いて行く。

「えっ、もう車両換えるの。換えるんだったらさあ「カシオペア」にしてよ。」

「うーん・・・。どうしようかな。」

車両庫の奥に入って従兄の箱を見つけて中身を出す。

（あれは貨物を取ってくるね。高速貨物かな。それともタンク貨物。いや、紙・・・。）

12両編成用の箱を見つけて2つ取りだす。とりあえず中身を確認して、次は機関車を探した。機関車は地元のEF210（桃太郎）をはじめとする機関車を大勢引っ張り出した。機関車の次は機関車に対応する車両を探す。例えば、EF210が貨物列車を牽引している時は313系や223系など東海道本線を走っている車両。E

F64が重連^{じゅうれん}でタンク貨物を牽引している時は383系「特急しなの」など中央本線^{ちゅうおうほんせん}を走っている車両という風にする。その車両を一つか二つ見つけて、戻った。

「やっぱり「カシオペア」は持ってきてくれないんだ。」

「その代わりにもっと面白いもん持って来たぞ。貨物だ。」

「また26両やる気。準備するだけでも疲れない26両って。」

「26両以外走らせる気ないし。それに萌^{もえ}が手伝うからそんなに関係ないじゃん。」

車両の入った箱を萌^{もえ}に渡して、机をくぐる。中に入ると萌^{もえ}はすでに着発線荷役方式の貨物駅にいて車両を並べ始めている。その並べるのに合流して、4両5両と並べていく。その数が26になったところで、その前に機関車を連結する。スタートはDF200（レッドベアー）だ。

「「レッドベアー」だっけ。」

「ああ。」

「「ブルーベアー」とかいけないのかな。雷^{かみなり}ものは「レッドサンダー」と「ブルーサンダー」でちゃんというのに。」

「まあ、作らなかつただけだろ。じゃあ、もうちょつとしたら出発^{だす}ぞ。」

今まで走っていた「出雲^{いづみ}」を駅で止めて、車庫まで回送する。その回送が終わると貨物の番だ。貨物列車が停まっている線路に電氣が行くように変えて、コンローラーのブレーキを解除。マスコンを入れて、貨物駅を発車する。発車した後は放っておくだけ。走っていくところを子供のように追いつながら、その工程を見守る。やがて貨物列車は新幹線の高架橋^{こうかきょう}の下をくぐり、また新幹線の高架橋をくぐる。坂を上って鉄橋^{てつか}を通過。次に坂を下ってこのレイアウトの緩行線^{かんこうせん}の下をくぐる。緩行線の駅を通過した後また坂を上ってこのモジュールで一番大きい駅を通過。やがてまた元の貨物駅に戻ってくる。しばらくこの動作を繰り返して、EH500（金太郎）にバトンタッチ。また動作を繰り返して次の機関車へとバトンを渡してい

く。

「そろそろEF210（桃太郎）に変えない。」

「EF210（桃太郎）はまだ。次はEF510の北斗星色ほくとせいに引かせるんだから。」

「なんでそこでそれ。EF510の北斗星色ほくとせいも貨物引くけど、ED75から引き継ぐっていうことはないでしょ。つうか東北本線とうほくほんせん通ってきて常磐線じょうばんせんに入る貨物なんてあるの。」

「あるわけねえだろ。究極にありえない貨物やってんだから。」

「・・・。ねえ、ナガシイ。気になっただけださあ、日本で一番長い貨物ってどこからどこ結んで、どこをどう通ってるの。」

「知るか。多分東京とうきょうから西鹿児島にしかがしあたりまでじゃない。」

「こういう貨物列車もあるだろう。だが、この貨物列車は日本一ではない。日本一は札幌貨物さっぽろかもつと福岡貨物ふくおかかもつを結んでいる列車。走行路線は札幌さっぽろから千歳線ちとせせん、室蘭本線むろらんほんせん、函館本線はこだてほんせん、江差線えさしせん、津軽海峡線つがるかいきょうせん、奥羽本線おううほんせん、羽越本線うえつほんせん、信越本線しんえつほんせん、北陸本線ほくりくほんせん、湖西線こせいせん、東海道本線とうかいどうほんせん、山陽本線さんようほんせん、鹿児島本線かごしまほんせんの順だ。」

「それって「はやぶさ」とごっちゃになってない。」

速攻でツッコまれた。

「そうだな。でも、これって仕方ないんだよなあ。駿兄ちゃんしゅんけんも貨物マニアじゃないし。分かる人いないんだよなあ。」

「へえ。駿兄ちゃんしゅんけん貨物の模型結構持つてるから一見すると貨物マニアって感じるけど、違うんだ。」

「ああ、本人が言ってた。」

「ふうん・・・。」

お互い走っている車両に目を向ける。今走っている貨物列車は26両のコンテナ貨車にコンテナを満載している。当然ずっと満載では面白くない。

「そろそろ牽引機変えるかあ。」

「変えるんだったらコンテナ満載もやめない。」

「そうだな。じゃあ、長いタイプのコンテナと載せ替えるか。」
貨物駅に列車を止め、そこまで赴く。まずここまで牽引してきたED75を貨車から切り離し、ケースにしまう。次に後ろに続いているコンテナ貨車のコンテナを必要数外し、20フィートコンテナに載せ替えていく。この20フィートコンテナは1両の貨車に3個載る。載せ方も何パターンがあり、満載。12フィートコンテナを20フィートコンテナで挟む形。その逆。こういった方法。もしくは満載されているコンテナすべてを外し、そのままにするということだってある。僕は26両中18両にそれを施した。そのうち10両を何も載せていない状態にした。編成は満杯から一気にスカスカになった。

「空コキ多いなあ。」

「なんか別なほうがいいのか。もっと空コキ増やすか。」

「なんでそうするんだよ。もうちょつと空コキ減らすべきだよ。」

「常磐線だったらこんな感じなんじゃないの。あれ、EF510の北斗星色は。」
ほくとせいしやうく

もえ
萌の手にチラッと青い物体が見えた。真ん中には金色っぽいラインが入っている。

「おい、それ返せよ。」

見つかったということが分かっていたようなのですぐに応じる
と思いきや、

「せめて、あと2両増やしてくれないとヤダ。」

「空コキ。」

「違う。コンテナ載せてあるコキ。」

「外すのより載せるほうが面倒くさいんだよ。」

「知るか。載せろ。」

5秒ほどいがみ合って、

「最初はグー。ジャンケンポン。」

チヨキとチヨキであいこだ。

「あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あ

「そうだな。東海道本線って言ったらEF210（桃太郎）の王道だもんな。」

「その隣は313系。・・・ねえ、ナガシィ。5000番台（313系）2編成連結して、12両編成やってよ。223系みたいに。」
「気持ち悪い。やめろ。」

「やってよ。面白いじゃん。」

そう言いながら、萌は僕に近づき、わき腹を指でなぞった。

「やめろ。くすぐったいから。」

「ナガシィがやるって言ってくればやめるよ。」

「お前・・・」

「ねえどっち。やってくれるの。」

「はあ。今日だけだぞ。」

そう言うのと萌のくすぐり攻撃は約束通りなくなった。車両庫に行つて313系の箱を探す。車両庫には父の313系5000番台と従兄の313系5000番台がある。それを探し出して、車両庫から戻ってくる。

「はいよ。やるとは言ったけど、並べるとは言っていないからな。」

「・・・並べてくれたっていいじゃん。」

「ダメ。」

この言葉で萌はあきらめたらしい。自分で313系を並べ始めさっき言った通り12両編成にした。並べ終わると萌はコントローラーの位置まで来て、

「外回りは借りるね。言っとくけど、出してる間に貨物がぶつかるとてことないようにね。」

「大丈夫だって。さっき貨物駅通過したばかりだから。今鉄橋のところにいるし。」

「了解。」

車両基地のポイントコントローラーで313系が止まっている線路に電気を行かせる。次にコントローラーのつまみを回して、313系の発車を促す。それを確認すると、自分の運転するコントローラ

1のブレーキを解除。マスコンを入れて、出庫してくる313系を本線に乗せるよう電気をとる。313系が本線に乗るところ聞いてきた。

「ナガシイ。313系、脱線しないよねえ。」

「知るか。脱線するんだったら、どっちかの編成にモーターぶち込めばいいじゃん。駿兄ちゃんしゅんの「スーパー雷鳥」みたいに。」

「そうだね。もし、脱線したらそういうよ。」

「そういう・・・。まさか、自分じゃやりたくないって思っ
てない。」

「チェッ。ばれた。」

どうしても萌もえはそうしてほしかったらしい。舌打ちをした。

「チェッ。ばれたじゃなくて、自分でそれくらいできるだろ。」

「あー。何も聞こえません。」

「ウソつけ。」

このあと30分間ぐらい313系とEF210牽引の高速貨物列車を運転した。

他にも223系1000番台の12両編成と223系2000番台の12両編成の新快速しんかいそく。京浜東北線の209系と山手線やまのてせんのE231系など。いろんな列車を走らせていたらもう時間は5時。いつも思うことだが、気付くともう夕ごはんの時間だったりする時もある。時間が足らないのだ。

「ヤベ。家帰らないと。ナガシイじゃあね。明日学校でな。」
時間に気付いて萌もえが離れのドアに向かう。

「6月14日忘れんなよ。」

ドアを半開きにした状態で行った。

「忘れねえよ。これ見ちゃったんだから。」

パンフレットをかざすと、ニツと笑って帰っていった。

「岸川きしかわかあ・・・。」

裏付ける思いで、つぶやいた。

人物
永島智暉 ながしま ともき
坂口萌 さかぐち もえ

誕生日
誕生日

3月11日
10月3日

血液型
血液型

O型
A型

身長
身長

161cm
159cm

1 列車 鉄道少年（後書き）

感想がございましたらお書きください。

2列車 見に行きます 文化祭

6月14日。岸川^{きしかわ}高校の文化祭に向かった。岸川^{きしかわ}高校は遠州鉄道^{えんてつ}の助信^{すけのぶ}から西へ歩いて25分ほど。岸川^{きしかわ}の正門についた時刻は9時03分だった。もうすでに受け付けは始まっている。受付をスルーしてからはすぐに鉄道研究部^{てつどうけんきゅうぶ}が展示を行っているというホールに向かった。

ホールは人でたくさんだ。その人が集中しているところには建物が建っているとても小さい風景が見える。家の離れでよく見なれたレイアウトだ。

「家のより小さいな。」

「ナガシイ家^ちのは大きすぎるだけじゃないの。」

「いや、そうかもしれないけど・・・。」

「ほら、なんか走って・・・。」

汗が出てきそうだった。そう言う頃には他の子供に混じってかじりついてそれを見ているからだ。でもいつものこと。萌^{もえ}にとっては普通のことと受け止めた。永島^{ながしま}を追ってモジュール^{モジュール}ところにした。

「313系だ。これ東海とかで走ってる車両^{やう}だぜ。」

「これだって毎日走らせてるじゃん。新快速だか、普通で。知ってるよ。」

「ああ、そうだった、そうだった。」

今度は313系の走っていった方向からまた列車がやってくる。前面が白くオレンジと緑のラインが入っている。湘南色^{しょうなんしよく}という塗装^{とせう}だが、その車体にはステンレスボディ^{ボディ}の部分が多い。211系という車両だ。

（211系でシングルアーム。こんなの見たことないけど・・・。）
カーブを曲がりきってきた6両編成の車両の後ろにはさっき走っていった313系がくっついていて。こんな編成あるのだろうか。僕は初めて見る編成に少し違和感^{いわかん}がある。だが、走っている車両にそ

んなことは関係ない。他の子供がやっているように列車の進行方向に先回りする。ここで見ていたいなあといいところに来たら、しゃがんで電車が走っている高さに目線を合わせる。こうやってみると模型でも本物の様に迫力を感じるのだ。その時萌は僕の背中側にある方に目線を向けていたらしい。先にあっちの列車が来たみたいで肩をつついた。

「「サンダーバード」だよ。」

目線をそっちに替えて、「サンダーバード」を見る。だが、その列車は「サンダーバード」と違って顔が赤い。

「「サンダーバード」じゃなくて「スノーラビット」だよ。「はくたか」、「はくたか」。」

「えっ「はくたか」ってこんなに顔真っ赤の車両もあるの。」

「ああ。北越急行が持つてる車両は顔真っ赤だよ。」

「へえ。そうなんだ。」

理解しているのかどうかは知らないけど……。目線に戻して、さっきの列車が通過するのを待った。通過すると走り去った方向に顔の向きを変えて次のカーブを曲がって姿が見えなくなるまで見送る。見送り終わるとまたつつかれた。

「「雷鳥」。「しらさぎ」。どっち。」

むこうから走ってくるのは485系という特急電車。この手の車両には先頭にこの車両は「特急〇〇」と掲げている。そこを見ればいい。けど、今走ってくる車両にはそんなのどこにもない。おまけに流線型の顔をしている。

「お前、今分かって聞いただろ。」

「えっ。・・・はあ。「雷鳥」でしょ。パノラマだったから分かりやすかったよ。」

「だったら聞くなよ。」

「いいじゃん別に。ナガシイに比べたら鉄道知識ないんだから。」

「いや、そうだけどさあ・・・。」

すると今度は、

「おい、ハクタカ。「雷鳥」編成違う。4号車と5号車と8号車ドアの向き逆。」

後ろから声を張り上げられる。

「今更いいじゃないですか。そこまで見てる人いませんよ。」

さっきの人にハクタカと呼ばれた人が答える。すると、さっきの人とは別の人が「雷鳥」に手を出した。走っていた車両を手で捕まえ、モーターがはいっていると思われる車両を抜き取った。それを抜き取るとそれまで走っていた「雷鳥」は動かなくなり、その人はさっき後ろの人が指摘していた車両の向きを正常な向きに直していった。そして一番最後にモーター車を線路上に戻して、分離した車両を連結しなおしていた。

「膳所さん。そこまでしなくても……。」

「ハクタカの場合はあるそこまでしてやしないとダメ。名寄もこれからそうすればいいじゃん。」

さっき「雷鳥」を直した人は膳所、編成が違っていると指摘した人は名寄というらしい。

「はあ……。」

「名寄。次「立山」行くから、内回りにこれ並べて。」

「うわ。来たよ「立山」。」

今まで313系が走っていた方は「立山」という列車に置き換えるらしい。この名前も初めて聞く列車だ。だが、並べているところをよく見ていると見たことのある車両だった。家の車両庫にある「急行ゆのくに」というのと同じ車両だ。

「ちゃんと並べろよな。」

「まあ、ハクタカとは違って編成間違えることないだろ。」

「いや、名寄の場合は間違い方がひどい。上野でもよく解るぜ。」

「あつ。外回りあっち向きなのをこっち向きで入れちゃった。」

「ほらな。」

「ハハ。そう言うことか。」

ちよっとの間中のやり取りを聞いているといろんなことが分かる。

名寄なよろという人は鉄道のことはよく解っているがケアレスミスが多い。
「立山たてやま」を渡した上野うえのという人は鉄道にはそんなに詳しくないらしい。膳所ぜんぜという人はパーフェクト……。そんな具合だろう。

また今度は、

「ナヨロン、そっちに313系の「ムーンライトながら」ある。」
女子の声だ。この部活には女子もいるみたいだが、言ってることは全然違う。313系はいくら使われても特別快速とくべつかいそくまで。「ムーンライトながら」に充当されるわけがない。そして、今言いたかった車両は……。

「「ムーンライトながら」って373系で運転してるよねえ。」
当の本人も萌もえにツッコまれるとは思っていないだろう。

「そんなのではないぜ。」

「あれないつけ。」

すると後ろからまた別な人が出てきて、

「313系の「ムーンライト」……。じゃなかった。えーと313系の……。あーもう。373系の「ムーンライトながら」。」
ようやくとその答えにたどり着いた。

「違ちがうって分かってるのに2回も間違まちがうかな。」

「さあな。あの二人は天然てんねんってところかなあ。まああれでマニアだったらただのバカだけど。」

「……。ナガシィ。他のところも見に行かない。なんか面白いのやってると思うし……。」

「ヤダ。終わるまでここにいる。」

(やっぱり……。)

しばらくの間同じところにしゃがんでみたため足が痛いたくなってきた。座ろうとしても電車のほうがさせてくれない。今名寄なよろと上野うえのという人たちのほうは489系の「特急あさま」と「特急白山はくさん」がEF63という機関車きかんしゃにプッシュプルしてもらって走っている。この情景はかの有名な碓氷峠つすまがとうげでしか見れない光景だった。一方ハクタカという人ひとがいる方は883系の「特急ソニック」と787系の

「特急つばめ」が走っているが、その「ソニック」のほうだけ「クソニック」と呼ばれているのはなんでだろうか。

「さっきから「クソニック」ってよく言ってるけど「ソニック」ってそんなにクソなのかなあ。」

言い終わると叫び声が聞こえる。

「ああ。この「クソニック」また架線柱喧嘩売りやがって。」

「本当にクソだな。つうか誰だよ。内回りに「クソニック」出したの。そいつ処刑だ。」

「あのう僕ですけど、何かいけないんですか。」

「犯人ハクタカだってさ。ダメに決まってるだろ。内回りに置いたら「クソニック」が架線柱に喧嘩売りにいって自分から脱線するから。「あずにゃん」もそう。」

「じゃあ、なんで「スーパーパーおおぞら」は内回りに出しても何も問題ないんですか。」

「あれはKATOの振り子機構が少ししか働かないからいいんだけど。だけど「あずにゃん」と「クソニック」と「しなっちの副作用」はマジで副作用するからダメ。」

「「あずにゃん」と「クソニック」は何言いたいか分かりますけど、最後の「しなっちの副作用」ってなんですか。」

「えっ、「しなっちの副作用」は「しなっちの副作用」に決まってるんじゃないか。」

「全然答えになってません。つうか善知鳥先輩それ遠回しに解らないって言ってますよね。」

こういうやり取りが聞こえてきた。

「あの人が言ってる「しなっちの副作用」って「しなの」のことだよねえ。」

「ああ、多分な。」

なんか分かってはいけない気がするのなんでだろう。

ずっとホールにいて2時間。もうほとんど終わってしまった。昼でも食べに行こうかと誘われて、他の展示に行ってみる。そこで見

たのはポケットモンスターに変装した人や、気ぐるみを着ている人。今の高校生というのはこういう感じなのだろうか。そんなことを思いながら、あるクラスのクラス展に入って焼きそばを買ってまたホールに戻った。

戻ってみると名寄・上野周回のほうには貨物列車が走っていた。

その先頭に立つのはEF210。桃太郎。後ろに続いているコンテナ貨車は17両。貨物列車としてはふつうであるが、家で走らせている26両の高速貨物列車と比べてしまえば少し短い。その隣に走っているにはEF66が牽引する寝台特急。ヘッドマークは「あさかぜ」となっていた。編成は7両。正規の14両の半分であるが、ツツコまないことにしておこう。一方のハクタカチームはEF510が牽引する「寝台特急カシオペア」と「寝台特急北斗星」が我が物顔で走っている。どちらかといえばこちらのほうが客の目を引いている。

「あーっ。ハクタカっ。」「カシオペア」止めてっ。」「

叫び声がした。その叫び声はさっきギャグを言っていた人だ。止めてと言った「カシオペア」を見てみると、機関車の動輪が線路から外れており、その車輪の下に何かを巻き込んでいる。

「止めました。」

「ちよつとサヤ。」「北斗星」も止めてっ。ぶつかるっ。」「

と言った時にはもう遅かった。「北斗星」は「カシオペア」が待ちこんだ謎の物体Aに突っ込んで乗り上げる形で脱線した。そのおかげで「北斗星」を牽引していたEF510は少しばかり態勢を崩した。次の瞬間。EF510は観客側にグラッと倒れて落下していった。

すかさず手が出た。落ちていくEF510をダイレクトキャッチ。床に落ちる手前で受け止めた。その頃には部員の人々が脱線した「カシオペア」と「北斗星」の復旧に駆けつけており「カシオペア」を復旧させていた。それに混じってEF510を「北斗星」が走っていた外回りの線路に乗せて、

「あの。お手を触れないようにお願い……。」

そう聞こえた時には六つある車輪を次々と乗せていった。

（なんだ。こいつのなれたような手つきは。家で模型やってるとしか思えない……。これは将来期待できるかも……。）

「触れちゃいけないのは分かってますけど、EF510（こいつ）を助けたついでです。」

全ての車輪を乗せ終わってから口を聞いた。その現場には少しづつ
らくなったため、萌を促して場所を移動した。

「毎日やってるからって。あれは将来来るって勘違いされたんじゃない。」

あきれられた。でも、その顔には決めつけているというのも垣間見た。

「いいじゃねえかよ。やっちゃったもんはやっちゃったんだから。」

それよりもここで「北斗星」が来るの見てよう。」

永島に続いてしゃがもうとすると、対角線のコーナーで同じように
している人を見た。明らかに中学生。そういう人だった。

（同じような人もいるんだなあ。ナガシイと同類……。）

「北斗星」を見て目を輝かせている永島を見てふと笑いがこぼれた。
「どうした。何か笑えることでもあったか。」

「いや。なんでもない。」

「何でもないわけないだろ。笑えることが何もないのに笑うっていうのは変人の証。」

「変人とも限らないんじゃないか。思い出し笑いっていうのがあるんだから。」

「……。」

「ほら。そっち向いてなくていいのか。」「北斗星」が来たぞ。」

萌に言われて振り向いてみると「北斗星」はすでに僕の前ではなく
カーブを曲がっていつてしまっていた。

「あっ、この野郎。」

「ハハハ。引っかった。」

「・・・」

「抑えろって。家でいっぱい見れるだろ。」

「見れるけどさあ。EF510の北斗星色ほくとせいしよくでの「北斗星」ほくとせいはここで見れない気がして。」

「なんで・・・あれ、ナガシイ家の「北斗星」ほくとせいって私のあげたカシオペア色のほうだったけ。」

「そうですよ。萌もえからもらったカシオペア色ですよ。」

「あれ、そうだったっけ。「北斗星」ほくとせいのJR北海道仕様のやつはあげたの覚えてるんだけど、他の何かとごっちゃになってわかんない。」

「確か。お前からもらったやつは「北斗星1号・2号」ほくとせいのセットと「北陸」ほくりくの客車セットと「能登」のとの9両セットと「EF510のカシオペア色」だった。」

「あれ・・・なんかナガシイにワムの34両セットあげた記憶があるのは・・・」

「それ当てたのは駿兄ちゃんしゅん。駿兄ちゃんしゅんがそれもってきた時に見せてって最初に言ったのが萌もえだった。それだけ。」

15時近くになると他の客をひいてきて、だんだんいづらくなってくる。ちよつと前にホールを出て、家への帰路についた。

文化祭が終わるとすぐに片づけに入る。今まで大きなモジュールとプラレールで埋め尽くしていたホールは何もない状態に早変わりしていく。

「今年は優秀賞ゆうしゅうしょうかあ。去年グランプリだったけどおしかってね。」

「まったくだ。生物部死ねばいいと思う。」

「おいおい。過ぎたこと悔やんでもしょうがないだろ。それより片付け手伝え。」

「ねえ膳所さんぜんせ。生物部に聞こえるように死ねって叫んでいいですか。」

「やめろ。それやる前に片付けろよ。」

「じゃあ片付け終わったら叫んでいいんですね。」

「いや、そうじゃなくて。」

「おい、善知鳥^{うとどう}。話してばっかで手が止まってるぞ。」

「ごめんねアヤケン。気をつけるよ。」

ふつうの学習机を「はーっ」という声とともに持ち上げる。

「でも、今日絶対岸川^{きしかわ}くるっていう人見つけたよ。」

「誰だよ。」

「あの「北斗星^{ほくとせい}」が脱線したときに、EF210（モモチヤン）を危機から救った人。」

「えっ。善知鳥^{うとどう}の言っていたいと従弟^{いとこ}じゃないのかよ。」

「だって海斗^{かいと}はもう大阪で行く高校も決めたって言ってたし。それに今日はちよつと見に来てただけだから。」

「にしては最初から最後までいたよな。あいつと同じで。」

「その人がここに来るっていうのか。でもそれは併願^{へいがん}じゃないか、併願校^{へいがんこう}落ちたらの話だろ。」

「そうだけどさあ……。なんか単願^{たんがん}できそうな気がするんだよねえ。」

「こらッ。机持ったままそこで話してたら同じだろが。」

「あつ。すみません。」

その頃、

「ナガシィ。今日楽しかったね。」

「ああ……。萌^{もえ}。俺、行く高校あすこに決めた。」

「他の高校とか見てから決めた方がいいんじゃない。」

「いや、俺にはあすこしかない。それに……。あすこだったら楽しめそうだ。」

7月。

「文化祭を見に行った後はテストかあ。」

萌^{もえ}は小さくため息をついた。

「ナガシィはいいよねえ。勉強しなくていいんだからさあ。」

「さすがにそれは無理。1時間くらいは勉強しないと。」

「それでもいいじゃん。塾行き始めたら定期テストふつうに200

点いくようになったし。何か覚える秘訣ひけつとかあるの。」

「秘訣ひけつなんてないよ。それに萌もえがこれやったら死ぬと思う。」

僕がやっている勉強法とはテスト1時間ぐらい前になってパニックッテいる状態でノートもしくは教科書に目を通すこと。ここではそれだけやって数学の問題集などはあらかじめやっておき、ここで目を通す。といった具合。もちろんこれができるのは1時間目のテストだけで2時間目、3時間目のテストは10分間の休み時間だけでこの作業をする。

「そりゃ死ぬと思うよ。ナガシイのやり方で覚えれる人のほうがすごいと思うから。」

「人をエスパながしまーみたいに言うな。」

「永島ながしま。今度のテスト勝負しようぜ。」

そう話しているときに話しかけてきたのは友達すくもゆうまの宿毛佑真だった。彼とは中学校からの中で、定期テストでは毎回勝負している。勝敗は五分五分。塾に行く前は負け続けていたが、塾に行き始めてからは勝ち続けている。

「宿毛すくもも懲すくもりないよねえ。勝てっこないよ。」

「いいだろ。それに勝負する前から負けるって思うのは嫌だ。今回は俺も自信あるんだ。合計点勝負しようぜ。」

「ああ、いいよ。」

「ねえ、宿毛すくも。宿毛すくもってテストの時どうやって覚えてる。」

「えっ。俺の場合は、とにかく実践かなあ。問題集なんか買って、まずその問題集にやらずにノートにやる。やり終わったら採点して、次に問題集にやって、また採点。そんな感じかなあ。」

「その方法でナガシイに負けてるってどうよ。」

「まあ、少し腹立つけどな。でも、結果がそうだったんなら、もっと頑張ればいいだけの話。」

「もっと頑張っても勝ったことないじゃん。」

「あのなあ。もっと長い目で見ろって。永島ながしまの場合はすぐに忘れる。短期記憶に頼ってテスト乗り切ってるんだから。」

「それに、学調とかじゃ、あれ完全に負けてるから。国語19点とか取ったことあるし。」

「それ1年の話だろ。2年生の時は26点取れてたじゃん。」

「上がったには上がったけど、国語が弱点ってことには変わらないじゃん。」

「お前ももっと本とか読もうぜ。そうすれば読解力上がるから。」

「なんか今更って感じるんだよなあ。俺の場合本はアニメにして読んでるからなあ。」

「・・・。ナガシイの場合本を読むと想像力が発達するから。別に悪いやり方じゃないんだけどね。」

「そうだったな。永島サスペンス系以外は速く読めないもんな。」

「ふつうおかしいよねえ。」

「おかしくて悪かったな。」

「まあまあ。じゃあ、永島。テストの時待ってるぜ。」

宿毛はそう言い残して、自分の席に行った。

「ナガシイ。今からもテスト期間も勉強せずに離れにコンツメでしょ。私なんかそれ出来ないからいいよなあ。」

「懂れるんなら、ずっと「デュエモ」とか「バトルアーマー」のゲームやってればいいじゃん。」

「見つかったら没収されるんだけど。」

「・・・。そ、そりゃドンマイ。」

数日後。

「永島。国語何点。」

「37点。」

「ハハ。国語では勝った。38点。」

「勝ったって。まだ国語だけだろ。この後どうなるかだって。勝負は合計点だろ。」

「そうだったな。わりい。」

そう言い残すと自分の席に戻っていく。

「ナガシイ37点か。私23点。」

「あと2点で半分じゃん。せめて半分取ろうぜ。」

「まあ、この調子なら合計110点ぐらいだと思うし、またゲーム解禁かな。」

「よかったな。」

「あつ、そうだ。ナガシィ。電車でGO!の新快速姫路行き。あれどうしても尼崎で数秒遅れちゃって高得点でないだよねえ。ナガシィだったらやりこんでると思うから、今度やってくんない。」

「マジかよ。それ俺も苦手なんだ。特に尼崎。あれって塚本で早く通過しそうになってわざと速度落とすと痛い目見るんだよねあ。停車位置550mまで130km/hでツッコんで一気に減速っていうことやらないと間に合わなくなるからな。」

「でもそれやるとどうしても土（プラマイ）30cmに収められなくなるらない。」

「いや。そこはうまくやればどうにでもなる。後は時間との闘いつてところか。」

「ナガシィ。それで何点いった。私23万。」
「24万。」

「あつ。じゃあナガシィでも私の記録更新無理かあ。」

「無理だな。」

そのまた数日後。

「えー、これはオープンキャンパスに行った時の感想を書く用紙です。この夏の間に公立を少なくとも2校。私立も1校見て……。」
その説明が終わるとあくびと声が出た。

「あーあ。決まってるのに公立も見に行かなきゃなんないのかよ。」

「面倒くさそうだね。」

「できればずっと家にいて模型いじってるほうがずっと楽しいんだけど。」

「アハハ。ナガシィらしいね。」

「そういえば、萌はどこに行くか決まった。」

「えっ……。公立はいける学校だったらなんでもいいんだけど、

私立なら宗谷にでもしようかなあって……。」

（何言ってるんだよ。私。）

「へえ。萌らしいな。夢に近づくためなら宗谷に行くのが一番か。」

（ダメだ。私も岸川行きたいなんて到底言える状態じゃない。）

「うん……。」

「自信持てって。実をいうと俺のほうが受かるかなあって思ってる。」

」

「それ絶対無駄。ナガシイ内申点高いに決まってるじゃん。」

「それでも心配になるときない。」

「そりゃ少しはあるけど、ナガシイは大丈夫だって。ナガシイの進路はみんなが意外に思うほどレベル低い進路なんだから。」

「……。」

「そうでしょ。」

「それもそうか。変な心配かもな。」

笑っている永島の顔がなぜか遠くの人のように思えた。

この回からの登場人物

宿毛佑真 誕生日 4月7日 血液型 B型 身長 164cm

m

2列車 見に行きます 文化祭（後書き）

これにはタイトルの前に○列車と冠していますが、大して意味はありません。ただ、順番が分かりやすければと思ったからつけました。もしほかのシリーズになったら○Mに変わるかもしれません。

3列車 夏 冬

今は夏休みの真ただ中。公立のオープンキャンパスはいよいよ行
って、そこで聞いたことはすぐに頭の中から拭い去った。8月の第
3週。岸川きしかわのオープンキャンパスがある。そこに行って体験授業を
聞き流して、自由に見学できるときにまた鉄道研究部の展示に行っ
てみた。

展示を行っていたところは昇降口しょうこうぐちのある2階。昇降口から右にか
じをきってつきあたる部屋だった。ドアを開けて中に入ってみると、
文化祭より小ぶりのモジュールが展示してある。中にいたのは文化
祭の時に見た人たちと同じように岸川きしかわを見に来た中学生。部員の数
は文化祭見たときよりも少ないと思った。今走っている車両は内回
りは何か分からないが、外回りは253系「特急成田エクスプレス」
であることはすぐに解った。

「「253系」ネックスだ。」

声を上げたくなくても上がってしまう。電車を見ると出る癖。しよ
うがない。声を上げたのが影響したのか、目線が自分のほうに向い
ているがお構いなし。「253系」ネックスに近づいて、間近で「253系」
が走り去るのを見た。

その子の姿と反応の仕方を見て、鉄研部員てつけんは声をひそめて、
「おい、善知鳥うじと。あの子なのか。善知鳥うじとが言ってた絶対に鉄研に入
るっていう中学生は。」

「よく覚えてないんだよ。顔つきとか。」

「おい、ふつう覚えてるだろ。物忘れひどすぎ。」

「あの子ですよ。見かけなかったのって11時ぐらいから30分く
らいの間でしたから。」

「アヤノンはよく覚えてるね。」

「外回りだったし、気付きやすかったっていうのもありますから。」
「へえ。」

「善知鳥先輩。へえじゃなくて……。」

また、

「あの子電車で詳しいんだな。まるで木ノ本や留萌きのもと るもいみたい。」

「友紀ゆきはまだ分かってないなあ。別に詳しくないよ。」253系 ネットクス
「くらい解ってふつう。」

「そうそう。」253系 ネットクス
「分かったって何の自慢にもならないよ。」

「そうか。あたしは分かるとしたら「ドクターイエロー」くらいしかないのに……。2人もあそこまで詳しくれば入るんだよね。あの子も鉄研てっけんに入るのかなあ。」

「蘭らん。まだ鉄研てっけんに入るって決めたわけじゃないって。さくら行こう。」

「えっ。ちよっと木ノ本きのもと、留萌るもい。待って。」

しばらく253系に見入っていたら内回りは681系「特急はくたか」に変わり、やがて外回りはEF81が牽引する貨物列車に変わった。それに目線をあわせてみると誰かが僕に話しかけた。

「将来鉄研てっけんに入ろうって思ってる。」

おそらく文化祭の時にしているのかもしれないけど、僕のほうはそれがだれかなんて覚えていない。誰だかわからないけど、

「はい。」

とだけ返事をした。

「おーい。この子将来の鉄研部員てっけんだって。」

「マジ。こんなマニア部入ってくれる人いるの。」

「よかったな。今年は2人だったから来年はどうなるかと思ったけど。」

「よし。まずこれで1名は確保したわけだ。1人と言わずに来年は5人くらいドンと入部があった方がいいけどな。」

「5人なんて。そんなたくさん入部するわけないだろ。3人くらいで十分だよ。」

「多いほうが楽しいじゃん。ねえ君。」

すると何かをかぶせられた。手を当ててみると帽子ぼうしだ。それもただ

の帽子ではない。運転手や車掌のかぶる制帽だ。

「似合うって。これかぶりたかったら鉄研こいよなあ。」

「それだけで来るかっていうの。ていうか最終的に決めるのは本人なんだから、本人に選ばせないと。」

「でもそすることはできるのよね。」

「確かにそうだけど・・・。」

「もう決めてますから。」

と言ってかぶせられた帽子を取った。

「もうここしか来るところはありません。絶対にここに来ます。」帽子をかぶせた人に渡して、教室を出た。もうしばらくいればと止められたが、もう帰りたいと言って断った。だが、一二次の心配がやってきた。もし僕一人の入部だけだったらどうしよう。でも、そんな心配は後か。

それから月日が流れて2月。岸川高校の受験日は2月9日。その日までにやれることをやっていった。

「永島。お前って岸川志望だったんだな。」
宿毛が話しかけてきた。

「何。その言い方。知らなかったの。」

「いや、多分そうじゃないかなあとは思ってたんだけど、本当に同じ進路とは思ってなかっただけ。」

「同じ進路。」

「ああ、俺も北星落ちたら行くところ岸川なんだ。あすこだったらものすごく適当にやらない限り留年はないからな。」

「北星併願かよ。落差ひどくない。」

「そんなのどうでもいいって。俺北星は受かるかどうか知らないけど、岸川だったらどんなバカでも受かるからな。」

その声は周りにも聞こえていた。隣にいたクラスメイトが意外そうに話しかけてきた。

「永島も宿毛も私立岸川狙ってるのか。」
「ああ。」

「ウソ。永島ながしまも宿毛すくもも成績いいよねえ。」

「ああ。高校のほうに送られる1学期の成績永島ながしまが34で、俺が36。」

「そんなに成績よくて岸川きしかわ行くの。」

「俺はまだ北星ほくせい狙ってるけどな。永島ながしまは岸川きしかわ単願で狙ってる。」

「えっ。もったな。それで親なんか言わないの。」

「言わないよ。進路は全部任されてるから。だからどこ行こうが自由。」

「自由でも岸川きしかわ以外行く気ないだろ。鉄研てっけんやりに行くんだから」

「えっ。鉄研てっけんやるためだけに岸川きしかわに行くの。もっと上の学校とか狙わないわけ。」

「いや、さっき言ったじゃん。岸川きしかわ以外行く気ないって。」

「二人とも俺より成績いいのにレベル低いなあ。」

「俺が思うに成績いい奴って全員レベル低い高校言って自分の好きなように高校生活送るもんだと思うけど。」

「いや。それは永島ながしまと宿毛すくもだけだと思う。」

この話が終了すると、

「もう願書は出したんだしあとは受けに行くだけ。宿毛すくもテスト1時間前になったらよろしく。」

「おいおい。永島ながしま受験会場違うってこと考えとけよな。」

「あっ……。考えもしなかった。」

「おい。ふつうに考えろよ。俺は併願。お前は単願。受験会場が違うって考えてふつうじゃないか。」

「ナガシイはふつうじゃないからそういうこと考えないの。」

クラスメイトと入れ替わりに話に入ってきたのは萌もえだった。

「言われてるぞ。ふつうじゃないって。」

「結構前からふつうじゃないのは自覚してるけど。」

「……。」

「ハハ。ねえ、ナガシイ。勉強してる。」

「してると思う。」

「ううん。家で模型と遊んでると思う。」

「うん。その考え方正しい。なんか勉強すると体が拒絶反応を起こすというか。」

「それはウソでしょ。ただ勉強したくない言い訳じゃん。」

「・・・。はい。そうですね。」

そんなこんなで2月9日。岸川きしかわ高校を単願で受験。その数日後には・・・、

「あー、受かったかどうか心配だー。」

「ナガシイ心配しすぎ。内申34あって、岸川きしかわ単願。受かんないわけないじゃん。」

「それでも受かってるかどうかは気になるだろ。」

「それは・・・。」

（なんでだろう。ナガシイにここまで受かってほしくないって思ったことなんて・・・。いや、そう思ってちゃだめだ。ナガシイは岸川きしかわで鉄研てつけんやる。それを止めちゃいけないんだ。そうしなきゃいけない・・・。でも・・・。んっ・・・。）

（高校からは萌もえとは一緒じゃないのかあ・・・。えっ。俺何考えてんだよ。宗谷そうやに行きたいって言ったのは萌もえの意思じゃないか。それを止めるなんておかしい。二人とも自由に生きて、もしかた・・・。その時。その時そうすればいい。）

そう思いを巡らせている間に自分たちの順番がやってきた。僕は岸川きしかわに萌もえは宗谷そうやに合格。

（これで本当に・・・。）

（・・・。今は・・・。でも、いつか言わなきゃ。私が目指してるのはこんなのじゃない。今からでも間に合う・・・。）

そして、合格通知をもらった日の放課後。

「ナガシイはやっぱり岸川きしかわ合格おめでとう。あすこなら毎日楽しそうだね。」

「ああ、だろうね。萌もえは宗谷そうや。お互い夢に前進だな。」

「そうね。これからお互い夢に向かって歩いてくんだよね。」

「うん。俺は電車の運転手。萌^{もえ}は幼稚園の先生。この二つをかなえるためにはそこに行くのが一番の近道になるのは間違いないんだからな。」

「・・・。そうだね。」

何かかわす言葉がなくなったみたいに黙り込む。

「ナガシィ。鉄道研究部って何するんだろうね。」

「よくわかんないけど、どっか行ったり文化祭とかで展示やつたりするんだって。」

「よくわかんないって・・・。それでも入る部活。」

「入る部活だよ。俺^{きしかわ}岸川行かなかったら行く学校ないんだから。他の学校はただのトゲだよ。」

「内申34あってそういう人も珍しいと思うけどね。」

「そうかあ。俺には全部トゲみたいに見えるけど。」

「違うでしょ。ナガシィには岸川^{きしかわ}はとげを覆うクッションがあるけど、ほかの学校にはそのクッションがないからおりたくないだけじゃない。」

その描写を想像してみる。ヘリコプターに乗っている僕はいま下を見下ろしている。下にはたくさんのトゲ。それもとても鋭い。ちょうど中心ぐらいにはとげが突き出ていないところがある。そこに飛び降りようとしている。

「うーん。当たってるかも。」

「かもじゃなくて当たってると思うよ。」

それから1か月と数日。今執り行われているのは伊奈^{いな}中学校卒業式。中学3年生全員の名前が順番に点呼されて、卒業証書を授与されていく。僕も卒業証書を受け取って、自分の席に戻った。

（ここで、萌^{もえ}と話すのも今日が最後か。）

心の中で分かりきっていることを思った。

（ナガシィと毎日話せるのも今日が最後かあ。）
萌^{もえ}も分かりきっていることを思った。

卒業式が終わると3年生は保護者と2・1年生に見送られて、体育館を後にする。体育館の次は学校の外へ。あるところまで歩いて全員水入らずになる。

「ナガシィ。帰ろ。」

「お前友達とは話してかなくていいのか。」

「綾^{あや}たちとか学校同じだし、また会えるし。」

「そう。じゃあ、行くか。」

自分には友達はそんなにいない。別に悲しくもないし、何の未練もない。ただ一つだけ僕を悲しませるのは萌^{もえ}とは違う学校になるということだけだった。

「これから違う高校だな。」

「嫌なの。」

「いや、そういうわけじゃないけど……。今までずっと話してたのに、これからは話せなくなるんだなあって思っただけ。」

「……。それはそうだけさあ。でも、県外の高校とか行くわけじゃないし、会おうと思えばいつでも会えるわけだし。」

「それもそうだな。ごめん。なんか暗くなるようなこと言って。」

「気にしないで。ナガシィのことよく分かってる人だから。」

「そうだったね……。」

しばらく黙って数歩。今日はいつもの帰り道がどうしても長く感じてしまう。

「なあ、萌^{もえ}。文化祭とか見に来いよ。待ってるから……。」

「暇だったら行くね。」

「いつも暇なくせに。」

ちよっとの間お互い黙っていた。

「ナガシィ。……創^{つく}るなよ。あと頑張^{がんば}れよ。」

何をつくるなということなのだろう。でもだいたい想像はつく。

「分かったよ。そっちこそな。」

「……。うん。じゃあね。私こっちだから。」

「おう。じゃあな。」

手を振って僕は萌^{もえ}と別れた。その後ろ姿を見送っているとため息が出た。

（結局言えなかったなあ。でも、いつか言わなきゃいけないことか・
。。これ、本当にナガシイ許してくれるのかなあ。やっぱりウソ
ついてきたから許しちゃくれないのかなあ。）

ながしま
永島の歩いて行った方向を見て、考えを巡らせていた。

その時僕は・・・、

（結局えいなかったなあ。好きって・・・・。大丈夫。萌^{もえ}は
ほかの男子には・・・・。）

家のところまで来てそれを思う。ちよつと萌^{もえ}の家のある方向を向いてしばらくそのままにいる。

（言えるチャンスはいくらでもある。また、その時が来たときに・
。。）

二度と訪れることがないだろうと思う二度目を心の中で思う。だが、この先に待っていた展開は少なくとも僕には想像できなかった。

3列車 夏 冬（後書き）

気まぐれ投稿みたいになってすみません。
これからもこのような不定期投稿ですが、
読んでくれる人には感謝。

4列車 スタート 高校生活

中学を完全に卒業して7日後。4月7日。僕は真新しいワイシャツに腕を通し、ネクタイを締め、黒いズボン履き、ブレザーに身を包んだ。

きしかわこうこうにゅうがくしき
岸川高校入学式。1年生は9クラス。そのうち1クラスは中高一貫

とくしん
コース。2クラスは特進かコース。残りの6クラスがふつうにやっていたコースとなっている。僕は1年5組で、同じ中学校から来た人は僕を含め3人。そのうち一人は僕と同じクラスである。彼とは親友で名前は宿毛祐真である。すくもゆうまもう一人は名前も顔も知らない。

ほくせい
「あーあ。俺は北星落ちてここになっちゃったけど、またお前と一緒だな。」

「そうだな。」

「これからもよろしくな。またテストとかになったら勝負しようぜ。」

「ああ。でも・・・、始まってそうそうテストの話っていうのなあ。」

「テストの話を引き合いにしたのは悪かった。いきなり勉強の話だと遊べなくなるってか。」

「うん。」

「お前は十分遊んでるって。受験勉強だつてろくにしていって我慢してただろ。」

「それでもやったって。受験前の1日前に1時間くらい。」

「それをろくにやってないっていうんだよ。まあ、私立なんて受からないほうがおかしいってところあるからそれでも合格したならいいか。」

「そつ。そういうこと。」

ながしま
「ハハ。永島らしいな。永島の場合は結果しか気にしないからな。その頭ある意味うらやましいよ。」

「何。宿毛俺すくもの頭みたいなほうがいいって思ってる。」

「自分の好きなことしか頭に入ってこないんだもん。そこまではつきりしてる頭だったら何かと苦勞することがないのかなあってこと。」

「そうかなあ。」

「じゃあ、考えても見ろよ。お前高校決めるときここに鉄研てっけんがあるから来たんだろ。他のところまともに考えてたか。」

「ああ、確かに。」

（分からせるにも一苦勞かよ・・・。）

体育館に移動しながらこんな話をする。今日は部活紹介があるそう
だ。まあ入る部活も決まっているのだが・・・。

「永島ながしまはどこをどう考えたって鉄研てっけんだろ。俺どの部活にしようかなあ。」

「宿毛部活すくも入ろうって思ってるの。」

「いや。出来れば入らないほうがいいなあ。まあ、強制だったら適當なところ入っという活動に行かないっていうのも一つの手だな。」

「入るんだったら活動しろよ。」

「もう部活動にはうんざり。永島ながしまは運動部に入ってなかったからそう感じないんだって。」

「確かに運動部じゃなかったけど、情報処理部でも後々面倒くさくなったぞ。」

「お前その時代から遊んでたんじやないのか。」

「うん。インターネットいじってKATOカトーとかTOMIXトミックスのインターネットで好きな車両の再生産とかいつかなあってみてた。」

「やっぱりやるのはそれかあ。ちゃんとタイピングとかやってたんだろうな。」

「やってはいたよ。2年生までに表計算2級取ってスピードは3級まで取った。」

「・・・。なあ、永島ながしま。気づいてはいたけど、お前活動と遊びがごっちゃになってないか。」

「えっ。」

永島ながしまのこの反応には正直困った。

中高一貫コースちゅうこういつかんをのぞくクラスの生徒全員が集まったのが13時10分ごろ。始まったのは13時20分きっかりだと思いたい。まず始まるのは運動部の紹介。運動部なんて入る気はないし。運動部の部活紹介はとにかく耳から入れて耳から出した。頭をただ通り過ぎていくだけ。なんといっているのかも忘れた。

何分かたった後に5分間の休憩をはさむ。これが終われば文化部の紹介。まず一番に生物部の紹介。その次に鉄道研究部の紹介となっていた。

（これ以外聞かなくていい。）

そして、いよいよ鉄道研究部の紹介。出てきた人は2人。1人が演説台に行ってもう1人は胸の前で何かを広げた。あの広げた物は間違いなく鉄道模型である。その車両が何なのかは分からなかったが、何かと白が強調される車体である。583系「急行きたぐに」だろうか。その傍らで語っている人はこう言っている。

「僕たち鉄道研究部てつどうけんきゅうぶは3年生4人。2年生2人の計6人で活動しています。部費は年間14,000円と多少高いですが、年に一度臨地研修りんちけと言う旅行りょこうに行つて東北とうほくなどいろんな所へ訪問しています。また地域からの要請ようせいで学校以外でも展示を行っております。・・・」

（部費は14,000円。それを差し引いても入る価値はある。いや。入らなきゃ岸川に來た意味がない。僕は勉強をしにここに來たんじゃないんだ。それは二の次。）

また別の人は、

（鉄道研究部かあ。私がここに來た半分の目的はあれ・・・でも、女子が入っているの。逆にそういう面でいじられたくないし・・・）

それが終わるころ。僕の頭の仲は鉄道研究部のことだけでいっぱいになった。部活紹介が終わって教室に戻ろうとするころ。宿毛すくもが話しかけてきた。

「頑張れよ。部費も高いみたいだし。」

「あんなの関係ないよ。関係すんのは、入るか入らないかだ。」

「それもそうだな。」

「宿毛^{すくも}は部活何にするんだよ。さっきはどうでもいいやつに入っ
てばいいって言ってたけど。」

「なんていうかなあ。こういうときに限ってそういう部活って見つ
からないんだよなあ。」

「あつ、なんかわかる。自分に合ってるの探してる時って自分が気
に入っただのは何か都合が悪くて、気に入ってないけど都合がいい
ていうことだろ。」

「そんなところ。でもさっきの説明聞いて、俺情報部にでもしよ
うかなあって思ってる。やっぱりこれからの時代パソコンいじれなき
やついてけねえだろ。さすがに基本操作ぐらいはできたほうがいい
かなあって。」

「ふうん。」

宿毛^{すくも}にそう返事を返すと自分の肩が少し重くなった。

「どうした。」

落ち込み気味の僕が少し気になったらしい。

「なんかここまで来ると鉄研^{てっけん}入るの俺だけなんじゃないかなあって
思えてきた。」

「なるほど。もし一人だったらお前が自動的に次期部長になるんだ
もんなあ。」

「俺部長なんて柄じゃないし。出来れば俺よりもしっかりしたやつ
が入ってくればいいなあって。」

「ストライクゾーンの狭い要求だな。残念だけど俺は鉄研^{てっけん}にはい
かないぜ。部費14,000円なんて到底払えないからな。」

「そこをなんとか。お代官様。」

「他当たれって他。」

このやり取りを見ている人がいた。すらりと伸びた僕よりも身長
のある人が。

教室に戻ると担任から部活登録届の紙をもらった。顧問はうちのク
ラスの副担任安曇川正司先生らしい。部活登録届をもらうと時間は
すでに15時を回っている。全員10分間ぐらい自由になっていた。
その10分間が過ぎると遊びを危ぶむ宣言があった。

「ええ、これからは毎日ノート3ページやって出してもらいます。」

（マジかよ。）

（これじゃあ北星と同じじゃん。）

「土曜と日曜合わせて6ページを次の週の月曜日に出して、ゴール
デンウィークなどの連休中は1日5ページやって出してもらいます。
この勉強は絶対みんなのためになるからな。この高校生活でどこま
で頑張れるかが・・・。」

（知るか。）

その悪夢のホームルームが終わって・・・、

「永島。四ツ谷先生のあれ。どう思う。」

「俺たちを殺す気かよ。四ツ谷先生。」

「殺す気はないんだろうけど・・・。永島は当然やらないんだよな
あ。」

「やるわけねえじゃん。あのなのやったらいつか死ぬ。だから反抗
してノートは出さない。・・・。そう聞く宿毛は出す気あるのか。」

「ふと、これやったら永島を抜き返せるかなあって思った。」

「やってみれば。ノート出したほうがいいか出さないほうがいいか
はそれで決着がつく。」

「出したほうがいいだろ。・・・でもそれをするとか対等じゃないか。
永島が出さないなら、俺も出さないでお前に勝負しかけたほうがいい
いか。でないとハンデ大きいからな。」

「なんだ。結局宿毛も出す気ないじゃん。」

「だってやりたくねえもん。北星受かってたら俺も考えたかもしれ
ないけど。」

アルミ可撤出てきている下駄箱の下から2番目の手をかけて、ロッ
クを解除。手前に引っ張ると靴の入った口がぽっかりと開く。上履

きを靴に履き替え、両開きになっている昇降口が出る。その先には階段があつて10段くらいの階段の2本立てになっている。最初の10段を下ると進行方向右側にまた別の階段が通じてきている。

「あれ、永島ながしまそっちから帰るのか。」

「違ちがうつて。鉄研てっけんのあるとこ体育館のステージ裏うらつて言いつてただろ。だったらこっちから言いつたほうがいいのかなあつて。」

「ああ、そういうことか。」

その階段を下ると1回の昇降口に通じる。そこを左に曲がつて2・3年生の駐輪場のあるところへ向かう。ちよつと開けたところに出ると右手側に2・3年生の立体駐輪場。左手側に体育館の入り口がある。その入り口からステージ側を除くとステージの上に何か置いてあるのがわかる。

「ステージ裏うらじゃなくてステージ上うへじゃないのか。何か置いてあるし。俺が思うにあれの後ろに部室ぶしつみたいなものがあるとは到底思えない。」

「どこにあるかなんて今はどうでもいい。それより、分からなかったら安曇川先生あづまがわに聞きけばいいよ。」

「そうだな。鉄研てっけんの顧問らしいし。」

宿毛すくもは歩き始めて、僕にさよならを言いつて帰かえつた。

案内があつた体育館ステージ裏うらに向かおうと思おもつたが、ここで路頭に迷まよつた。すると誰かが声をかけてきた。振り向いて見るとクラスくらすの・・・誰だつて。

「佐久間さくまだよ。永島ながしま何してんだよ。」

「鉄研見てっけんに行いこうかなつて思おもつてて・・・でも、ステージ裏うらつて言いつてただけでどこにあるのか分わかんないからここに突つつ立たつてるつていう感じだけど。」

「鉄研てっけんつ。永島ながしまも鉄研てっけんはいんの。実は俺も鉄研てっけんに入いろうつて思おもつてんだ。つうかそのためにここ来きたくらいだし。どうせ見みに行くんなら一緒に行いこうぜ。」

「ああ。」

「でも……、場所が分かんないっていうのは俺も同じなんだよなあ。」

「安曇川先生に聞けばいいじゃん。あの人顧問だし。」

「なんでお前聞かなかったんだよ。」

「んっ。多分頭がそこまでまわらなかったんだよ。俺バカだし。」

職員室に戻って安曇川先生を呼ぶ。すると、居合わせた先輩らしき人を呼びとめた。

「鷹倉君。この2人鉄研見学に行くって言うてるから、部室まで連れてって。」

「はあ。アド先生。僕はただのパシリですか。あっ後、部活登録。」

「はいはい。分かりました。じゃあ連れてって。」

安曇川先生は鉄研部内ではアド先生と呼ばれているようだ。誰が命名したかは知らないけど、まあいいか。そして呼びとめられた鷹倉先輩という人はいかにも迷惑そうな顔をしている。しかし、その顔も誰かを見てからは変わった。

「絢乃。こいつら部室まで連れてってやって。」

「ハクタカさあ。そういうことするのやめなよ。」

と言ってから僕達のほうに顔を向ける。するとため息をついて、

「分かったよ。場所教えるだけでも教えとくわ。だから案内終わるまでは待ってるよ。」

「ヘイヘイ。」

「で、ハクタカ。あたしの部活登録届も出しといてね。」

「お前なあ。」

「じゃあ、行こうか。」

絢乃と言った人は紙をハクタカという人に渡して、すぐに僕達を連れていってくれた。

「鉄研に入部かあ。君達ってなんか詳しいことってある。」

「俺は新幹線のことはいいたい分かります。」

まず佐久間が口を聞いた。

「俺は電車のことならだいたい……。」

「そう。電車のことで話をするなら先輩にいい人がいるんだけどなあ。」

話しながら、体育館のグリーンベルトを歩く。端^{はし}まで来るとドアを開けて中に入る。そこで体育館用のスリッパに変えるように促されて、体育館内に入る。中ではバスケット部が準備を始めている。どこまで行くのかと思っているとステージの手前で左にかじをきつた。すると目の前にドアが現れる。そのドアを開けるとステージに上がるための階段。それを上ってステージに上がる。ステージを無視して、奥側の狭い通路に入る。そこをするとすり抜けて、さっきいたところの反対側に来る。その前にはまた階段。それを7段上ると小さな踊り場を介してまた階段。この位置まで来ると上に二つのドアがあることを確認した。絢乃という人はそこまで来ると二つあるうちの左側のドアを指差して、

「あっちがあたし達の部室。普段は鍵^{かぎ}がかかっているから、来たいときは安曇川先生^{あどがわせんせい}か吹奏楽の山科先生^{すいそうがく やましなせんせい}に鍵をもらって開けてね。これで部室の場所分かった。」

「あ・・・、はい。」

「それじゃあ。今日は活動^{ふていき}ないから。不定期^{ふていき}っていうのも不便だよ。ねえ。ああ、そうそう。名前言ってなかったね。あたしの名前は楠^{くす}のきあやの絢乃^{ゆの}。とりあえず部員だからよろしくね。」

そう言って来た道に戻っていった。僕と佐久間^{さくま}はしばらくその場にいたが、早く帰りたいという気持ちに押されて帰った。

今回からの登場人物

佐久間悠介^{さくま ゆうすけ} 誕生日 1月15日 血液型 B型 身長 174 cm

鷹倉俊也^{たかくらしゅんや} 誕生日 3月22日 血液型 B型 身長 173

c m

楠絢乃^{くすのきあやの} 誕生日 12月22日 血液型 B型 身長 16

7 c m

安曇川正司^{あどがわ ただし} (アド先生) 誕生日 10月21日 血液型 B型

身長 163cm
1年5組担任 四ツ谷_{よつや}

5列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）

その頃もえ萌が通い始めた宗谷学園では・・・。

「萌の彼氏は当然鉄研入ったんだよねえ。」

「入らなきや岸川に言った意味ないしね。」

「ていうか萌もえなんで岸川行かなかったのよ。そうすれば彼氏とも同じ学校だったのに。」

「ナガシイが宗谷に行くのが一番だって言ったからね。それがあるとなんか行きづらいだろ。」

「ああ、そういうことか。それだと行きづらいわなあ・・・。でも寂しくない。」

「そこまで子供じゃありません。ナガシイがいくら大きい子供だからって一緒にしないでよ。」

「永島君ながしまにあったら言ってやろうかなあ。萌もえが永島君のこと大きな子供って言ってたって。」

「言ってもいいよ。本人がそう言ってたんだから。」

「・・・。」

（手回しが速かった・・・。）

翌日。部活の中身はまだ見ていないが、部活登録届ぶかつていろうくとていけを出した。数日後。今日はアド先生から活動日だと聞かされて勇くすのきんで楠先輩に教えてもらった部室に向かった。

だが、ドアの前に立ってドアを押してみると開かない。鍵がかかっている。

（あれ。ドアって押せば勝手に開くっていうやつじゃなかったっけ。）

しばらくすると佐久間さくまも合流して、またしばらくの間ドアの前で突っ立っていた。

「あれ、新入部員。」

下から声がする。踊り場のほうを見てみると女子の顔がこちらをの

ぞきこむ状態にある。

「サヤ早く来てみ。新入部員いるよ。」

その人はサヤという人を呼んだ。ちよっとするとそのサヤという人が顔を出した。

「あれ、なんで前に突っ立ってんの。入ればいいじゃん。」

第一声はこれかよ。この人はバカなのか。それとも、ウケを狙っているのか。

「サヤバカだろ。鍵かかってるから入れないに決まってるだろ。」

「あれ、鍵は善知鳥うしろが持ってるんじゃないの。」

「あたしが持つてるわけないでしょ。だからサヤが取って来てよ。」

「サヤ先輩も善知鳥うしろ先輩も自分で鍵取り行くとかして下さいよ。」
聞き覚えのある声は楠先輩くすのきの声だ。その声がしたあとサヤという人が階段を上って来て部室のドアを開放した。

「あれ来てたんだ。前に鍵は安曇川先生あどがわか山科先生やましなに貰ってって言ったのに。」

僕達の顔を見つけるとそう言って、

「ちよっと狭いけど入れば。電車好きにはたまらない部室だと思うし。」

促されて中に入った。入ってみると確かに狭い。ドアのすぐ横にはレールの入った箱が置かれている棚。レールの他に転車台の模型も置かれている。ドアの左側にはカラーボックスみたいなのが2つ置いてある。ぱっと見モジュールの材料になりそうなものが置かれていた。その向こうには木の棚があり、そこには製作中のモジュールが置かれている。そして、右側奥の方には白いケースに詰まった引き出し。中はカラーボックスの中身と同じモジュールの材料だろう。真ん中あたりにはこの狭い部屋に長机。それも2つはベコベコになり、そのうちの1つには製作中と思われるモジュールが3枚置かれている。またそのうちの1つには木の棚が置かれており、そこにはE231系の写真とモアイ像が置かれている。意味はあるのだろうか。そして、その長机に対応するように長椅子が一つ。後は折り

たたみ椅子が3脚。学習椅子が5脚ほど置かれている部室だった。

先輩達は思い思いの席に腰をかけて、休んでいる。さつきサヤと呼ばれた人はPFPをやり始めて、善知鳥うとうという人と楠先輩くすのきは携帯電話をいじり始めた。全員マイペースすぎて逆に困るというか……。しばらくそんな状態が続いていると、また人が来た。だが、その人はドアを開けるとすぐにドアを閉めてどっかに行ってしまった。

「ナヨロン。」

いきなり善知鳥うとうという人が叫んだ。ドアに突進して、今帰ったと思う人を捕まえて、部室の中に引きづり込んだ。

「おい。善知鳥うとう。首掴むことないだろ。いつもギャグでやってるの分かってるじゃないか。」

「半分冗談じゃないって気があるから。つい癖で。」

「それはウソだろ。ていうかお前らこのこととかいろいろ言ってやれよな。1年生は分かんないんだから。」

今いる3人を叱ってからその人はこう説明してくれた。

「とりあえず名前だけは言っとくわ。俺は名寄真佐哉なよるまさはや。よろしく。」

「あだ名ナヨロンな。」

「余計な事言うな、善知鳥うとう。まあいいか。多分お前らも強制的に善知鳥うとうにあだ名つけられると思うから……。とりあえず中のこと説明しとくけど、お前らの後ろにある棚と木の棚でちよっと隠れてるところ以外は開拓かいたくしていい。今言った部分開拓すると死ぬからやめとけってことをまず最初に言っとく。で他は、その後ろの白いケースト、こっちのボックスの中にはモジュール作りのための道具。まあ作らなきゃ関係ないけどな。それで木の棚の下にあるのが、ボンぎゅうにゅうド水と工具。と、無いとは思うけど間違っまちがってボンド水飲ぎゅうにゅうむなよ。飲んだら食道と胃が固まるから。まあ今言っとくのはこれだけかな。」

辺りを見回して、

「お前ら自己紹介だかなんかやったか。」

「やってないよ。」

「じゃあやれよ。1年生来てるのにゲームとか携帯は失礼だろ。」

「分かったよ。じゃあ名前くらいは言っとくわ。」

それまでPFPをいじっていたサヤという人がゲームを一時中断して、

「俺の名前は北斎院大智^{きたさいやだいち}。漢字難し（むず）いからサヤとかって呼んでくれていいよ。」

「あたしは善知鳥^{うとうまい}茉衣。電車のこととか全然分かんないけど、分かんないことあったら聞いて。でこっちの彼女がハクタカの追っかけの……。」

「ちよっ、善知鳥^{うとうまい}先輩。余計なこと言わないでください。」

「えっ、だってそうじゃん。」

「そうじゃありません。」

「顔真っ赤で説得力無いよ、アヤノン。」

「だから、善知鳥^{うとうまい}はそういう余計な説明しなくていいんだって。」

「ええ。いいじゃん。」

「いやそれがよくない。」

3年生が言い合っている間にまた一人やってきた。その人を見て、

「アヤケン。オヒサア。」

僕達を見ると、

「新入部員。」

「ああ、そうだよ。」

「じゃあ、名前は言っとくな。綾瀬健斗^{あやせけんと}。部活じゃアヤケンで通ってるからそう呼んでもいいよ。」

ざっと自己紹介を済ませる。

「そーいやあ、お前らの名前聞いてなかったな。1年何組でどこに住んでるかとか名前言ってもらうか。まずそっちののっぽのほう。」

「1年5組の佐久間悠介^{さくまゆうすけ}です。涼ノ宮^{すずのみや}に住んでます。」

「涼ノ宮かあ。案外近いね。」

今度は指を僕のほうに向けて言えと促す。

「1年5組の永島智暉^{ながしまともし}です。小楠^{おぐす}の中瀬^{なかぜ}っていう所に住んでます。」

（小楠^{おぐす}の中瀬^{なかぜ}……。永島^{ながしま}……。）

「佐久間悠介に永島智暉ながしまかあ。分かった。」

「部員は全員で6人って言ってましたけど、今ここにいるのは5人ですよねえ。」

「前職員室の前であたしと話した人がいるでしょ。あの人6人目だよ。名前は鷹倉俊也たかくらしゅんやっていうんだけどね。ハクタカってみんなに呼ばれてるからそう呼んでもいいよ。」

噂をしているとその鷹倉先輩たかくらが来た。

「彼がさっき言った鷹倉俊也君たかくらしゅんや。前あってるから分かるよね。」

「ああ、はい。」

その後佐久間さくまは足早に帰り、僕はしばらく部室においてあった車両で遊んだ。

「永島ながしまってどんなあだ名がいい。ないならあたしの独壇場で決まるけど。」

「ああ、じゃあ。ナガシイでお願いします。」

「分かった。永島イコールナガシイだって。皆覚えろよ。」

「……。」

「そのあだ名って何か関係あるんですか。」

「別に関係ないよ。ただ鉄研てつけんの文化みたいなやつ。この部活の部員は全員友達だからさあ。先輩と後輩の関係っていうのも少しは大事なんだろうけどあたしはそんな固いこと言わなくていいと思ってるだけ。」

「……。」

「は……反応無っていうのも少しらいんだけど。」

「善知鳥先輩インパクトありすぎなんですよ。1年生からヒカレル対象だと思えますけど。」

「そうか。ねえ、ナガシイあたしってそんなに個性的か。」

「えっ……。」

「ほら、永島ながしまが困ってるじゃないか。」

「いやあ、ごめん。いきなり難しい質問しちゃって。まあそんなに固くならなくていいってだけ。いいよ、あたしに限ってはタメ口で

も。」

「タメ口聞くんならナヨロンのほうがいいんじゃないか。こいつ電車詳しいし。」

「それだけでそうするなつうの。」

「ウソ。それは冗談。」

「どこまでが冗談で、どこからが本当なんだよ。」

「よし、質問変えよう。担任誰。」

（こいつは人の言うこと聞いているのか・・・。）

「えっ。四ツ谷先生ですけど。」

「うわっ。四ツ谷かよ。」

「四ツ谷かあ。お前まだよかったな。」

先輩たちがこういうのは十中八九あのことだろう。そのことを先輩に聞いてみると夏休みや冬休みに1日5ページ出されるということ
は本当。そして、出さないといつか付けが返ってくるということを聞いた。

「へえ。そうなんですか。」

「まあ、ナガシイならどうにかなりそうだね。バカそうだし。」

（いや。こいつバカじゃないだろ。）

ふと時計を見るともう18（6）時だ。

「あっ、すみません。今日はこれで。」

「ええ。もう帰っちゃうの。もうちょっと長くいればいいのに。」

「帰るって言うてるのに引き留めちゃいけないだろ。」

「次の活動日いつですか。」

「明日だけど。」

「じゃあ、明日も来ます。失礼します。」

ドアを閉めて帰路についた。

その後の部室では・・・、

「すごいのが来たな。」

名寄なよろがつぶやいた。

「すごいって。ナガシイなんかすごいところでもあるのか。」

「いや、あいつ自体がすごいって意味じゃない。永島ながしまの家がすごいって言った方がよかったかな。」

「どういう意味だよ。」

「あいつ、小楠おぐすの中瀬なかぜってところに住んでるって言ってただろ。たぶん間違いないと思う。あいつ遠江急行こうきゅうの社長の孫だ。」

今回からの登場人物

北齋院大智きたさや だいち 誕生日 11月19日 血液型 B型 身長

169cm

綾瀬健人あやせ けんと 誕生日 3月30日 血液型 AB型 身長 167

cm

名寄真佐哉なよろ まさや 誕生日 9月3日 血液型 O型 身長 17

1cm

善知鳥茉衣うしろつまい

誕生日 6月4日 血液型 A型

身長 165cm

5列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）（後書き）

珍しく連続投稿です。今後連続投稿は恐らくないと思いますが、読んでくれる人には感謝。

6列車 彷徨い娘

部室の窓を割るほどの絶叫が5秒間続いた。

「マジ。ていうかふつうそういう人って北星とかに行かされるんじゃないの。」

「行かなかったんだろ。あすこは完全な進学校だし。」

「そりゃあ置いといて、なんでそう・・・ってさっき言ったか。」

「でも、ナガシィってそういう風に見えないよね。」

「いや、あの性格でそう見える方がすごいと思う。」

「もうその話やめればいいじゃないですか。同じ部員なんですから。そういう目で見ない方がいいですよ。」

楠くすのきがこの話を辞めさせてからはいつもと同じバカ騒ぎに戻った。なお、この部活のクオリティーはバカ騒ぎにある。

その頃運動場のほうでは・・・。

「友紀ゆきはソフト部でしょ。私もソフト部に入ろうかな。」

「そう。留萌るもいは入ろうって思ってるんだ。木ノ本きのもとは。」

「えっ。まだ迷ってるけど・・・毎日練習はきついなあ。」

「おい。中学のときだってそうだろ。だいたい運動部なら毎日練習しないとダメでしょ。」

「榛名はるなが言いたいののは中学の途中から部活来なくなってたし、続けられるかどうか不安ってことでしょ。」

「それもあるけど・・・。」

（入るか入らないかは別として一度鉄研部てっけんも見に行ってみるかなあ。）

ソフト部が練習する風景はもはや白黒でしか映っていない。色づいて見えていたのはオーペンキャンパスで鉄研てっけんがやっていたあの展示だった。ただ、女の子が鉄研てっけんに入っているのだろうか・・・。その口論こうろんが続いていた。

翌日。

「永島。^{ながしま}ノートやってきたか。」

「昨日言ったじゃん。やる気ないって。」

「いや、いちばん最初ぐらいはやっといたほうがいいって。1か月くらいやってゴールデンウィークのあたりから面倒になりましたって言えば通るって。多分お前だけだぜ。1日目からやってないっていうのは。」

「・・・。」

ちよつと心配になったが、そうでもなかった。逆にやってある人のほうが珍しかったぐらいだった。

「出して損じゃないのか。宿毛。^{すくも}」

「いや。損とは思ってない。でもあれやるのは骨がいるってことは分かった。書くスピード速い俺でも2時間はかかったぜ。さすがに90行はきついなあ。」

「そんなこと言わないで。よけい痛みがひどくなる。」

その放課後。

(鉄研^{てっけん}かあ。)

壁に貼り付けてあるポスターを見てふと思う。そう言えば岸川に來てから鉄研^{てっけん}のこと以外正直考えたことがない気がする。

(女の子でも見に行っているんだ・・・よし。)

決心をきめてポスターが指示する部室のあるところまで行ってみることにした。だが、体育館のところまで来て足が止まる。ここに来るとバスケット部の目がある。鉄研^{てっけん}を見に來たと思われたくないというのも少しある。

すると、今來た方向から一人走ってくる人が見えた。矢のごとく自分の前を通り過ぎて、ドアノブに手をかけた。

(鉄研^{てっけん}部員・・・。)

その人からは何かと自分と同類のような気配がする。思い切つて声をかけてみた。

「ねえ。君、鉄研^{てっけん}部員。」

顔をこちらに向ける。

「そうだよ。・・・見学に来たの。」

とりあえずここははいと返事をする。そうでなければここに来た意味がない

「そう。じゃあ、昇降口で靴替えてくれば。そうすれば、ダイレクタで帰れるから。」

「・・・分かった。替えてくるけど、私部室の場所分かんないんだけど。」

「分かった。戻ってくるまで待つてるよ。」

待たせては悪いと思いすぐに皮靴に替えて戻った。戻るとさっきの人が約束どおり待っている。その後はその人に促され、靴をスリッパに替えて、バスケット部の隣を通ってステージ裏の通路を通って階段を上がる。左側のドアに手をかけて開けようとする鍵がかかっている。

「開けんの面倒くせえなあ。」

独り言を言って、その場に座った。しばらく立ったままでもいたが、

「ねえ。カギ取りに行かなくていいの。」

「そのうち先輩が来るって。それまでこのままでいいよ。」

するとその先輩が来た。先輩もまた面倒くさいと言ってその場に座る。次の人もそうだ。誰か取りに行く人はいないのだろうか。すると下から怒った声がする。その声を聞くと先輩の一人が腰を上げて、ドアを開けた。

部室内に入ると携帯電話使い放題。同じ一年生と思われる人は木の棚のほうから車両を取りだして、机の上に置かれているモジュールで遊び始め、他の人は携帯電話をいじるかPFPでゲームをし始める。

「よーす。皆。」

後ろからすごく大きな声だ。ただ、今後ろから入って来た人は男子ではない。女子の声だ。

「おお、新入部員。これでナガシィとユウタンと合わせて3人目かあ。」

「えっ、マジ。」

「サヤ先輩今気付いたんですか。」

「しょうがねえだろ。こいつはスゲー鈍感なんだから。」

「まだ部員になるとか限らないです。今日は部活見学に来ただけみたいですから。」

「へえ。でもうれしいよ。名前なんて言うの。」

「木ノ本きはるな榛名です。」

「榛名ちゃんかあ。で、ちなみに榛名ちゃん電車好き。」

「・・・まあ、少しは。」

「へえ。あたしは電車全く分からないけどよろしく。善知鳥うとうまい茉衣よ。それで、そこでゲームやってるのがこの部活の部長の北斎院大智で、奥で携帯いじってるのが綾瀬健斗あやせけんとで、もう一人携帯いじってるのが・・・ねえ、サヤ。ハクタカって名前なんだっけ。」

「3年生分かって2年生分かってないってなんですか。鷹倉俊也たかくらしゅんやです。」

少々あきれ気味になっているのは分かる。

「それで、そこで遊んでるのが、同じ1年生の永島・・・。」

「智暉ともきです。」

「そう。智暉君だ。」

（なんてハイテンションな部活だよ・・・。）

「まあ、部員は後2人いるんだけどねえ。今日ナヨロンとアヤノンとユウタンはどうした。」

「ナヨロンは補修。」

まずアヤケン先輩が答える。それに続けてハクタカ先輩が、

「絢乃あやのは日直にっちよく。」

と答えた。

「じゃあ、来るっていうことだね。」

「佐久間さくまは帰ったと思います。」

「帰ったって。面白いのに帰るなんて本当にやなやつだな。」

「まったくだ。この部活に来なくて何が面白い。」

「そこまでいう人はごく稀だと思います。」

「そうか。」

「ぼ・・・僕の場合は家でも十分楽しいですけど。」

「それはそうだろうな。」

振り向いてみるとそこにいたのはナヨロン先輩だ。

「あれ、ナヨロン補修じゃないの。」

「補修だけど、その道具ここに忘れてったみたいで探しに來ただけ。」

「多分、これだろ。はい。早くしないと補修に遅れるぜ。」

サヤ先輩がその補修道具をナヨロン先輩に手渡す。

「大丈夫。もう間に合うとか思ってたないから。後、これサンキューな。」

その後楠先輩も合流。僕は昨日と同じ6時くらいまで遊ぶ。6時になると時間だと言って帰ろうとした。見学に來た木ノ本もほぼ同時に帰ると言った。

部室を出て、足早に階段を下りる。

「永島君。ちょっといい。」

まだ部室のドアの前に立っている木ノ本に止められる。

「いいけど、何。」

「私って・・・鉄研に入ってもいいと思う。」

（なんじゃそりゃ。）

今回からの登場人物

木ノ本 ^{きののほん} 榛名 ^{はるな}	誕生日	8月13日	血液型	O型	身長	160cm
室蘭 ^{むろらん} 友紀 ^{ゆき}	誕生日	7月1日	血液型	A型	身長	162cm
留萌 ^{るもい} さくら	誕生日	7月20日	血液型	A型	身長	157cm

6列車 彷徨い娘（後書き）

こういう感覚って書きづらい・・・。
思い切って女子鉄も出してみました。

7列車 またまた新入

いきなりそう聞かれても……。僕には入ればいいじゃんと答えるしかない。

「入ろうと思ってるなら、入ればいいじゃん。」

「でも、私女の子だよ。女の子が鉄研てつけんに入るってなんか変じゃない。」

「

「変じゃないだろ。先輩の中でも女子いたじゃん。」

「あの2人は違う。マニアじゃない。……。あの人たちは旅行ができるからこの部活に入ってたって言ってたじゃん。でも私は入るならそんな理由で鉄研てつけんに入らない。私は言っちゃえばマニアなの。」

「ならなおさら……。」

「でも、女の子が鉄研てつけんとかそういう部活に入ってるのかって。一度降りた階段をまた上る。」

「そんなの関係ないよ。なんに興味持とうが、どんな部活に入ろうがそれはその人の自由だろ。木ノ本きのもとが好きなようにすればいい。」

「……。」

「もし入りたくないなって思ったら、中学で入ってた部活にでも行けばいいじゃん。もちろん、その部活が自分にとって楽しければの話だけど。」

今度は上った階段を下りる。

「永島君ながしま。ありがとう。ようやくとどうすればいいか分かったよ。」

「そう。んじゃあサイナラ。」

階段を下りてさっきの勢いで帰っていった。ステージの向こう側にチラッとその姿を捉えて、

（なんに興味持とうがその人の自由かあ。）

翌日。

「蘭らん。ちよつといい。」

「何。木ノ本きのもと。入りたい部活でも決まった。」

「うん。私鉄研てつけんはいる。」

「・・・やっぱり。そうだね。ソフト部来たって木ノ本きのもとにはきつただけだもんね。」

「まあね。そういえば、さくらはどうするって。」

「留萌るもいはソフト部入るだって。まあるもいを辞めて鉄研てつけんに行きそうなどころはあるけどね。」

「・・・。」

しばらく友達の室蘭友紀むろらんゆきを見つめた。

「どうした。あたしの顔になんかついてる。」

「ううん。なんか蘭はこうなること分かったたのかなあって。」

「分かったかあ。分かってたらあたしは神だね。・・・でも、そうなるのかなあ。木ノ本きのもと中学きぎのちゅうがくに入ってからだんだん元気がなくなってきたじゃん。だから木ノ本きのもとが好きな鉄道でどうにかなるかなあってね。」

「やっぱり分かってたじゃん。」

「いや、でも女子の入る部活じゃないって敬遠けいえんするとは思ってたけどね。最初はマジで敬遠してたし・・・。」

「途中経過はダメダメでも結果オーライだろ。」

「だな。・・・鉄研てつけん入るからには楽しんでこいよ。そこでいい彼氏とかもできるだろうし。」

「さあそれはどうかな。」

「まさか、もういるとか。」

「えっ・・・。い・・・今はいないよ。」

「まあ今はそんな話どうでもいいか。」

話は授業によりここで中断にされた。でも伝えたいことはちゃんと伝わっているだろう。

その後木ノ本きのもとはもう一人の親友留萌るもいさくらにも鉄研てつけんに入るということを伝え、同日。部活登録届を提出した。

その頃5組では・・・。

「永島ながしま。今日は出しといたほうがよかったんじゃないのか。」

「確かにそうかもな。でもどんな奴でも続いて1か月だろ。早い奴は三日坊主で終わるにきまつてる。」

「お前の場合はやらすじまいだもんな。」

「だってやりたくないもん。あんなのやるくらいなら家でずっと模型いじってるほうが楽しい。俺がここに来た理由は……。」

「鉄研やるためであって、勉強は二の次だろ。それは分かっているけど、出さなかったやつお前だけみたいだったから絶対ホームルームの時にたたかれるぜ。」

「たたかれようがどうってことねえよ。ていうかそれで定期テスト俺の上に行ってくれるやつがいれば俺にとっては大歓迎だけだな。」

「それは、俺か。それとも、また未知の人間か。」

「できれば、お前。」

「ないな。お前の上あきらめたわけじゃないけど、絶望的だと思う。」

「すくも宿毛の言ったことは当たった。」

「ながしま永島。お前だけだぞ。ノート3ページ出してないのは。お前はできるんだからこれやってもっと上狙うべきだ。」

（狙い気ないのに。）

「はい。じゃあ、さらっとやって持ってきます。」

とか、適当に返事をしておいた。

「あれ言ったら余計ヤバいんじゃないか。」

「ヤバいな。でも出す気はない。死ぬから。」

「その死ぬっていうのは当たってるな。俺もう9ページやって出してるんだけど、あの9ページだけでもしんどいって思った。あれはながしま永島の言うとおりに続く人でも1か月だと思う。」

「だろ。やらないでもそれが伝わってくるんだから異常だって。それならノート代を払わずに自分の小遣いにしたほうがよっぽど賢い。」

（ながしま永島にとってはそれが賢い選択なんだな。）

「つうか宿毛はあれやり続けるの。」

「あれ1冊終わるまではな。それ以降はやれない。つうかやらないと思う。」

「そう。んじゃあ。俺今日も鉄研てつけんやってくから。」

「おう。じゃあな。」

その後ろ姿を見送っている間

（永島ながしまのやつ。鉄研てつけんあるっていう日だけ元気だな。坂口さかぐちと一緒にやなくなったからか。いや。そんなことあまり首ツッコまないほうがいいか。あいつの選んだ道だし。）

その頃宗谷学園そうやがくえんでは・・・、

「萌ちゃんもえ。今日何か部活見てく。」

「それだったら綾あやだけで行けば。私情報部に入る気もないし。」

荷物をまとめて、カバンを背負う。すると、すたすた昇降口のほうへ歩いて行った。その後ろ姿を磯部いそべと端岡はしおかが見送る。

「萌ちゃんもえはどうしちゃったんだろう。情報部にも愛想つかしっちゃったのかなあ。」

「そうじゃないの。」

「ナガシイ君と一緒にないから。」

「それかなあ。あたしはもっと別な理由だと思うけど。」

「例えば。」

「・・・。すぐには思いつかないって。萌もえの考えるパターンって永島ながしま君でないと分かんないくらいだと思うし。」

「そこまできなあ。」

「そこまでじゃない。つか話ズレてる。あたしが思うにもう部活には入りたくないんじゃないの。なんかに専念したいっていうのかなあ。そんなこと読み取れるんだよねえ。」

「なんかに専念したいって。何に専念する気よ。ナガシイ君との恋愛。」

「それじゃないと思う。永島ながしま君のことはそっちのけじゃないのは分かるんだけど・・・。」

（私ってこれからどうすればいいの。ナガシイと同じ進路に行くた

めには観光系の専門学校かなんかよねえ。でも、どの学校に行けばいいの。それが全然分かんない。少なくとも浜松にあるっていう国際観光と大原はなしね。あんなところ言ったらってろくなものにはなれない。なんかナガシイには知られたくないし……。どうすれば……。)

またその日の放課後。鉄研てっけんの部室にさらに3人が押し掛けた。その3人は全員中学生で名前は背が高い順に諫早轟輝いさはやこうき、空河大樹そらかわだいき、朝風琢哉あさかぜたくやだそうだ。

「じゃあ、あだ名はイサタン、ソラタン、アサタンでいいね。」

「えっ。それはどう……。」

「新入部員に拒否権きよひけんはない。」

ナヨロン先輩が言っていた強制的というのはこういうことか。

「で、みんな何に詳しい。」

「僕は模型鉄もけいてつですから、それなりに電車のことは分かってますけど。」

「まず諫早いさはやが口を開いた。それに続いて、空河そらかわがディーゼルに詳しいと言いい、朝風あさかぜは寝台特急しんだいとっきゅうに詳しいと言いった。

「みんなそれぞれ詳しいものがあるんだな。」

本ノ本ほんのほんが傍らでつぶやいた。

「なんだ。自分には詳しいものはありませんみたいな言い方してるけど。」

「今はね。昔は寝台特急とか新幹線とかはだいたい分かってたんだけどね。小学校の3年生くらいになった時から女の子がこれに興味持もってていいのになって考え始めてからはどんどん忘れてって、今分かるのは新幹線の形式か特急の名前だけ。」

「まあ鉄研てっけんに入いってて新幹線が分かんないんじゃ絶望ぜつぼう的だからな。」

「何。ナガシイ。新幹線分ぶんかってなきや絶望ぜつぼう的か。」

会話を聞いていた善知鳥先輩ぜんちうが自分の頭に手を置いた。そして、強く握にぎる。

「いや、そういう意味じゃなくて、0系とか「こだま」とか。それ

ぐらいは分かってた方がいいってことです。」

「ごめんね、ナガシィ。あたしには0系も「こだま」も分かんないから。」

「いやそれでも「こだま」、「ひかり」、「のぞみ」くらいは分か
ってた方がいいですよ。日本人として。」

「何。ハルナンもそう思ってるのか。じゃあ、「こだま」とか分か
ってなきや日本人失格にほんじん しっかくってこと。」

「まあ、簡単に言えば・・・。」

「言っちゃうの。」

僕はこう答えたが、先輩たち。特に3年生は当然というような顔を
していた。

「・・・まあ言われてもしようがないとは思ってるけどね。膳所せぜさ
んや青木おおぎさんにもそう言われたからなあ。でもね、覚えられれば苦
労しないわけよ。どうやったらナヨロンみたいにオタク化できるか
分かんない。」

「おい。オタクって言うなオタクって。少なくともマニアの領域で
止めといてくれない。」

「だってナヨロン完全にオタクじゃん。SLエスエルのボイラーの形とかが
違うからこれはなんとかっていうことふつうの人間が解るか。」

「それはお前の出してる例がマニアックすぎるだけ。いくら電車知
らない人間でも1964年10月1日に東海道新幹線東京とうかいどうしんかんせん〜新大阪しんおおさか
間515・4キロが開業したことくらいは分かるだろ。」

今度はアヤケン先輩が口をはさむ。

「あもう。そのなんていうか分かんない先輩。いくらなんでも総
延長は分かんないって。」

諫早いさはやも話に入ってくる。

「少なくとも、1964年10月1日に東海道新幹線とうかいどうしんかんせんが開業して、
東京〜新大阪間が「ひかり」で3時間。「こだま」で4時間になっ
たっていうは知っとくべきでしょ。」

「所要時間しょうじょうじかんなんてド素人が解るかよ。だったらまだ総延長のほうか

ハードル低いつて。」

「アヤケン先輩も諫早いさはやもやめろよ。1964年10月1日までは一般常識としてその先は2人ともマニアックだ。」

木ノ本きのもとが止めに入る。

「だから、開業かいぎよう当時は最高速度210km/hキロから始めたって言った方が分かりやすいだろ。」

「やめんか。アヤケンと諫早いさはやが話に入っただから話がこじれてるだろ。だから・・・。」

「サヤ先輩まで辞めてください。余計話がややこしくなります。」僕が止めに入ってようやく話が収まった。その後はまたまた電車の話で持ちきりにはならず、面白話で持ちきり。6時になるまで部屋でバカ騒ぎ。木ノ本きのもとの話では先輩達は7時までバカ騒ぎらしい。でも、その時間までこの状態が続いても暇じゃないのはすぐに想像できる。

今回からの登場人物

端岡夏紀はしおかなつき 誕生日 2月21日 血液型 O型 身長 16

磯部綾いそべあや 4cm 誕生日 11月3日 血液型 A型 身長 147

諫早轟輝いさはや こうき cm 誕生日 11月17日 血液型 O型 身長 15

空河大樹そらかわ だいき 9cm 誕生日 2月10日 血液型 O型 身長 151

朝風琢哉あさかぜたくや cm 誕生日 5月8日 血液型 AB型 身長 1

47cm

7 列車 またまた新人（後書き）

このやり取りって知ってる人でないとウケないかなあ・・・。

8列車 気持ち 決定

そのまた翌日。

「結局今日も出さなかったんだな。」

「やる気ない奴のやる気を底上げしてやったって無駄。ともかく俺にはやる気はない。何と言われようと絶対やらない。」

「はいはい……。」

「何。」

このところずっと思っていたことを永島に打ち明けてみた。
ながしま

「永島。ながしま お前寂しくないのか。」

「えっ。」

「なんか知ってるから余計こう感じるのかなあ。お前を見ると今のお前より中学の時のお前がもっとイキイキしてた気がする。」

「……。」

「今からいつものお前になってっていうのは無理っていうのは分かっている。そうしてくれてたのはあいつだっていうの分かっているけど、元気がないお前はお前らしくない。」

「……。」

「俺思ってたけど、お前はあいつのことが好きなんだろ。今からでも遅くない。あって気持ちを確認しあうだけでも自分の気持ちも落と着けるんじゃないかって。」

「……。」

「こんなこと言いたくないけど、何か言ってくれよ。ずっと黙ってるってお前らしくないから。」

「気持ちだけなら確認し合ったかもな。卒業式の時に。」

「……。なんだ。それなら。」

「寂しいっていうのは当たってるかもな。いつも話してたやつが今はいないんだから。」

「……。」

しばらく机を挟んだ状態でいる。

「永島^{ながしま}。俺でもいいか。」

その言葉で顔を上げた。

「俺にお前の電車の知識ぶつけてくれ。俺電車のことはわかんないけど、覚えることだったらお前にも負けない。お前が持つてる鉄道知識を俺にぶつけて……。もっと言っちゃえば俺をあいつと思ってくれて構わない。それぐらいの気持ちで俺と話してくれ。そのほうが断然お前らしい。」

（宿毛^{すくも}。）

「なあ。頼む。暗いお前は正直見たくないんだ。」

「……。悪いけど、それはできない。半分萌^{もえ}だからできったってところもある。それをお前が再現しようとしたって無理だ。宿毛^{すくも}に電車のことは覚えられない。」

「なんでだよ。」

「じゃあ、聞けけどお前東海道新幹線がどこからどこまで走ってるかわかるのか。」

「そ……。それは。」

「最低限今この段階でその話ができないと……。」

「決まったわけじゃない。今からでも間に合う。俺がそのこと全力で覚えれば1日で十分だ。掘り込んだところまで……。」

「だから無理だって言ってるだろ。その知識は萌^{もえ}だから習得できたんだ。いくら頭がいいからって。お前の頭はそういう風にできてない。宿毛^{すくも}は……。お前はいつもみたいにしてくれればいい。それだけでいい。」

「永島^{ながしま}……。」

「自分で言うのもなんだけど、なんかこれだけで俺たちは終わらない気がする。今元気が少ないのは我慢の時だと思う。」

「……。」

「分かった。そんなに簡単に終わらない来いっていうのは俺もうすうす感じてる……。でも……。どうしても我慢しきれなくな

「つたら俺に言えよ。なんでも受け止めてあげるからな。」

「宿毛・・・。ありがとな。分かった。どうしてもそうならお前に鉄道知識いっぱいぶつけるからな。」

「はっ。ぶつけるものは悩みじゃなくてそれかよ。」

「さっきそうしてくれて言っただじゃん。」

「・・・。そうだったな。」

その日の放課後。

「今日また新入部員が来たぞ。」

今日は一段とテンションの高い善知鳥先輩である。

「また新入部員かよ。今年は善知鳥が言った通りブレイクしたな。」

「さあ、新人入って来い。」

そう言われてはいってきた人は・・・。木ノ本はその顔を見ると、

「あつ、箕島君。」

「えっ。木ノ本さん。」

「新入部員って箕島君だったんだ。」

その会話を聞いている善知鳥先輩の目は明らかに光っている。

「何ハルナン。まさかハルナンの彼氏だった。」

「そんなんじゃないやしません。同じ中学同じクラスだった人です。」

「なんだ。つまんないのー。」

「はい。そういうこと言わない。」

「まあいいわ。それより今日はもう一人部員が・・・。何勝手に入ってるんだよ。」

善知鳥先輩がそう言ったとき全員その人の存在に気付いた。

「何か入ってきたし。」

「もの扱いしないでください。」

「いや。したくなる。」

「はい。サヤもそういうこと言わない。」

「とりあえずまずは名前だけ言ってくれるか。」

「1年4組の箕島健太です。よろしく願います。」

「1年7組。醒ヶ井瑛介です。よろしく願います。」

「あだ名はミッシィ、サメちゃんでもいいよね。考えるの面倒だし。」

「そんな安易でいいのかよ。」

「その前に先輩。サメちゃんっていうのはやめてください。」

「何。文句でもあるの。」

「・・・。いえ、ありません。」

善知鳥先輩は醒ヶ井の文句を人にらみで退けると今度は僕たちの紹介に入った。

「こっちが鉄研部員。」

と言ってから人数を数えて、

「いないのはユウタンだけか。まあいつか。この部活の天然部長のサヤとモジュールデザイナーのアヤケンとマニアのナヨロン。北陸大好きのはくたかとその人大・・・。」

「それ以上何も言わないでください。」

そう言わせまいと楠先輩がその口をふさぐ。

「ぶはあ。分かった。じゃあ、言い方変える。鉄研のホームヘルパーアヤノン。後は鉄研一お調子者の1年生ナガシィと1年生の紅一点ハルナンとあんまり部活に來ない背の高いユウタン。これで全員よ。」

「・・・。」

「だから、善知鳥先輩のそのハイテンション差で1年生がヒイテますって。」

「じゃあどうすればいいのよ。あたしからこのテンション取ったら何も残らないんだからね。」

「それはよく分かってますけど・・・。」

「分かっているならそれでいいじゃん。」

そのやり取りを見ていた箕島が、

「なあ、木ノ本さん。この部活っていつもこんな感じなのか。」

「こんな感じだよ。まあ、1年生の中にもそういう人いるけど。」

その人に目を向けて、誰かということ言う。

「納得。」

そういうと同時に心の中で思うことが一つあった。

（部活内でのあだ名がナガシイって言ってたな。俺と同じ感覚でつけてあるとすれば、こいつの名字は永島^{ながしま}か。まさかとは思うけど、永島^{ながしま}ってあれじゃないよな。）

「普段からこういう感じなんだろうけどな。」

「普段からねえ・・・。」

（これでもしあれだったら驚きだぞ。）

しばらく先輩たちと話していると部室のドアがまた開いた。

「おお、イサタン。」

「手を上げる。」

諫早^{いさはや}は手で拳銃の形を作ってあからさまにこう言った。それに乗せられて手を挙げる人は・・・。

「うわあ。お前ら手あげないと撃たれるぞ。」

「そこまでじゃないだろ。諫早^{いさはや}が作ってるのは指拳銃。弾丸が出てくるわけないじゃん。」

「サヤ先輩。死んでください。」

どこから取り出したのだろうか。諫早^{いさはや}が手にしていたものがいつの間にか本物の拳銃になっている。

「あーっ、バカやめろ。」

「そこまで驚かないでください。エアガンなんだから。」

「そんなの学校に持ち込むんじゃない。あぶねえから鞆中しまっつけ。」

「諫早^{いさはや}・・・。お前休日とかになったら山に分け入ってサバゲーでもやってるのか。」

「そんなのやってませんよ。休日は家で自分の模型いじってますからね。」

諫早^{いさはや}はエアガンをかばんにしまいながら言う。

「・・・。」

続いて空河^{そらかわ}と朝風^{あさかぜ}が来て、中学生全員がそろろう。

「諫早^{いさはや}。お前本当にエアガン抜いたのか。」

「ああ。抜いた。サヤさんの反応が面白かったけど。」

「イサタン。後で覚えとけよ。」

「はい。ちゃんと忘れまーす。」

こういう部活でいいのだろうか。でも、こういう部活だからいいのだろう。

それから数日が過ぎていき、4月20日。部活登録のあった新入部員は僕を含め8人。鉄研部^{てっけん}は全員で14人となった。

これから岸川学園鉄道研究部^{きしかわがくえんてつどうけんきゅうぶ}（略KRC^{ケイアールシー}）の今期の活動が本格化していくのだ。

今回からの登場人物

箕島健太^{みしま けんた} 誕生日 4月5日 血液型 A型 身長 159cm
醒ヶ井瑛介^{さめが いえい すけ} 誕生日 2月21日 血液型 O型 身長 165cm

8列車 気持ち 決定（後書き）

このところ連続投稿。あー死ぬー。

とまあようやくここまで来ました。そういえば舞台設定していませんでしたが、この物語2008年スタートです。

ということは・・・なんですよねえ。

これからこの先の展開を考えるためにまた不定期になるかもしれないませんが、読んでくれる人には感謝。

9 列車 基本事項

4月24日。部活決定の日から4日。クラスの人ともなじんで、次はという段階。これからは部活の先輩やその仲間、高校生活になじむ番である。そのの一環と言っているのかはわからないが、鉄研部員1年生は5組に集合して昼食をとっている。

日も浅いことだし、全員自分たちの話になるのは当然のことだろうか。みんなのことは少しでもわかっておく必要がある。

「永島ながしまは何で電車が好きになったわけ。」

僕の右隣に座っている木ノ本きのもとが話しかけてきた。

「うーん……。なんで、好きになったか。」

「そうそう。だってここにいるみんなは電車のことが好きだから入部したようなもんでしょ。だったら知りたいじゃん。その理由。」

「それだったら、木ノ本きのもとが電車好きなの理由のほうが聞きたいなあ。」これには全員興味を示した。木ノ本きのもとはちょっと話しづらいという顔をしたが、

「お母さんに憧れたから。」

と答えた。

「へえ。木ノ本きのもとの母さんって運転手みたいなことやってるの。」

「うん。JRの在来線の運転手やってる。よくそれ見にお父さんが連れてってくれたんだ。その時から電車のこと好きになった。」

「へえ。」

「で、永島ながしま。質問には答えたんだし、私の質問にも答えてよ。」

「ああ。……自分でもよくわかんないんだよなあ。それ。」

「えっ、何かきっかけあるでしょ。それとも物心ついた時から好きなのわけ。」

「いや、そうじゃないんだけど……。いつ、どのタイミングで好きになったかわからないんだよなあ。『パノラマスーパ』見たときからか、100系を見たときからか。」

「「パノラマスーパー」はいつ見たんだよ。」

「多分、幼稚園の時。よく兄ちゃんに連れられて100系見た行った時も幼稚園の時だったから。」

「なるほどねえ。子供の記憶だし、あいまいになるよなあ。佐久間は何で好きなの。」

「んなことしらねえよ。いつの間にか好きだったんだから。」

「箕島は。」

「俺は、こういう部活もいいなあって思って入っただけだから。」

「醒ヶ井は。」

「モジュールとか作れるって言ってたじゃん。だから楽しそうだなって。」

全員に目的はあるそうだ。

「おい、ナガシィ。」

ドアのほうから大きな声が聞こえた。一様にその方向を見てみると善知鳥先輩が立っていた。

「なんですか。」

「今日、アド先生が集合って言ってたから、それ伝えに来た。」

「あの、それもう全員知ってますけど。」

「・・・。ならいいや。全員こいよ。」

とだけ言って、自分の教室のほうへ走っていった。

1年生も交えた今季最初の部活動。今までと同じように部室に集う。今日は何をするのだろうか。

「よしす。諸君。さあみんな運べ。」

善知鳥先輩がみんなに指令を出す。その指令を聞くとすぐに先輩達は嘆いた。それも裏声である。嘆く必要はあるのか。そして、裏声である必要もあるのか。おそらくないだろう。

「じゃあ、1年生は全員外に出て、階段のところに並んで。」

名寄先輩が外に並ぶように促す。今日はどうやら荷物運びらしい。

部室前の階段に醒ヶ井、箕島、木ノ本、僕の順に並ぶ。すると、上からまず白いケースが大量に運び出されてきた。次はどこに置い

であるかも知れない謎の物体の山。最後はいたるところに指の跡が付いている荷物。ぶっちゃけていうと金属の山。電車のおもちゃやそのレールなど。鉄道研究部に関連するものも含まれている。だが、中には・・・。

「なあ、なんで卓球ラケットがあるんだ。」

木ノ本きのもとが回ってきた荷物の中にある卓球ラケットを発見する。

「ホントだ。なんに使うんだよ。」

荷物を渡されて、中を見してみる。すぐに見つかったラケットは1つ。だが、よく見てみると1つだけではない。3つある。他に卓球ボールも入っている。本当に何に使うのか分からない。すると上から、

「おい。そっちにラケットいつてない。」

北斎院先輩きたさいやの声である。

「あつ、来てますけど。」

「ちょっとそれ、必要だから上にまわして。」

「サヤ先輩がラケットの入った箱上にまわしてだって。」

「なんに使うの、これ。」

「さあ。」

用途不明のままラケットの入った箱を上に戻した。

しばらくの間部室から下ろされる荷物を床に置き続ける。安曇川先生あどがわ（アド先生）がその荷物をステージ裏にある狭い通路に置いて行く。狭い通路がさらに狭くなる。上からは「ゴミ」とか「あーっ」とかいう声に混じって、掃除機の音や、何か物を動かす音が響いてくる。一方階段のところからは上から運ばれてくる荷物にあだ名をつけて伝言ゲーム状態。もちろん前者の声も後者の声も何の意味もないと思う。

なんだかんだもう18時。その頃にもこの作業は終わりが見えないう。醒ヶ井さめがいが用事で帰ってからもしばらくはこの状態のままだった。体育館で練習しているバスケット部がランニングするところになると、上から先輩達が大量のゴミ袋を抱えて降りてきた。僕達1年生はそれと入れ替わりに自分の荷物を持って下に下りる。

「そんじゃあ。今日はこれで終わりだから、みんなオツ。」
サヤ先輩が簡単に締めくくる。

「で、誰がゴミ袋を捨てに行くか決めたいんだけど……。」
と言った瞬間に6つあるうちのゴミ袋を2つもって駆けだす人が一人。

「あつ、ハクタカフライング。」

鷹倉先輩を追って善知鳥先輩が。続いて、サヤ先輩がまた2つゴミ袋を持って走りだそうとすると、

「ちょっと待てよ。それは俺の獲物だ。」

「離せアヤケン。獲物だったらまだそっちにあるだろ。」

「あっちのはゴミだから。」

「お前ゴミ袋にゴミって言ってどうすんだよ。ゴミ袋の立場がないだろ。」

「知るか。」

その頃僕の傍らにいる名寄、楠先輩は……。

「ナヨ先輩。プレゼントです。」

「んじゃあいつてくるか。」

「あつ先越された。いい加減離せ。」

「獲物くれるまではなさねえよ。」

「おい、ホモケン離せ。」

「サヤが渡してくれれば離すよ。」

「誰がこれやるか。」

「あもう。楠先輩サヤ先輩達は何やってるんですか。」

「毎回恒例のゴミ袋争奪レース。詳しいことは後で説明するからちよつと待っててね。」

すると楠先輩はサヤ先輩が左手で掴んでいるゴミ袋の一つを取って、さつさと走っていった。それを追うようにしてサヤ先輩がアヤケン先輩を振り切り、アヤケン先輩はそれを追っていった。僕達はいとうただ哑然とした顔で見ただけである。しばらくすると、毎回恒例ゴミ袋争奪レースに参加してきた先輩達が全員戻ってくる。

「んじゃあ、お約束が終わったところで全員解散。」

サヤ先輩が息を切らしながら解散命令を出す。解散命令が出された後楠先輩くすのきがこう教えてくれた。

「モジュールとか作ってる、そのゴミが出るから毎回ゴミ袋に固めて、サヤ先輩の前に置いてくじゃん。それでサヤ先輩がゴミ袋に話しに入ったところでスタートよ。体育館を出て、あっちの2・3年生のチャリ置き場のあるところにダストシュートがあるから、そこまでダッシュするの。取られないようにね。それで、取られずにダストシュートにいられたら、その人の勝ち。取られたら取った人の勝ち。」

「うーん。よく解んないけど、ゴミ袋持ってダストシュートまで逃げろってことですよ。」

「そういうこと。面白いから次からやってみれば。じゃあね。」

「なあ、永島ながしま。鉄研って本当に個性的だな。」

「ハハ、個性的すぎて少しついていけないかもな。」

4月25日。今日もまた部活。9時30分から開始ではあるが、

先輩たちは全員パワフルである。北斎院先輩きたさいや せんぱい以外は全員集合済みだ。

「善知鳥先輩うとう せんぱいたち早いすねえ。」

「そうかあ。そんなことより、授業担当誰だか知りたい。」

なんでパワフルという話からこんな話になるのだろう。善知鳥先輩うとう

の話方は全く読めない。とはいっても聞かれたことだ。話すのが鉄則だろう。

「えーと、生物の担当が橋本先生はしもとで、・・・」

「サッカーボールじゃん。サッカーボールって最悪じゃない。授業の教え方とかくそ下手だよ。要点言うだけだし。それだったら教師いらないっていうくらいだから。」

「えっ、サッカーボールって。」

「だって、あのメタボ体系。完全にサッカーボールじゃん。人にけられながらダイエットすることをお勧めするよ。」

「善知鳥違うって。サッカーボールは袋井。」

「袋井。あれは、ラグビーボール体系。腹が出てて、縦に長い。で、ごめん他は。」

「英語は小林先生で、数学は青梅先生、情報が東中野先生。」

「数学青梅とか最強じゃん。」

「おめえらしいな。青梅先生は指導力あるから。後の小林と東中野はどちらでもない区分。最悪でもないし、最高でもないってところかなあ。」

理数系コースのアヤケン先輩はどうしても青梅先生にあやかりたいそうだ。

「あとは、国語アド先。社会は四ツ谷だろ。」

「何かとすごいな。でも、四ツ谷って嫌だろ。毎日ノート3ページ出されるんだから。」

「あつ、確かにそれはちよつと。僕なんか出してませんから。」

「早いなあ。でも、テストとかでいい成績とると特進行けとかってうるさくなるぞ。」

「えっ、ナヨロン先輩も言われたんじゃないんですか。」

「ああ、言われた。でも、そんなことしたら遊べなくなるからなあ。」

「どうせ遊び相手いないじゃないか。」

「うっさい。これからできるんだよ。これから。」

するとドアが開いた。見ると木ノ本だった。善知鳥先輩はいまぼくにしたのと同じ質問をして、ナヨロン先輩とアヤケン先輩はそれを聞いて楽しんでいる。そうしている間に9時30分になった。

「はい、みなさんお集まりですね。」

ドアを開けてアド先生が部室の中を覗き込んだ。

「あれ、北斎院君はどうした。」

「サヤだったら、まだ来てませんけど。」

「部長不在じゃあなあ、困ったもんだな。」

と言っているとサヤ先輩が息を切らして、部室に飛び込んできた。

「北齋院君。おはよう。」

というとアド先生はサヤ先輩の首を後ろからつかむような体制をとった。

「アド先生。それダメ。やっちゃダメ。」

「はいはい。これからは部長が遅れるということはないようにしてください。」

すると僕のほうを見て、

「永島君。木ノ本君。ちよつとその木の板とつてくれないかなあ。」

「

と頼んだ。いち早く木ノ本が反応し、白いケースの隣に無理やり押し込んで歩きの板を1枚取った。木の板は薄いベニヤ版。長方形の形になっている。木ノ本がそのベニヤ板をアド先生に渡す。

「あと綾瀬君。直線レールの入った箱持ってきてくれないかなあ。」

「へーい。じゃあ、このゴミに植林終わったら行くから少し待っててちょ。」

その返事を聞くとアド先生は下に来て、と手招きをした。僕たちはそれに促されて、部室から出る。部室から出るとすれ違いに中学生の諫早と空河にあった。アド先生はその二人にも声をかけて、ステージに降りた。ステージに降りると、僕たちがいつも利用している奥の通路から折りたたみ椅子を取り出してきて、一人勝手に座る。僕たちはその前に思い思いに腰を下ろす。諫早と空河が合流して、数秒経つとアヤケン先輩が緑色の横30cmくらいある箱を持って下りてきた。アヤケン先輩はその箱を渡してすぐに部室へと戻っていく。それを確認してから、

「これがKATOというところから出ているレールです。」

と説明を開始した。アド先生が取り出したものには、当然だが、レールが2本規則正しく並んでいる。そのレールの下にある黒くレールと直角に並んでいるものが枕木。そういえば、今はコンクリートの枕木が主流だということがあったが、その中で「木じゃないじゃないですか。」とツツコミを飛ばしていたことをふと思い出した。

木でなければ、名称は「枕コンクリート」にでもなるのだろうか。

「これはKATO^{カトー}から出ている最も標準的なレールです。この長さが124m^{ミリ}です。KATO^{カトー}のほうはこれを基本にレールの長さが決まっています。例えば、この2分の1のレールは62m^{ミリ}。これの2倍のレールは248m^{ミリ}。その248m^{ミリ}のレールに62m^{ミリ}足すと310m^{ミリ}という風になってます。さらに長さを調整するために64m^{ミリ}と加っている端数レールも出てますし、このような伸びるレールなどもあります。」

アド先生はまだ箱から出されていない伸びるレールを僕たちに掲示した。このレールには他と違って真中は枕木ではなくコンクリートをモチーフにした板が取り付けられている。そのレールの上には「78—108」と書いてあった。元の長さは78m^{ミリ}。最大は108m^{ミリ}になるということだろう。

「ただ、このレールはほかのレールより壊れやすいので、慎重に扱ってください。」

直線レールの説明は大体終わった。今度はカーブレールについての説明。

「この裏側を見てください。」

アド先生はカーブレールをひっくり返すとその真ん中のあたりを指差した。そこには「R282—15。」と文字が浮き上がっている。

「この「R」というのはこのカーブのきつさを表しています。そしてこちらの「15。」というのはこのレールで曲がれる角度を表しています。そして、カーブとカーブの間は33ミリが基本になっています。だから、282m^{ミリ}の次は315m^{ミリ}、その次は348m^{ミリ}という風になっています。それで、この中に216m^{ミリ}のやつがありますが、それは製作には使わないでください。」

説明が終わると今度は箱に入っているレールと2本ずつ僕たちに渡した。

「つなげてください。」

そう指示があった。2本のレールを床に置いて、連結する。中には

空中のまま連結したりする人もいる。連結が完了すると、しばらくそのままでいた。

「それじゃあ、今度はこれを外してください。」

そう指示が出る。両方のレールに手をかけて引っこ抜こうとする。だが抜けない。

「このレールは両方に引っ張っても抜けないようになってます。だから、この継ぎ目をどちらかに折り曲げるようにして引き抜いてください。Nゲージのレールは両方に引っ張って抜けるやつやこれみたいにとちらかに折り曲げて抜けるタイプもあります。」

説明を受けた後はその通りにぬいていくだけ。これが完了すると後ろに置いてあったベニヤ板を取り出した。ベニヤ板を床に置いて、レールを3本つなげる。そして、板の上に置き、左右を合わせた。

「この板は248mのレールを3本つなげた長さになってます。248mを3本つなげると何ミリだ。計算せい。」

「248×3で、744mです。」

後ろからナヨロン先輩が覗き込んでいた。

「はい。今名寄君が言ってくれた744mというのがこの部活のモジュールの基本です。この中にレールが収まるようにしてください。」

その後レールのさらに詳しい説明を受けた後、自分たちで何を作りたいかということ聞かれた。僕としては家にいっぱいある分、何を作りたいかなんて言う欲望はない。だが、ほかの人は駅を作りたいとか山のある風景作りたいとか、川がある風景を作りたいなど意見は様々。その中でも採用されるのはごく一部。今回は山と川の融合と山と駅の融合。後は留置線のある風景を作ることとなった。

9 列車 基本事項（後書き）

だんだん鉄道研究部らしくなってきました。

10列車 製作

そういう風になったとはいっても僕は作り方を知らない。当然一緒に作ることになった木ノ本きのもとも知らない。これでは到底前に進むことはないだろう。

「ナガシィ。何作るの。」

「えっ、留置線のある風景でも作ろうかなあっと思って。」

「そういうことで分からないことがあったらアヤケンに聞くのが一番だよ。あいつ器用だし。」

「ああ、はい。そうします。」

「おい、善知鳥うとう。そういうところで俺の仕事を増やすな。まだ、あれ出来てないんだから。ナヨロンにでも頼め。あいつは車両だけだけど何も作れないってわけじゃないから。」

「ナヨロンに頼むとろくなことがないじゃん。古墳作るって言い出すかも……。」

「そう言ったのはサヤだぞ。それで俺が作ったんじゃないか。結局ごみの一員になったけどな。」

先輩と話していたら余計進まなくなる。とりあえず、家に広がっているレイアウトのことを思い出す。だが、家のレイアウトにはこういう風なものはない。自分たちに与えられているのは板3枚だけ。これが家にあるレイアウトみたいになるのだろうか。そう思った。

「まあ、まず配線決めるかあ。」

「そうだな。でも、どうやって配線すればいいわけ。」

「さっきアド先生がやってたみたいにならなくたっていいから、とりあえずポイントと直線レールがあればどうにかなるかあ……。あつそれだけじゃどうにもならねえ。ゆるくてもいいけどカーブも必要かあ。」

独り言のようにしゃべっていると、

「ほれ。」

アヤケン先輩がレールを持ってきてくれた。手に持っているのは248m^{ミリ}レール12本。

「線形が単純ならこれだけで足りる。留置線配置するっていうなら、もうちょっとこの直線レールと道床が片方ないレールと124m^{ミリ}のポイントレール4番とかっていうふざけたやつが加わるから。」

そのレールはふざけているのだろうか。僕たちが探そうという前にアヤケン先輩はそれも探して持ってきてくれた。さっき言っていたレール。ポイントレールは皆さんお分かりだと思うが、片方道床が欠けているレールというのは見たことがないだろう。見てみるとそのレールは標準の半分くらいの長さで僕たちから見て左側の道床が斜めにカットされている。文字通り片方道床が欠けたレールだ。

「4番ポイントの直線側にこのふざけたレールをつなげて、その片方にR481のカーブを分岐側に組ませる。こうすると両方の線路がつくんだ。もしこの4番ポイントで、道床が欠けてないやつとやると片方ははまってももう片方ははまらなくなる。だからこんなふざけたレールがあるんだよ。」

さっきから聞いていればアヤケン先輩はそのレールのことをずいぶん迷惑がっている。だけど、その理由は問いてはいけないことにも思えた。とてもくだらない理由が返ってきそうだからである。

「お前らに必要なレールはこのくらいかなあ。後、その直線レール。道床の色何かに揃えとけよ。その中でも茶色のやつは結構古いのだからあんまりあてにしないほうがいいぜ。」

とだけ言って部屋に上がっていった。

アヤケン先輩から渡されたレールを使って配線をする。さっきアド先生が言ったとおりにして、直線レールをつなげていく。248m^{ミリ}の直線レールを3本つなげたところで、1枚目の板の上に置く。すると、ちょうどぴったりとおさまるのだ。もちろんこのことには種も仕掛けもある。

「とりあえずはなったな。」

本ノ本の隣^{隣の}を見てみるとまだレールが余っている。それもカーブレ

ールとポイントレール。

「お前バカだろ。この中に留置線を配置しなきゃ意味ないだろ。これじゃあ、ただレール並べてはい終わりじゃん。」

「知らないよ。大体留置線はそっちに並べるんじゃないの。こっちには余裕が。」

「あるだろバカ。何のためにこの板があるんだよ。こっちには隙間がないんだよ。どこをどうやったらレールが並べられるんだよ。」
ちなみに今どういう状態でレールが並んでいるかというと、僕のほうはしっかりと板の端を一直線に、木ノ本のほうはそれきのもとに並行して仲良く並んでいる。

しばらくどうすればいいかを考える。もちろん方法はいくらでもある。真ん中に留置線を持つてくる、真ん中に留置線を持つてくる。このうち僕たちがとった策は真ん中だ。そのため、木ノ本きのもとが敷設した線路にカーブレールを組み込み、1本レールが入るスペースを作る。次に僕の敷設したほうの1枚目の終わりにポイントレールを組み込み、留置線につながる線路を作る。2枚目は3本のレールが並んでいる状態のまま右側まで進んで、2枚目終了直前に留置線が終了。3枚目は1枚目の逆バージョン。ポイントレールが組み込まれていないところだけは1枚目を違うか。その状態で配線が完了した。配線が完了したところで、僕たちのものをアド先生に見てもらおう。アド先生のほうは別にいうこともなかったらしく、配線はこのままでOKということだった。

「よし。じゃあ、ここまで進んだら、罫書きをしてください。」

「けがき。」

「このレールの配置をペンかなんかで板に写し取ってくださいってことです。さあ、やって。」

いわれるがままそうやる。レールと板の接着しているところにペンを当てて、レールに沿って線を引く。そして、全部の線を引き終わったら次は継ぎ目の部分に今書いた線とは直角に線を引く。これで、どこに継ぎ目が来るのかがわかる。継ぎ目を書くまでが終了したと

ここで、仮置きした線路を板から外す。線路配置が決まったところで次の作業に入る。次の作業とは当然、家などの配置を決めることだ。

「家の位置決めろって言ったって、わかんないよなあ。どこにどうやっておいていいかわかんないし。」

「こういう時ってどうすればいいんだろう。」

「永島^{ながしま}って電車で詳しいよなあ。こういう方面も詳しくないのか。」

「電車詳しいからってこれも詳しいなんてこたないよ。」

しばらく考え込む。するとさっきの言葉が思い浮かんだ。

「というわけで、聞きに來たんですけど。」

「はいはい。」

僕たちのモジュールのところまで来てもらい、アドバイスをもらう。

「なるほど、線路配置は決まったのね。」

そうつぶやくと、近くにあった家の模型から一つ取り出して、説明を開始した。

「これは、道路の形を想像しながら、建物を配置して組んだ。こういうところはこういう風になってるかなあっとかってことを想像しながら、家の配置を決めていく。それが難しいなら、先に道路の形を決めちゃったほうがやりやすいよ。」

アヤケン先輩はそう教えてくれた。

アドバイスをもらったところで、家の配置に取り掛かる。まず道路を決めてからとも言ったが、お互い想像力に乏しいわけではない。頭を使って物を作る。

「この道路の感じは線路に沿ってずっと続いてるってどう。」

「いいんじゃない。それなら、ずっとこっちに続けていくでいいじゃない。」

「それでもいいけどさあ、ずっと平坦ってなんかやじゃない。2枚目だけ丘にしちゃうとか。」

「でも、そんな道路あるのか。それだったらなおさらトンネルかなんだろ。」

「それ言っちゃったら、道路がトンネルで並走してる鉄道がトンネルじゃないっていうところあるのかよ。私の知ってる限りじゃないぞ。」

「わかったよ。じゃあ、2枚目は丘にしちゃうでいいか。」

「丘にするのはいいけど、それだれが作るんだよ。私汚れるの嫌だからね。」

「汚れるのは俺も嫌だけど、それ言ったらものなんて作れないだろ。だったらジャンケンで決めようぜ。」

ジャンケンをやって結果は、

「永島^{ながしま}。お前いかさまとかしてないよなあ。」

「ジャンケンでどうやっていかしまするんだよ。」

「えっ、簡単じゃん。後だしとか、マインドスキャンとか、ジंकスとか。」

「ジंकスは無いけど、マインドスキャンって無理だろ。千年眼^{ミレニアムアイ}じゃないんだから。」

プラノコの歯を発泡スチロールに入れる。前後に動かすとキュ、キュッと音を立てる。

「ああ、この音ヤダ。」

「木ノ本^{きののもと}、もうちょっと静かにやれないか。」

「あんたはいいよなあ、耳ふさげて、私はふさげないのよ。ちょっと変わりなさいよ。」

「ヤダよ。」

「変われ。」

「ヤダ。」

すると楠先輩^{くすのき}がやってきた。

「あつ、楠先輩。これ変わってください。」

「遠慮しとくね。あたしの専門は物作りじゃないから。」

あっさりと断られた。

次に来た醒ヶ井^{さめが井}は、

「あつ、醒ヶ井、これ変わって。」

「おう、いいよ。」

快く引き受けてくれた。

「醒ヶ井君。こんにちは。」

醒ヶ井が来たことに気づいてアド先生が醒ヶ井の後ろからつかみかかる。

「こんにちは。ていうか安曇川先生やめてください。今切ってるところだから。」

そう言っている間にカット終了。

「これだけなら、俺じゃなくて、自分たちできれよな。おれもこの音嫌いだから。・・・ん。木ノ本。もしかしてそのためだけに俺に切らせたのか。」

「うん。思いつきはまってくれてありがとう。」

何がともあれ、作業が完了したのだ。次は道路の配置だ。

「この発泡をこうやってくと道がふさがるんだよなあ。また切らなきゃダメじゃん。」

「おい勘弁してくれよ。また俺に切らせるのか。」

「うん、分かってる人は分かってるねえ。」

「分かりたくないんだけど。」

「大丈夫。おれたちも手伝から。だから、醒ヶ井はこっちのここから下を切り出して。俺と木ノ本で、こっちを坂みたいにするから。」

「おい、そっちそんなに人数いらないだろ。」

「気にしない、気にしない。」

「気にするよ。」

と話していると、

「みなさん。12時です。お昼にしてください。」

とアド先生から指示があった。

10列車 製作（後書き）

最初は不定期更新。この頃は毎日更新・・・。
いつかまた不定期更新に戻るかも・・・。
そんなのでも読んでくれる人には感謝。

11列車 バスケと走行テスト（前書き）

ストーリー中にある批判はあくまでもストーリーの中だけですので。現実にもそうということは一切ありません。

11列車 バスケと走行テスト

作業は一時中断。部室に戻って、弁当を食べる。

「ナガシイ、ハルナン、サメちゃん、ミッシイ、イサタン、ソラタン、アサタン。バスケットやらない。」

「おお、面白そうじゃん、やろやろ。」

サヤ先輩がそれに乗る。サヤ先輩に次いで、アヤケン先輩も乗った。

「おーい、バカタカとアヤノンはやらないのか。」

「バカタカって呼び方やめてください。つうか、いつから僕のあだ名は変わったんですか。」

「あたしは運動は苦手だからやめときます。一人プレイだったらしますけど。」

「えー、シュートだけ。つまんないじゃん。試合やろうよ。試合。」

「でも、それ下のバスケット部がいなければの話でしょ。」

箕島^{みしま}が当然の質問をした。

「大丈夫。バスケットは午前中だけ。午後はあたしたちの貸切になる。」

弁当を食べ終わって下に行くと、さっき言ったとおりバスケット部はいなかった。

「ほれ、やるぞ。」

体育館のステージから飛び降りて、北の器具庫のほうへ走っていく。中からボールをつく音がして、善知鳥先輩^{うとどう}がドリブルしながら、出てきた。

「善知鳥先輩。体操服とか持ってきてませんよ。」

「大丈夫。見られたら見られたでござ愛嬌。」

「じゃあ、僕参加します。」

「おお、サメちゃんはすかさず変態を自嘲したぞ。ナガシイたちは参加しないのか。うまくいけば、女の子のパンツが見れるぞ。」

「そういう釣り方やめろつうの。」

「・・・。」

「榛名^{はるな}、参加するなら、あたしの体操服貸すけど。」

「えっ、でも。」

「いいって。どうせあたしは参加しないんだし。それに、モジュールも作ってないし。」

「・・・じゃあ、私も。」

「じゃあ、ちょっと上来て。ハクタカ。もしのぞきにきたら、頭から飛び降りてよ。」

「のぞかねえよ。」

「ふうん。あたしの時はのぞきに来るのに。」

「それは。お前の着替えてるタイミングが悪いだけだろ。」

「ねえ、ナガシィ。本当に参加しない。」

「楽しそうだから、参加します。」

「よし、4対4でやるか。」

やる人は全員体育館のフローリングに行つてスタンバイする。その姿を見ている人は、

「善知鳥^{うしと}のやつ。ああいつても中にハーフパンツはいてるよなあ。」

「あれにつられる醒^{さめ}ヶ井^がつて。ただの変態なんじゃないのか。」

「ああ、ただの変態かもなあ。」

「もう集まってるし。」

「ハルナン。早く、早く。」

「楽しそうなのはいいんだけどなあ。」

「ハクタカ。今日は珍しくのぞきに来なかったね。」

「だから、のぞいてるんじゃないくて、お前の着替えるタイミングが悪^{わる}いって言ってるだろ。」

「それ言ったら、ハクタカの来るタイミングが悪^{わる}いってことになるじゃん。」

「そうかもしれないけど、着替えるタイミングも悪い。」

「ハクタカ言ってることおかしい。だからバカタカって言われるんだよ。」

「いったな。クソアヤ。」

「ナガシィ。パス。」

「いただき。」

「あつ、サヤとるな。」

「申し訳ない。昔バスケットやってて。」

「少しは手を緩めろよ。」

「残念。はいスリーポイント。」

10分後。

「つ・・・疲れた。この頃動いてなかったからな。」

「最後なんか体育苦手な善知鳥うとこうにもボールとられてたもんな。」

「うるさい。ああ、暑い。服ぬぎてえ。」

「脱げばいいじゃん。」

「女子がそんなにさらつと脱げばって言うなよ。」

「サヤ先輩、上から扇風機持ってきますか。」

「ああ、お願い。」

「はあ、久しぶりにバスケットやったなあ。1年生以来だっけ。」

「そうだな。猪谷さんいのたにがいた時以来だな。昔はバスケットがいない

ときは製作そっちのけでよくやったな。」

「サヤ先輩たちそんなことしてたんですか。」

「ああ、あのときは俺たちも若かった。」

「若かったって。もう年寄りみたいな言い方ですね。」

「人間18になればおじいちゃんの仲間入りすんの。18になると体が言うこと聞かなくなる。」

「サヤ先輩。そんなこと言わないでくださいね。」

扇風機を持ちに行った楠先輩くすのきが言った。

「だってそうなるんだからしょうがないだろ。」

扇風機の前に行って誰もがよくやることを始める。

「だから、サヤとるなつて。」

「マジックカード。部長権限を発動。」

「トラップカード。無効を発動。」

「あー、バカたれ。トラップカード。カウンターカウンターを発動。」

「サイクロン。」

何を始めると思えば・・・。

「おいおい、何こんなところでデュエルしてるだよ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩うとろうがそんなことをしている間に扇風機はナヨロン先輩が占領していた。だが、僕には別のことを思い出していた。萌とよくやったのだ。カードはほぼそのままでモンスターカードだけ電車にしてやったことがある。あれについては自分でもよく考えたものだと感じするところがある。

それはさておき。13時45分から作業再開。

「これ、塗料で塗ったほうがいいよ。」

アド先生に言われて上から筆と塗料の缶を持ってくる。この塗料缶の固まったふたを開けると、中で塗料が固まっていた。カッピカピになっており、乾ききった土のようにひびが入っている。仕方がないので、体育館を突っ切って近くの水道まで歩いていく。水を入れて、筆で押したりすりつぶすようにしながら、水に浸らせていくと塗料が復活。ここまで来てようやくと塗る作業に入った。

発泡スチロールと板の道路と家の部分に塗る作業を施行すると、この先の作業が進まなくなると思ったが大きな間違いだった。塗料は一度塗っただけでは下地が透けてしまいうらしい。そのため何べんも塗って色を濃くする。それが完了すると外に持って行って、干す。その間塗料の缶にふたをして、筆を洗う。この部活では筆を洗わなかったら制裁があるという。何ともおかしな風習がある。

筆を洗い終わってもとの位置に返す。これが終わると次は配置すると決めた家の組み立て。Nゲージの家屋は組み立てられ終わっているものからプラモデルのように自分で組み立てるものまで様々。僕たちが使うと決めたものはジオコレという中の数種類。近郊住宅地の全シリーズを網羅してモジュールに配置することにした。これを箱から出すと、地面と壁など数枚のパーツに分かれている。それ

を組み合わせて、地面となるとところにさしていく。これをさし終わるとききれいな近郊住宅ができる。このころには塗装した板のインクも乾いており、中に持ってきて、どのように置くか仮置きする。

「その住宅はそこかよ。面倒だから順番に並べちゃおうよ。」

「おいおい、そんな住宅地あるのかよ。」

「醒ヶ井さめがいツッコんだら負けだと思っていよいよ。」

「どういう意味だよ。」

「まあ、それでいいだろ。」

「これはこれでいいんだけど、ここどうする。変に余っちゃったけど。」

「工場にでもすればいいだろ。」

「えっ、ちょっと古臭い感じのこれにするのか。」

「いいだろ古臭くても。半分模型だからできることじゃん。」

「そうだな。」

「おい、そっちはもういいよ。こっちはどうするんだよ。そっちはつか決まったって意味ないぜ。」

「そっちどうしようか。」

「コンビニとか。トラックステーションでもいいんじゃないか。」

「えー、トラックステーション。」

「えっ、ヤダ。」

「いいよ、何も思いつかないし。」

「ああ、そう・・・。」

「永島君。ながしま他を決める前に線路つけちゃっていいよ。まず電気が通るかどうか確認して。」

アド先生がレールを取り付けていいという。午前中に決めたレールを元通りに直して、幅のある両面テープで張り付けた。レールをつけ終わると、バラストをまく。バラストとはレールの下にひかれていく砂利のこと。あれは車輪からかかる重みを少しでも分散させる効果がある。一種のキャタピラなのだ。僕たちの取り扱っているレールは道床という部分があってその道床の部分がバラストの部分で

ある。まかなくてもいいのではあるが、まかないままだと木の板があらわになる。そのために薄くまく必要がある。さっきの両面テープと同じように上からバラスト（カラーパウダー）の入った容器を持ってきて、指でつまみながらまく。地道な作業がツボにもなる。

1枚にバラストをまき終わると板を立てていないバラストを落とす。滑り台のように駆け下りていったバラストをさらにかき集めて、2枚目に転用。2枚目も同じ作業を行って余った分は3枚目に転用。3枚目で余ったバラストはごみを含まないように容器に戻す。バラストをまき終わると車両の走行試験。順番が逆なのはご愛嬌。とりあえず、走れば今はOKだ。部屋にある名鉄めいてつ「パノラマデラックス」とフィーダー、コントローラー、フィーダー線接続用の線路を持ってきて、試した。

コントローラーのコンセントを差し込み、コントローラーのパイロットスイッチが点灯したことを確認する。そして持ってきた「パノラマデラックス」を線路上に置いて、ディレクションスイッチを前進に入れた。そして、コントローラーのつまみをゆっくりと回す。電気に反応した「パノラマデラックス」の顔が次第に明るくなる。ライトがついているのだ。そして、ピクツと前に動いた。するときこちないがゆっくりと動き出し、僕から見て手前側。板の端の線路を完全に走破した。

今度はディレクションを後進にして、同じように走らせる。こちらも良好。「パノラマデラックス」は順調に走った。

走ることが確認されたら今度はフィーダーをさしている線路を変えてテストする。「パノラマデラックス」もそっちへお引越して、同じ動作を繰り返し返した。今度もよく走ったのだが、2枚目と3枚目を越えるところで、急に止まった。

「あれ、どうかしたの。今までよく走ってたのに。」
見ている全員が異変に気付く。「パノラマデラックス」を覗き込むと、顔がさっきと違って暗いことに気付いた。電気が行っていないのだ。「パノラマデラックス」を走っていた位置まで後退させると

「ギューーン」とモーターが動いた。電気はある位置まではいっている。だが、進むとすぐに止まった。

「これの位置変えてみればいいんじゃないか。」

「いや、それじゃあない。」

今度は「パノラマデラックス」をどかして、走らなくなるところを検証した。すると、2枚目と3枚目の継ぎ目はジョイナーと呼ばれる部位が一つしかないことに気付いた。

「分かった。こいつだ。」

2枚目と3枚目を切り離した。切り離し終わると上に行つて、アヤケン先輩に言った。

「アヤケン先輩。このジョイナーってどこにありますか。」

「ジョイナー。ああ、レールの入ってる箱から、ジョイナーのついでるレール出して、あーって取り外せばいいよ。」

なぜ「あー」のところだけ裏声だったのか。それはさておき、レールの入った箱を探す。レールの入っている箱を見つけたが、なかなかジョイナーのはまったものに出くわさない。出くわしてもなかなか外れない。だんだん外れないジョイナーにキレたくなってくる。

「あーっ、もう。なんで外れないんだよ、バカたれ。二つはまったの出でこいや。あつたら返事しろーっ。」

全部独り言です。

「すげえ。永島がどんながしまどん鉄研色てっけんしよくに染まってく。」

善知鳥先輩うとどうは何か別なところに感心している。

なんとか2つジョイナーのはまった線路を見つけて、持っているレールとつなげる。そしてすぐに外す。すると本来ジョイナーのはまっているほうにジョイナーがはまる。これで問題は解消だ。

そのレールを下に持って行って再びはめる。また走行テストを行うとこの区間もおるようになった。内側の線路も電気が通ることが確認された。

そして時間は16時。今日の作業はここで終了した。

翌日。4月26日。今日もモジュール製作である。今日はほとんど走ることを楽しむだけ。午前中はほぼそれだけで終わり、昼はまたバスケットボール。午後になって初めて、製作を進めた。今日は2枚目の住宅地づくりである。

「ここも近郊住宅だけだとなんか張り合いがないよね。」

「それはないだろ。1枚目で近郊住宅を使っているいいじょうそれはできない。どれもこれも同じようになるからなあ。」

「醒^{さめ}ヶ井^{がい}って本当にこれだけだよなあ。」

「うるさいなあ。」

「あと、変態っていうのもあるよねえ。」

「だまれつつうの。」

「まあ、それは置いて、ここどうする。」

「近郊住宅から田舎に通じるところだろ。ここは結構古臭い建物にしとくのがいいんじゃないか。」

「確かにそれもあるけど、今は田舎から町につながるところって大体系新しい家が建ってるだろ。反対に近郊住宅よりも近代的なもの建てたほうが効果的かも。」

「何。2階建てとか、3階建てのやつ。」

「そう。それくらいのほうが自然じゃないかってこと。」

「うーん。」

しばらくどうするか考え込んだ。しかし、何分考えても答えが出そうにないため、

「アヤケン先輩だったらどうするのが一番自然ですか。」

「えっ、自分が思ったとおりにやってくのが一番いいよ。道路配置が決まったら何も考えないでやっても何とかなるよ。」

という回答だった。道路配置が決まるまでは想像力。道路配置が決まったら自分の勘。このつくり方って効果的なのだろうか。それともアヤケン先輩だけに通じることなのだろうか。

結局アヤケン先輩が言ったとおりにやっていくことになって、古臭い建物を配置。実際あるかどうかは別として、その家の隣。2枚

目始まってすぐ（1―2）のところに畑を配置。そのあとは一列に家を並べて、反対側の切り出されたところに詰所を配置した。実際のところ、この詰所は郵便局もどきという設定となった。

概略ができたところで、家をベニヤ板に張る作業になった。模型の家を張る作業はいくらでもあるのだろうが、この部活でとっている方法はストラクチャーの地面のふちに両面テープを張って張り付ける方式。こうすれば、確実に接着できる。

上から細い両面テープを持ち出して、裏側に張る。縁から反対側の縁まで行くとテープを適当な長さに切る。それを4回繰り返し、仮置きしたところに置いていく。1枚目の建物はすべて決まっているため、1枚目はすぐに完了。3枚目は設置が決まった建物は貼り付けていった。2枚目使う発泡スチロールと設置する建物を張り付けた。なんかとんとん拍子に進み気味である。

ここまで作業が完了すると醒ヶ井さめがい以外は墮落した。僕は中学生のほうの進行状況を見に行った。

「諫早いさはや」。どうだ進み具合は。」

「えっ、この山をハゲからモッサモッサにするために植林してるんですよ。」

諫早はアド先生をちらつと見てそう言った。

「なんですか。永島ながしまさんもやるんですか。水分たっぷりの山にするために。」

「いや、ただ見に來ただけだよ。ていうか。これ走行テストやった。」

「あー。やり忘れてた。・・・でも、7000番台（223系 網あ干区ぼしく）のくそったれだったらふつうに通りますよ。ゴミじゃないから。」

「7000番台。どれかわかんないけど、まあ大丈夫なんだな。」

「おいおい。それやめてくれよ。」

顔を上げるとナヨロン先輩の顔があった。

「俺が一番最初に作ったのもそうだけど、サヤが作った「安曇川あじがわ」。

マイクロ Aceの車両が通らないっていうやつもあるし、テストはしとけ。でないとごみを量産することになるから。」

「あの。その二つ今どうなったんですか。」

「んっ。俺のはちよっと前にジェットピストルで破壊して、サヤのやつは・・・まだ残ってたかなあ。まあ、寮に行けばあるかないかわかるよ。」

「・・・。」

「じゃあ、明日7000番台持ってきます。」

「いよ。今調べろ。部室に確か。サヤの隠物があったはず。サヤに貸してもらえ。」

諫早はナヨロン先輩に促されて上に行った。上ではスピーカー全開で曲を聴いている。今はやりのEDOとかいうやつだと思う。

「サヤ先輩。」

「んっ。何。」

「モジュールの走行テストやりたいんですけど。」

「ああ、分かった。俺の貸してやるからちよっと待って。」

サヤ先輩はそう言って開拓してはいけないといわれたところのものをどかして、中から車両ケースを取り出した。

「はい、諫早。「ふみさん特急」。」

（間違い方がひどいなあ。）

「ありがとうございます。」

サヤ先輩がくれたのは富士急行の特急「フジサン特急」の模型であった。それをモジュールに持って行って走行テストを行う。車両はスムーズに走り出し、つなぎ目にある鉄橋も難なくクリア。植林しすぎのように思える崖の部分も何の支障もなく通過した。次に線路を変えて、同じようにテスト。車両はまず僕たちが覗き込んでいた側の線路と別れて、奥に進路をとり、つなぎ目で鉄橋を渡る。そしてトンネルに入り手前側の線路と合流する。トンネルの中もさほど支障はないようだ。

「よし。行け。「フジサン特急」。」

「諫早。いつまでそんな際物走らせてるんだよ。」

「なあ、諫早。やめようぜ。横の富士山が気持ち悪い。」

「フジサン特急」の拒絶反応はナヨロン先輩だけではなかった。空河も嫌いのようである。

「気持ち悪すぎて吐き気がする。」

「電車見ただけで吐き気でもすんのかよ。」

「いや、電車は大丈夫。でもこれはダメ。」

イコール好みの問題である。

「確かにそうだな。名寄さんが「際物」っていった意味もわかる。サヤさんってこういうものの好きなんだな。」

「そう。サヤこういうの好きだから。」

「・・・。」

「際物好きで悪かったな。」

目線を後ろに向けるとサヤ先輩が立っていた。いつの間に下に来たのだろう。

「ナヨロンか。俺の際物伝説広げたの。」

「ああ。それがどうかしたか。」

「お・・・お前。」

「ああ、サヤ先輩もナヨロン先輩もなぐり合うんだったら外か向こうでやってくださいね。」

「大丈夫。なぐり合う気はないから。・・・よし、ナヨロン。上で平和的に話し合おうじゃないか。チャカとか、チャカとか、チャカとか。」

「それ絶対に平和的な話じゃないですよねえ。」

さて、話を進めよう。と言っても今日は終わりまでこんな調子のみままであった。そして一番最後に掃除。楠先輩曰く毎回恒例のごみ袋争奪戦も行われて今日の部活は終わった。

11列車 バスケと走行テスト（後書き）

作者が後ろ向きなのに後ろ向きじゃないってどうですかねえ…。

話は変わりますがこれから先さらに濃くなっていきますが、読んでくれる人には感謝。

自分自身のって書いているいじょう面白いもの（多分）できてると思うのでこれからもよろしくお願いします。

12列車 原則

翌日。4月27日。

「・・・。永島^{ながしま}。今日めちやくちや疲れてるな。」

「いや、そうでもないよ。確かに休日なかったけどさあ、意外と楽しいから。」

「へえ。先輩とはもうなじんだの。」

「うーん。なじむというか。部活の先輩「もう鉄研色に染まってきた。」とかって言ってたからなあ。」

「本当にその順応性には感心するよ。」

あきれたのと関心が入り混じった顔だ。そういう顔をしているのは宿毛^{すくも}である。

「ところで、静岡まで何円かかるか知りたいんだけど。」

僕はこの手のものには詳しくない。というか知らない。

「1280円。」

佐久間^{さくま}が口をはさんだ。いいところに助け舟がいたものである。

「1280円かあ。ありがとう。」

「ていうか、そんなこと聞いてどうすんの。遊びにでも行くの。」

「まあね。」

「それよりも、もっと安く静岡に行く方法があるぜ。」

佐久間^{さくま}がそのあとなんといったかというと、

「それ、法律的にダメだろ。立派な犯罪だぞ。」

これがその言葉に対する宿毛^{すくも}の答えだった。何を言ったかというところは想像に任せるとしよう。もちろん、いま言ったことは実行してほしくない。

その日の放課後。同じように部室に赴いた。部室の前には醒ヶ井^{さめがい}がいた。もう一つカバンがあったが誰のものはわからなかった。しばらくすると、サヤ先輩と箕島^{みしま}が来て部室を解放した。

中に入って、製作途中のモジュールを眺めてみる。この2日でだ

いぶ進んだものだ。今日はこれの製作をちょっと進めて終了した。

一方。宗谷学園に入学した萌のほうはというと、今日は友達と街に出ていた。今は帰り列車の中である。ロングシートに肩を並べて、ちよっと前のほうを見てみた。そこは行き止まりになっていて、一人男の子が前を見てはしゃいでいる。

「萌、さっきから笑ってるけど、なんかあったのか。」
ずっとニヤニヤしてたのが気になったらしい。

「えっ、なんでもない。ただ、昔のこと思い出してただけ。」

黒崎も萌の見ていた方向を見してみる。何を見ていたかはすぐに分かった。

「にしても、電車の前ではしゃいでる子供を見て思い出し笑いするとはなあ。」

「だって、なんか笑えない。ああいうところ見てると。」

「よくわからんなあ。少なくともあたしはあれを見ても笑えない。」

「じゃあ、私だけかなあ。昔の友達みたいだなあって思うの。」

「へえ。萌の友達って電車好きなのか。」

（それだから萌は電車に詳しいのか。）

「うん。幼稚園の時からずっと電車のことが好きでさあ。浜松はままつによく新幹線見に行ったり、家で模型で遊んだり、インターネットで動画をあさったりとかね。中でも新幹線の100系が一番好きでさあ、連れてかれたときはダダこねて「帰りたくない。」って言ったり、小学校の修学旅行じゃ自分の座る席に座らずに16号車のドアまで行って東京駅に着く直前までそこにいたりとかしてたからね。」
「それ、先生に叱られたよなあ。」
「うん。でも、怒られた後も100系見たらすぐに復活したりするから。」

「あたし電車のことは全くわかんないけど、その人にとっては特効薬なんだな。だから、ああいう風にしてる人を見ると過去のその人みたいに見えてくるのか。」

「過去のっていう意味じゃないんだけどねえ。今もそういうところ

があるから。」

「その人って成長してるのか。」

「ぜんぜん。大きな子供だよ。でも、そういうところがかわいいんだけどね。」

会話は一呼吸置いたらまた始まった。

「そういえば、宗谷に入学したとき私驚いたわ。世界には同じ顔つきした人が3人いるとかっていうけどさあ、マジでその人に会うとは思わなかった。」

「誰かと、その人似てるのか。」

「うん、鳥峨家大希君だったかなあ。顔つきもそうだけど、声までそっくりだったんだもん。」

「・・・萌。まさかそれで鳥峨家のこと好きになったとかって言わないよなあ。」

「いわないよ。・・・なに、梓、鳥峨家君のこと好きなの。」

顔が赤くなった。

「いや、そういう意味じゃないけど・・・。」

「へえ。」

「な・・・何か疑わしいことでもあるのかよ。」

「ううん。別に。」

といったとき外を対向列車が通り過ぎた。すると頭を抱えて、

「はあ。ここからだとパンタ見えないからダメだよなあ。」

「何。パンタとかっていうやつ見ただけで車両の判別つくの。」

「うん。遠江急行なら菱形だったら1000系。シングルアームだったら2000系っていう風に決まってるから。ちよっと複雑っていえば遠州鉄道のほう。あれは基本1000形は菱形で2000形はシングルだけど、1000形のうちの1001がシングルアームになってるから。モーターしか変わらないから紛らわしいんだよねえ。」

自分の手で菱形とくの字を作ってパンタグラフを再現する。

「遠州鉄道って全部同じ車両だろ。あん中にも違いあるのかよ。」

「梓。^{あずさ} マニアの前でそう言ったら殺されるよ。全然違うんだから。2000形はVVVFインバーターっていう高い音の出るやつだけど1000形はそんなのじゃないもん。それに乗り心地で言ったら1000形より2000形のほうが上。同じことは遠江急行の2000系と1000系にも言えることだから。」

「あたしには、そんなこと言われても何もわからん。」

「とりあえず、聞けば分かるって。どんなバカでも。」

「それってさあ。もしわからなかったら、萌があたしを馬鹿にする材料になるよなあ。」

「そのつもりはないから安心して、梓。^{あずさ}。」

この後列車はすぐに駅に停車した。その時になる音に少し耳を傾けていたが、やはり梓には違いは分からなかった。

「何がどう違うの。あたしには全部同じように聞こえるんだけど。」

「逆にあたしにはなんでみんな同じに聞こえるかわかんない。どういう聴覚してるか・・ああ、あとこれもあるか。そう思うこと。」
梓が少し首を傾けた。

「遠州鉄道って結構古い車両も持ってるじゃん。」

「持ってるじゃんって言われてもあたしにはわかんないって言うてるじゃん。」

「あれ。一番モーター音うるさいんだよ。あの中でよく寝れるなあって思う。」

「へえ、うるさいんだ。」

「本当にうるさいよ。時折その電車に乗ってくるんだけどさあ、満員になった状態でも西鹿島側のところまでモーター音が聞こえてくるくらいだに。」

「いや、だからあたしに・・。」

「あの中で寝れる神経がおかしいよねえ。一度精神科医とか耳でも直してくればって思うくらいよ。」

「何。電車の中で寝ちゃダメなの。」

「梓。^{あずさ} 電車の中で寝て何が面白いの。電車に乗ったら根気でも起き

てることでしょ。」

「その考え方あたしには理解できない。」

「えっ、何で。これってふつうのことだと・・・。」

「いや、ふつうじゃない。ふつうじゃない。」

「そうかなあ。」

「おい、自分。その考え方ふつうじゃないって思ったことないの
よ。」

「ないよ。だって、電車乗ったら携帯いじらない。音楽聞かない。
あんまり人と話さない。寝ない。前ずっと見てるは鉄則じゃないの。
」

（どんな五原則だよ。）

ふと前にまた目を向けてみるとさっきの男の子の姿はなかった。
今止まっている小楠おぐすで降りたのだろう。ずっと普通ふつうに乗っている萌
たちにとつては関係のないことだが、ここでは急行きこうと普通ふつうの接続が
行われている。ここで終点まで用がない人は急行きこうに、途中駅に用が
ある人は普通ふつうに流れてくる。しかし、寝過ねとして急行きこうに終点鹿島ま
で連れてかれるといった客はよく見る。自分も4日前にやってしま
ったことだ。

「そういえば、あたしたち浜松はままつから急行きこうに乗ってこなかったけど、
何で急行きこうじゃダメなんだ。急行きこうなら結構早く家につけるじゃん。」

「急行きこうはダメ。寝過ねと痛い目に合う。」

「痛い目って。もしかして、自分もやっちゃったのか。」

「うん。やっちゃったよ。目を開けたらなんか知らないところ走っ
てるなあって思ってたらさあ、間もなく終点鹿島ですって言ってた
んだよ。でも2000系に2連ちゃんに乗れたから結果オーライな
んだけどねえ。」

（転んでもただじゃおきないやつ。）

4月28日。昼休み。

「ねえ、永島ながしま。N700系エスナナの喫煙ルームでバーベキュウとかやつち

やダメかねえ。」

佐久間がネタを振った。思わずふいてしまう内容だ。

「やっちゃダメだろ。」

「でもやっちゃいけないとも書いて無いよねえ。」

「確かに書いてないけど、そういうことするやつがないからじゃねえ。」

「なあ、永島何。喫煙ルームって。」

木ノ本きのもとから質問が出た。ちよつと予想外だ。

「喫煙ルームって、N700系エヌナナについてるやつだよ。そこ専用で喫煙ができるんだ。」

すると頭を抱えて、

「ダメだ。この頃離れすぎてたから私の中の情報が古い。なんかいろいろなのとごっちゃになってる。」

「そのうち思い出すって。今はいわば我慢の時かなあ。」

その頃先輩たちはというと、

「行先エーティーエムってATMでいいんじゃない。」

「うーん。なんか思いつかないもんなあ。じゃあそこにするか。」

「ATMエーティーエムに行つて戻つてくるだけかよ。それだけじゃ能がないな。」

アヤケン先輩が口をはさんだ。

「だから、それだけじゃだめだからKODケイオーディーまで行つて放物線に乗つてグルつて帰つてくれればいいんだよ。NMDエヌエムディーまで。そうすれば時間がそんなないだろ。」

「それだとまだ時間が余るだろ。大体何時の「ホームライナー」に乗つてくんだよ。って言つても1本しかないけど。」

ナヨロン先輩は時刻表を取り出して、ざっと目を通した。

「ふつうに無理だな。どっかで暇つぶさないと。」

「じゃあ、SMZエスエムゼットのエスパルスドリームプラザとかどう。あそこ正直言つてみたいって思つてたし。」

「果たして、それに1年生が乗るかだな。」

「1年生が乗るか。そるかかあ。鉄道好きには少々きついところも

あるかもな。移動意外。」

「そんなこと言ってたら旅行なんかできないじゃん。」

「確かにそうだけど。」

「まあ、いまそんな話するのよそうぜ。乗るかどうかは別として、乗らないことはないだろ。初めての旅行なんだし。」

「そうだな。後は俺たちがどう味付けするかだもんな。」

「時間は俺に任せろ。善知鳥^{うと}じゃだめだし、アヤケンじゃこいつの読み方知らないだろ。」

「なんで俺じゃダメなんだよ。」

「サヤは間違えずにこれ読めるのか。」

「うっ。そ・・・それは。」

「だろ。だから俺に任せろ。えーと、全員昼抜きでいいよなあ。」

「いいわけないだろ。」

さてさて、いったいどういう旅行になるのだろうか。

今回からの登場人物

黒崎梓^{くろさき さい}

誕生日

12月12日

血液型

B型

身長

15

7cm

12列車 原則（後書き）

こんな5原則ふつう守れない。

13列車 初旅行の工程

4月29日。今日は岸川学園きしかわがくえんの寮で部活動である。岸川学園の寮きしかわりょう（岸川寮）は正門を出て、南に歩いて行く。すると職員駐車場が見えて来る道を左に曲がって、近くにある神社の前を通ってすぐのところにある。この2階はほぼ鉄道研究部の貸し切り状態になっており、中の階段の右側にモジュールなどが保管されており、学習室のほうはほぼ自由に使っていいそうだ。

「えー、今日は5月2日の歓迎旅行にどこに行きたいかってことだけど、どこに行きたい。」

「って、1年生に聞く必要ないじゃないですか。もう行き先決まってるんだから。」

「ナヨロン。ちょっと書いて。」

「サヤ、ATMエーティーエムって浜松はままつから東だよなあ。」

「ナヨロン。それやばくない。編成に詳しいんだから分かるだろ。ふつう。」

「うっさい。知ってて言っただけだよ。」

黒板にうねうねした線を一本。それにつながった線を一本。その端に至り豊橋とよはしと至り東京とうきょうと書いた。

「えーと。まずこれで浜松はままつがどこ分かるか。」

「だいたいここじゃない。サヤ合ってるよねえ。」

「合ってるけど、善知鳥うぐいすが書くなよ。」

一呼吸おいて、

「まず工程を話す。5月2日に浜松駅改札口・・・言うの面倒くせえなあ。ハカグチに6時45分集合。集合したら「休日乗り放題」とかっていう2600円の切符渡して、7時05分に出る「ホームライナー」に乗って静岡しずおかまで行く。そこで、静岡しずおかまで行ったら普通でATMエーティーエムまであーっていったって、それから国府津こくふづとかいう・・・。」

「国府津な。」

ナヨロン先輩が訂正する。

「それはどっちでもいいから。で、その国府津こふづとかいうところまで着たら御殿場線ごてんばせんに乗ってあーって戻ってくる。それで清水しみずのエスパルスドリームプラザとかいうところであーって休んで、普通であーって帰ってくる。ざっと工程はこんなもん。説明終了。」

「にしているわけないだろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がすかさずツッコんだ。

「えーと、サヤだとまた端折りそうだから、俺から工程言っとく。」

説明はサヤ先輩からナヨロン先輩に変わった。

「まず、集合はさっき言った通り6時45分。この時間に集合できなかったやつはたとえサヤでも置いてく。それで今回の旅行で使う切符は「休日乗り放題きっぷ」とかっていうやつで、旅する。これが2600円。だから当日は2600円忘れるなよ。で改札とおって一番最初に乗る列車が7時05分発の「ホームライナー静岡しずおか」。それで終点の静岡しずおかまで行く。次が8時51分に発車する普通熱海行あたみき……。」

「あーっ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩うとトリが叫んだ。すると、ナヨロン先輩をどっかに連れて行った。

「しょうがない。今度はぼくが説明するか。」

説明のバドンはナヨロン先輩からアヤケン先輩に変わる。

「さっき言ってた8時54分発の熱海行きあたみに乗って、終点熱海の到着が10時04分。次に乗る列車は11時30分発の普通だから、この間に食うもん食っとくように。まあ、食いたくない人は別だけどな。で11時30分のふつうで途中の国府津こふづで降りる。国府津で降りたら御殿場線ごてんばせんの12時32分発の列車に乗って終点沼津ぬまつが13時50分着。それで、沼津ぬまつから14時15分発の普通で、途中の清水しみずまで乗る。その清水到着が14時59分。そのあとエスパルスドリームプラザとかっていうところに行って、清水しみずに戻って17時15分発の普通で終点浜松はままつが18時41分。とまあ、こんな感じだ。」

ああ、あと言い忘れてたけど「ホームライナー」に乗るためには310円必要だからそれも忘れるな。忘れたやつはたとえサヤでも置いてく。」

「はい、分かりました。」

すると、ナヨロン先輩を抱えて、サヤ先輩と善知鳥先輩うとじうが戻ってきた。

「何二人でネタばらししちゃってんだよ。」

サヤ先輩に抱えられている状態だったナヨロン先輩がそこから抜け出して、

「ネタばらしじゃないだろ。いくらなんでも通じないって。」

「そうそう。ナヨロンの言うとおりだぜ。とりあえず工程はざっと話しておいたけど。」

「そうか。」

サヤ先輩はため息をつくど、

「よし、本当に分かったか今からおさらいする。まず「ホームライナー」って何て呼ぶか分かるか。」

ほとんどの人が手を上げて、自分の考えを述べる。まず醒ヶ井さめがいが、

「「ホームライナー」。」

「違ながしまう。永島。」

「HR。」

「そうだ。HR。」

「サヤ。HRじゃなくて、HLな。Home Linerだから。」

またナヨロン先輩が訂正する。

「んじゃあ次。ATMってなんだ。」

「現金自動預け払い機。」

「醒ヶ井バカだろ。違さめがいう。空河。」

「熱海。」

「そう。次、御殿場線ってなんだ。」

「御殿場線。」

「木ノ本。いい加減気づけて。」

「あつ。分かった。突起、突起。」

「違う。」

「突起違うんじゃないよ。」

「放物線。」

「うわ、スゲエ。永島^{ながしま}当てやがった。」

「感心するところ違うだろ。」

ナヨロン先輩がツツコム。

「とまあそんな感じだ。全員覚えろー。」

「サヤ。まだ注意事項いってないだろ。」

「ああじゃあ頼む。諸君聞けー。」

「えーと、注意事項今からいいいます。注意事項はまず車内へのマックスの持ち込み禁止。」

「善知鳥^{うと}先輩。もしマックス持ち込んだらどうなりますか。」

「もし車内にマック持ち込んだら、窓開けて外に投げ捨てる。」

（今の車両ってだいたい窓あきませんよねえ。）

「その2。車内でもし携帯^{ケータイ}とかが鳴ったら、その人の携帯壊します。」

「どうやって壊すかって言うと、折り畳み式携帯^{ケータイ}はスライドして、ス

ライド式携帯^{ケータイ}は折りたたんで壊します。」

「もし両方だったらどうするんですか。」

「もし両方だったら窓開けて、外に投げ捨てるか。開かなかったら着いた駅でゴミ箱に捨てるか、車内のトイレに流す。」

（とにかく。まともな壊し方しないってことね。）

「その3。来た列車が吊りかけじゃなかったら、界磁チョッパヤダ吊りかけがいいって言うこと。」

「言わなかったらどうなりますか。」

「一番最後。やらなくていいだろ。だいたい、今の車両なんてVV^{バイバイ}VF^{ブイエフ}が多いんだから。」

「んじゃあ、VVVF^{バイバイブイエフ}ヤダ吊りかけがいいで。」

「関係ねえよ。とにかく言わなくていいってこと。」

「ちなみにナヨロンはその犠牲者です。」

「言わなくていいつうの。」

最後はナヨン先輩が善知鳥先輩を押し潰して、この話は終了。

「旅行とかはだいたい決まった。」

横で聞いていたアド先生が口を開いた。

「あつ、だいたい。」

「それで、北齋院君。自己紹介とかはしたの。」

「あつ、とりあえず名前だけぐらいは言いましたけど。」

「1年生に顔とか覚えてもらうために、もう一度やって。クラスと名前と一言でいいから。」

「あつ、分かりました。えーと全員席ついて。今から顔覚えてもらうために3年生から順番で自己紹介することになったから。とりあえず俺から始めるけど。3年5組。北齋院大智です。よろしく願いします。」

「カッコすごく天然です。」

「一言余計。次、善知鳥。」

「3年5組善知鳥茉衣です。何か分かんないことあったら聞いてください。」

「3年8組綾瀬健斗です。よろしく願いします。」

「こいつの作ったゴミモジュールいっぱいあるよ。」

「ゴミじゃないだろ。・・・3年6組名寄真佐哉です。鉄道には詳しいんで何でも聞いてください。」

「地図を読むのは苦手です。それと彼女募集中です。」

「一言余計だ。次、ハクタカ。」

「2年8組。鷹倉俊也です。よろしく願いします。」

「「チャンダーバード」と「パクチャカ」にしか詳しくないぞ。」

「「サンダーバード」と「はくたか」だけで悪かったですね。次絢乃。」

「2年8組の楠絢乃です。よろしく願いします。」

「自称。鉄研のホームヘルパーです。」

「違います。次、1年生。」

「1年5組の佐久間悠介さくまゆうすけです。電車は新幹線が興味あります。よろしく願います。」

「1年4組箕島健太みしま けんたです。よろしく願います。」

「1年7組醒ヶ井瑛介さめがいえいすけです。電車には全く詳しくありませんがよろしく願います。」

「1年4組木ノ本榛名きのもと はるなです。よろしく願います。」

「1年5組永島智暉ながしま ともきです。電車にはそこそ詳しいのでよろしく願います。」

「次中学生。」

「1年A組の諫早轟輝いさはや げうきです。よろしく願います。」

「1年A組空河大樹そらかわ だいきです。よろしく願います。」

「1年A組朝風琢哉あさかぜ たくやです。よろしく願います。」

これで部員全員の紹介が終わる。読者の皆様も少しは覚えてくれただろうか。

4月30日。今日で部活決定が仮決定から本決まりになる。

13列車 初旅行の工程（後書き）

ようやくここまで来ました。

これから2話程度の旅行シリーズになります。どうぞ自分がそこに
いると思って読んでみてください。

本当に読んでくれる人には感謝。それと感激です。

14列車 揺られて(前書き)

現実と大きくかけ離れているところがございますがこの中だけですので。

自己満足なところがあつて本当にすみません。

14列車 揺られて

5月2日。4月29日にサヤ先輩から言われたプランで旅行。

6時45分浜松駅はままつ在来線改札口を守るため、余裕を持って浜松駅はままつに到着した。だが、余裕を持ちすぎたかもしれない。そこには僕以外誰もいなかった。しばらくそこからそんなに離れないところをふろふろと行ったり来たりを繰り返していると、

「ナガシイ。」

聞き覚えのある声だ。でもこの声は萌の声ではない。善知鳥先輩うとどうの声だ。

「ナガシイ早いなあ。本当に鉄道好きっていう表われかもなあ。」
「・・・。」

いうことは何もなかった。

またしばらく待っているとアヤケン先輩が、また数分後にはハクタカ先輩と楠先輩くすのきが、その数十秒後には醒ヶ井さめがいと箕島みしまが、そのまた数分後にはナヨロン先輩が集合した。6時40分現在、まだ集合していないのは木ノ本きのもとと佐久間さくまと中学生3人。そしてサヤ先輩だ。

改札口が少し大きな荷物を抱えた人で込み始める。でも人数は少ない。荷物が大きいために込んでいるように見えるだけだろう。この2分前には西鹿児島にししかこしまからの「寝台特急はやぶさ」しんだいとっきゅうがお目見えする。その7分前には南宮崎みなみやまきからの「寝台特急富士」しんだいとっきゅうふじが参上する。両者とも東京と九州を結んでいる寝台特急の仲間である。

「よしす。永島ながしま。」

後ろから肩をたたかれた。振り向いてみると木ノ本きのもとだった。さらに諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかせの姿もある。

「お・・・お前らいたいどこから来たんだよ。」

「えっ。どこって、こん中からだけど。」

木ノ本は親指で改札口の向こうをさした。イコール。今の今までホームにいた。イコール。「富士ふじ」、「はやぶさ」を撮影していた。

「まさか。「富士」と「はやぶさ」の写真撮りに行ったのか。」
「うん。それにしても大変だったよ。お祭りから逃げるために口実
作って、昨日の20時からここにこもって、「富士」と「あさかぜ」
と「はやぶさ」と「出雲」と「瀬戸」と「さくら」と「みずほ」と
「銀河」と「スーパーレールカーゴ」撮影してたんだから。」
「よくやるなあ。」

「ああ、それにしても久しぶりにやったなあ。だから今すっごく眠
いんだよねえ。ちょっと電車の中で寝ながら行くわ。」

「おい、まさか中学生も一緒だったとかって言わないよなあ。」

「それは言わないよ。空河が来たのが6時00分ごろで、朝風が来
たのが6時12分ごろで、諫早が来たのは6時21分だもん。」

（全員俺が来る前にホームに上がってたのか。だんだん木ノ本の撮
り鉄根性がむき出しになってきたかも。）

「あつ、そう。」

6時45分。まだ現場に現れていないのはサヤ先輩と佐久間だけ。

「サヤとユウタン。置いてけぼり決定。」

善知鳥先輩はそのことを喜んでいらしく万歳をしている。

「相変わらずだな。あいつ毎回時間通りに来ないからなあ。俺たち
が1年生の時の歓迎旅行もボイコットするみたいな勢いがあったか
らな。」

「サヤ先輩ってそんなに時間守れないんですか。」

「守れるには守れるんだけど、こういうときはルーズになるって
うのかなあ。ホント。遊びに行く時だけはこのう風になる。遊ば
ないときは真剣に時間守るんだけどね。あいつって変だよなあ。」

「まったく。後輩を待たせるなつうの。鉄研部の部長が。」

先輩たちが口々に文句を言って遅れてくる部長を待っている。す
ると、3分遅れでサヤ先輩が到着。さらに5分遅れて佐久間が到着
した。佐久間が到着するとみんなから「休日乗り放題きっぷ」の2
600円と「ホームライナー」の整理券料金310円を徴収。しば
らくその位置で待っているとサヤ先輩とナヨロン先輩が「トイカ」

の宣伝が書かれている包みを持って戻ってきた。それを順番に渡していく。渡された包みを開けてみると、切符が2枚入っていた。横に長い水色が買った切符が「休日乗り放題きっぷ」。小さくオレンジ色っぽくなっているのが「ホームライナー」の整理券だ。その整理券が示していたのは6番B席。後でだれがとなりか確認してみると僕の隣は諫早いさはやだった。

6時55分。コンコースでやる作業はすべて完了。それぞれ改札口に上がる。「休日乗り放題」は普段皆さんが使っているきっぷとは違う。改札機を通らず、直接窓口のほうを通って改札を抜けるのだ。そのとき5月2日と書かれたハンコを押される。この後改札を通ることについては改札で駅員に提示するだけでいい。無人駅だった場合は車掌か運転手に提示すればOKだ。オーケー

ハンコを押された切符はこの後熱海まで用はない。包みの中にしまつて階段を上る。階段を上ると今度は右にかじを切って1・2番線ホームに上がる。

僕たちの乗る「ホームライナー」は1番線に控えていた。窓周りが黒。その下に入るオレンジ色の帯。ジェイフルJR東海の特急車両373系だ。これの3号車に乗り込み、発車の時を待つ。7時05分。「ホームライナー」は時間通り浜松駅はままつを発車した。

浜松はままつを発車した373系は快調に東海道本線を飛ばす。浜松はままつを下車するとすぐに新幹線とはずれ、しばらくすると天竜川てんりゅうがわを通過する。天竜川てんりゅうがわを通過すると坂を上って鉄橋を通過する。

ながしま しずおか
「永島。静岡まだ。」

後ろの席に座っている佐久間さくまが話しかけてきた。

「まだだよ。まだこれ天竜川てんりゅうがわだろ。」

「えっ、これ天竜川てんりゅうがわ。もう安倍川あべかわだと思ったよ。」

とぼけていることは知っている。弁当を食べているときによく話していることだが、本物を聞くとあきれる。

「んなことあるかよ。どこをどう曲げたらこれが安倍川あべかわになるんだ

よ。」

「ハハハ。そうだな。」

話が終わると、窓のほうを眺めた。下流には東海道新幹線とうかいどうしんかんせんの天竜川てんりゅうがわ鉄橋が見える。

「ちよつと行ってくるよ。」

後ろに流れていく浜松はままつの風景にさようならを言って、外を流れる風景に見入った。

時折下り列車がこちら側の視界を遮る。その時には何系かということがふつうに気になる。

「前が313系で、・・・後ろが211系。」

諫早いさはやが側面の色で判断をつけた。読者の皆様にも簡単に見分けたポイントを説明しておこう。まず、313系のラインカラーはオレンジ色。211系のラインカラーは湘南色しょうなんしよくと呼ばれる緑とオレンジのライン。そして、顔。鉄道は皆同じ顔という概念がある人はぬぐい捨ててほしい。鉄道にはそれぞれ個性があり、皆が皆同じではない。313系はオレンジ色のラインが入った顔、211系は湘南色しょうなんしよくのラインが入った顔をしている。もちろん。違いはこれだけではないが、今ここで説明してしまうと処理ができなくなると思うのでやめることにしよう。

「313系と211系か。ここら辺ってそういう編成ふつうにやってるんだな。」

「確かに。名古屋圏なごやけんはこんなくそつたれ編成やってませんもんね。」

「くそつたれかよ。」

「ああ、くそつたれはありませんでしたね。名古屋圏なごやけんはこんなゴミ編成ないですね。」

「あんまり変わっていない気が・・・。」

そんな話で1時間。「ホームライナー」は8時03分静岡しずおかに到着。次に乗車するのは8時51分発。普通熱海行きあたみ。これまでは少々時間がある。

373系「ホームライナー」から下車して、まず集合がかかる。

8時51分発の列車に乗るためにここに集合しろということだった。その確認が終わると自由行動になる。

「なあ、永島^{ながしま}。おなかすかない。」

木ノ本^{きのもと}が話しかけた。

「えっ、どうして。」

「だって、ご飯食べてないんだもん。昨日の晩御飯から何も食べてない。飲み物は飲んだんだけどね。」

「あっ・・・そう。よくやるなあ。」

「よくやるなあって、このくらい当然だろ。」

「俺は撮りに行ったりとかしたことないから、当然とか言われてもわかんねえよ。」

「えっ。ないの。」

「そんなことより、なんか食べてこいよ。そこら辺にキヨスクだの蕎麦屋^{そばや}だのなんかあるから。」

「それくらい知ってるよ。で、話が脱線したけど、永島^{ながしま}もなんか食べる。」

「食べねえよ。つうか、ご飯家で食ってきた。」

「そうかあ。」

と言ったら階段の向こうにある蕎麦屋^{そばや}に一人駆けていった。

ふと373系に目をやってみるとヘッドマークがさっきの「ホームライナー」から「ふじかわ」に変わっていた。案内には8時17分発。「特急ワイドビューふじかわ」甲府行きとある。

携帯電話^{けいたいでんわ}を取り出して、その写真機能を使う。373系を収めるとそのあとに収めるものはなくなる。

「「ふじかわ」かあ。」

横を見るとさっき蕎麦屋^{そばや}のほうに行っていた木ノ本^{きのもと}が戻ってきていた。

「いつの間に戻ってきた。さっきまで蕎麦屋^{そばや}のほうに行って・・・。」

「ああ、さっき食べて戻ってきた。こういうとき便利だよねえ。あ

の手の蕎麦屋とかうどん屋。ホームにあるから外に出る必要ないし。」

「・・・。そこまで食べるのが早ければ、おにぎりとかのほうが効果的なんじゃない。」

「それもそうかもしれないけどさあ、気分によるんだよねえ。今はおにぎり食べたっていうと気じゃなかったから、そばにただけだけど。それにそばとか麺類ってするする入って、早く食べ終わりそうな感じしない。」

「ああ、確かに。」

「だろ。こういうときはああいう店に駆け込み入店するのが一番いいと思う。」

（駆け込み乗車じゃなくて、駆け込み入店かあ。）

それは一理あると思った。自分も麺類は好きだし、麺類だと早く食べ終わるという先入観もある。

という話は置いて、8時45分。自由行動は終了。さっき確認された位置に全員が集合する。しばらくすると313系を先頭に6両編成の普通列車が入線してきた。この列車で終点熱海まで揺られる。

「ナヨロン先輩。さっきから何見てるんですか。」

僕は純粹にナヨロン先輩が向けている目線が気になった。彼はさっきから313系ではなくて上を見ている。それもずっと向こうの上だ。

「いや、パンタの向きがどっちかなあって思っただけ。」

ピンポーン、ピンポーン。ドアが開いたので、ホームに人があふれる。ドアから吐き出される人の波が終わると今度は乗る人の波。さつきと同じで降りる人も乗る人も同じくらいなのでさほど混みようも変わりない。ナヨロン先輩は先頭のドアのところに荷物を置いて、さっきの説明を続けた。

サイナイチサン ニイイチイチ

「313系と211系ってシングルパンタのつき方が逆なんだ。つまりどっち向きでついているかわかれば、後ろの車両を見ないで判

別できる。」

ナヨン先輩は手でくの字を作ってさらに続けた。

「これがシングルパンタとして、これが東に開いてる車両^{やつ}。つまり今乗った位置からすれば右に開いてたら313系^{サンイチサン}。左に開いてたら211系^{ニイチイチ}っていう風になる。それで先頭車だけ判別したかったらヘッドライトの色を見ればいい。だいたい黄色っぽいヘッドライトしてる車両が211系^{ニイチイチ}。まあ、運用のあれで、311系^{サンイチイチ}だったり313系^{サンイチサン}の名古屋圏の車両だったりすることはあるけどな。それで、白のヘッドライトが313系^{サンイチサン}2500番台。こちら辺で白は2500番台しかないから、見分けやすいよ。」

「へえ。」

「ナガシイ。そんなところ固まってないでこっちにくれば。座れるよ。」

楠先輩^{くすのき}に呼ばれて、そっちのほうへ赴いた、

「ほら、ナガシイ座って。」

「えっ、でも。」

「いいの、いいの。あたしはこれくらい大丈夫だし。」

「やせ我慢するなつうの。お前こそ座つとけ。」

ハクタカ先輩が口をはさんだ。

「別に・・・。」

「いいから座れ。どうなってもしらねえぞ。」

楠先輩^{くすのき}はハクタカ先輩に無理やりという形で座らされた。

「チッ。アヤノンのやつうまく逃げたな。せつかくのいじる材料がなくなっちゃったじゃない。」

隣は善知鳥先輩^{うと}。今のことはどうやらいじられるという立場から逃げたかったからだそうだ。気づくと列車はすでに発車しており、次の停車駅東静岡の案内を行っていた。

東静岡^{ひがし静岡}に止まって、すぐに発車。次は草薙^{くさなぎ}と言っているころ、善知鳥先輩^とが話しかけてきた。

「ナガシイ。こうやってるのをひまだし、なんか話そうか。全員の

面白い話とか、いろいろ。」

こう持ちかけてきた。今の僕にはそんなに暇ではないのだが、さっきまで「ホームライナー」に乗っていたという反動が大きかった。

「別にいいですよ。」

了承すると後は一方的に善知鳥先輩にペースになった。

「そうだなあ。まず、アド先生の異名とかって聞きたいって思わない。」

「うーん。はい。」

「アド先生のもう一つの異名はねえ……ハゲ友の会会長よ。」
「えっ。」

「だからその名の通りだって。アド先生今髪の毛ないでしょ。だからそういう異名も5年前の先輩がつけたんだって。そういう話。」

「アド先生のほかの話ってないんですか。」

「アド先生は何かと少ないんだよねえ。でもほかの人だったらこういうの多いよ。例えばナヨロンとか。」

「ナヨロン先輩にもなんか異名みたいなのあるんですか。」

「ナヨロンの場合は伝説だよ。伝説。あいつ電車に異常に詳しいじやん。」

「じゃんって言われても。僕はまだ付き合ってるそんなに経ってませんから。」

「それでもわかるだろ。あいつ電車に乗ったら見るところが違うんだよ。パンダグラフとかっていう……。」

「パンダグラフです。」

「いいよそんなこと。あいつそれ見て、あっこれは何系だとかいうからね。他にあいつが入部したときに青木おおぎさんっていう人たちと電車のこと話してたのよ。その時ナヨロン、エスエルの話して、知識で先輩たちを撃ち落としたからね。」

「えっ、ナヨロン先輩ってそんなに詳しいんですか。」

「詳しくすぎだよ。ここがこうなってるからこれは何々だねとかって、もうどっかの先生みたいに言うから。」

確かに。どこか先生じみているというところはある。

「じゃあ、鉄道知識でナヨロン先輩に勝つって無理じゃないですか。」

「あつ、でも勝つことができる分野もあるよ。例えば、料金とか、距離とか、駅名とか。ここ覚えてるとナヨロンに勝てるよ。」

料金。駅間。駅名。すべて僕が詳しくないところだ。

「ダメだ。僕はナヨロン先輩には勝てませんね。」

「何。ナガシイも電車のことだけなのか。」

「はい。僕、新幹線を除外するなら223系が好きなんですけど・・・」

「ごめん。あたしその時点についていけない。そもそも223系って何。211系とかじゃなくて。」

「善知鳥先輩。あまりそういうこと言わないほうがいいですよ。」

「それは分かっているよ。でもあたしには違いが分からないんだって。なんせ0系もわからない人よ。」

自慢げに言われても何の自慢にもならない。

「223系ってJR西日本の新快速なんですよ。その1000番台と2000番台の違いはテールライトがヘッドライトのすぐ下にあるかないかなんです。」

「えっ、それだけ。もっと顔が大々的に違いますとかじゃないんだ。」

「だって同じ車両ですよ。違いが少なくなるのは当然です。でも、視認性だけで違いが判断できるわけですから、まだまだ優しい間違えを探しだしていますよ。」

「うーん。そうなのか。」

電車のことを話して首を傾げられることは今までなかった。そもそも萌はこの違いは理解していたし、223系すべての違いも分かっていた。それとも、僕が今までそういう人として話していなかったからこういう結果になったのだろうか。

「ダメだ。やっぱりあたしには電車のことはわかんない。それより

まだまだ面白い話あるんだけど、聞きたくない。」

何かと停滞した空気を進めたいらしい。うなずいて話を進めさせて、

「ナガシィ。この部活の中で好きな人っている。」

「いませんけど。」

「うそっ。ハルナンのこと好きじゃないの。」

「好きとか嫌いとかいうわけじゃないですけど、そういう目では見てません。」

「なるほど。他の人かぁ。ならいいや。ちょっと掘り込んだ話しちゃってごめん。でも、この部活には部活内恋愛しちゃってる人いるんだよねえ。」

興味はないのだが何か答えを返さなければと思って誰ですかと聞いた。

「アヤノンとハクタカ。二人とも幼馴染同士なんだけど、冷やかされるかと否定するから。」

「それって自分がただただ冷やかしたいだけじゃないですか。」

「その冷やかすのが面白いんだって。」

これはどう反応したらいいものか・・・。

14列車 揺られて（後書き）

新入部員歓迎旅行。ようやくと鉄道研究部らしくなりました。

でもこういう旅行にいくとマニアの人の恐ろしい能力が発揮されるんですよねえ。それがあらわになっていく人が多いですが、これだけでとどまらない人も世の中には・・・。

あーあ。マニアのパワーって本当に恐ろしい。

15列車 熱海 国府津 清水

しばらく313系に揺られて熱海^{あたみ}まで行く。途中にはパルプの盛んな富士^{ふじ}。旧東海道本線。御殿場線^{ごてんばせん}との分岐^{ぬまつ}駅沼津。新幹線の車両基地がある三島^{みしま}と主要駅が続く。三島を発車すると次は函南^{かんなん}。函南を出ると次は終点熱海だ。ここ函南^{かんなん}と熱海の間には丹那^{たんな}トンネルというトンネルが存在している。このトンネルを通りぬけると隣に東海道新幹線の線路が見える。そしてまたトンネルに入る。そのトンネルを出ると熱海のホームに滑り込む。

「やっとここまで来た。」

善知鳥^{うぐいす}先輩は体を伸ばした。

「よく耐えたな。」

サヤ先輩はそれに感心している。

「よく耐えたなって。よっぽど耐えきるのが珍しいみたい言い方だな。」

「だってそうだろ。お前の場合寝てるかなんかしないとどうかなるだろ。」

この話を聞いていると善知鳥^{うぐいす}先輩がこの部活に入った理由がなんなのかわからなくなってくる。

「みなさん。集まってください。」

アド先生が集合をかけて、全員を集める。全員集まったら改札に向かい、朝渡された「休日乗り放題きっぷ」を駅員に掲示して出た。改札を出ると人盛り。歩くところが狭いからか東京^{じょうき}よりも人がいると錯覚する。僕たちが出た出口付近には足湯と蒸気機関車^{じょうきかんしゃ}が展示されていた。多分、日本に鉄道が走り始めたのころに走っていた蒸気機関車^{じょうきかんしゃ}だと思う。その蒸気機関車の前まで来るとアド先生から指示があった。

「みなさん。これから自由行動にします。11時10分にここに集合してください。」

「はい。」

全員の声がそろそろ。それが済んだところで、みな思い思いに解散していった。

「さて、俺たちは昼飯にでもするか。」

佐久間が僕を誘った。

「昼か。早くない。」

「早くないだろ。乗る電車が11時30分なんだから。」

それでもそうかと思いいそれに同意することにした。熱海駅側には長屋みたいに建物が建っている。そこに2階はどうやら飲食店が並んでいるらしい。そこに入って、全員で昼を食べることになった。入ったところは2階に上がってすぐのラーメン屋。そこで昼をとったあとは何もすることがない。1回のお土産屋のあたりをふろふろと歩いて、家用に買っていくお土産を選んだ。それが終わったらさっきの蒸気機関車のところに戻った。

そこにはすでにナヨロン先輩がいた。ただ、厳密に言えば違う。のんきに足湯に浸かっているのだ。

「ナヨロン先輩。」

声をかけた。すると振り向いて僕のほうを見た。少し驚いたようだ。

「永島か。善知鳥かと思つたよ。」

「善知鳥先輩だったら都合が悪かったですか。」

「悪すぎたよ。もしかしたら、この足湯に突き落とされるかもしれないからな。」

「そうなんですか。」

「いや、それくらいしてきかねないっていうのかなあ。まあ、そんなところ。・・・ところで、永島今まで何してきた。」

正直に昼ご飯を食べてきたと答えると、

「そうかあ。真面目だな。」

「えっ。お昼ご飯食べることで真面目なんですか。」

「そう真面目。いや、真面目すぎる。こういう業界にいくと昼なんてただ邪魔なイベントになるだけだぞ。永島もそういうタイプだから」

らすぐに分かる。」

（そういえば、アヤケン先輩「昼食べたい奴は食べとけ」って言うてたなあ。もしかして、アヤケン先輩も食べてないのかなあ。）

「アヤケン先輩はいま何してるんですか。」

「んっ。確か綾瀬あやせなら、海のほうへ歩いてったと思ったけどなあ。何か写真にでもとってるんじゃないか。ギャルとか、ギャルとか、ギャルとか。」

「それしそうなのは断然ナヨロンのほうだけだなあ。」

後ろを見てみるとさっき噂うわさしていた善知鳥先輩うんどうだった。その姿を見るとナヨロン先輩はさっさと足湯から出た。

「どうしたナヨロン。」

「いや、何となく。」

一息おいて、

「ところでなんだよ。俺がギャルの写真撮りに行くって。」

「だってしそうじゃん。ナヨロン彼女いないんだし。それに初恋もないらしいし。」

「初恋はあった。フラれただけ。」

「どっちも同じじゃん。そんなことよりナヨロンで遅れてるぞ。このナガシイでさえ彼女いるくらいだぞ。」

このナガシイでさえって言い方はなんだ。

「へえ、そうなのか。」

「ナヨロンいつまで、電車が彼女だって言ってるんだよ。」

「勝手に話進めるなよ。俺はそこまでじゃないぞ。・・・ところで、そういう善知鳥うんどうには春が来たのかよ。」

ナヨロン先輩がそう聞いた瞬間善知鳥先輩の顔が少し赤くなった。

「い・・・いえるかよ。恥ずかしい。」

少しは恥じらいというものあるらしい。

11時10分。サヤ先輩が1分遅れて集合場所に到着。これで全員そろった。揃ったところで改札口を通り抜けて、またホームに戻る。ホームで待っていると函南側かんなんみから白いヘッドライトをつけた車

両が接近してきた。JR東日本の一大勢力。E231系のお出ましである。乗車位置は8号車。15両編成の車両のちょうど中間である。

11時30分。僕たちを乗せた15両編成の車両が熱海を発車する。その隣には185系の「特急踊り子」など。東海道本線の特急列車が並んでいる。熱海を出るとしばし、外の風景に目を向けていた。

しばらくすると眼下に相模湾が広がるようになった。世界に比べれば相模湾などほんの点でしかないのだが、ここから見る限りはそんなことは思わない。かなたには地球の輪郭がわかるように少し丸みを帯びて見える。

「海だ。」

普段海に縁のない人のテンションが上がる。しかし、すぐにトンネルに入ってその視界が遮られる。

「このトンネル死ねばいいのに。何やってるんだよ。」

トンネルに文句を言ってもどうにもならないと思うが……。そのトンネルを抜けるとまた海が見える。しかし、今度は木に邪魔されてよく見えなくなる。これを何度か繰り返して、根府川に停車。その後早川まで相模湾を望み、早川から沿岸部を外れて小田原に。次の鴨宮は東海道新幹線が開業する前モデル線があったところである。ここから30km程離れている綾瀬までモデル線は伸びていた。ここで新幹線のための各種試験が行われたのだ。鴨宮の次は国府津。ここで東海道本線からは分かれる。

12時00分。国府津に到着。8号車から下車して、E231系を見送る態勢をとった。しばらくするとE231系のドアは3回電子音がしてしまった。すると高い歌声を奏でて国府津のホームを後にいしていった。国府津を発車すると線路が左にカーブしている。そこに差し掛かるころにはスピードは70km/hを優に越しているだろう。こんなに早いものかという速さで走り去っていった。

それを見送ったら、御殿場線のホームに赴いた。ここに列車が来

るのはまだ先である。そのころ。さつきE231系が走り去っていったホームにはまた別のE231系が入線してきた。これもさつきと同じスピードでホームから走り去っていく。

「早いなあ。」

ふと言葉が漏れる。

「あんなに早いものかなあ。いつも寝台特急ブルトレとか見てるからあんなに加速率いいとはっきり驚くわ。」

木ノ本きのもとも意外な感じで話している。

「まあ、そこは人それぞれだろうな。普段電車しか見てない人はあの速さがふつうと思って、寝台特急ブルトレとかが発車するときはこんなに遅いのかと思う。だけど、そのほうが慣れてる人はあれくらの速さが速く見えて、寝台特急ブルトレのほうがふつうに見える。木ノ本きのもとはそういう方面では正常だよ。」

ナヨロン先輩がさらに続けた。

「乗ってるぶんにはそういうこと考えないんですけどねえ。」

「乗ってるときはそういうこと考えないだろうなあ。他のに気をとられてるから。」

（他のに気をとられてるかあ。そうかもな。）

「・・・。」

この会話が終わってしまうと3人とも黙ってしまった。全員見る風景に気をとられて、そういうことを考えないようにだ。

数分後。御殿場線ごてんばせんの列車を待っているホームに電車が入線する。

今度はさっきの313系と違い211系という車両である。違いは前述したとおりである。

「211系ニイチイチかあ。乗り心地悪い奴だな。」

佐久間さくまが211系を見るなり文句を言った。

「えっ。乗り心地悪いのか。」

「悪すぎだよ。こいつ発車したときにガクンガクンなるからな。」

この表現は相当悪いということらしい。

「佐久間。乗るんだったら前がお勧めだぜ。」

隣で会話を聞いていたナヨロン先輩が答えた。前の車両のパンタグラフを遠目ながら見てみると2つあった。僕にはそれが何系なのかわからなかった。

御殿場線ごてんばせんに乗車して、発車を待つ。12時32分国府津を発車。

しばらく外に目を向けていると隣に大量の線路が現れた。車両基地のようだ。そこには211系など御殿場線ごてんばせんで活躍する車両が止まっていた。この光景を後にすると山に分け入り、風景的にはそんなに面白くない光景が続く。また数十分揺られていると目の前に富士山が現れた。今日の富士山は晴天に恵まれ頂上まで見える。その写真を僕は写真ではなく目に焼き付けた。しかし、そのころになると風景にも飽きてしまった。もちろん、こうなったらやることは一つだ。席を立てて数人誘った。

乗った車両は3号車。隣の2号車に方へその数人を引き連れて歩いて行った。2号車に入るとシートの形が変わった。さっきまでのロングシートがクロスシートに変わった。

（なるほど。ナヨロン先輩が「前がいいよ」って言ったのはこういうことか。）

ここでもうやっと白黒はつきりした。

そのころ、誘った諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかぜはすでに一番前にかじりついていた。僕もその一員に加わって前を見る。さらに木ノ本きののほん、佐久間さくまが加わって6人で前を見つめた。

この状態を終点沼津ぬまつの手前までや手、沼津ぬまつに到着する直前に元の場所に戻った。

「お前ら何してんだよ。」

戻るなりハクタカ先輩にそう聞かれた。

「大目に見てやれって。ハクタカだってわからないわけじゃないだろ。」

「確かにそうだけど。ガチでそれとやられると・・・。」

「何か不都合なのか。まあ、普段裏声上げてるハクタカが言うのに

も説得力っていうものがないけどなあ。」

「このう。」

沼津ぬまつに到着。ここからは東海道本線を逆戻りだ。14時15分発の普通列車で、途中清水しみずまで揺られ清水で下車。下車してからは清水の繁華街みずつぽいところを抜けて、東海道線をまたいで、清水の東側にある公園を通り抜ける。途中に踏み切りがあつて、そこを211系が通過していくのが見えた。さらに歩いて静岡鉄道の鉄橋が見えるところまできた。そこをゆっくりと通り過ぎていく静岡鉄道の車両を眺めて、また歩き出す。そのあとはいろんなところを通って行ったため、どこをどう歩いたかなんて覚えていない。30分か40分くらい歩いただろうか。エスパルスドリームプラザに到着。しかし、鉄道好きの僕には何もすることがなく困っていた。ふろふろと中を歩いていると佐久間さくまが僕の肩をたたいた。

「おい、永島ながしま。見てみろよ。フェラーリ乗り場。」

笑いが噴き出た。当の佐久間も笑いをこらえられないでいる。

「フェラーリって。フェリー乗り場じゃないか。」

「こっから乗れるのは、フェリーじゃなくて、フェラーリに変わったんだよ。」

こんな冗談誰なら受けるだろう。

15列車 熱海 国府津 清水（後書き）

高い歌声ってモーター音のことですよ。

電車を人に見立てた描写がまた多く出てくるときがあるかもしれません。

また、電車にも感情があるんですよ。

読者のみなさん。これからたとえものといえどいたわってやってと思う今日この頃です。

16列車 3 cars or 6 cars

16時30分ごろ。エスパルスドリームプラザの2階入り口に集合。そこから今度は道を一直線に進んで清水しみずに帰る。予定では乗る列車は17時20分発の列車である。帰路。僕、諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかぜはさっさと歩いて一番先頭に立ち、その後ろに木ノ本きののもと、さらにその後ろに先輩たちが続く形になった。先輩たちとは距離が離れて、50mメートルぐらいあったと思う。

しばらく歩いて、長い歩道橋らしく物が見えた。その西側に目を向けると清水しみずの駅舎が見える。僕たちの前に現れた歩道橋は自由通路らしく清水しみずまで伸びている。中学生たちはすぐにその通路を伝って清水しみずまで走っていき、僕はそれを追う形になった。改札を通りに抜けて17時15分。十分間に合う。階段を下りてホームに向かった。ホームにはすでにその列車に乗る人たちの人盛りができていた。その頃先輩たちは、

「17時20分。まだ間に合うけど・・・。」

「そうだな。最後の最後ぐらいゆっくり帰らせてくれよだよなあ。」

「これじゃあ、死んじゃうじゃん。」

「できれば、もうちょっとあったほうがよかったなあ。」

電光掲示板に書かれている「3両」の表示にため息をついていた。

17時19分。その列車が入線。そのころには先輩たちもホームに降りてきて、列車を待っていた。

「最後に乗る列車はこいつですね。」

諫早いさはやが乗り込み、空河そらかわが乗り込む。僕もそれについて乗り込もうとした時、

「待て、その列車こいつに乗るな。」

サヤ先輩が待ったをかけた。

「おい、諫早いさはや。空河そらかわ。降りろ。」

その声を聴いて、下りるように促す。すぐに反応した二人はホーム

に降りて、数秒後にドアが閉まった。間一髪である。ドアが閉まった211系はホームから走り去っていった。

「サヤさん。なんで今の列車やつに乗らなかったんですか。」

諫早いさはやが下りろといった意味を聞いた。

「今のは3両だぞ。あんなん中に放り込まれたいか。」

「いわゆる。混むから乗りたくないってことだ。」

アヤケン先輩が解説する。

「なんですか。それ。今に乗っていくっていう風になってたじゃないですか。だったらあれに乗るべきでしょ。たとえ1両でも。」

「大丈夫。こんなの日常茶飯事だから。お前たちに今後の部活の予定表渡してあるだろ。あれ。今までなかった日にやることってなかったか。」

善知鳥先輩うしろの解説には何となく納得できた。4月の24日以降あった部活は25日、26日、27日、28日、29日。予定されていた日は25日、26日、29日。27日と28日の部活は最初から予定になかった。それをやっているのだ。そして、24日の部活も予定されていなかった。つまり勝手に行われている部活があるのだ。「だから、予定表なんて気にしちゃいけない。予定表通りにやらないのがこの部活なんだから。諸君。分かったか。」

「こういう部活で、そんなにルーズじゃいけませんよねえ。」

「いけないんだけどねえ。でもすぐになれるよ。」

この後聞いた話だが、善知鳥先輩うしろたちが入部したときからこの状態だったらしい。ほぼ伝統化してしまっているそうだ。

次に来る列車は17時37分発。普通はまづ浜松行き。これには行先の隣に6両とはいていた。そのため、この列車に乗って帰ることになり、浜松到着は19時04分となった。

17時37分の列車は211系を先頭にする6両編成。パンタグラフを見ていたナヨン先輩の判断では後ろは313系ということだった。

211系のシートに座って、ボーツと外を眺めていると新幹線の

線路が隣に現れた。静岡しずおかに着いたのだ。その静岡しずおかには長居せずにくぐに発車。この後「ホームライナー」で通過してきたすべての駅に停車しながら、浜松はままつを目指す。その間はどうしても暇になる。

「永島ながしま。柿ピーでも食べる。」

「おう、食べる、食べる。」

柿ピーがなんなのかは別にして、今は何かしていたほうが暇ではない。そう思って佐久間さくまから柿ピーをもらい食べる。

「木ノ本きののもとも柿ピー食べるか。」

「おやじか。お前は。」

「うるせえな。いいだろ好きなんだから。」
数分後。

「結局木ノ本きののもとも食べるのかよ。」

「そうじゃないって。なんか食べてたほうがましってこと。なんかやることなすこと久しぶりすぎて体がついていけない。」

「あー、そう。」

「あー、もうこれが夕ご飯でいいや。」

「えっ、柿ピーが。」

「だって、この後夕ご飯のことなんか考えたくないもん。それにお父さんには夕ご飯食べてくるねっていえばそのあとはスルーしてくれるし。」

「なぜお父さんにメール。」

「ああ、うちイクメンだったから。お母さんがJRジェイアールで働いてるって言っただろ。だから、自動的にあたしの世話はお父さんになったわけ。」

「いや、育児休暇いくじきゅうかみたいなの取らなかったのかよ。」

「取らなかったらしいよ。お母さんが休んだのは私を出産する間の1年ぐらいで、私を産んだらすぐに職場に戻って運転やったんだって。」

「木ノ本きののもとの父さんよくそれ了承したよなあ。」

「今考えてみるとかんなんだよ。お父さん昔よく私を連れて駅とか

に出かけてったから。だから、お父さんも鉄道マニアだったんだと思う。だけど理由^{わけ}あって、仕事続けられなくなったんだと思う。」

「なんで仕事続けられなくなったんだよ。」

「そんなこと知らないよ。それに小さい時からそんなこと知っちゃったら運転手になりたいなんて思わないって。」

「・・・。」

掛川^{かけがわ}を過ぎると東海道本線は新幹線と並走する。

「なんか来ないかなあ。」

前の新幹線を見て、木ノ本^{きのもと}がつぶやく。

「なんか来てくれるといいな。でも新幹線ってさあ、なんか来てほしいなあって思ってる時に来なくて、どうでもいいかって思ってる時に来るんだよなあ。」

「あつ、それよくある。なんで新幹線ってあんなにKY^{ケイワイ}なんだろうなあ。もうちょつと空気が読めればいいのに。」

「ハハ。空気読めか。・・・なんかわかる。」

すると前を新幹線が通過していった。特徴は鼻の先に光っていたテールライトだった。

「N700系^{エスナナ}だな。」

「N700系^{エスナナ}だな。はあ。この頃あいつ多すぎ。」

「これからあの手の車両しかいなくなるんだろなあ。私N700系^{エスナナ}あんまり好きじゃないんだよねえ。まだ700系のほうがかわいかったというか。」

「えっ、700系かわいいか。俺あれ一番最初に見たときなんじやりやって思った車両^{やつ}だけど。」

「なんじやりやか。そこは人それぞれだもんなあ。・・・永島^{ながしま}さあ、自分が一番好きな車両って何。」

この手の質問には正直困る。それぞれでいちばんがあるためだ。例えばJR北海道ならキハ261系「スーパー宗谷^{そうや}」。JR東日本なら253系「成田^{なりた}エクスプレス」など。他にもたくさんある。

「一番か。・・・答えるのに困るなあ。」

「あつ。じゃあ、新幹線でいちばん何。」

「100系と200系のH編成^{エイチ}。俺それが好きだな。」

「100系はどういう顔してるかわかるけどさあ、200系のH編成^{エイチ}ってどんな顔してる。いまいちよくわかんないんだけど。」

「H編成^{エイチ}って、あの100系の顔した200系だよなあ。」

佐久間が確認してきた。

「そうそれ。」

「あつ、なるほど。・・・じゃあ、永島^{ながしま}って「グランドひかり」の100系も好きなのか。」

「「グランドひかり」の100系は好きじゃない。鼻の下にあるひげが・・・。」

「あれって空気取り込み口なんだってなあ。俺もあんまり好きにはなれないなあ。」

「あつ。そうなんだ。知らなかった。」

「えっ、永島^{ながしま}なら知ってると思ったのに。」

「俺確かに電車には詳しいけど、そういう方面詳しくないんだ。それに今の今まで遠江急行^{こうきゅう}の駅と遠州鉄道^{えんてつ}の駅全部言えなかったから山手線の駅は全部言えるけど。」

遠江急行^{こうきゅう}と遠州鉄道^{えんてつ}とは地元を走っている私鉄のことである。

「それふつう逆だろ。」

「だって、そうだったんだから仕方ないだろ。」

「でも、今なら言えるんだろ。」

「いや。まだちょっと怪しいところがあるけどなあ。順番通りに言える自信ねえし。」

こんな話をしながら211系に揺られた。浜松到着^{はままつ}は19時04分。定刻通りに到着した。

翌日。5月3日。この間は浜松祭り^{はままつ}も絡んで部活はない。毎日のように家の模型で遊んでいる。しかし、今日はちよつと携帯^{ケータイ}をいじって遊んでもいた。

「昨日、部活の歓迎旅行で国府津まで行ってきたよ。」

文面をこうして相手に送る。その返信は、

「ふうん。ところで、何か珍しい車両とか見た。」

「見てない。」

「そう。じゃあ、100系とかも見えてないんだね。ナガシイの好きなやつだけど。」

「確かに。でも本物見て失神しても困るから。」

「失神じゃないだろ。その前に死ぬだでしょ。うれしすぎて。」

「ハハ。そうかも。」

「でも、ナガシイいいなあ。いろんなところに行けて。次行くときは何か撮ってきてよね。お土産はいらないから。」

「何がお土産はいらないだよ。いるじゃねえか。」

「まあ、いいじゃん。でも、このお土産だったら買う手間ないよね。」

「確かに。次臨地研修が夏にあるから、その時は何か撮って帰るよ。」

「じゃあ、どこ行くかわかったらメールしてよね。予約入れるから。」

「へいへい。」

そう送ってスライド携帯の端末を閉じた。

「さて、そろそろ貨物にでも変えるかなあ。」

寝そべった状態から体を起こして、車両子に入る。これを何十回も繰り返してこの日を過ごした。他の日も同じで6日までの暇つぶしには困らなかったが、ゴールデンウィーク中に出された宿題は何もやっていなかった。とりあえず6日の午後に片づけて、次の日からまた部活だ。

5月7日。宗谷学園では、

「何、安希。」

「赤電って芝本から新浜松まで乗るといくらかかる。」

「赤電って何。」

「えっ。萌ちゃんそれでも電車詳しいの。」

「分かんないものはわかんないんだから。そもそも赤電あかでんって・・・あつ、遠州鉄道えんてつのことか。」

「ようやつとその意味が分かった。」

「400円だよ。」

「400円ね。そのあと名古屋なごやまで行きたいんだけど、名古屋なごやまでいくらかかるかわかる。」

「ごめん。私詳しいの車両車両だけだから。」

「あつ、そうなんだ。じゃあ、「ひかり」か「こだま」どっちが速い。」

「えっ、「ひかり」だけど・・・。それわかんないってヤバくない。」

「ヤバくないって。これって知ってたほうがいいこと。」

「そういう意味じゃないけど、それくらいふつうじゃないってこと。ってごめん。話が脱線だつせんしちゃったね。」

（本当に萌ちゃんって電車のこと好きなんだな。これで、電車が彼氏あきとか言わないよねえ。）

安希あきはそう思いながら、自分のクラスに戻った。

クラスに戻ると友達に話しかけた。

「ねえ、梓あずさ。梓あずさの言うこと本当だったよ。あれってすごいよねえ。」

「すごいというかすごすぎだよ。前なんか、電車なんか見分けられてふつうみたいなこと言われたから。」

「えっ、電車って違いとかってあるんだ。」

「そうらしいよ。この前なんか電車来たのにあれには乗りたくないとかって言ってたし。」

「へえ。」

今度はそのことを萌の中学からの友達に振ってみた。

「そのことだったらあたしたちはどうとも思っていないけど。」

「あれって受け流しとけばいいんだって。梓あずさも安希あきも真剣に受け止めようとするからそうなるんだって。聞き流しておけば軽い反応で

済むから。」

「萌ちゃんって昔からああい子だったのか。」

「いや、少なくとも小学校1年生の時はああじゃなかった。」

「小1の時は……。つまり小2からああなったっていうわけ。」

「そういうこと。萌よく電車で詳しい男子と休み時間中話してて、本人が言うにはそれだけで覚えちゃったらしい。新幹線のこととかいろいろ。」

「へえ。」

お弁当を食べ終えて、机にのめっている萌の姿を見る。

「でも、このごろ元気がないんだよなあ。彼氏と違う学校になったからかなあ。」

「えっ、あれで。」

「あつ、梓^{あずさ}たちが知ってるのは電車の話するときの萌だけ。中学の時とかもそうだったけど、授業とかになったらあれがふつう。だから、電車の話してる時のほうが生き生きしてるように見えるだろ。」

「……。」

「本当はその人のことが死ぬほど好きなんだよ。なのに、何で別の学校に行ったんだかあたしにもわかんない。」

「……。」

とどこどころ聞こえてくる言葉を背中受ける。ふと机の中からスライド携帯^{ケータイ}を取り出して、端末を開いた。待ち受け画面は阪急8000系。永島^{ながしま}が好きな車両の一つである。

「……。」

5秒くらいの間8000系を見つめて端末を閉じた。

一方岸川学園では、

「結局ボーイコットするとかみたいなこと言ってたけど、しなかったじゃないか。」

醒ヶ井^{さめがい}が呆れたように言った。

「するわけないだろ。1年生のいない歓迎旅行ってなんだよ。まあ、サヤ先輩がやりそうみたいだったけど。」

「善知鳥先輩うっとうが言ってたけど、サヤ先輩って時間にとってもルーズなんだって。それだから、歓迎旅行の時に「サヤがボイコットした歓迎旅行」だって先輩が言ったんだって。」

「鉄研の部長が時間守れないって死んでるよなあ。」

「あれで、将来なんになるんだか知らないけどさあ。」

「ハハハ。」

その頃3年生のほうは・・・、

「ハックション。」

「食事中にくしゃみするなよな。サヤ。」

「いや、誰かに噂されてる。まったく誰だよ。こんな時間に噂するゴミなやつは。」

「ゴミなやつって。それお前おほこ十八番だな。」

「ところで、今日部活あったっけ。」

「ないよ。」

「ないのかよ。ホントゴミだな。」

その頃部室では・・・、

「お・・・お前。のぞきに來たわけじゃないんだから、ハンマー投げることないだろ。ていうか、それで窓が割れたらどうするつもりだったんだよ。」

「そういうときは、のぞきに來たバカタカに弁償してもらおうよ。なんでそんなにあたしの下着姿見たいわけ。」

「見たいわけじゃねえよ。ちようど絢乃あやのが着替えてることが多いんじゃないか。つうか、そんなに見られるのが嫌なんならあっちの更衣室ういしつに着替えればいいじゃないか。あっちなら見られないんだから。」

「今ちようど体育でバレーボールやってるんだからしょうがないだろ。あたし教室じゃなくてここでお昼食べてるんだから。」

「一人で食事かよ。さびしい奴だなあ。」

「別に。教室で食べるとバカタカと一緒に食べないのかって冷やかされるから。」

「教室に帰ってくれば同じだろうが。」

その言動にあきれ閉じた目を開けると、

「何胸見てるんだよ。体育の後は制服が透けて下着の解像度がいいみたいな目で見てるなよ。」

「それ、お前の一方的な考えだ。」

「黙れ、このバカタカ。」

あやの 絢乃は机の上に置かれている小物入れの引き出しからボンド水を滴下する注射器を取り出した。

「バカやめろ。それはヤバいって。」

「バカタカ。どっちの目に打ってもらいたい。」

「どっちも嫌だわ。」

とまあ、今日も一日ふつうに過ごしている僕たち鉄道研究部である。

今回からの登場人物

そのだあき

蘭田安希

誕生日

3月10日

血液型

B型

身長

157

cm

16列車 3 cars or 6 cars (後書き)

この小説に出ているほとんどのキャラクターには電車からの由来があるんですよ。

今回の安希も東京―広島間を走っていた「特急安芸」からきてます。

17列車 中間テスト

5月9日。歓迎旅行^{かんげいりょこう}が終わって最初の部活。ゴールデンウィークの時浜松では盛大なお祭りがあるため、ほとんどの浜松市民はそっちへ貸し出される。浜松祭りとして有名である。凧上げや屋台の引きまわしなどなど。いろんなことをやっている。

今日の活動は文化祭に展示するモジュールというものの製作である。モジュールとは小さなレイアウトをたくさん繋げて一つの大きなレイアウトにするためのパーツのことを言う。それを作っているのだ。僕達を作っているモジュールは中に留置線を設けた駅のような風景のもの。まあ近くに駅はないためただの引き込み線と言った方がいい。それを作っているのだが、あれからほとんど進んでいない。それから少し日がたってテスト期間になる。この時はどうしてもモジュールの進行はストップしてしまう。それよりも少し心配がある。

「永島^{ながしま}。今回のテスト勝負しようぜ。」

友達の宿毛^{すくも}に誘われる。

「おう、いいよ。今回は絶対負けないからな。」

「よく言うよ。でも、今回はいい勝負になるだろうな。英語に至れば中学の復習だもんな。」

「ハハハ。で、ソッコウで悪いんだけど、数学教えて。」

「おい、数学こそ俺が教えてほしいわ。」

「まあ、そういわずに。」

「はいはい。そうしないと勝負になんないもんな。特にお前の場合^{すくも}は。」

宿毛^{すくも}から数学、国語、英語、現代社会、生物。いろいろ教えてもらってテストで勝負する。45分後。テストが始まり50分のガチンコ勝負がスタートする。それを3時間。次の日に2時間。終わったらどうなるかというのは想像に任せよう。

テストが終了しテストが返却される。

「永島^{ながしま}何点だった。」

宿毛^{すくも}に聞かれてテスト用紙を見せる。

「マジかよ。この点数チートだぞ。」

「宿毛^{すくも}は何点。」

「これ。でも永島^{ながしま}の点数にはとどかないな。その点数取られると。他ので挽回しなくちゃいけないじゃないか。」

「大丈夫。俺も国語が足引っ張るから。」

「その割にはいつも勝ってるじゃないか。」

「永島^{ながしま}。何点だった。」

佐久間^{さくま}が聞いてきた。

「まあまあだったよ。」

（こいつ。頭いいってこと知られたくないのかよ。）

数日後。テストの合計と平均点、クラス順位が出る。

「やっぱりこういう結果かあ。今回もまいりました。」

「いい加減にしてくれよな。俺こういうの好きじゃないんだよなあ。」

「

「順位だけはお前嫌いだな。俺が頑張ってるときにお前が手を抜いてくれればいいのに。」

「それじゃ勝負にならないだろ。」

「お前なら勉強しなくても大丈夫だって。」

「さすがに勉強はしないと無理。1時間くらい。」

「今回1時間も勉強してないよな。」

一方他のクラスでは、

「今回のテスト、5組の人が学年トップなんだって。」

「蘭^{らん}それどこから。」

「興津^{おきつ}先生の話をちよつと聞いちゃったから。名前までは聞きとれなかったんだけどね。でも、そんなに珍しい名前じゃなかったと思う。珍しいやつだったら覚えてるし。」

（5組って。もしかしてあいつかな・・・。いやいや。バカっぽい

し、ないよな。」

「心当たりとかってあるの。」

「いや別に。」

「だよねえ。」

友達の室蘭らんにはこういったが、やっぱり気になった。

「だから聞いたんだけど。誰だかわからない。」

「何。どういうこと。」

「うちの担任の沖津さんの話だと5組の生徒が学年トップ亭ことらしいんだけど。誰か心当たりないかなあって思って。」

「永島ながしま。宿毛君すくもだよねえ。学年トップって。」

「ああ、そうじゃない。宿毛頭すくもいいし。」

だが箕島みしまはこう思っていた。

（学年トップってこいつだぞ。木ノ本きのもとさんこいつが同じバカ友とかって思ってるのか。そして、同じクラスの佐久間さくまはこの事実知らないんだ。）

「じゃあ、宿毛君すくもっていう子が今回の学年トップなんだ。」

「ああ。多分ね。」

ふと、このとき室蘭むろらんが言った言葉が再生される。

（珍しい名前……。宿毛すくもってふつうに聞くような名前じゃないか。じゃあ、鈴木すずきとかっていう名前だよねえ。だったら覚えてないのも裏付けるけど……。）

だが、そう思っただけで声にはしなかった。

「ていうか。今日からだよねえ。部活。」

「ああ、そうだな。」

「あー、これでまた文化祭まで休めなくなる。もうちょっと家でゴロゴロしてたいのになあ。」

「ゴロゴロって。永島ながしまの場合それ毎日やってるだろ。」

「ゴロゴロしてるから休めるんじゃないか。あー、家で遊んでえ。」

「永島ながしまの場合はもう遊ばなくてもいいだろ。普段から遊んでるようなもんなんだから。」

「ダメ。普段から遊んでるけど、遊び足りない。」

（いつまでこんな子供みたいなこと言ってるんだよ・・・。）
そのあと永島^{ながしま}にどう話しかけていいのか。その言葉を失った。

6限目終了。これからホームルームをやって、掃除。今週は掃除担当ではないため、長いホームルームが終了したら、部室に即行で向かった。

「宿毛^{すくも}。永島^{ながしま}とテスト勝負してみたいだけどうだった。」

「あ。ああ、それなら、永島^{ながしま}の勝ちだよ。俺は今回も負けた。」
（えっ。）

その会話を聞いて目が点になった。

（永島^{ながしま}。あのとき学年トップは多分宿毛^{すくも}だって言ってたよなあ。まさか、そういうの知っててああいう風に言ったのか。知られたくないのかよ。いずればれることなのに。）

「あいつ生物で満点取りやがったからなあ。俺も90点台は叩き出したんだけどシクツチまってな。それがあっちの決勝点って感じなんだけどなあ。」

「ところで、お前合計何点取ったんだよ。」

「えっ。俺が474点で、永島^{ながしま}が475点だったけど。」

「はっ。おめえら最強じゃん。」

「まあ、今回は内容が中学からの布石で簡単だったというところもあるけどな。」

「お前らその学力でなんでここに来たんだよ。」

「永島^{ながしま}は鉄研やりたいから。俺は併願校落ちたから。」

「マジかよ。俺あんなバカっぽい奴に負けたのかよ。」

「気落^{すくも}とすなって。俺もこの頃勝ててねえんだよ。」

「宿毛^{すくも}に勝てないってもう無理じゃん。俺勝ってこないじゃん。」
「あきらめんなって。俺もいつかは抜いてやろうって思ってたんだ。あいつ1番嫌いだから。そうしてやれば、永島^{ながしま}のほうは満足してくれるんだけどね。」

「だったそれだけ。」

「だって。そうしなきゃ永島ながしまがうるさいんだよ。」

「永島ながしまってホントよくわかんねえな。」

「・・・。」

その話を耳で受けながら、掃除を終わらせると家に帰った。

17列車 中間テスト（後書き）

こういう人いたらウザいですね。

またこれって案外敬遠されがちなんでしょうか。

登場人物のほとんどが鉄道に興味があること以外はふつうだと思えますが・・・やっぱその知識量が掘り込みすぎてますかねえ・・・。

話は変わりますが、感想は受け付けておりますので・・・感想がありましたらどうぞお書きください。そうしていただけると嬉しいです。

18列車 模型選び

テストが終了すると部活は再スタート。これから文化祭までピッチを上げる。6月に入ると衣替えで、男子も女子もポロシャツに夏のズボン・スカートに替わる。6月初頭。僕達のモジュールが完成。ここまでくれば何をする事がない。

「名寄君。なよろくん文化祭で使う車両を決めたいんだけど。」

「分かりました。」

すると、

「永島。ながしま車両庫行くけど、一緒に行かない。」

「行きます、行きます。」

ナヨロン先輩についてまた岸川寮に赴いた。

岸川寮に入って階段を上がって右にかじをきると右側に5枚扉が現れる。ここには分けて鉄道研究部のものが詰まっている。

「とりあえず説明しとくけど、相談室4には展示で使うときのモジュールとかが入ってて、自習室1が車両庫。自習室2と3がモジュール保管庫。自習室4はどうでもいいもんが入ってる。」

そう説明してくれた。

アド先生が自習室1の鍵を開けて、ナヨロン先輩と僕が続けて入った。

「名寄君。なよろ6時間で4周回だから・・・。」

「10分に1回交代が1時間で6回。6時間で36回。それが4つで144回。それだけ選べばいいんでしょ。」

「そうです。」

「じゃあ、適当にやるときますから任せてください。」

それを聞いてアド先生は他の部屋に言った。

「あいう。ナヨロン先輩。ここにあるものって全部アド先生のなんですか。」

「ああ、だいたいな。時折OBが寄贈した奴があるだけ。」

「あつ、223系とか「サンダーバード」とかいろいろある・・・」

「自分が走らせたいやつなんでも入れていいよ。でも時折・・・」
「それじゃあ223系と「サンダーバード」と「253系」^{ネックス}と100系。」

「ああ、ごめん。言ってなかった。走らせたいって言っても新幹線^{しんかんせん}はなしだ。新幹線^{しんかんせん}が在来線^{ざいらいせん}走ることになるからな。」

「でも、E3（イスリー）系とか400系はありってことでるよね。」

「確かに。そういう言い方するとそうなっちゃうな。・・・入れたいのか。」

「はい。」

「分かったよ。じゃあ2本はエントリーでいいな。」

それからというものの僕は2段ベッドの下を占領している箱の中から走らせたい車両を引き抜きまくった。キハ283系「特急スーパ1おおぞら」。485系3000番台「特急はつかり」。E351系「特急スーパあずさ」。383系「特急しなの」。373系「特急東海」^{とつかい}、「快速ムーンライトながら」。683系「特急しらさぎ」。787系「特急つばめ」。代表的なものはだいたい入れた。だが144も車両を選ぶとどうしてもネタが尽き気味になる。3年もこの部活にいるナヨロン先輩でも困るくらいだ。

「そうだな。今回は313系^{サンイチサン}の0番と211系^{ニイチイチ}の5000番つなげて中央線^{ちゅうおうせん}の快速やるっていうのもいいな。」

「ナヨロン先輩。去年の文化祭きて思いましたけど、313系に211系を連結した運用ってあるんですか。」

「あるよ。歓迎旅行の時にも乗っただろ。御殿場線^{ごでんばせん}の列車。後ろは211系^{ニイチイチ}だったけど前は313系^{サンイチサン}の3000番だったじゃないか。」

「あもう、そんなこと言われても分かんないんですけど。」

「だよなあ。313系^{サンイチサン}ってややこしいからな。」

ため息をついて説明し始める。

「まず0番台が東海道線の快速で4両編成だろ。300番台がその2両編成バージョン。1000番台は0番台の中央線バージョン。1100番台はそれのLEDバージョンで、1500番台が1000番台の3両編成バージョン。2300番台は2両編成でダブパン装備準備車。3000番台はダブパンの2両編成。2500番台はここの辺の3両編成で5000番台が6両固定の快速用。8000番台は中央線のセントラルライナー用ってな感じだからな。まだいっぱいあるけど。」

「えっ。313系ってそんなに番台あるんですか。」

「ああ。でもこれなんか西日本の223系に似てるんだよな。」

「223系だったら分かります。0番台と2500番台が関空快速用で1000番台と2000番台が東海道線の新快速用。」

「あと6000番台のダブパン車が地下鉄東西線に乗り入れることができて、ワンパンのやつは221系との共通運用。5000番台は「快速マリンライナー」で5500番台が霜取りようにダブパンになった2両編成ってな。」

「あつ、223系の中にも知らないのがある。」

「永島なら知ってると思っただけだなあ。知らないんだ。この部活に入ってればいやでも詳しくなる。」

話しながら車両を選ぶ。

「そうだ。永島。貨物列車だったらどれがいい。2軸貨車だけの古き良き国鉄貨物か、コキ5000形だけの旧高速貨物か、コキ100系だけのJRFの高速貨物か。もしくは鮮魚特急っていう「とびうお」か、タキ1000のタンク貨物列車か。」

「別に何がいいっていうやつはないですけど……。つうかそれだったら家にもあります。」

それを聞くとナヨロン先輩は何か思い出したようだった。

「あつ。そうだった。これ聞いてなかった。お前文化祭当日何持ってくる気。」

「えっ。考えてるのは「カシオペア」と「北斗星」と「トワイライ

トエクスプレス」と「出雲^{いずも}」と「瀬戸^{せと}」……」

「寝台特急^{フルトレ}のほとんどな。」

「あとは「雷鳥^{らいちょう}」と「しらさぎ」ぐらいかな。」

ナヨロン先輩はしばらく考えてから、

「なら。「出雲^{いずも}」はDD51（デデゴイチ）の重連で持ってきてくれない。あと他に「カシオペア」や「北斗星^{ほくとせい}」の牽引機^{けんいんき}はなにが来る予定になってる。」

「「カシオペア」はEF510の北斗星色^{ほくとせいしよく}で、「北斗星^{ほくとせい}」はEF81の予定ですけど。」

「EF510（アオカマ）とEF81（ホシカマ）かあ。分かった。それで「雷鳥」っていうのはパノラマグリーン。それとも非貫通グリーン。」

「それって何か重要ですか。」

「いや、自分の中にあるイメージを膨らませてるだけ。永島^{ながしま}だったら分かるだろ。模型は想像だって。」

「はい。何となく。……パノラマグリーンですけど。」

「はい、了解。……「ネックス」のさあ253系の12両編成持ってる。」

「できるにはできますけど。」

「じゃあそれも頼む。で持ってくる寝台特急は「カシオペア」、^{ほくとせい}「北斗星」、^{フルトレ}「トワイライトエクスプレス」、^{フルトレ}「出雲」、あとは九州特急の何か自分が好きなの……って言って分かんないか。「あさかぜ」とか東京から、大阪から九州に言ってた寝台特急^{フルトレ}のことこういうんだよ。それだけでいい。できれば、牽引機は全区間エントリーが望ましいけどな。」

「はい、分かりました。」

「大体こんなところかな……。これじゃあサヤ達のほう^{ながしま}考えてなかったな。自分達のほうはこれで終わりでいいか。よし永島。サヤ達のほうも考えるぞ。」

他に残っていて有名な車両や特急は883系「特急ソニック」。

小田急のHiSE、LSE。2000系「特急南風」。キハ85「特急ひだ」。781系「特急ライラック」など。

「かわいそうだから221系でも入れといてやるか。あとE259系もこっち。225系もこっち。」

「こっちにも「北斗星」入れときましようか。あとは「カシオペア」も。」

「そいつら牽引するEF510（カシカマ）とEF510（アオカマ）が「いやだ、いやだ。」っていつてるぜ。」

「なんですかそれ・・・。」

「まあそれは冗談だけど。これも入れてやれEF210（モモカマ）。」

「いや、ナヨロン先輩ここはEF200のほうがいいですよ。」

「EF200（ハイカマ）。そいつやめとけ。スカイダイブ経験6回の強豪だから。」

「ともかくそれどういう意味ですか。」

「今は知らなくていい。そのうち分かる。」

そんなこと話しているうちにこちらもほとんどナヨロン先輩が決めてしまった。ここにはずっと所属していたから何がどうなっているのか分かっているのだろうか。それともただ自分の好みで選んだのか。

その日の帰りの列車。小楠に停車した時だった。

「あれ、ナガシィ。」

振り向くと萌の姿があった。同じ方面に通っているのだが、こうしてあったのは久しぶりだ。

「よーす。久しぶり。」

「なあ、萌。あたし邪魔見たいだからどっかいってるか。」

萌の隣の人が聞いた。

「別にいいよ。ここにいても。」

「お前が小楠くるって珍しいな。」

「今日は友達とこっちに来ただけだから。」

「へえ。」

「そうだ。ナガシイ。そっち文化祭っていつある。」

「確か、・・・何日だっけ。」

「そういうと思ったよ。ナガシイそういうこと気にしてないもんね。6月13日でしょ。」

「ああ、確かそう。」

「見に行くからよろしく。家から何か持ってくるの。」

「「カシオペア」とか「北斗星^{ほくとせい}」とか。まあいろいろ持ってくるよ。」

「じゃあ、貨物も持ってくるわけ。」

「貨物は持ってかない。学校にあるみたいだから。」

「そう。じゃあ26両はやらないんだ。」

外を浜松方面に向かう列車が通り過ぎる。

「何系。1000系。それとも2000系。」

「パンタ見えないから分かんねえよ。多分普通だから1000系だろうな。」

「でも、1000系も2000系も関係なしに普通とか急行に使ってるよね。」

「確かに。最初から運用が分かっていたらこうやって苦労することもないんだろうけどな。」

「ハハ。・・・部活楽しい。」

「うん。先輩達はみんなハイテンションだし、1年生は多いし中学生から入部があったくらいで。」

「へえ、多いんだ。その中に女子とかいる。」

「いるよ。同じ学年の中に隠してなければお前と似てる人もいるんだけどなあ。」

「・・・。」

このとき会話を聞いていた友達。黒崎^{くろさき}には端岡^{はしおか}が言った言葉が再生されていた。

（あのことって本当だったんだな。電車の話してる時のほうが生き生きしてるって。）

「へえ、そうか。かくしてなければ私と同じね。中に入るんだね。そういう人。」

「まあ、女子ならそういうところは意識しちゃう人もいるだろうな。」

「・・・。なんでそんな話すんのよ。暗くなるじゃん。」

「ああ、そうだな。じゃあなんか別な話でもするか。でも、何話す。」

「ナガシイ、2日に熱海行ってきたって言ってたじゃん。その時の話でもいいじゃん。」

「ああ、そんな時の話かあ。いいよ。」

話している間に芝本に到着。萌は小楠おぐすから乗ってきた友達と別れて、僕と帰路に就いた。

「文化祭に持ってくのは去年と同じで身分証でいいんだよねえ。」

「ああ。多分それだけでいい。」

「それじゃ6月13日見に行くから。」

そう言って萌と別れた。

18列車 模型選び（後書き）

今回は会話がマニアックすぎてごめんなさい。

この先も時折このような列車が出てくるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

19列車 運び屋

6月8日。岸川寮に集合。

「おーい、諸君。運ぶぞー。やれーっ。」

サヤ先輩がみんなに指示を出した。するとまずアヤケン先輩が動いて、

「はーっ。」

相談室4から裏声。するとアヤケン先輩はとても大きく口を開けた木の箱を持って相談室4から出てきた。

「おめえらもやれー。」

アヤケン先輩に促されて僕達も相談室4に入る。相談室4にはさっきアヤケン先輩が運んで行ったのと同じ箱が5つ。1年生は2人ずつでこの箱を運び出す。だが、必ずと言っていいほどドアから出るときに問題になるのだ。箱を長いほうのままドアを抜けようとする^{つか}と問える幅。縦に持つと今度は自分達が問える。でも何とか抜けることができる。抜け出したら階段を下って寮の玄関まで輸送する。これをこの後何度も繰り返す。2階に戻ると今度は大きな箱の代わりに衣装ケース。部活では白い箱で通じている。これには引き出しの代わりにモジュールが入っている。それを2・3年生は2段。もしくは3段。1年生は1個ずつ運んでいく。

しばらく同じ動作を繰り返していたが、モジュールを乗せる岸川のハイエースの荷台が満タンになったため、まずこれを学校に運んでいくことになった。

「えーと。一人乗ってください。」

先輩達は行きだそうとしない。むこうで何があるか分かっているのだ。

「えーい。全員右手を上げろ。」

何が始まるのか・・・。

「最初はグー、ジャンケン、ポン。」

何が始まるのかと思えば、ジャンケンかよ。

「はい、ハクタカ行ってらっしゃい。」

「マジかよ。」

「じゃあ北斎院君。きたさやくん上にしまつてあるモジュール全部出してください。」

「へーい。」

ハイエースが寮から出ていったところで、僕達は2階に戻ってさつきから出している白いケースを下に運んでくる。玄関には白いケースが7段くらいになった山が2個くらい。

「おーい。こんなに積むんじゃないよ。」

アヤケン先輩が注意する。

「アヤケンその持つてる奴また上にのつけようぜ。」

「やるなつうの。」

「おっ、ナガシイいい所に来た。乗せろーっ。」

言われるがままに乗せる。

「バカ。下ろせ。もう乗せるな。」

「アケ先輩注意もいいですけど、運んでくださいね。」

しばらくすると第2陣でハイエースが戻ってくる。またハイエースが満タンになると第3陣に持ち越し、第3陣が来ると運び出したものはすべて乗りきった。荷物が全部乗ると僕達は歩いてホールのところまで向かう。

鉄道研究部が展示を行うホールは僕達1年生が授業を受けている南棟ではなく北棟というところにある。ここの1階なのだ。

ホールの北側には第1陣で連れてかれたハクタカ先輩と第2陣で連れてかれた楠先輩が運び入れたものが詰まっている。僕達は第3陣が到着するまで待っている。待つこと数分。第3陣のハイエースが到着。後ろから荷物を降ろして、いっしょに運んできた車両も運び出した。

今日の部活はここで終了。これからの1週間はずっと文化祭の準備である。

翌日6月9日。今日部活動はない。6月10日。今日から本格始動。

「まずは作ったモジュールを運びこんでください。」

アド先生の指示で部室にある作ったモジュールを運びこむ。運びこんだら8日に運び入れたところにまず入れる。

「ええ、次は・・・。名寄君。^{なよろ}1年生ひきつれて特教6の机をここに運んで来てくれる。あと事務室に頼んで昇降口下の長机も出して。」

「分かりました。おーい1年生と中学生行くぞ。」

まずはアド先生に言われた長机から。ナヨロン先輩曰くめんどくさいらしい。その長机を運び出すと佐久間^{ひくま}がこういうことをやった。

「永島。^{ながしま}バズーカ隊用意。ズドーン。」

「おいおい。」

それをホールに運び込む。軽いには軽いのだが、何回も往復すると手が痛くなる。3往復目で長机がなくなる。次は南棟1階の一番東の部屋特別教室6から机を運び出す。ここには2段重ねで学習机がぎっしりと埋まっている。

「うわあ。ゴミっていうけにあるなあ。」

「ゴミかよ。」

「とりあえずこれ運んで。一人2つずつでいけるだろ。・・・よし、行けーっ。」

今度は学習机を抱えて何往復。もう何回行ったり来たりしたかなんて数えてられない。ふつうなら軽い机でもずっしりと重く感じられた。

学習机が必要数に達すると次はモジュールが並ぶように机を並べていく。一つはホールにある長机とさっき運び出した長机で収まる。もう一つは学習机が長机の代わりになる。

「永島。^{ながしま}その机こっちに持ってきて。」

「アヤケン先輩。これはどっちに持ってたら。」

「木ノ本。^{きののもと}まだモジュールはいい。・・・ああ。あとそのゴミ落と

してもいいから。」

「ハクタカ。これ中にいれるから受け取って。」

「んっ。バカ。箱ごと中にいれようとするな。」

「ナヨロン。部誌間に合いそう。」

「サヤのバカ。なんで進めとかないんだよ。」

「おーい、ナガシィ。この・・・アヤケンこれなんだったつけ。」

「えっ。ああ、ゴミ2号だよ。」

「このゴミ2号をむこうのほうに運んどいて。そんでもってサメちゃん。このアヤケンのゴミ3号はあっちに運んどいて。」

「あっ。アド先生。313系の5000番台のギアボックスください。」

「ナヨロン裏切るなー。」

「絢乃。フィーターこの向きでここにいれといて。」

「はいはい。」

「こっち一般人通行不可ね。」

「なんですか。そのハルヒ的な。」

「あっ、そうだサヤ。今年はみんなでコスプレする。」

「いいよ。コスプレなんかなくても。まあ帽子だけはかぶりたいけどな。」

「じゃあナヨロンは全身ね。あとは帽子だけでいいか。」

「勝手に決めんなよ。」

「大丈夫。あれ着て似合いそうなのは1年生の中にもいるし。それにナヨロンが着るとなんか渋くなるんだよね。SL好きっていうのがその渋さを後押ししてる感じで。」

「どういうやつじゃ。それ。」

「ねえちよつと1年生集まって。」

善知鳥先輩うしろに言われて、ひとまずサヤ先輩達のところ集合する。

「ねえ、みんな乗務員が着てる服、着てみたいって思わない。」

ちよつと考えるところがある。なおこの問いについては醒さめヶ井が いと箕み島しまはヤダ。木ノ本きのもと、僕いさはや、諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかせは帽子だけならと回答。

「でも、一つだけ問題があるんだよねえ。今回は帽子だけっていてもこの数ないんだよね。去年作ったから8人分しかなくて。」

「善知鳥うとうもよくやるよなあ。」

「逆を言うと家庭以外ダメダメだからなんだけどなあ。」

「それは今関係ないだろ。でも何人でかぶるかなあ。女子のやつはあたしのアヤノンの分しかないし・・・、男子のやつは6人分しかないもんな。うーん。よし。あたしの独壇場で決めよう。えーとサヤはかぶるでしょ。アヤケンとは外回りってことが多いからいいでしょ。ナヨロンは向こうの内勤だからかぶって、ハクタカもかぶる。あとはナガシイかな。でもあと一人余ってるなあ。・・・じゃあ残りはサメちゃんでもいいか。」

「ここまで考える頭があるんだったらもうちょっと進路のこと深く考えろよ。」

「うるさいなあ。いいだろ。で、あとは女子のほうか。ハルナンがかぶりたいって言ったから・・・。アヤノン別にかぶらなくてもいいよねえ。」

「はい。」

「うーん・・・。やっぱりかぶせよう。」

「や・・・やめてください。あれかぶってるとなんか冷やかされそうで。」

「よし。かぶせよう。」

「嫌です。」

この時今まで部誌に取りかかっていたサヤ先輩が何かに気付いた。

「お前ら何やってんだよ。ちゃんと仕事しろ。」

「おいおい。それ今気付いたのかよ。」

「サヤ。本当に眼科か精神科医に行ったら。ヤバイよ。」

「眼科か精神科医に行くのはナヨロンだろ。この知識量と今更教師になりたいっていうこの頭どうにかし・・・。」
ポカッ。

「黙ってやれよ。」

「はい。すみません。」

今日はホール入り口手前に凹おウの集会を完成させるところまで進んだところで解散。この次は次の日にまわる。

6月11日。今日は真ん中に設置する大周会の二つ目。この周回は長方形で組成させる。

「ナガシイ。この「綾瀬車両区」あやせしやりようくをむこうに運んで。」

ここで呼ばれた「綾瀬車両区」あやせしやりようくとはモジュールに付けられたタイトルらしい。

「で、ハルナンはこっちの「青木海岸」おおぎかいがんを運んでって。それで、ミッシイは「青木海岸」おおぎかいがんの片割れ運んで、サメちゃんはそこの「ピザ」お願い。」

ちなみに「ピザ」とは45cmセンチ四方のコーナーのことである。

「あもう、善知鳥先輩。このコーナー……。」

「コーナーじゃないって言ったでしょ。「ピザ」よ「ピザ」。どこでもいいから運んどいて。」

本人はどうしてもコーナーのことを「ピザ」と呼びたいらしい。

「それで、……ハクタカ。お前の作った「鷹電」たかでんのやつってどこにある。」

「それだったらもう使いましたけど。」

「ここに1枚余ってんだけど。」

「善知鳥先輩バカですか。それは「鷹電」たかでんじゃなくて「貨物駅」かもつえきですよ。目玉あんののか。」

「ナガシイごめんね。ちよつとハクタカ待てー。」

「まったく。子供かよ。永島」ながしま。この「貨物駅」かもつえき持ってって。セツティングは俺がやるから、仮置きだけでいいよ。」

とまあごたごたがありながらも何とか完成。ここで今日の活動も終了。続きは6月12日に持ち越しである。

19列車 運び屋（後書き）

気づいたら文字数がえらいことに・・・。

このままいったら最終回までに文字数と読了時間が・・・。
自分でもこれはすごいと感心します。

あと展開が遅くてすみません。

それでも読んでくれる人には感謝です。

これから根性で続けていきたいと思えます。

20列車 文化祭前日

6月12日。いつものように朝学校に登校する。

「はあ。ながしま永島いいよなあ。部活でクラス展の準備逃げられるんだから。」

「何。逃げたかったらお前も鉄研とかに入ればよかったのに。」

「いや。俺はもう部活には入る気なかったからな。こういう時に限ってそういうのが裏目に出るとは。」

「そういえば、俺たちのクラスってどんなクラス展やるの。」

「お前ホームルームの時に言ってたやつすぐに忘れてんだな。そこまではつきりした頭だったら俺も持きたいよ。・・・お菓子みたいな作って売るんだって。」

「へえ。」

「でも、永島ながしまの場合は来れないの前に来たくないだよなあ。クラス展より部展のほうが楽しいだろうから。」

「まあ、確かに。」

「ならこっちから見に行くか。その時は差し入れ持ってってやるよ。」

「気持ちだけにしてくれ。」

「分かった、分かった。気持ちだけってことで投票は鉄研部に入れとくからな。」

「えっ、何。投票って。」

「本当にはつきりした頭だな。何も聞いてない。ある意味感心するよ。」

「いやあ、それほどでも。」

「ほめてないってこと分かってるよねえ・・・。」

「そりゃ当然。」

8時30分。普段通り点呼。9時00分。文化祭準備開始。部活としての集合は10時00分。それまでの間クラス展の準備をほん

の少しだけ手伝う。9時55分。南棟3階の部屋から目の前の階段を使ってホールに赴く。ホールにはもうすでに部隊は終結済み。僕達が最後に集まった。

昨日とおとといで模型を走らせる周回は完成している。今日やるのはこれから設置するプラレールの展示と周回に電気を流すための配線作業をすることだ。

「おい1年生。むこうの武道場とかつていうところからベニヤ板持ってきて。」

サヤ先輩の命令でまずはベニヤ板。それを持ってくると次は学習机を等間隔で並べその上にベニヤ板をかぶせ、シートをさらにかぶせる。だが、このシートをかぶせる作業が以外と疲れる。

「ねえ、善知鳥先輩。ここ机ありますか。」

今机の上に乗っているが、足を降ろすところを間違えば机に頭を打つ。

「大丈夫。そこにはあるよ。」

善知鳥先輩が机の下に入って上にいる僕に安全だと信号を送る。それが終わったところでゆっくり足を降ろす。下の地盤がかたい。机の上だ。端まで来て、飛び降りる。もちろん端まで机があるわけではないので、ここも踏み外したら机に頭を打つ。とりあえず何の事故もなく完了。

次はOBが持っているというプラレールを設計図通りに敷設すること。設計図にはレールに当たるところが線で示されており分かりやすい。そしてその線に少し交差するように書かれているのは継ぎ目のことだという。

「とりあえずやるかあ。青木おおぎさんもここもうちよつと詳しく書いてくれれば分かりやすいんだけどなあ。」

「まあそれでもやるしかないだろ。今日は青木先輩おおぎ手伝いに来れないんだから。」

「んじゃあ。ナガシイ。このレール類とかくつなげまくって。直線レール5本。」

プラレールは鉄道ファンたる者全員が通る道。いつもの手つきでレールを繋げていく。一方その時サヤ先輩達はプラレールをガンガン繋げていく。だんだん形ができてきて真ん中あたりに橋脚を10個くらい積み上げたタワーが完成した。

「おーい、サヤ。そっちから何人か引き抜いていい。」

「ああ、いいよ。」

「永島^{ながしま}、箕島^{みしま}。ちょっとこっち来て。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹^{おウ}の周回にやってくる。

「これから配線ってやるんだけどさあ。それやってくれない。そんなでやって覚えろ。以上。」

「あの。名寄^{なよろ}先輩。それじゃよく解んないですよ。」

「さすがにいい加減すぎたかな。」

と言って床に置いてある黒い箱を手にとって僕達に見せた。そこには青と白のコードの先端に端子が1個ずつついているコードとつける端子が3つついているコードの2種類が入っている。またそのコードの中には赤と黒だったり茶色と白だったりと色にバリエーションがあった。

「これをフィードってところにつないで、コントローラーのあるところまでつなげる。永島^{ながしま}だったら分かるよなあ。」

「ああ、まあ。」

「それで繋げる時にやっちゃいけないのは内回りと外回りをごっちゃに結線すること。そうしたらどっちかが逆走することになるからな。そこだけ気をつけてやれ。」

これだけ支持された。ようはつなげばいいのだ。

フィードーというのはだいたいどういう恰好をしているかというところパターンあると言っている。まず一つ目は線路にコードの端をくっつけているタイプ。二つ目は線路に電気を流せるようになってる専用の線路にくっつけるタイプ。あともう一つは線路の特定の場所に差し込んでくださいというタイプ。学校にあるのは2番目にいったタイプ。このタイプのフィードーはこの周回の中に4カ所。

コントローラーの位置からは柱の陰になってしまう部分。その次は一つ目のフィーダーのあるコーナーの反対側のコーナー。三つ目は二つ目のフィーダーがある一の反対側のコーナー。ここがコントローラーから一番近い位置にある。そして四つ目のフィーダーは三つ目のフィーダーの反対側のコーナーに設置してある。ここからさつきナヨン先輩が見せてくれたコードをバンバンつないでコントローラーに結線した。

結線が終了したら次は電気が流れるかどうかのテスト。前にナヨン先輩と選んだ中からEF210を取り出して外回りの線路に乗せる。アド先生曰く機関車とマイクロエース製の車両が滞りなく走れば問題ないそうだ。

コントローラーの電源投入。ディレクションスイッチを前進に置いてコントローラーのつまみをまわした。だが、EF210はピクリとも動かない。ライトもついていない。

「どうしたんだよ。こいつ。」

「あつ。ながしま永島。そいつはゴミだ。モーターがいかれてるから。EF510（レトサン）にして。」

「あつ、はい。」

EF210を線路から外し、ナヨン先輩が持ってきたEF510を線路に乗せる。気を取りなおして、再び電源投入。するとEF510は少しピクッと後ろに動いた。このままでは逆走になる。ディレクションを前進から後退にしてまたつまみをまわす。今度はちょっと前に進んですぐに滑り出した。コントローラーから離れて少しの間EF510の走っている姿に見入る。家でいつも見ている光景と分かっていても飽きない。

とりあえず何の滞りもなく一周。次はマイクロエースの箱を探してその車両を走らせる。とりあえず手に取ったのは783系という九州の特急車両。それを外回りに並べて同じ動作を行った。すると少しばかり突っかかってしまうところがある。そこを木の板で修復しながら、783系を何周かさせる。その間に問題も解消。次は貨

物列車などの編成もの。これが途中で連結を解除しなければ完了。なのだが、毎回どこかで貨物列車は開放すると言ったので、これに完璧を求めることはできないようだ。

とりあえず貨物列車も何の滞りもなく1周。これで電気系統は完了だ。

この時にはプラレールのほうも50%がたで完了している。ふと時計を見ると12時13分となっていた。昼ごはんの時間だ。昼ご飯には持ってきた弁当。食べるのが面倒くさいと思いながら、流しこんで13時05分作業再開。午後はプラレールの準備。遊びながらやっていたため15時ちょっと前に作業を完了。次は、体験運転のコーナ―の設置である。

「諸君集まれ。」

善知鳥先輩が全員を衣装ケースが積まれている前あたりに集めた。

「これから体験運転のやつを組み立てるんだけど、時間ないから全員でやろう。」

「だから、あれさっさと片付けとけて言ったのに。」

「さっさとっていう前に青木さんいなかったからどう組み立てていかかわかんなかったじゃん。」

「てめえら、時間がないならはじめようぜ。そんなところで時間くってるなよ。」

アヤケン先輩が話に歯止めをかけて、全員に複線の高架レールを手渡した。

「まずはそのレールつなげ。」

全員に行きわたったのを確認して指示を出した。

「あっ、待った。まだダメじゃん。おい、善知鳥。白い子ない。白い子。」

「えっ、白い子。」

「ほら、アヤケン。白い子。」

「サンキュー。」

ナヨロン先輩から渡された箱の中には横2cm^{センチ}くらいしかない直方

体の白い物体がたくさん入っていた。アヤケン先輩はその1個を取り出して、

「まず、この白い子を高架レールの下の子の部分に取り付ける。2個くらい取り付けて、取り付け終わったらほかの高架レールをつなげる。これやって。後、下についてる突起下になるように取り付けなきゃダメだぞ。でないと、あーってなるから。」

「あーってどうなるんですか。」

「深入りしないでいいから、まずはやれ。」

さっき言われた動作を行って高架の直線レールをつなげていく。それを10何人でやると20本くらいの束が一気にできる。

「全員で直線レール量産してんじゃねえよ。こんなにならないって。」

そのことに気付いたアヤケン先輩が量産を止める。

「カーブレールだれかやれよ。カーブしない体験運転所作ってどうすんだよ。運転面倒になるだけじゃないか。」

「あたしそんなこと知りませーん。」

「知っとけ。」

「アヤケン先輩これどうするんですか。」

「多分6ペアぐらい、12本は使うかなあ。その束ねたやつをもう一度束ねて、4本にしたやつを俺にパスして。そのあとはどうにでもなるから。おい、善知鳥うっとう。橋脚のやつどこにあるかわかる。」

「橋脚ってあのラーメンみたいなやつか。」

「そう。食えるラーメンのやつ。それどこ。」

「お前の足元にあるだろが。」

「あっ、あった。ごめん。」

「アヤケン先輩。言ったとおりにやりましたよ。」

「あっ、サンキュー。うわっ、バカたれ。マガンなボケ。」

それを受け取ったら、新幹線しんかんせんのよく見る橋脚を3つ取り出し、線路の継ぎ目に取り付けてる。「カチャ」という音を立てて、何かがはまる。1個取り付ける作業が完了したみたいで、アヤケン先輩がそ

の位置から手を放した。すると橋脚は継ぎ目のところに礼儀正しくはまっている。さっきの音はこれがはまる音だったらしい。他の2か所も同じ作業で、はめ終わると、体験運転コーナーになるところの一番奥に置いた。

僕たちもただ見ているわけではない。僕は箕島^{みしま}が4本にした高架レールを受け取って同じように橋脚を取り付ける作業を行った。

「アヤケン先輩。他のもやっておきますか。」

「いや、これはもういいよ。ていうか、そっちに駅作ってくんない。」

「何駅がいい。綾瀬^{あやせ}駅とかでいい。」

「何でもいいけど、綾瀬^{あやせ}駅はやめて。出来ればサヤ駅とかのほうがいいんじゃない。」

「それ関係ないだろ。はあ。木ノ本^{きのもと}。多分その箱の中に駅舎の建物があると思うから、それとって。」

サヤ先輩が指差した箱の中を探してみる。すると汚れた白い駅が出てきた。その看板には「新大阪」と書かれている。どこをモチーフにしているかはすぐ分かるが、本物とは似ても似つかない。

「ありました。」

「サンキュー。後、そん中に白いプレートみたいなのがいっぱいあると思うからそれもとって。それに空いてる溝の部分にさっきの白い子を逆向きで入れて、ほかのプレートとドッキングさせる。それやって。」

サヤ先輩に促されて作業を開始。プレート同士をさっきのレールと同じ要領で取り付け、ほかのプレートを取り付けていく。それが4枚くらいになったところで善知鳥^{うと}先輩に手渡し、そのプレートをさつき掘り出してきた駅舎の上に設置した。さらにその上にレールとホームを設置。1面2線の島式ホームが現れた。

「よし、こっちは終了・・・。」

すかさずナヨロン先輩がツッコんだ。

「なわけないだろ。駅舎を境にして両方に垂れ下がってる高架駅が

どこにあるって言うんだよ。」

「狭い日本でも、そういうところくらいあるよ。」

「あるかもしれないけど、これはないだろ。駅舎過ぎたらすぐに地面まで下がるのかよ。実物にしても40メートルくらいしかないぞ。」

「なあ、善知鳥^{うとろ}。ボケるのもいい加減にしようぜ。こんな駅ないことには変わりないんだからさあ。」

この駅舎から急速落下するプレートの下に橋脚を設置して、垂れ下がりをなくす。これで、さっきからアヤケン先輩がつなげていた高架橋と連結。1周する体験運転コーナーが完成。すぐに配線がなされ、カーブの下にあるライダー専用取付口に高架線用のライダーを取り付け、コントローラーと結線。E1（イーワン）系新幹線^{しんかんせん}「MAX^{マックス}」と800系新幹線^{しんかんせん}「つばめ」をそれぞれ3両ずつおいて、電気が通ることを確認。両方ともスムーズに走ったため走行テストも完了した。そして、なんとか前夜祭に間に合わせた。

20列車 文化祭前日（後書き）

話を作っていくとだんだんキャラクターに個性が・・・。
自分にはもうちょっと文才と考える能力が必要だと感じます。

なお次の話でも文化祭前のことなので・・・。
本当に展開が遅くてすみません。この状態だと8月のイベントまで行くのにいったい何日かかるんだか・・・。

21列車 前夜祭

前夜祭。

「1年生諸君集まれ。これから系の運転訓練やるぞ。」

運転訓練とは文字通りのことをする。なんが必要があるのだろうか。
「注意事項は急発進、急停車しない。脱線したらすぐに列車を止める。の二つよ。」

「善知鳥が言えることか。」

「だから、2人ずつ来てまずナガシイとハルナン。次がミツシイとユウタン。次がサメちゃんとイサタン。最後がアサタンとソラタンだよ。」

凹の周回に入ってコントローラーのつまみを握る。線路上に置かれた車両はJR東海の車両311系と313系だ。つまみをゆっくり回すと311系のモーター車（3号車 モハ310形）だけがむなしく動き出した。

「列車は知らせてる時はもれなくマックスにしているから・・・。」
ポカッ。

「しちやダメだぞ。まあどうしてもこいつゴミだってゆう模型があったらやっていいけどな。」

三つ目の注意を受けて1周。1周したら訓練生交代。箕島に代わって運転訓練終了。

1年生全員の運転訓練が終了すると前夜祭に入る。その前に先輩達が配置を決める。

「ナヨロン。そっち何人必要。」

「明日青木さんも来るっていうからこっちは後2人くらいでいいよ。」

「じゃあ、そっちにミツシイとナガシイでいいでしょ。でハルナンがこっちの内勤で、中学生は新幹線の体験運転でしょ。あとは外回りでもいいでしょ。」

「それでいいな。」

「永島^{ながしま}。箕島^{みしま}。ちょっとこっち入って。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹^{おウ}の周回に入る。

「えーと、次はここにある車両どれでもいいからこの線路上に並べて。」

「リレーラーとか無いんですか。」

「あるにはあるんだけどねあれ青木^{あおき}さんの私物だとかって明日手伝いに来る人がいうもんで、基本使わないほうがいい。」

「なんですかそれ。」

「気にしないでいいよ。ともかくリレーラー使わずに線路上に早く乗せられればいい。」

僕は223系を探して内回りに、箕島^{みしま}は何でもよかったらしく373系を手にとって外回りに置き始めた。これはなれないと少し難しい。特に機関車などの車輪の多い模型はすぐには言うことを聞いてくれない。僕はいつも家でやっている手つきで次々と車両を整列させていったが、箕島^{みしま}のほうはそうではないようだ。車両の高さに視線をおとして両手で丁寧^{ていねい}に並べている。箕島^{みしま}が373系3両をレール上に設置し終わるとき、僕は223系8両のうち6両（3号車サハ223形）を置き終わり7両目（2号車モハ223形）に取りかかっている時。作業スピードが浮き彫りになる。10秒後ぐらいに作業を完了した。

「終わりました。」

「やっぱりやってる人は違うなあ。」

ナヨロン先輩独り言のように呟いてから、

「永島^{ながしま}。明日223系も持ってこれる。」

「別に必要なら何両でも持ってきてますけど。」

「さすがだな。」

「おーい、諸君。」

善知鳥^{うぐいす}先輩がみんなを読んだ。

「これから、これでレールを磨いてもらう。」

善知鳥先輩うとつが持っていたのは右手に綿棒、左手に「UNICLER」^{うにから}と書かれたボトルだった。これでやる作業は大体見当がつく。

「このレールクリーナーで線路を磨け。」

そう言っていた。

「さて、やるか。」

「正直これ面倒なんだよなあ。」

「何。永島家ながしまに模型でもあるのか。」

「ああ、じいちゃんが作ったこれの10倍くらいあるやつがな。」
「・・・。」

思わず顔が引きつった。

（さすが、永島家ながしま。それを作ったっていうと永島宗一氏ながしまそういちか・・・。
なんつう社長だよ。暇人なんだか。）

「へえ。根っからの鉄道好きなんだな。」

「ああ。でも・・・、この構図こうずってちょっとやりづらいところもあるかも。」

やってみると案の定そういうところが出てきた。例えば凹の周回になっているほうでは駅構内。この駅の屋根は線路側に大きくせり出している。つまり綿棒が入り込める隙間が小さいく綿棒の頭も小さいため、レールと接地しにくいのだ。

「ナヨロン先輩、もうちょっと便利なやつってないんですか。TOXトックスのクリーングングカーとか。」

「んな便利なもののこの部活にあるけど、持ってきてない。時折、そこだけにレールクリーナーぶちまけるだけっていうのがあるから。」

「最低なクリーニングカーですね。」

「永島ながしま。その言い方はちよつと違うぞ。この部活はそういう不都合なことはゴミで片づけるんだ。」

「ああ、そうですか。ていうか、いまそんな話どうでもいいです。」

「ナヨロン先輩。これって他にどこやったらいいですか。」

「全部だよ。」

「全部。まだ、駅しかやってないのに。」

「ていうか、木ノ本^{きのもと}もここに固まってるなよ。早くしないと6時までに終わらないんだから。」

「でも、時間通りに終わる例っていうのも少ないんですよえ。」

「そう。時間通りに終わるっていうのも少ないし、予定した日にやらないっていう例まであるからなあ……。て、そんなことどうでもいいだろ。やれー。」

「はいはい。」

全体にレールクリーナーをやるのと同時に進行で、モジュールには列車が走っている。今僕たちのほうには223系が走っている。

「永島^{ながしま}。もうちょっとでそっちに列車が行くぞ。」

ナヨロン先輩から注意がある。僕はそれを聞いて手を引っ込めた。223系はぼくのほうに接近してきたのだが、あるところを境にしてガクツとスピードが落ち、ついには止まってしまった。それもありがたいことに僕の前だ。

「ナヨロン先輩。223系止まっちゃいましたけど。」

そういうと、すぐにナヨロン先輩が駆けつけてきた。

「あー、もうこいつダメだな。」

そう言ってモーターが入っている5号車（モハ223形）を抜き取って、床を見た。

「永島^{ながしま}。ちょっとレールクリーナーと綿棒貸して。」

綿棒とレールクリーナーを渡すと、ナヨロン先輩は車輪を外して、車輪の一つに綿棒の頭を当てた。そのあと車輪の上のあたりから延びる緑色の棒を少し回すという作業を開始した。それを1台車3回。2台車6回繰り返して、再び線路上に戻した。

「永島^{ながしま}。走るかどうが見て。」

そう言い残して、コントローラーのほうに行った。

「永島^{ながしま}行ってる。」

「まだ行ってません。」

そういったすぐ後、223系のモーター車がピクツと動いた。そし

て、ぎこちなくではあるが前に進み出した。

「ナヨロン先輩。走りましたよ。」

「了解。」

それを聞くとすぐに223系を止め、前と後ろに話された車両を連結。8両にして、走らせた。8両編成もゆっくり動き出し、何とか走ることが確認された。

「永島^{ながしま}。これなんて言うやつ。まあ、特急じゃないのは見ればわかるけど。」

木ノ本^{きのもと}が話しかけてきた。

「223系。関西の新快速だよ。これはライトの部分が広がってるから2000番台だね。」

「他のとどう違うんだよ。」

「明日223系の1000番台持ってくるからその時見せてやるよ。一発で分かる違いだぜ。」

「ふうん。そんなに違うんだな。」

「ああ。だって、テールライトのついてる位置も大きさも違うからな。」

「なるほど。」

「おい、木ノ本^{きのもと}、永島^{ながしま}。話してるのもいいけどちゃんと仕事しろよ。」

「だってもうレールクリーナーは終わったんだもん。」

「なんか別なこと探してやれ。」

そう言われて、ほかのことを探す。だが、結局レールクリーナーの仕事に落ち着いた。今度はEF510が牽引する貨物列車が走っている。

「なんかいっぱいつないでる。」

「おい、ナヨロン。加減しろよ。加減。つなげすぎだろ前夜祭なのに。」

「いいだろ別に。」

「1、2、3、4、・・・。」

本ノ本は隣でコンテナ貨車の数を数え始めた。何ともカラフルなものである。赤、緑、黄色、青、黒、ピンク。本物の貨物列車はここまでカラフルではない。

「15、16、17。全部で17両つないでる。」

「17両か。なんか驚くような数字じゃないね。」

「永島が驚く数字ってなんなんだよ。」

「えっ、32両とかそんぐらい。」

「32両って。機関車にひけないだろ。」

「いや、引けるって。1600ト級の貨物列車は計画上だけだけどあったわけだし不可能じゃないって。それに模型だったら脱線しない限り何両でも引けるんだから。」

「じゃあ何。40両の貨物列車だって可能とかっていうの。」

「ああ、言う。だけどうちじゃできないんだよなあ。26両しかないから。」

「十分あるじゃないか。」

その話はナヨロン先輩にも聞こえてたらしい。

「なになに。永島コキ26両あるの。じゃあ持ってきてくれよ。俺17両じゃ物足りないって思ってたんだ。頼む。」

「あっ、いいですよ。機関車どうしたらいいですか。」

「機関車は学校にあるやるでなんとかする。機関車って走ればコキ引けるんだからな。」

「なんですか。その走ればいいみたいな考え方。」

「だってそうなるだろ。模型の場合特に機関車は走りさえすればそのあとに何両続いても関係ない。だからそういう答えに行きつく。間違っていないだろ。」

「確かに。」

「うちのEF210（モモカマ）で最高のやつに引かせる。東海道・山陽本線の長大貨物列車をやろうぜ。」

「いや、それだったら学校のコキも使って32両にするべきです。」

「バカ、32両なんてEF200（ハイカマ）が引ける量だぞ。3

390kWのEF210（モモカマ）に引けるわけない。」

「・・・考えてみればそうですね。EF200って定格出力6000でしたっけ。」

「そう。6000kWだから引けるの。」

「それ実際やってませんよねえ。」

「やる前に電気的問題があつてな。今の電気事情のままじゃだめだからやれないだけ。もっと電気の供給能力が上がれば、やれるらしい。」

「持ってくるか持ってこないかっていうところから結構話が脱線してるんですけど。」

「あつ。そうだったな。じゃあ、悪いけどそれをお願いね。」

「はい。」

18時00分。前夜祭終了。作業もやることがないため活動は終了した。

家に帰るとすぐに車両庫に走った。

（えっと、223系1000番台とコキ26両と「253系」^{ネックス}と、

「カシオペア」と「北斗星」^{ほくとせい}。なんかたくさんあるなあ。引き受けすぎたかなあ。）

うすうす感じながらも執事に頼みに行った。

「お願い。明日の文化祭でこれを高校まで運んでほしいんだけど。」

「そういうことでしたら、喜んでお引き受けしますよ。車両を運ぶついでに坊ちやまもお乗りになったらどうですか。」

「いや、送ってくれるのは芝本まででいい。そこからは電車で行く。」

「はあ、しかし・・・。」

「いいんだって。そのほうが楽しいから。じゃあ、箱はもう車に積んどくから。」

そう言って車両庫のほうへ走っていった。

その後ろ姿を見ていたのは執事ではなかった。

「なんか、昔駿君^{しゅん}に引き連れられて浜松駅まで行っていた時と変わ

らないな。」

「たかのり隆則様。」

「わたやま和田山。手伝ってやれ。」

「・・・はい。たかのり隆則様。」

3箱目を運び出している姿を見ると昔同じようにここに通っていたいとこのことを思い出した。今自分の息子はその人と同じ学校にいるのだということを改めて実感した。

今回からの登場人物

ながしまたかのり永島隆則

わたやま和田山

21列車 前夜祭（後書き）

ようやく文化祭の前夜祭まで行きました。

これから2・3話かけて文化祭の中身。まだまだ先が長いなあ。
ネットにアップしている原作を作りながら思う今日この頃です。

22列車 当日

6月13日。文化祭当日。文化祭は9時からであるが僕達はいつも学校に行くように登校しなければならない。結局家の車で送ってもらった。こういう措置は模型の輸送のためである。運転手も手伝ってケースをホールに運び込む。

「よーす、ナガシィ。早いじゃん。」

ホールには既に3年生と中学生が集まっている。皆考えることは同じなのだろうか。

「ナヨロン先輩。言われたやつ持ってきましたよ。中に言われてないのも入ってますけど。」

「あつ、ありがと。これで今日1日は持つな。」

中で僕の持ってきた箱を受け取って中身に見入る。

（うーん。「北斗星^{ほくとせい}」と「カシオペア」と「出雲^{いづも}」と「富士^{ふじ}」。あとはEF510（アオカマ）・・・これは「北斗星^{ほくとせい}」に対応してるんだよな。それとEF81（ホシカマ）。いや、これが「北斗星^{ほくとせい}」か。あとの機関車^{カマ}はその通りか。で、永島^{ながしま}の言ってた言っていないやつっていうのが「しなの」。でも10両って。まさかな・・・）

「何かありましたか。」

「いやなんでもない。・・・それと一つ聞くけど、これ全部走るんだよな。」

「昨日走行試験やってきましたから大丈夫ですよ。全部走ります。」
展示場に箱を入れてから8時25分までホールで遊んで、8時28分に体育館入り。8時50分ごろまでの開会式を経て、9時00分から文化祭開始だ。

「永島^{ながしま}。外に5000番（313系）と300番（313系）の併^{へい}結^{けっ}入れて。」

「はい。内何にするんですか。」

「373系^{サンナナサン}か、311系^{サンイチイチ}か。それとも2500番（313系）と2

11系の併結ニイチスイびけつか。迷うところだけど、ここは373系の「東海」だサンナナサンとうかいろ。」

「ですな。」

「箕島みしま。俺たちが行っていいよっていったらすぐに走らせて。」

ナヨロン先輩はすぐさま373系の箱を探して、線路に置く。先に内回りの作業が完了し内回りから走りだす。だが、・・・、

「やべ。永島ながしまがパンタ車あっち向きで入れたってことはあれ逆じゃん。」

「名寄先輩なよろ。止めますか。」

「もういいよ。直すの面倒だから。そのまま行っちゃえ。素人にはわからん。」

「箕島みしま。外線も行っていいよ。」

「よし、永島次ながしまだ。」

「えっ、早くないですか。」

「一つの列車の走行時間は10分。10分の間に入れ替えしないといけない。もたもたしてられないよ。」

「じゃあ、次は「しなの」行きますか。」

「うん。じゃあ「しなの」外に出して、内回りは・・・0番（313系）と211系の併結ニイチスイびけつでいいか。並べて。」

「10両でいいですか。」

「6両だろうが、8両だろうが、10両だろうがなん両でもいい。」
持ってきた箱から「しなの」を取り出す。この「しなの」は基本編成6両と付属編成4両の10両編成。編成は大阪おおさか〜長野間ながので走っている「しなの」の運用である。今からナヨロン先輩が外に取りだそうとしているのは中央本線ちゅうおうほんせん（中央西線）である快速列車。東海道線の静岡圏しずおかけんでもそうだが、ここでは313系という新型車両と211系という従来の車両の併結運転が行われているらしい。

作業をしている間に9時00分。一般客の入場が始まり、たちまちホールは子供たちでごった返す。

「さて、ゴジラが入って来たぞ。」

そういうのは何となく分かる。子供は何でもかんでも触りたがるというのがある。これは模型にとって強敵だ。触るということは脱線の危険性が増すということ。普段脱線しないところでも脱線するらしい。ひどい時には走ってる車両を押さえつけるため走っている車両すべてが横転することもあるらしい。

とりあえずこのゴジラは外回りの人に任せるとして、9時05分。内回りを373系「特急東海」から313系0番台（運用は1000番台）と211系の併結へいけつに変える。外回りは東海道本線の新快速しんかいそく列車から中央本線の特急「しなの」に変える。ポイントを変えて「しなの」が発車していくのを見送ってまた次である。次はJR東日本に移るらしい。253系「特急成田エクスプレス」とE231系（209系？）の総武線をこれまで走ってきた車両を片づけて線路上に出す。作業を行っていると、誰かに話しかけられた。

「おい、名寄なよいる。」

誰だろうか。その問いに答えようとしていると、

「青木おおきさん。青木おおきさん僕の独断でこっちだから入ってください。」

「マジかよ。そんでもって、これはどうにかならないのか。」
走っている「しなの」を指差した。

「素人には分からないから大丈夫です。」

「分かる人来たらどうするんだよ。」

「来ないことを信じましょう。」

「あのなあ。」

どうやら今来た人は青木おおきというらしい。左側に展開しているプラレールの持ち主なのだ。よくあんなに集めたものだと感心する。その人は机の下をくぐって僕達の周回に入ってくる。

「とりあえず紹介しとく。OBの青木洋輔おおきようすけさん。」

「それだけかよ。・・・まあよろしく。時折こうやってくるかもしれないから。」

「あっ、よろしく願います。」

「で、名寄なよ。俺の「きたぐに」が入れる隙間はあるのか。」

「あつ、それ考えてなかった。」

「おい、考えとけよ。しょうがねえ。サヤのほうで走らせてくるか。」

「それやったら「きたぐに」が死ぬと思います。」

「そうだな。じゃあ、次こいつを行っちゃえて。走らせてちょ。」

「へいへい。永島^{ながしま}。外回り「雷鳥^{らいちょう}」出して。」

「あつ。はい。」

トミックス
TOMIXの「雷鳥^{らいちょう}」の箱を開けて作業を開始したが、ナヨロン先輩が言ったあのことが少々気になった。

「ナヨロン先輩。これ持ってくるって聞いたときパノラマグリーンかパノラマグリーンじゃないかどっちゃかって聞きましたよねえ。なんでですか。」

「パノラマグリーンだと支持率がいいっていうかなあ。結構違うかな。」

「へえ。そうなんですか。」

「ああ、それもあるけど。パノラマグリーンとそうじゃないやつの違いも見ておきたかったっていうのもあるかなあ。まあ、それはさつき見て分かったけど。」

「どこがどう違うんですか。僕にはどうしても国鉄車は同じように見えるんですけど。」

「同じように見えるかあ。まあしょうがないよなあ。大体そういうもののしか作ってなかったっていうのをあるからなあ。」

外側に「きたぐに」を並べながら続ける。

「パノラマグリーンってふつうのやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつうのほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。でも、中には変り種があるからなあ。パノラマグリーンの最終編成あたりだと思うけど、あいつはほかのパノラマグリーンに比べて窓周りが広い。だからちよつと見分けづらい。」

「へえ。そんなに違うんですね。同じように見えるやつも似て非な

るものってわけですか。」

「まあ。そういうところだな。」

「雷鳥」を出している間青木おおきさんは今走っている「しなの」に目をやっていた。

「名寄。これ持ってるの誰だ。」

声をひそめて聞いた。

「永島。あいつだけど。」

「俺思うんだけどさあ。これ明らかに南みなみさんのやつだよなあ。」

「永島遠江急行ながしまこうきゅうの社長の孫だし、南みなみさんがその親戚みねってことじゃないのか。」

「・・・。そういうことだよな。ものすごい大物が入ってきたじゃないか。それであの性格だから誰もそう思えない。そこがすごい。」

「ハハハ。」

その頃僕はというと、文化祭を見に来た鉄道マニアらしき人と話していた。

「この「しなの」は10両だから大阪から来るやつですよな。」

「ああ、はい。」

「私も高校生の時にねえ、この「しなの」で名古屋なごやから長野ながのまで行ったことがあってね。」

「へえ、そうなんですか。」

「私が乗ったときはまだ383系じゃなくて・・・。」

「381系の時ですか。」

「いやいや。もっと前。確かディーゼルカーだったかなあ。もう40年位前の話かなあ。」

そういうとその人は持っているカバンの中から携帯できるサイズのアルバムを取り出し、その車両を探していった。

「あつ、あった。これだよ。」

指差した車両の真ん中には「しなの」、その下にローマ字で「SHINANO」と書かれている。今僕が親しんでいるヘッドマークとは全く縁のないものである。そして車両はどこかで見たことがある

ような顔をしている。車両は確かキハ181系。大阪^{おおさか}→鳥取間^{とっとり}を結んでいる「特急はまかぜ」と同じ車両のほうである。

「今じゃこれもねえ、「はまかぜ」だけになっちゃったからねえ。本当はこれにはもっと走ってほしいんだけどねえ。」

名残惜しそうに語っている。この人はキハ181系^{これ}のことが好きなのだろう。昔から親しんできた車両であることには間違いはないのだ。

「そうですね。」

なんか暗い話になっていたので話を換えよう。

9時25分。583系「急行きたぐに」、485系「特急雷鳥^{らいちょう}」に交代。

「ナガシイ。」

誰かに呼ばれる。今度は誰だかしつかりと分かる。萌^{もえ}だ。だが、それを聞いて哑然とする人もいる。それは3年生と2年生。あとは木ノ本^{きのもと}である。

（今、ナガシイって呼んだよねえ。この人。）

（まさか。ナガシイって他の人から呼ばれてたあだ名。気に入ってんだな。）

（彼女か。）

「よしす。「雷鳥^{らいちょう}」走ってるじゃん。それも「きたぐに」と一緒にあ。」

（この人分かってる。まさかとは思うけど編成違うとか言わないよなあ。）

「それで次はなに走らせるの。「カシオペア」。」

ちよっとナヨロン先輩に視線を向けた。ナヨロン先輩は首を横に振って、持っている箱を掲示した。「ワム38000形」の貨物列車と今自分が手に持っている281系「関空特急^{かんくうとくきゅう}はるか」が次に走る列車だ。

「まだ「カシオペア」は出さないよ。」

「最後まで出さないつもり。」

再びナヨン先輩に視線を向ける。何もなかったけどいつか出すと
いうことだろう。

「この間には出るよ。」

「ふうん。」

背をかがめてホームの中をのぞきこむ。

「ホームに停まってるのは「ワム」と「はるか」かあ。」

（「はるか」はまだしも、「ワム」まで分かるなんて……。ふつ
うの人だったら「あつ、貨物列車だ。」で終わるリアクションなの
に。）

「あの「ワム」って駿兄ちゃんしゅんの。」

「ううん。部活にも持ってる人がいてね。これその人の私物なんだ。
」

（今この人駿兄ちゃんしゅんって言った。間違いない。南さんみなみのことこの
2人は知ってる。）

「んじゃあ、他のところもさらっと見てくるから。また来たらよろし
くね。その間に「カシオペア」走らせたりとかしないでよ。」

「しねえよ。俺の独断でやってるんじゃないから。」

萌もえは模型を見ながら、隣の周回のほうへ歩いて行った。

（あの人って永島ながしまのなんなんだろう……。）

今度は木ノ本きのもとのいる周回に来て同じように視線をおとした。する
と向こう側から緑色の先頭の車両がこちらに向かってくる。

「ねえ、これって「スーパー白鳥」はくちよう。」

おそらくこれは私に聞いたのだろう。

「ああ、ちよつと……。ハクタカ先輩。これって「スーパー白鳥」はくちよう
ですよね。」

「うん。そうだよ。」

「だって……。でもよく解るね。」

「昔からナガシイと電車のこと話してたから。特急だったら名前と
使われてる車両。あとはナガシイが好きな車両くらいだけだけ分
かるよ。」

（永島の彼女なのか。）

「それで、ナガシイの言ってた、隠してなければ私と同じっていうのは君かなあ。」

（あいつそんなこと言ってたのか。）

「まあ違うってことはないよね。ナガシイと同じ上履きはしてるのこん中に何人もいたけど、女子っていうのは君だけだったからね。」

「……。」

「あつ、名前言ってなかったね。坂口萌。また展示とかで会うと思うからとりあえず覚えといて。」

「永島から聞いてるんじゃないか……。木ノ本榛名よ。同じ鉄としてよろしく。」

「木ノ本さんね。よろしく。」

ふと永島を見て、

「やっぱり彼女創るなっていう方が無理だよなあ。」

「いや、別にあいつのこと彼氏とか思ってたないから。」

「ふうん。木ノ本さんがどう思ってるか知らないけど、ナガシイは私以外に彼女を創らない。これは断言できるんだけどねえ。でも言っというてよかったかも。」

「……。」

「ただ、一つだけ問題があるんだよねえ。まだ本当のこと言っていないし……。」

「おい、言っていないなら言えよ。」

「私が今言ったのはそういう意味もあるけど、違う意味もある。あいつには秘密にしといてほしいんだけど。」

その内容を聞くと、

「秘密にしとく必要があるのかよ。それ。正直に話した方がいいだろ。」

「そうは思ってるんだけどね……。ごめん木ノ本さん。この話はまたどこかで会った時お願い。今はいろいろとまずいから。」

（今のことは全部本当……。）

ながしま
永島のいる周回のほうに歩いて行く後姿を見ながら心の中でつぶやいた。

今回からの登場人物

おおぎ
青木洋輔

誕生日

11月1日

血液型

A型

身長

159

cm

22列車 当日（後書き）

話がブレていてすみません・・・。

展開は考えたところで成り行きといふことが多いので、これからもうそういうレが出てくるかもしれません。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。

根性でまずは高校1年生の最後まで持っていきたいと思えます。

23列車 話し合って・・・

一方僕達はというと展示に追われて、次に何を出そうか話し合っている。

「今はまだ11時。「カシオペア」とか行くには絶好の時間なんだろうけどな。」

「見に来てる人も多いし、今出しちゃえばいいじゃないんですか。12時になったら食料調達しにどこか行っちゃいますよ。」

「おい、名寄。なよろ ネタに困ったらこれ走らせればいいじゃん。」

「青木さん。あおき 「ライトレール」はまだ。文化祭の最後の最後で暴走させるんだから。」

「「ライトレール」暴走させるって。それはどうだろうか。」

「でも、「ライトレール」はそういうところ走ってるんだよ。風景以外は問題ない。」

「いや、別な意味で問題があります。40km/hキロしか出ない車両がなんで400km/hキロ出すんですか。」

「そこは御愛嬌。」

「そんなことよりもまだ走らせてないやつだっていっぱいあるじゃないですか。223系とか、223系とか、223系とか。」

「お前、223系好きだな。ニイニイサン」

「100系がいなければ1位ですから。」

「じゃあ100系暴走させようぜ。在来線だけど、ミニ新幹線がありならありだろ。」

「その片割れ何にするんですか。レイチャン 0系ですか。レイチャン 0系はちょっと。」

「何0系嫌なのか。」

「そんなことはないです。でも、両方ともここに持ってきてません。」

「なんでそんな話になったんですか。もう「カシオペア」と「北斗星」ほくと 出しますよ。」

「いや、待て。「北斗星」は「北斗星」でもバリエーションを持たせた方がいい。例えば「夢空間」とか「夢空間」とか「ゆうトピア」とか。」

「最後関係ないぞ。なんで「夢空間」って言ってる。「和倉」になるんだよ。おかしいだろ。」

「青木さんもナヨロン先輩もやめてください。オヤジギャグにもなりません。」

「よし。永島。何に牽かせる気。EF81（カシカマ）。それともEF510（アオカマ）。はたまたEF81（ホシカマ）か。」

「「カシオペア」はEF510（の）502号機で「北斗星」はEF81（の）133号機です。」

「分かった。並べろ。」

ナヨロン先輩の承諾を受けて内回りに「カシオペア」を外回りに「北斗星」を並べ始める。すると、

「ナヨロン。次に行くつもり。」

サヤ先輩がモジュール越しに話しかけてきた。

「内回りが「カシオペア」で外回りが「北斗星」の1号だな。いや編成の向き・・・。」

「なあ、「カシオペア」こっちに貸してくんない。こっちからは「北斗星」貸すから。」

「んなカオスにしたいなら「トワイライト」でやればいいじゃないか。」

「「トワイライト」だったら珍しさがないだろ。」

「その前に「カシオペア」貸してほしいかは永島に聞け。こいつのだから。」

「ごめん。「カシオペア」貸してくんない。」

「それだったら毎回家でやってますから。それに撤去すんの面倒だから嫌です。」

「1年生に拒否権は・・・。」

「ある。」

すると、潔くあきらめていった。サヤ先輩のおかげで作業が停滞していたが、作業を再開。すぐに2・1号車（スロネE27-200形・カハFE26形）と牽引機（EF510-502）をレールにのせた。ナヨロン先輩の腕時計で11時01分「カシオペア」が発。11時04分に「北斗星」が出発した。

「永島か。箕島。どっちか昼食べてこい。」

「えっ、でも。」

「大丈夫。こっちが編成順に片しとくから。」

「・・・。」

「じゃあ。僕が行きます。永島。運転変わって。」

と言うわけで、まず箕島が昼を食べに行くことになった。僕は箕島から運転を変わり、運転席についた。青木さんとナヨロン先輩は次の車両について何にするか話し合っている。

「ナガシイ。次はなに走らせるわけ。」

「永島。お前の「出雲」DD51（デデゴイチ）の重連で召喚して。」

「分かりましたけど。外回り何にするんですか。」

「外回りは泣く子も黙る「急行だいせん」だぜ。」

泣く子も黙るのか・・・。

「だって。」

「「出雲」は聞いたことあるけど、「だいせん」って何。キハ58とか使ったやつ。それとも「きたぐに」みたいに583系使ったやつ。」

「おいおい。山陰本線は電化されてないんだぜ。583系走れるわけないじゃん。」

「あっ、そうか。・・・ああ、ちょっと私バカになったかも・・・。」

「それ分らなかっただけでバカになったって言うなよな。また1から覚えようっていう人もいるんだから。」

（木ノ本さんのことだな。）

「へえ。1からね。」

「坂口さかぐちじゃん。」

その声とともに来たのは宿毛すくもだった。

「宿毛すくも久しぶり。」

「宿毛すくも。クラス展のほうどうなってる。」

「クラス展のほうはまあふつうくらいだよ。やってる位置が悪いっていうことはないけど、なかなか客の量が上がらないっていうかなあ。多分ほかのところと割れてるんだと思う。」

「クラス展何やってるの。」

「お菓子とかの販売。」

「楽しそうだね。」

「楽しそうだねって言っても坂口さかぐちも来る気はないんだろ。ここにいるほうが断然楽しいから。」

「まあね。」

永島は「出雲いずも」を線路上に出すために今は運転台にはいない。そのコントローラーを見つめていると、

「ねえ、宿毛すくも。これいじっていいと思う。」

「ダメだろ。いくら模型いじれるからってそれはダメでしょ。」

「いいじゃん。少しくらいマックスにしたって。」

その会話は十分聞こえた。

「おい。そのコントローラーマックスにするなよ。家じゃないんだから。」

と注意されてしまった。

「はいはい。ただの冗談だから安心して。」

「お前の場合どこからが冗談でどこからが本気なのかわかんねえよ。」

「ほとんどは冗談のはずだから。」

「はずってなんだよ。」

「ハハハ。」

（永島のやつ。やっぱり坂口さかぐちと話してたほうが生き生きしてるじゃ

ねえか……。そうか。鉄研だからこういう機会があるのか。だったら俺が心配するまでもなかったかもな。」

一方、他の区画では。

「ねえ。あの人ってさっきからナガシイと話してるけど、ナガシイの彼女かな。」

「善知鳥先輩には何でも彼女に見えるんですね。」

「永島のやつ。うらやましいなあ。」

「何。サメちゃんもナヨロンと同じで彼女募集中か。」

「えっ。まだ一度も縁がないですから。て言うか名寄先輩も募集中って。彼女いないんですか。」

「頭いいけど、半分電車が恋人状態だからな。それで縁がない。ところで、佐久間はどこに行ったか聞いてないか。」

「多分他のクラス展とかに行っただんじやないんですか。」

「あのバカ。アヤノンだけに任せるんじゃない。アヤノンをいじれないじゃないか。」

（そのために。）

また……

「おーい、アヤケン。貨物ぶっ倒れた拾って。」

「なあサヤ。これどこで落した。」

「この小楠貨物で倒れた。」

「小楠貨物かあ。よく俺こんなゴミ作ったな。」

「ゴミかよ。」

「あいよ。落ちてたコキはこれで全部。」

「バカ野郎。コンテナも落ちてどっかに吹っ飛んでる。探せ。」

「えっ。その状態じゃ何かダメなのか。」

どういう状態か説明しよう。左側からコンテナがあり、あり、なし、なし、なしの順になっている。

「この状態じゃ※□△○※□△○になるだろが。」

解説不能のところだけ裏声でした。

「せめて、日本語しゃべれ。」

「日本語ですか何か。」

「ウソつけ。」

「ナヨロン先輩。また「雷鳥」^{らいちょう}行くんですか。」

「バーカ。またって言う言い方は何だよ。国鉄って言うのはようは頭だ。どんな編成考えるかで走らせるパターンって言うのは何百にもなる。「雷鳥」^{らいちょう}には「だんらん」をいれて、一番後ろに「ゆうトピア和倉」^{わくら}をくつつけて、「雷鳥」^{らいちょう}に引っ張らせる。」

「そんな編成あるんですか。」

「あつただ。国鉄に正統性を求めるところでどうかしてるぜ。それがあるからさまに出るのは客レとかディーゼルだな。キハ58にキハ10とかそういう方面を連結したとかっていう実績だってあるんだ。・・・いや、くつつけたのはキハ40だったかな。」

「分かりました。ていうかそんなことどうでもいいです。」

12時42分。僕は持ってきた弁当を食べに一度管轄を離れた。弁当を食べ終わって戻ってきたのは13時03分ごろだった。

「昼食べてきました。」

「へーい。・・・永島」^{ながしま}。223系の2000番台8両。内回りに出して・・・。っていつても、外回りどうするかなあ・・・。」

「永島さん」^{ながしま}。次外回りなんか走りますか。」

諫早がクラス展をきり上げてやってきた。

「ああ、まだそれ決まってるじゃないんだけど・・・。内回りは223系の新快速^{しんかいそく}が行くみたいだけど。」

「じゃあ、ちようどいいですね。僕のこれお願いします。」

そう言ってKATO^{カトー}の箱を差し出した。箱の背には「223系2000番台へ1次車」4両セットと書いてあるが、表には「223系6000番台4両セット（宮原）」^{みやはら}とシールで直してあった。

「ナヨロン先輩。諫早^{いさはや}がこれ行ってほしいって。」

今の箱をナヨロン先輩にも差し出す。ナヨロン先輩も箱の背と表で表示が違うことを不思議に思ったかもしれない。だが、中身を見ると納得したようだ。

「諫早。これよくやったな。ダブパンってことは宮原にいる600番（223系）だよな。」

「はい。」

「これだったら、もうワンセット繋げて、「丹波路快速」とか「直通快速」とかやった方が面白い。ここまですてきてるんだし、これで終わらせるのはもったいないぜ。」

「名寄さんならそう言うと思って、もうワンセット持ってきてます。」

「えらい。なんか他に持ってる車両とかってある。」

「今はないですけど、家に223系のパンタを全部シングルにしたやつと同じ6000番台の網干あぼしにいるやつと211系の3000番台を無理やり5000番台化したやつならあります。」

「うーん。なるほど。でもそいつらは次だな。」

「ああ、あと名寄さん。もしカーブとかでこけたら「こけんじゃねえよ。ボケ。」とかって言っといってください。僕が許します。」

「はいはい。でもこれいけないようになってるだろ。明らかに重量感違うし。」

「ああ、はい。くつつける方はモーターぶち抜きしましたから。」

その時にはもう編成を理解していたらしい。

「永島。新快速を1号車（クハ222形）からこっちの方向で入れてくから6000番は8号車（クモハ223形）むこうで入れてっ
て。」

ナヨロン先輩から箱を受け取って言われたとおりに並べていく。レールに置いて行く順番は8号車からではなく1号車から。こうしないといれづらい。なぜかというところを並べる線路の隣に建物が隣接しているからだ。

「ナガシイ。手伝おっか。」

「いや、大丈夫。それに、これ人のだし。」

「223系の・・・2000番台。なんか顔似てるよねえ。」

「いや、こいつは2000番台じゃなくて6000番台。モーター

車のパンタ2つだし、ちょっと分かりづらいけど乗務員室扉のところにラインの下にオレンジのラインが入ってる。」

「ホントだ。223系も大家族だからなあ。分かりづらいね。」

「でも、先輩の話聞いていると223系もそんなに親戚たくさんじゃないみたい。313系のほうがもっと親戚たくさんなんだって。」

「ふうん。」

「ねえ、ナガシィ。」

善知鳥先輩うんちゅうに呼ばれる。

「何。ナガシィ、鉄研でもナガシィって呼ばれてるの。よっぽど気に入ってんだね。このあだ名。」

「・・・。なんですか。」

「そっちにさあ138系か981系の「あずにゃん」ない。E253の「あずにゃん」走らないんだけど。」

(言ってることメチャクチャだし・・・。)

「E253系なんていうやつありませんけど、それに138系とか981系ってどこどう間違えたらそうなるんですか。」

ここで正しい答えを皆さんには知らせておこう。もちろん、そんなこと知ってるよという人もいるだろう。まずE253系と間違えられたのはE257系。138系と間違えられたのは183系。981系と間違えられたのは189系である。

「永島ながしま。探してるのはこいつらだ。渡してやれ。」

さすがナヨロン先輩。善知鳥先輩うんちゅうの言いたいことはこの人にはしっかり伝わっているようだ。

「ナガシィ。パス。」

善知鳥先輩うんちゅうが手を差し出す。僕も手を伸ばしたが、あと少しで届かない。

「ナガシィ、手伸ばせ。ゴムゴムのー、ピストル。」

「無茶言わないでください。ゴムゴムの実食べてるわけじゃないんだから。」

すると外回りをしていた楠先輩がリレーしてくれた。

「アヤノン。邪魔すんなよ。」

「善知鳥先輩。今自分何歳ですか。」

「善知鳥茉衣19歳。永遠の少年……ああ、いやいや。永遠の少女です。」

「……。」

「アーツ。EH200（ブルサン）の隣が困るー。」

何となくバルサンと同じ様な響きがする。

「……名寄先輩。内回りさっきからどこにいるか分かんないんですけど。」

運転業務についている箕島が疑問をぶつけてきた。

「えっ。新快速どっか行った。」

「ねえ、ナガシィ。223系あすこで横倒しになってるけど。」

萌がそう教えてくれた。指差している場所は運転台から死角になるところ。行ってみると、223系は全車両が脱線していた。1号車（クハ222形）、2号車（モハ223形）、3号車（サハ223形）と6号車（サハ223形）、7号車（サハ223形）、8号車（クモハ223形）は完全に、4号車（サハ223形）、5号車（モハ223形）はファイダーのふちに受け止められる状態で横倒しになっていた。

「手伝おっか。」

「手伝ってくれるのは家だけで十分。ここはいいよ。」

脱線の復旧作業として、まずは3号車と4号車、5号車と6号車の連結を解除。そのあと1号車から3号車と6号車から8号車はすぐに線路上に仮置きする。そして4号車と5号車も線路上に仮置き。車両を仮置きし終わったら随時車輪をレールに乗せる。

「あつ、223系だ。」

ふと顔を上げると自分の前にいるのは萌ではなく小学生だった。その小学生は今ここから見える範囲をざっと見渡して僕にこう聞いた。「こっつてこういう部活もあるんですね。中学からでも入れるんですか。」

「ああ、今年は中学から3人入ったからな。」

「へえ。ここって頭いいほうがいいですか。」

「頭よくなかったっていいよ。僕みたいなバカでも入れたんだから。」
(んじゃあ。僕みたいなバカでも大丈夫なんだよなあ。よし。・・・)

「おいおい。僕みたいなバカっていうのはウソだろ。・・・それとも、鉄道バカとしてのバカか。それだったら裏付けるね。」

「アハハハ。」

5号車のモーターを線路上に置くと引っ張られる感覚を覚えた。車輪が明らかに動いている。

「箕島^{みしま}。コントローラー完全に止めてる。」

どうやらその声は箕島^{みしま}にはとどかなかつたらしい。まだ車輪が動いている。

「箕島^{みしま}っ。止めてっ。コントローラーの電源切って。」

ちよっと声を張り上げていうと、青木^{あおき}さんがそれに反応してくれた。

「箕島^{みしま}。コントローラーのノッチオフにして。」

その声を聞くと箕島^{みしま}はつかんでいる新幹線のようなコントローラーのアクセルをもとの位置に戻す。するとこれまで電気をとっていた223系の車輪も止まった。止まったことを確認して、改めて5号車を線路上に乗つける。左側の台車、右側の台車の順に線路に乗つけて、

「223系、行っているよ。」

そう指示を出すと、またも青木^{あおき}さんが反応して223系を走らせてくれた。

「こういう意味では家でやってるのより疲れるな。」

「いや、家でやってる時のほうがもっと疲れる。あれやるって言っても駿兄^{しゅん}ちゃんと俺と萌^{もえ}ぐらしいしくないじゃん。3人しかないから脱線しても気づきづらいっていうかな。逆にこの人数でやるから運転班としては大助かりってことじゃないかな。」

「ふうん。」

一呼吸間をおいて、さらに話が続く。

「今走ってる223系ってちょっと短くない。家で走らせてるのが常時12両編成でしょ。あれ8両編成だよねえ。」

「常時12両なのはうちのレイアウトが全線複々線だから。新快速しんかいそくってほとんどが12両編成で走ってるっぽいから。」

「いや、それは分かる。でも8両っていうこともあるのか。」

「あるんじゃないの。電車でGO！ゴーに収録しゅうろくされてる新快速全部8両編成だし。」

「2002年のデータだもんね。・・・外回り走ってる6000番台だっけ。あれは何。」

「あれって多分おおさか東線の「直通快速」ひがしせん ちよくつうかいそくか福知山線の「丹波路快速」ふくちやません たんぱじだろ。どっちだか知らないけど。」

「「丹波路快速」は名前聞くだけでどこに行ってるのかなあってことは大体見当がつくけど、「直通快速」たんぱじかいそく ちよくつうかいそくってどこどこ結んでるわけ。」

「奈良と尼崎の間らしいけど。」
あまがさき なら

「奈良から尼崎までの直通ね・・・。なんかわざとらしい名前の付け方ね。」

「わざとらしいってなんだよ。」

次の車両選定に戻った。しかし、その頃にはもう決まっていたように、内回りにEF510牽引の貨物列車。外回りに「寝台特急トワイライトエクスプレス」がスタンバイしていた。

23列車 話し合って・・・（後書き）

223系のことが多く出てきますが、自分自身223系のことが好きだからです。

個人的には223系1000番台がお気に入りですが・・・。

こんな話どうでもいいですね。

なお、これからも223系は大量に出てきます。

やっぱり好きなもの書いてる時が一番ノリノリですね。（笑）

24列車 暴走 富山ライトレール

EF510と「トワイライトエクスプレス」が走りだしてから、次に何を走らせるかの議論。

「在来線にE3（イースリー）系の「つばさ」と「こまち」を走らせて何とか時間稼ぎにして、次に旧国鉄いけばいいだろ。「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか。」

「お前さつきから「とびうお」・「ぎんりん」にこだわり過ぎ。少しはもっとほかのやつにしろよ。あのキハ58使って、多層建てでもやればいいじゃないか。」

「多層建てすか。やるのはいいですけど、相方が困り・・・。」

「そんなのいくらでもあるだろ。485系使って「つばさ」でいいじゃないか。」

「いくらなんでも、それはないでしょ。」

「あいう。内回りに「スーパ―はくと」で外回りに「スーパ―おき」か「はまかぜ」出せばいいじゃないですか。」

「ちよつと待て。今外回りに貨物列車出したんだからさあ、あれを徹底的にいじればいいじゃないか。」

おおき
青木さんが口をはさむ。

「えっ、EF510（レトサン）の後にEF210（モモカマ）出して、EF81（コチカマ）の重連でED76（ナロカマ）の単機みたいなことするんですか。別に嫌とは言いませんけど、ずっとあれをまわしているっていうのはちよつと。」

「えっ、いいじゃないですか。面白いですし。」

「でもEF510（レトサン）から始まるっていうのはちよつとって思っんですよ。そういうことするならなおさら「3099レ」か「3098レ」みたいなことするべきだと思います。」

「また面倒くさいこと思い付くなあ。」

この後ナヨロン先輩から教わったことだが、「3098レ」と「3

099レ」は日本一長い距離を走る貨物列車らしい。走行区間は福岡おか さっぽろ札幌まで。途中日本海縦貫線にほんかいじゅうかんせんという短絡路線を通ってもその走行距離は2000km以上になるという。

「ていうか、貨物だったら他にもいじりようありますよねえ。機関車変えるだけじゃなくて貨車変えてどうにかするっていうのも。」

「確かに一つの手だけど、変えるの面倒くせえじゃん。」

「おいこら。鉄道マニアがそんなこと言っているのかよ。」

「じゃあ、僕が変えるでやっていますか。」

「ああ、それだったらやってもいいけど、何にする気だ。タキ。ワム。トラ。」

「タキ。」

「了解。並べろ。つってもその隣に困るんだよなあ。そうになると、あの「トワイライト」もいじらないと。」

「EF210（桃太郎）に牽引させて、東海道線っていうことにしちゃえばいいじゃん。」

「それ言ったらほとんどの列車そうなるじゃないですか。209系ケヒレクの隣にEH200（ブルサン）のタキ走らせて根岸線ねぎしせんとか。その隣にE231系イニサチ走らせて湘南新宿ラインしょうなんしんじゅくとか。」

「んなこと言ったらはじまんねえだろが。」

「あいう。外に113系とか行けばいいんじゃないでしょうか。」
しばらく黙っていたが、ポンと手を叩いて、

「その手があったか。」

そこ感心されても・・・。

その後もこんなギャグみたいな決め方をしながら、走らせる車両を決めてホームに並べる作業。こんなことをしている間にも時間はどんどん過ぎて14時30分になった。

「さて、そろそろやるかなあ。」

「えっ、ナヨロン先輩あれ冗談じゃないんですか。」

「冗談なわけないだろ。やると言ったらやる。次の周回で、内回りキハ56（キハゴロ）と外回りキハ22（キハニニ）を停車させる。」

やるぜ。」

そういつて車両の入った箱を詮索。箱を三つ取りだして箱を開けた。中には小ぢんまりとした白い車両が入っている。色はそれぞれ違って一つは赤、二つ目は緑、三つ目は紫だった。そのうち二つ。赤と緑をいつもの手つきで線路の上に置いて気動車の到着を待つ。気動車が到着するとポイントを直線に変更。

「箕島^{みしま}。運転変わって。」

珍しくナヨロン先輩がコントローラーのつまみを握る。すると、一気につまみをまわした。停車していた車両は勢いよくホームを飛び出していった。

「あつ。ナヨロンのやつ「ライトレール」走らせてやがる。」

モジュールに比べてとてもちっちゃい車両を善知鳥^{うしろ}先輩が発見する。

「ナヨロン。それはあたしの専売特許よ。勝手に使うな。」

「うるさい。ときにはいいだろ。」

「おい、名寄^{なよろ}。新しい仲間。」

「おお。万葉線^{まんようせん}。」

内回りを止めて同じ線路上に青木^{おぎ}さんから貰った車両を置く。この車両は「ライトレール」とよく似ているが、少し違う。置き終わると再びつまみをマックスにした。すると、今度は外回りと駅の反対側に止めて紫の「ライトレール」を置いた。当然、こちらも置き終わると暴走させた。

なぜか走らないけど、この「ライトレール」の暴走は子供たちには好評のようだが、部員には好評ではない。むこうの管轄の人が出てきて、レールの上に手でトンネルを作った。

「あつ、バカ。取るな。」

「ハクタカ。そっちの「ライトレール」取って。」

「永島^{ながしま}。「ライトレール」死んでも守れ。」

なんなんだろうか。この状況。

「ハクタカ取るな。」

「ヤダよ。人には散々編成違うとか言っというて自分はこんなことし

てるんだから。」

「いいだろ。間違ってるないし。」

「そこ違うだろ。根本が間違ってますよ。」

ハクタカ先輩は走ってきた内回りの赤い「ライトレール」の速度に合わせて、トンネルを作った右手を滑らせる。滑らせるのと同時に「ライトレール」を掴んで、レールの上から外し、自分達の周回へ持っていた。

「ちくしょう。一つ持ってたか。楠くすのき。そっちに取られたの取り返して来い。」

「絢乃あやの。取ったらお前の恥ずかしい話クラスにばらすぞ。」

「この。バカタカ。」

「ちよつとアヤノン邪魔。取れないじゃん。」

「ちよつ、どこ触ってるんですか。」

「永島ながしま。箕島みしま。死んでも守れ。」

と言った時にはもう遅い。紫色の「ライトレール」は善知鳥先輩うとむに取られてしまった。

「サヤ、「ライトレール」取ったぞー。」

「オッシャー。」

「よーし。こっちもやるぞ。」

「家でやる時にはないすさまじさだね。」

萌もえが話しかけてきた。確かに。家でやっている時はこんなことはない。ただ普通に車両がゆっくりと走っているだけである。もちろん、新幹線はゆっくり走ってないが。

「確かに。でも、楽しくていいよ。こういうこともあって。」

「ハハ。・・・ナガシイが持ってきたやつ大活躍だったね。」

「ああ、ちよつと持ってきたすぎたかなあって思ってたけど、そうでも無かったよ。先輩なんかもつと持ってきてもらった方が良かったかもなあって言ってくらいだし。」

「駿兄しゅんちゃんの223系も持ってきてたけど、あれどうするの。横倒しになっちゃったし。」

「あれも部活のやつ。顧問のなんだって。」

「へえ。顧問のやつねえ。って顧問の先生持ちすぎじゃない。どのくらい持ってるのよ。」

「数えてなかったから分かんないけど、うちの父ちゃんくらい持ってるよ。」

「あつ、じゃあ結構持ってるんだね。」

「・・・。」

「今日部活の先輩といろいろ話してたけど何話してたの。」

「次にどれ出すか話し合ってた。」

「へえ。」

「まあ、それも話してたけど、電車の雑学とかもいろいろ話してた。」

「へえ。例えば。」

「「雷鳥」のパノラマグリーンとパノラマグリーンじゃないやつの見分け方とか。SLのこととか。話してた先輩俺の知らないことも知ってたもん。ついてくのが精いっぱいだった。」

「ナガシイ、でもついていけなくなることもあるんだ。それなら私があの人と話したら全然じゃん。」

すると、後ろから声をかけられた。

「トモ。よーす。」

「駿兄ちゃん。来たんだ。」

「あつ、南さんお久しぶりです。」

善知鳥先輩がいつものテンションより冷えた口調で話しかけてくる。

「えっ、知り合いですか。」

「知り合いも何も、俺はこのOBなんだけど。」

「ウソ。」

「ウソって、ナガシイ気付いてなかったんだ。」

「ああ、今初めて知った。」

このころには全員気付いた模様で3年生と青木おおぎさんが寄って来て何かいろいろ話し始めた。

「ナガシイ。バカ。」

「ああ、そうだったのか。暁あかつきフェスタに行ったときとかどっからか現れてくるから、なんでかなあって思ってたんだけど……。」

「おいおい。いくらなんでも鈍すぎ。」

「ていうか。駿兄しゅんちゃんくんの遅かったな。」

「なんかいろいろやってたんじゃないの。そうでなきゃおかしいって。ふつうならここに直行する人なんだから。」

「……。それもそうだな。」

「ナガシイ。いつになったら帰れるわけ。この後に片付けやるんでしょ。」

「ああ、18(6)時くらいだと思うよ。でも。この部活予定表通りにやらないからなあ。いつ終わるか分かんない。」

「それダメでしょ。」

「ハハ……。まあね。」

この時木きのもとノ本は二人の様子を見ていた。二人とも笑顔を交えて話しているのだが、なぜかその顔がいつもと違うように見える。ただ話しているだけなのに、ただ話しているように見えないのだ。

(永島ながしまには坂口さかぐちさんの存在が大きいんだ……。坂口さかぐちさんも言っていたこと。お互いを理解してるからあすこまでの自信になるんだ。でも、それを理解してるなら、なんであのかを永島ながしまに言えないの。)その思いだけがつのった。

15時。文化祭終了。そのあと部展、クラス展のグランプリ、優秀賞が発表される。クラス展の結果はグランプリ3年6組。優秀賞2年5組。部展のグランプリは吹奏楽部。優秀賞は生物部だった。「あー。去年は優秀賞だったけど今年は優秀賞すら取れないってホントゴミだな。吹奏楽部のばか野郎っ。」

「まったくだ。」

「サッカーボールが表抜いたんじゃないのか。」

「え。なんで。」

「チート使ってたのがばれたんじゃないのか。」

「あれのどこがチートよ。部員のやつと後輩のやつかき集めて一気にどっさつと投票しただけじゃん。」

「はたから見ればチートみたいに見えるってことか。」

「まあ、そういうこと。」

善知鳥先輩とサヤ先輩は息を大きく吸って口に手を当てて、

「クソサッカーボールのばか野郎ー。」

「バカ。職員室に聞こえるだろ。」

「なんで。聞こえるように言ったにきまつてるじゃんねえ。」

「そうそう。このくらいしないと意味がない。」

「意味がないの前に全員片付けろ。」

青木さんが仕切って、片付けさせるように促す。

「ところで、この箱4箱誰のだ。」

「あつ、それ永島の。」

「あ。すぐ片付けます。」

（萌はもう帰ったんだな。）

心のどこかでそれを思った。17時片付け完了。この後はアド先生のおごりで一人一人にペットボトルが配られ、500ミリリットルのジュース、お茶を全員で飲み干す。それを飲み干し終わると、

「よし。野郎ども。次は臨地研修だー。」

サヤ先輩が気合い入りに叫んだ。

その声に続けて、先輩たちが。1年生の大半もそれにつられて返事をした。

その帰り、正門を出ると予想してなかった光景を見た。

「萌。まだいたの。」

「いいじゃん。一緒に帰っちゃダメ。」

「ダメじゃないけど……。まだいるとは思ってなかった。終わるの分かんない部活が終わるのってふつうまってるかなあって。」

「まっっちゃダメとかっていうことはないんだし。ていうか、そんな話どうでもいいし、帰ろ。」

「おう。」

さつきから頭の中に響き続けているものがある。坂口さかぐちから語られた道のり。あれは固い愛の証か、固い絆の証か。

今回みなみしゅんからの登場人物

南駿 誕生日 3月15日 血液型 O型 身長 176

cm

24列車 暴走 富山ライトレール（後書き）

こういうのってないことは承知です。
作者が狂っててすみません。

なお、今回で文化祭のエピソードは終了です。これから1回別なレ
をはさんで夏の大イベント臨地研修の話になっていきます。現実と
大きく違っても読んでくれる人には感謝感激です。

まずは高1の終了まで根性で書き上げるといった以上自分の精神力
をもって根性で完成させていきたいと思います。

25列車 難読質問

6月14日。文化祭の片づけ。モジュールを随時量に運んで、車両のほうは図書館準備室に入れた。その片付けが終了すると、2階昇降口のちょうど下にあるピロティに集合するよう言われた。

「よし、諸君。これからみんなを広報課こうほうかと総務課そうむかと模型課もけいかに分けるからちよつと待っててね。」

前にナヨロン先輩が言っていた班決めである。だが、形式上その形をとるだけで、活動上関係ないらしい。

「えーと、まず醒さめヶ井がゐは総務課そうむかでいいだろ。後は、・・・。」

「少なくとも永島ながしまは模型課もけいかだな。」

「佐久間さくまはなんかメカニック関係得意そうだし、広報課こうほうかでいいだろ。」

「残りのミッシィとハルナンはどうするんだよ。」

「残りってそれだけじゃないだろ。中学生だってそうだ。ああ、あと諫早いさはやも模型課もけいかだったな。」

「なんか有能なやつが引き抜かれてるような気がするけど。」

「気のせいだって。」

「じゃあ、箕島みしまは総務課そうむかで、は広報課こうほうか・・・。」

「木ノ本きののもと広報課こうほうかっておかしいだろ。木ノ本もどっちかって言ったら模型課もけいかじゃないのか。」

「おう、ナヨロン。さっきから人引き抜きすぎ。」

「分かったよ。じゃあ、あとはそっちで決めて。もう引き抜く当てもないから。」

「じゃあ、模型課もけいかはもう人回さなくていいね。」

「ちよつと待て。せめて3人。3人は模型課もけいか来てほしいんだけど。」

「引き抜く当てあるじゃないか。」

「それじゃあ、ハルナンも模型課もけいかで、アサタンが総務課そうむかで、ソラタンが広報課こうほうかでいいね。」

「ああ、それでいいよ。」

会議が終わったらしくサヤ先輩がこちらを向いた。するとそれぞれにどこどこに行けと指示を出し完成まで持って行った。

「よし。そっちの一番左のやつが総務課。真ん中が模型課。そして、いちばん右が広報課だ。とりあえず何班にいるっていうのは覚えといてちょ。」

そういうことだそう。

「で、これからの部活のために全員に書いてほしいものがあるんだけど……。」

サヤ先輩はさっきから持っていた紙を全員に配った。その紙にはこんなことが書いてあった。例えば「ロングシートとクロスシートどちらが好きか」、「このJRに一言」など。他にも「川内」の読み方、48という数字でピンと来るものなど50個の質問が書かれていた。

「この質問に回答してくれ。出来たら、俺に渡して。これを俺たちの部員紹介のページにアップするから。」

「はい。」

渡された問題に取り組む。内容は様々。最初は初歩的物から始まり、あとになればなるほど少しずつ内容が難しくなっている感じもする。

「なあ、永島。これなんて読むかわかるか。」

本ノ本が聞いてきた。シャープペンがさしている文字は「川内」。

「あつ、それ東北の都市と同じ読み方するよ。」

佐久間が口を挟んできた。

「確かにそうだな。」

「東北の都市。何、盛岡とか仙台とか。」

「今思いつきり答え言ったよ。」

「えっ、ウソ……。」

「答えは簡単なほうだな。」

「簡単なほうかぁ……。なるほど。そう読むのね。」

思いついたらしく、その答えを書いた。書き終わると、

「なんかこういうのって紛らわしいよね。ここら辺で言ったら新居町あらいちを「しんきょちょう」って読んじゃうってところかなあ。」

「あれ駅の読み方「あらいちよう」じゃなくて新居町あらいちだからな。さらに紛らわしいぞ。」

「あれなんてまだまだ優しいほうだろうな。難読駅なんて日本中探せばいくらでも出てくる。同じ九州新幹線きゅうしゅうしんかんせんの難読駅といえば「出るに水」って書いて出水いずみとかっていうのもあるね。他に僕が知ってるのは・・・これかなあ。」

紙の白紙を使って「長万部」と書いた。

「なにこれ。「ちようまんべ」とかって読むのか。」

（この読み方って絶対坂口さん知ってるよねえ。）

「いや。これふつうに読むってこと考えちゃいけない。難読だから。佐久間さくま分かる。」

「え。この読み方なんてわかるわけねえよ。」

「醒ヶ井さめがい。箕島みしま。これの読み方わかる。」

「知るかつ。」

「えーと、これって何「まんべ」だったけ……。ダメだ。「長」の読み方がわかんねえ。」

醒ヶ井さめがい、箕島みしまの順に回答を得た。

「何やってんだ。」

後ろから善知鳥先輩うじうが覗き込んでいた。

「これの読み方わかるかなあってやってたんです。」

善知鳥先輩うじうは「長万部」の文字を見るとすかさずナヨロン先輩を呼んだ。

「ナヨロン。これなんて読むかわかる。」

ナヨロン先輩にはすぐに分かってしまったみたいで鼻で笑っていた。

「簡単じゃん。「長万部」おしやまんべだよ。「カシオペア」とかの停車駅だよ。」

「ナヨロンそういう方面からのこういうのは得意だからなあ。」

「よし、俺からも問題作ってやる。これなんて読むかわかるか。」
書いた漢字は2文字で「青木」。

「えっ、ナヨロン先輩。これバカにしてるんですか。」
「全然。これぞ簡単すぎて難しいっていう問題だぜ。阪神にはこう書いてすつごく意外な読み方させてる。まず、この答えは封じでおくか。全員これ「あおき」って読むって思ってるだろうが、これは「あおき」って読まない。」

「はっ。これ「あおき」意外に読み方あるのか。」

「バカ。善知鳥は黙ってろ。」

読者の皆様にはこれの答えを教えておこう。もうすでに出ています。分かっている人はもう言うまでもないでしょう。

「さあ、どうだ。」

「ダメです。「あおき」意外思いつきません。」

箕島がギブアップするのを待っていたかのように全員ギブアップ。

「読み方は簡単なんだけどなあ。」

そういうとナヨロン先輩は青の上に大の字を書いた。

「こいつは「おおぎ」って読むんだぜ。他にもこういうのはどうだ。」

今度は「杉津」と書いた。

「これは「すぎづ」。」

「違うんですよねえ。これってもっと別な読み方でしょ。」

「ああ。」

「僕。これは分かります。「すいづ」ですよね。」

この問題には箕島が回答した。

「ああ、これ答えられちゃうと持ちネタがないなあ。俺が知ってる難読駅って言ったらこれくらいかなあ。」

「ナヨロン。それ嘘だよねえ。」

「箕島は歴史関連が得意そうだ。それだったら「水城」とか出して
もすぐ分かっちゃうだろ。」

「……。」

「いや。水城みずぎはふつうか。それだったら原田はるだのほうがわかりづら
かなあ。」

「なことどっちでもいいわ。ていうより、みんな書けた。」

「あ、はい。お願いします。」

「みんな早っ。」

どうやら終わってなかったのは醒さめヶ井めがだけだったみたいである。

それが全員書き終わったところでアド先生からまた新たな発表が
あった。

「えーと、今日から部長が北齋きたさや院君くんから鷹倉たかくら君に変わります。部長
としての仕事はまだ引き継がないようですけど、新しい部長ですの
で、みなさん歓迎しましょう。」

みんなは拍手でそれに応対した。

「よっ。ハクタカ。よいよでしゃばって教えれるとも思ってるの
か。」

「思ってませんよ。むしろでしゃばって教えたいのは善知鳥うと先輩じ
やないんですか。」

「って違うか。でしゃばって教えるのはアヤノンか。」

「えっ、何であたしになるんですか。」

「だってしそうじゃん。」

「絢乃あやのは絶対にそういうことしません。」

「なんでハクタカがかばうんだよ。さすがにアヤノンす・・・。」

「それ以上何も言わないでください。」

「えっ、どうして。」

「いいから、何も言わないでください。」

数日後。岸川きしかわ高校鉄道研究部のホームページを開いてみた。

(この「N・EXネックス」。ナガシィだよなあ。これも本当に好きだよね
え。)

そのページには結構面白いことが書いてあった。

25列車 難読質問（後書き）

全体的に文章が説明文であることを謝罪します。

作品上そうなってしまうところがあるのでご了承ください。

関係のない話ですが、今自分が作っている原作は高1の11月頃の内容です。まだまだ原作も発表分も先が長いなあ・・・。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。

読者のために根性で頑張ります。

・・・後書きがほとんど同じ内容ですみません。

26列車 まとまらない(前書き)

現実と大きく違う個所が多々あります。すみません。

26列車 まとまらない

正式な部員と認められた。そのような感覚に浸っているのもわずかの間。これから僕たちは本当にイベントに体を傾けていく時期になった。その鉄道研究部一大イベントというのは毎年恒例臨地研修である。

「サヤ、今年どこ行こうか。」

善知鳥先輩がサヤ先輩にどこに行こうかと聞いた。

「そうだなあ……。去年は東北だったし、おとしは四国だったなあ。アヤケン、ナヨロンはどこがいい。」

「九州でよくない……。」

ナヨロン先輩が提案する。

「おつ、ナヨロンさえてる。」

「うっさい。」

「九州かあ……。うん、いいかも。」

「よーし、みんなで九州に行こうー。」

「じゃあ、僕からそうアド先に言っとくよ。」

「サヤお願いね。」

「で、どうする。九州って言うてもどこに行くんだよ。」

「行くなって……。博多か小倉あたりだよなあ。」

「エー。」

「エーって……。病むこと確定なんだから文句言わない。」

「だって精神的に病ませるのはどうなんだよ。ハクタ力達はともかく1年生は耐えられないだろ。まああたしも耐えられないけど……。」

「そんなこと言ったらどこにも行けないだろ。それにその心配はないよ。」

「どうして。」

「木ノ本は撮り鉄だからそんなこと考えなくていいだろ。永島は電

車が好きだから入ったんだから問題ない。他は・・・、どうにでもなるからいいや。」

「ナヨロンってそういうことよく一発で見抜けるな。」

「見抜いてないよ。勘かんなんだから。」

「そんなことはどうでもいいよ。」

「じゃあ、博多はかた行いくってアド先に言いっていいな。」

「まだ、言いってなかったの。」

「善知鳥うしろが嫌きらだって言うからだろ。」

「はいはい、分わかったから早く電話でんわしてよ。」

今日の定例会ていれいかいはこれで終わおった。

（また遠いところまで行いこうとするなあ。）

そう思おもっているのはアド先生だ。この頃は遠いところに行いってない。

「まあ、できるだけ抑おさえましょう。」

独り言を言いった。抑おさえるというのは旅費。これができれば学校への申請は簡単である。

6月17日。今日は放課後に部活がある。今日からは夏の臨地研修りんちけんしゅうについての話し合あいだ。

「今年どこ行いくんだろうな。」

僕から見える人全員にこの問といをしてみた。

「できれば東北がいいな。」

「四国かな。」

「やっぱ北海道だろ。」

「どこでもいいよ。」

木ノ本きののほん、箕島みしま、佐久間さくま、醒さめヶ井がゐの順に回答があこった。言いってはないが僕もできれば東北がいい。

「ああ、どこになるんだか気になるなあ。」

すると教室のドアが開あいた。全員の顔がそそちを向むく。

「先生じゃないんだから、みんなでここっち向むくなよ。」

見ると楠先輩くすのきだった。もちろん顔はああきれていた。

「絢乃先輩。去年は東北のどこに行ったんですか。」
荷物を置こうとしている楠先輩に木ノ本が聞いた。

「去年は確か……。」

「『ばんえつ物語号』に乗ってきたよ。」

今度は楠先輩の後ろで声がする。声の主はハクタカ先輩だった。

「ハクタカ先輩達って結構いい所行ってますよね。」

「そうかもな。」

ハクタカ先輩はそう言って去年の旅行の説明を始めた。

「去年は東京まで各駅で出て、夜新宿から出る『ムーンライトえちご』に乗って新潟まで行って、その後『ばんえつ』に乗って、戻ってきたんだよなあ。」

「それより『ばんえつ物語号』ってどんな感じでした。」

木ノ本が興味ありげに聞く。

「それは……。」

「ダメだよ、そんなこと聞いても。だってハクタカ『ばんえつ物語号』の中で爆睡してたもん。」

「ええ、なんで爆睡してたんですか。」

「『ムーンライトえちご』の中で徹夜してたんだってば……。」
(よくやるなあ。)

「それでも、最初くらいは覚えてますよねえ。」

「それもないね。座った瞬間に寝たから。」

(何やってるんだか……。)

この話が終わるころには3年生も中学生も集合していた。全員が集合するとすぐに本題に入った。

「今年はみんなで博多の病院に行くぞー。」

「オー。」

テンションの上がる先輩達。なんで博多にまで行って病院に行かなければならないのか。

「あのなあ、普通に言えて。」

「そうそう、いくら1年生が鉄研色に染まったからって伝わらない

だろ。」

ナヨン先輩とアヤケン先輩がツツコンでいたが、何か通じてきた。「それって、今年の臨地研修は博多はかたに行くってことですよねえ。」

思ったことお口にしてみた。

「おお、さすがナガシイ。」

何となく分かりたくなかった。でも、九州きゅうしゅうに行けるのはうれしい。

「よし。んじゃあ工程言うぞー。」

またサヤ先輩たち恒例のあれが後にはまっているのだろうか。

「まずハカグチに6時45分集合。7時06分に出るふつうで豊橋とよはしまで行って、豊橋とよはしから7時49分発の特快米原行きに乗って米原まいばらで乗り換え。米原まいばらから9時50分発の新快速しんかいそくで大阪まで行って、大阪で昼休憩。昼ご飯食べたくないやつは食べなくていいぞ。それで12時00分発の新快速播州赤穂行きに乗って途中の相生あいおいで降りる。相生あいおいからふつうに乗って途中の糸崎で乗り換え。いと先から「シテイラナ」とかっている……。」

「略すなよ。」

「いいじゃん「シテイラナ」で。そいつに乗って広島ひろしまで降りたら17時55分発の「レルスタ」で博多はかたに19時06分だ。」

「だから略すなって。」

「もうどうでもいいわい。次行くぞ。2日目は自由研修で、全員で乗るやつはオリオンとかっているバスの21時40分発のやつ。こいつに乗って大阪が多分7時30分。三日目は大阪おおさかに着いたら自由で全員で押しかけるのは15時30分発の新快速しんかいそく。これで米原まいばらに着いたら米原まいばらで乗り換え16時59分発の特快とっかいに乗って豊橋とよはしに18時59分。そのあとはふつうであーって浜松はままつに戻ってくるっていう工程だぜ。」

「そんなんで通じだのかよ。」

「多分通じた。問題ない。」

「多分って……。おい。」

今ここにその工程を聞かされた。

「そんでもって、2日目と3日目は自由行動があるから、その班を決めてくれ。」

何とも展開の早い部活である。

その後、善知鳥先輩の言っていた自由行動の班を決めた。班は北斎院、善知鳥班。名寄、箕島班。綾瀬、醒ヶ井班。鷹倉、楠班。佐久間、諫早班。そして、永島、木ノ本、空河、朝風班となった。この班で行動し、いろんなところに行ってくる。班が決まると次はその中身を立てる。

「どこ行こうか。」

「そうだな。九州行けるんだし、いろんな所行きたいよな。」

「いろんなところって言ったって駅だろ。俺駅以外そんなに行きたいて思わないし。」

「それは私も同じ。城廻とかは箕島が喜びそうだけど、私たちはそういうがらじゃないね。」

「向こう行くんだったら九州特急とか見れるか。」

「納得だ。お前好きだもんな。ほれてるものが違うと思うけど。」

「それ言ったら空河だって同じだろ。キハにほれてるじゃん。」

「・・・。」

「ほれてる、ほれてないっていう話じゃないだろ。今はどこに行くかだろ。全員どこに行きたいんだよ。」

「正直博多から離れたくないっていうのが本音ですね。」

「博多だとディーゼルが見れない。熊本とかそっちに言って「ゆふいの森」とか「くまがわ」とか見たいなあ。」

「私は「かもめ」と「つばめ」と「有明」と「ハウステンボス」と「みどり」の写真が撮ればいいなあ。」

回答は朝風、空河、木ノ本の順。

「そんな都合のいいプランなんてあるかよ。」

「そうだけど。つうか、まだ永島がどうしたいかって聞いてないよ。」

「俺……。俺は鳥栖とすとかに行つて寝台特急ブルトレとか向こうに行く特急とっきゅう撮とつてたいなあ。」

「全員なんか写真撮りたいっていうのは変わらないんだな。」

「そうだな。」

「でも、具体的にどこに行きたいかっていうのは出てませんよねえ。」

「それはもう出てるも同然じゃないのか。朝風あさかぜは本音を言うとは多はから離れたくない。空河そらかわはディーゼルカーが撮とれればどこに行こうが関係ない。木ノ本きのもとは特急とっきゅう。俺は寝台特急ブルトレと特急とっきゅう。それで、朝風あさかぜが博多はかたから離れたくないっていう理由は寝台特急ブルトレの「富士ふじ」と「彗星すいせい」と「あさかぜ」、「出雲いづみ」、「瀬戸せと」意外完全網羅できるからだろ。」

「永島ながしまさんよく分かってます。」

あたりを見回して時刻表を持っている人を探す。

「醒さめヶ井がゐ。時刻表貸して。」

「前にあるだろ。それでいいじゃん。」

「お前のほうが近いんだからお前がそっち使えばいいじゃん。」

強引にも醒さめヶ井がゐが使っている時刻表をもらって最初のほうにあるブルーのページをめくった。これの前しんかんせんのほうには新幹線しんかんせん。真ん中に新幹線しんかんせんと特急とっきゅうの接続。後ろのほうには特急とっきゅうのダイヤ。一番後ろには寝台特急だいたいとっきゅうの時刻が記載されている。僕が開いたのはブルーのページの一番後ろ。つまり、寝台特急しんだいとっきゅうの時刻表が記載されているページだ。白の青の境目のページを開くと載っているのは「カシオペア」ほ「北斗星くんとせい」くんとせい「はくつる」の時刻。次のページをめくると左のページから「出雲いずも」いずも「瀬戸せと」せと「北陸ほくりく」ほくりく。右のページに「あけぼの」「ゆうづる」「日本海にほんかい」にほんかい「トワイライトエクスプレス」の時刻が乗っている。さらにページをめくると見開きに大きな時刻表が現れる。左ページは下り。右ページは上りの時刻。載っているのは「富士ふじ」ふじ「はやぶさ」「さくら」「みずほ」「あさかぜ」「あかつき」「彗星すいせい」すいせい「なは」。「これで分かるな。」

「今思ったけど、寝台特急フルトレって結構いっぱい走ってるんだな。」

「今でも定期列車が18往復36本。不定期が2往復4本設定されてますからね。」

「計40本か。多いなあ。」

「そんなでもありませんよ。過去には「明星みょうじょう」と「ゆうづる」がそれぞれ7往復14本設定されていた時代がありますから。」

「えっ。それだけで14往復28本。多すぎじゃない。」

「確かに多すぎですね。そのあと「明星みょうじょう」は4往復8本。「ゆうづる」は5往復10本に整理されてますから。」

「それでも多いだろ。」

「そんな話今はどうでもいいだろ。それよりこっち。いつか仕上げるべきやいけないんだから。」

「そうだった。ごめん。」

「別にいいよ。木ノ本きのもとの場合そういうこと話してたほうが楽しいだろう。久しぶりなんだし。盛り上がればいいじゃん。」

「盛り上がるのはこれが終わった後。そう決めました。さっさと終わらせちゃおう。」

「だな。」

今度は見れる寝台特急しんだいどっきゅうの整理だ。実際に行動ができるのは7時30分から8時以降。その時に博多に来る寝台特急しんだいどっきゅうは物の見事がない。

「あつ。寝台特急フルトレのそんなに空気を読んではくれないみたいだな。」

「寝台特急フルトレのKYケーワイ。」

「まあ、KYケーワイって言っても時刻表がこの通りですから。」

「そうですよ。どこかに行ってからまたとれるかもしれないじゃないですか。」

「そうだな。」

僕はしばらくその時刻表を見つめ続けていた。これは……。

「これって3日目にまわしちやえばいいんじゃないか。」

「どういうことだよ。」

「3日目にまわすと東京発着とうきょうはつちやくの寝台特急フルトレは見れないにしても大阪発おおさか

着の寝台特急は見るっていうこと。」

「ああ、なるほど。」

「でもそれって大半を捨てるってことですよねえ。」

「だってそうしなきゃダメだろ。いくらなんでも5時31分の「なは」はまず撮れない。」

「撮れないこともないんじゃないか。早起きすればいい話だし。」

「それはそうだけどね。」

「木ノ本さん。電車に12時間乗った後にまたホームに行ける自信あるんですか。」

「自信はないけど。ふつうに考えてできるってことじゃん。」

「やめとけて。木ノ本まだ体が慣れてないだろ。歓迎旅行の時も20（8）時からホームにいてずっと寝てなかったんだろ。電車の中で爆睡だったじゃねえか。」

「そうでないところもあった。これからずっとそれしてけば……。」

「いつか体壊すぞ。やめろ。」

「……。分かったよ。今回はやんないことにする。」

「で、話し戻すけど、「さくら」や「はやぶさ」や「みずほ」まで待ってたら広い範囲行動できない。」

「「さくら」と「はやぶさ」と「みずほ」が博多はかたに来るのって何時だよ。」

「全部9時台。そんなじゃ「さくら」が一番早くて、「はやぶさ」が一番遅い。」

「でも9時ならまだいろんなところいけるよねえ。」

「……。」

「確かにそうですけど、もうちょっと現実ってものを考えたほうがいいんじゃないんですか。大体「さくら」、「はやぶさ」、「みずほ」が時間通りに来るっていう保証はないじゃないですか。」

「それは安全神話の日本が何んとか……。」

「何ともならない時だってあるってこと。事故と天災にはどこをど

うあがいても勝てない。」

「そうですね。もし寝台特急ブルトレが事故を起こさなくても貨物が事故を起こしたら同じことですよ。」

「そう。だから、今回は東京発着とうきょうはつちやくの寝台特急ブルトレは切り捨てていいと思う。ここでも見れるんだから。だったら見れない大阪発着おおさかのやつを見たほうがいいだろ。」

「・・・。」

「それもそうですね。普段見れるやつ見たって機関車きかんしゃが変わってるだけだし。」

「でも、機関車きかんしゃ変わってるんだたらそっちも見たくない。こっちは見れないんだしさあ。」

「確かに見れないけど・・・。」

全員黙り込んだ。ここ浜松はままつで見れる機関車きかんしゃはEF66をはじめとする直流専用ちよくり専用の電気機関車でんきかんしゃ。九州で見れるのはED76などの交流電こうりゅうでん気機関車んきかんしゃ。EF66やEF65には青を基調とした塗装。ED76は赤をまとっている。それだけでも違うのだが・・・。

「ダメだ。好きなもの同士集まりすぎてるからこういうときまともなねえ。」

結局今日は何も進まなかった。

26列車 まとまらない（後書き）

今回から臨地研修シリーズの話です。

ストーリー中に出てくるみたいに寝台特急がいっぱい走ってたらなあ。新幹線より乗ってて飽きません。

27列車 立案（前書き）

残酷な発言がございます。

27列車 立案

翌日。

「今日も2日目、3日目の打ち合わせかあ。なあ、木ノ本^{きのもと}。なんか考えてきた。」

話題を木ノ本^{きのもと}に振ってみた。

「考えてみたんだけどさあ、昨日^{とす}鳥栖^{とす}に行くっていう話に最後なつてたじゃん。だったら鳥栖^{とす}まで行ってそこでしゃさつでもすればいいと思う。」

「しゃさつ。」

木ノ本^{きのもと}の言葉にあった「しゃさつ」という言葉が気になった。まさか……。

「おい。まさか人殺すなんてしないよなあ。」

「するわけないじゃん。永島^{ながしま}ならすぐに通じると思ったけど、通じなかったかあ。」

「なんだよその言い方。まるで俺が鉄道バカみたいに聞こえるじゃないか。」

「実質そうじゃん。」

「まあ、否定しないけど。で、何それ。」

「車両^{しゃりよう}撮影^{さつえい}。略して車撮^{しゃさつ}。」

「……。紛らわしい略語作ったなあ。車両^{しゃりよう}撮影^{さつえい}。略して車撮^{しゃさつ}かあ。」

「そう。すごいだろ。」

「どこもすごくないけどな。」

「それをスパツというなよ。」

「そんな話はどうでもいい。で、どんなの考えてきたの。俺はその工程^{こうけい}知りたい。」

「まず、8時12分の快速^{かいそく}で鳥栖^{とす}まで行く。後は車撮^{しゃさつ}大会^{たいかい}。戻ってくる列車は鳥栖^{とす}を15時23分に発車^{はつしや}する快速^{かいそく}。そのあと16時0

9分発の博多南線はかたみなみせんに乗って博多南まで行って総合車両所を見える。それで帰りは18時04分の列車っていう感じなんだけど。」

「……。」

「なんか反応してよ。」

「別に悪くないんじゃない。それで通してみる。」

「通すのはいいけど、まずは朝風あさかぜと空河そらかわの反応見てからだろ。」

「多分反対しないと思うけど。」

「いや、空河そらかわが反対しそうで怖いんだよ。空河そらかわってディーゼル好きだろ。私の計画の中ディーゼル出てこないから……。」

「鳥栖とすで「ゆふいんの森もり」も見れる。それがキハ71だかキハ72だかは知らないけどな。」

「なんだ。なら問題ないじゃん。」

「だから、きつと大丈夫だよ。朝風あさかぜが見たい寝台特急フルトレも見れるしな。」

このことを早速空河そらかわたちに振ってみた。

「なんか反対とか。こんなところ行くなんてゴミじゃんとかっていうところない。」

「別にないです。「ゆふいん」見られるだけでも十分ですから。」

「ないです。木ノ本きののほんさんありがとうございます。」

「いやあ。それほどでも。」

「浮かれてんな。通らなきゃこれボツ。また1から作り直さなきゃいけないんだから。」

計画を手帳サイズのノートに書いてアド先生に提出してみた。すると……、

「なんだよこれ。鳥栖とすまで行って写真撮って戻ってくるだけかよ。」
ダメだしたのはアド先生ではなくサヤ先輩だった。

「えっ、ダメですか。」

木ノ本きののほんが聞き返す。

「ダメってわけじゃないんだけど、行動が小さいっていうのかなあ。俺たちは門司港ももじこうのレトロうんたらとかっていうところまで行こうと

思ってるんだよ。」

「永島。門司港ってどこ。」

「えっ。門司港って……。」

鉄道知識が0に等しい木ノ本にはどういう説明をしたらよいのか。

ちよつと考えて、

「山陽新幹線の小倉って知ってる。」

「小倉。……小倉。」

どうもわからないみたいである。他に通じる言い方は……、

「九州渡ってすぐ。」

「……イメージわかないけど、何となくわかった。その近くなのか。」

「うん。」

「そっちの話は済んだか。」

するとサヤ先輩はさっきの説明を続けた。……いや、違う。

「俺たちそこに行くまで「クソニック」に乗ることになった。」

「「クソニック」って……。サヤ先輩その呼び方やめましょう。」

「いいだろ。別に。「ハイパーに問題起こす」やつらに乗るよりはましだ。」

これには首をかしげた。僕が知っている中で「ハイパー」がつく電車や車両が見つからない。それがわからないようだと思したようで、ナヨロン先輩が耳打ちしてくれた。

「783系。あれの愛称「ハイパーサルーン」。」

（なるほど……。）

「サヤ先輩。話が脱線してます。」

「えっ。あつ。話それた。ごめんごめん。」

「ところで、この計画は変えたほうがいいってことですか。」

木ノ本はそう聞いていたが、僕にはもうこれでは通る気はしなかった。

「もういいよ。また計画練ろうぜ。」

「なっ、永島。」

木ノ本きのもとは僕を呼び止めようとした。しかし、さっさと席に戻った僕を見ると僕たちのほうへもどってきた。

「聞こえてたと思うけど、この計画じゃあ通らなかった。なんか他にいい案ある。って言うてもすぐには出ないよなあ。」

「……。」

「永島ながしま。」

考え込んでいるさなか誰かに呼ばれた。僕を読んだ人は佐久間さくまだった。振り向いてみれば僕のすぐ後ろにいる。

「何。」

「お前らどこに行くってなってる。」

「鳥栖とすに行こうっていう話になってたけど、どうも通りそうになかったから鳥栖とすに行くことはやめた。お前らはどこ行くの。」

「「つばめ」に乗って熊本くまもとまで行ってくる。」

「「つばめ」っ。」

班全員の声がそろった。「つばめ」は博多はかたと西鹿児島にしかがしを結ぶ特急とくきゅうの名前。使われている車両は787系という車両で全体がシルバーに塗装されている。外見は何となくロボットを連想させそうな顔をしている。

「あ……あれに乗るのか。」

「ああ、それもここだけの話……で乗る。」

「おい。それはやっちゃダメだろ。」

「考えてることが幼稚ちういといふかなんというか。見つかったらどうすんのよ。」

「え。見つからなければどうということはない。」

「……。」

（いや、そういう問題じゃなくて……。）

なお、今ここで話されていたことは絶対に真似しないでください。犯罪です。

「熊本くまもとって言ってたなあ。熊本行って何するんだよ。」

「あすこって路面電車走ってるじゃん。それにでも乗ってこようか

なあと思つて。」

(熊本・・・)

「へえ。そうなんだ。」

佐久間とも会話はここでお開き。自分たちの計画に戻ったが、何も進行しないのは変わりない。なら・・・。

「先に3日目の計画作っちまおうぜ。」

「そうだな。2日目迷つてたつてしようがないもんな。」

「じゃあ、3日目どうするか・・・。」

全員頭を回転される。中に浮かんでくるのは昨日言った「あかつき」

「彗星」^{すいせい}「なは」をこの日に見る。

「まず、寝台特急^{ブルトレ}を見るのは必須だろ。」

「そうだな・・・。ん・・・。」

一ツ気がかりなことが浮かんだ。もしこれが本当だったら・・・。

「バスが大阪^{おおさか}に着くのは何時だっけ。」

「ゴミバスが大阪^{おおさか}に着くのは7時30分ですよ。」

「・・・。」

「どうかしたのか。」

「まずい。俺たち寝台特急^{ブルトレ}にも見放されたかも。このままいったら

「あかつき」と「彗星^{すいせい}」は見れない。」

「え。行つてゐる意味がちよつとよく分かんないんだけど。」

「おいおい。これくらい理解しようぜ。」

「木ノ本^{きのもと}さんにもわかるように説明します。まず「彗星^{すいせい}」の大阪到着^{おおさか}が7時16分。「あかつき」の大阪到着^{おおさか}が7時24分。」

「あ。なるほど。そういうことか。・・・。つて。えー。」

「死ねばいいですね。そのバス。」

「ほんとだよ。でも、バスのおかげで間に合うかもしれない。」

「なんで。」

「よく考えてみてくださいよ。鉄道は1分1秒でも遅れたらいけない。その代りにバスはそれに縛られない。どうしても高速道路の道路状況に左右されるからです。つまり、渋滞が続いていれば7時3

0分以降の到着になるということ。もし道路がスカスカですいすい通れる状態なら到着は7時30分より早くなる。」

「つまり、朝風^{あさかぜ}が言いたいのは道路がスカスカの状態であることを祈^{いの}ってこと。」

「まあ、そんな感じですよ。僕が思うにバスはゴミですから。」

バス好きの人ごめんなさい。

「よし。もし渋滞はまったらいらない車ロケランで破壊するか。」

まず木ノ本^{きのもと}がそれを言った。

「ダメですよ。ロケランで破壊したら残骸が残るじゃないですか。」

「何。残骸を残さないで車を吹き飛ばす方法でもあるのか。」

「核爆弾に決まってるじゃないですか。いらぬ車はすべて核爆弾で破壊する。」

「それ、私たちまで被^ひばくするからやめような。」

「分かった。残骸が残らなきやいいんだろ。」

「うん。まあ、そうだな。って永島^{ながしま}も核爆弾で破壊するとかつていうこと思^{おも}いついたのか。」

「いや。核爆弾だとしても俺たちが被^ひばくするじゃん。バスにクレーンをつけていらぬ車を放り投げる。今は車社会車社会とかつて言ってるけど、これからは鉄道社会になるんだぜ。地球にたまりすぎた車を一掃するにはもってこいのイベントじゃないか。」

「それ余計時間かかります。世界の車一掃するなら、全部の車の床下にプラスチック爆弾かTNT^{ティーエヌティー}を下にくっつけて、ある段階で爆破する。こうすればエンジン死ぬ。燃料タンク死ぬ。基盤死ぬの3弾攻撃が可能になる。」

車好きの人ごめんなさい。

「それやったら全員鉄道利用に切り替わるな。」

「鉄道利用に切り替わってもどうせ新幹線^{しんかんせん}利用でしょ。」

「なんか不満なのか。朝風^{あさかぜ}。」

「不満に決まっています。そんなことしてもどうせ早い乗り物にしか流れないんですから。もっと旅を楽しむとかつていうこと考えない

んですかねえ。だから現代人は視野が狭いんですよ。この年で言うのもなんですけど、僕は昔を見直す必要があると思いますね。」
（この年って。まだこいつ12だぞ。言うことはすでにおっさん化してる。）

「さっき視野狭いって言いましたけど、僕本当に現代人は視野狭いと思うんですよ。なんでそんなに早くいききたいって思うことだってありますから。」

「早くいって何が楽しいってことだな。」

「そうです。今は楽しいなんてどうでもいいっていう人がたくさんいるから新幹線しんかんせんがもうかって、それに並行してひっそりと生きている路線がどんどんさびしくなっていく。」

「でも、その対策は見つからないってことだよなあ。」

「そうなんですよねえ。どこどうやったらまがった心が折れるのか。その答えが見つからない。」

「そんな話どうでもいい。さっさと3日目上げちまおうぜ。」
そのあと話し合って3日目の計画を立てた。結果は車両撮影しゃりようさつえいの王道となった。

部活終了後。

（はあ。今日はすっかり遅くなっちゃったなあ。結局2日目の私の案はボツ。他にどんな計画立てろっていうのよ。はあ。）

心の中で溜息したかしないかの時。誰かにぶつかった。思いっきり頭と頭が衝突した。

「痛っ。」

思わず声が出る。おでこをこすりながら、

「ごめんなさ……。」

目を開けてみると、どこかで見たことのある顔だった。

「坂口さん。」

相手も目を開けると、

「木ノ本さん。」

お互いの名前を呼びあった。

27列車 立案（後書き）

今回は本当に謝罪するレだと思っています。

と言っておきながら、主人公たちがあんなことを言っているレのほうがなんか楽しい気がします。

話は変わりますが、このレの前までの文字数を原稿用紙の400字で割ってみました。その結果原稿用紙に空白なく文字を埋めても338枚相当になることが分かりました。いつの間に自分ってこんなに書いたんだろう・・・。

28列車 進路の密勅

頭をぶつけた彼女は坂口さかくちだった。先日行われた文化祭でもう顔は知っているが、こうして会うのは初めてだ。

「ごめんね。ちゃんと前見て歩いてなかったから。」
坂口さかくちがまず謝った。

「いや。分かるよ。ここに来たら絶対あっち向いて歩くのがふつうだからなあ。」

ここは遠鉄百貨店と浜松駅はままつ前のMAY ONEの間メイワン。遠鉄百貨店側から見て左手側に遠鉄バス浜松駅はままつ前。右手側には浜松駅はままつの1番線が顔をのぞかせている。坂口さかくちも木ノ本きのもともここを通る時は必ず浜松駅側を見たまま歩き、何か列車が来るといいうアナウンスが聞こえたら足を止めてくるまで待つ。それが4月からの日課になったのだ。

「あつ、やっぱり木ノ本きのもとさんもやるんだ。」

「ここを通るときにタダで通るなんてことができるかよ。」

するとホームからアナウンスが聞こえてきた。しばらくそのアナウンスに耳を傾ける。その声はこういつている。

「間もなく、1番線を、貨物列車が、通過します。黄色い線の内側までお下がりください。」

「貨物かあ。どうせEF210（桃太郎）だろうなあ。」

「そうとも限らないんじゃない。EF66とかEF200が貨物列車引くことだってあるし。それにEF65だってゼロじゃないよね。」

（ほんと。前会った時もそうだったけど、坂口さかくちさん進路間違えたんじゃないのか。このレベルだったらふつうに岸川きしかわに来ていいレベル。今鉄研やつても十分通用する。）

「じゃあ訂正。高い確率でEF210（桃太郎）だ。」

1・2分その場で貨物列車の通過を待つ。すると豊橋側とよはしから甲高いホイッスルの音が聞こえ、前面が青で、パンタグラフの形がV字形

になっている機関車を先頭に貨物列車が通過していった。

「EF210（桃太郎）。」

「違うよ。EF200だよ。今のは。パンタグラフがV字形になってたでしょ。EF210のシングルパンタはああいう風になってないよ。」

（パンタグラフだけで機関車の違いが分かるってどういう人・・・）

いつか自分もそうなるんだと薄々感じながら、いま隣にいる同じ女子鉄を見つめる。

「どうかした。私の顔に何かついてる。」

「いや。そんなことないけど・・・。ていうか、どっか座って話さない。ずっと立ってるってつらいでしょ。」

「そうだね。どこ行こうか。」

「そこら辺のベンチでいいだろ。」

これは坂口のほうは嫌だったらしい。

「だってお腹すいたもん。それとも、家にごちそうが待ってるの。」

「それない。ちょっと待って家に電話する。」

坂口さかぐちに断わって家に電話し、夕食をどっかで食べていくという確約を取り付ける。その後坂口さかぐちと一緒に近くのマックスに入った。

テーブルに座ると対岸に座ろうとしている坂口さかぐちの姿が目に入る。

そして、文化祭で言った言葉が再生された。

（私・・・。将来は運転手になりたいと思ってるんだ・・・。）

その時彼女はこういった。永島ながしまも将来は運転手になることを見据えているのだらう。そして彼女もそうなりたいと思っている。こういう状況なら同じ岸川きしかわに通学するのがふつうのはず。なのに、なぜ彼女は岸川きしかわではなく宗谷そうやに通学しているのか。そのことがどうしても気になった。

「なあ、何で永島ながしまと同じ岸川きしかわじゃなくて、宗谷そうやに通ってるんだ。」
いつの間にかその口が勝手に開いていた。

「ナガシイがさ、私の夢をかなえるためには宗谷そうやに行くのが一番だ

って言われたから。」

（理由はそれだけ……。）

「なんで。坂口さかぐちさんが成りたいのは電車の運転手でしょ。今それに一番近いことができるのは岸川きしかわじゃない。なのに。なんで宗谷そうやなんだよ。」

「……。」

坂口さかぐちからの回答はなかった。また言葉をつづけようとすると、

「あのさあ。木ノ本きののほんさんならいえることかもしれないけど、将来自分が電車の運転手になりたいって言える。」

「……。そ……それは。」

ほんの少し前の自分が思い浮かぶ。少なくともその時の自分にはこんなことは言えなかった。

「私には……ナガシイには口が裂けても言えるようなことじゃない。ただ……。ストレートに言えばいいだけだけど、どうしてもこれはなんか言っちゃいけないような感じがする。」

「なんでだよ。」

（永島ながしまが見てたのは坂口さかぐちさんの表面だけなんだ。だったら早くその気持ちに気付かせてあげなきゃ。永島ながしまは……私が入部を決めたときこういった。何に興味持とうがそんなの関係ない。なら、何に成ろうがそんなの男女関係ない。そうもとれる。）

「あんたの彼氏はこういつてたぞ。何に興味持とうがそんなの男女関係ないって。同じことだろ。何に成ろうがそんなの関係ない。何ためらってるわけ。本当になりたいって思ってることなら話すべきだろ。」

「……。」

また坂口さかぐちからの回答はない。しばらく黙り続けて、

「本当のことだから、いつか話さなきゃいけないとは思ってる。でも……、ナガシイにはずっと嘘ついてきたことになる。普段そう見えなくてもナガシイ嘘とか嫌いな。ずっとナガシイをだまし続けた、私を簡単に認めてくれると思う。」

（あいつならそんなこと気にしないと思うのに。やっぱり古い付き合いだから。それならこういう状況でどういう答えが返ってくるかはわかるはず……。なるほど。返ってくる答えが怖いから言えないんだ。）

「怖いんだな。」

「うん……。」

さかぐち坂口の声は一段と小さくなった。

「分かるよ。」

同じような境遇にずっと立たされていた自分を語りたくなる。

「私もずっとそう思ってた。私は成っていいのかって。周りの大人はさあ、みんなその考えに拍車をかける感じでそんなのになるなか、もっと女の子らしいことしなさいとかって言うてる。どんどん周りに道を崩されて、ついにはそんなのになっちゃいけないって思えてもきた。でも、ちゃんと見方もいるんだってわかった。私の母さんもそうだけど、ちゃんと自分が好きなように導いてくれる人もいる。今の私はあいつのおかげでいるようなもの。」

「……。」

さかぐち坂口は黙ったままにいる。木ノ本がさらに続けようとすると、

「もういいよ。」

さかぐち坂口がその先の言葉を遮った。

「ナガシイが言ったこと半分は本当だった。閉じこもってなければ私と同じって。でも私も同じだったんだなあ。ずっとその重圧に押しつぶされて言えなかった。」

もえ萌は自分に言い聞かせるように独り言を言った。言い終わると瞬きをして、

「木ノ本さんのおかげで私も迷いが晴れたと思う。ナガシイの言うことは当たってる。これからはもう迷わない。自分が思ったように進む。」

「……。」

「でも……。思ったように進むって言っても私はどこに進んでい

いのかわかない。浜松はままつにある国際観光こくさいかんこうとか大原おおはらとかに行ってもろくなものにはなれない。だから、木ノ本きのもとさんにナガシイの進路のことを詮索してもらいたいんだよねえ。」

ずっこけそうになる回答だった。

「なんで。すぐに永島ながしまに話すとかじゃないの。」

「今話して何がどう変わるのよ。私がただその進路に行きたいって言っても変わるのは3年後。だったらそこまでにやること、知っておきたいことがあるの。」

（確かに。坂口さかぐちさんには鉄道関連の進路でどんなものがあるかなんてわからない。そのために永島ながしまの詮索・・・。）

「調べてほしいのはナガシイの進路のこと。進路がわかれば後は私は何とかする。もちろん、その時に言わなくちゃいけないことも話す。それに、もしそれまでの間に話すきっかけができればその時いう。」

「でも永島ながしまの進路がわかってても、行きたいって思ってる学校がいくつもあつたらどうするの。」

「そこは、大丈夫。ナガシイは行く学校は必ず一つだけに絞る。そこ以外行く気ないから。」

これも疑わしい情報だ。でも、永島ながしまが岸川きしかわを単願で受験したということ・・・なら坂口さかぐちがこういうことも分かる。

「だから、答えが出るのは少なくとも3年生の春。その時までに進路が決まってなかったらその段階でそれは言う。」

「でも、そこまでは永島ながしまには話さないってことだよなあ。」

「それはそうだけど・・・でも、進路のことなんて今から考える人なんて私以外いないと思うし。」

（そういう問題じゃなくて・・・。）

「それに、私を本気にしてくれたのは木ノ本きのもとさん。私、今までこんなに本気でこの進路のことなんて考えたことなかった。でも今は違う。夢を実現させるためならなんだってする。でも、そこまで行く工程を知らなかったら何にもならない。協力してほしいの。」

「……」

ため息が出た。心のどこかで、押されきった感覚があるからだ。

「分かった。同じ進路を志す仲間として協力する。」

「決まり。じゃあ、メアド交換しよう。」

坂口はポケットから携帯電話けいたいでんわを取り出した。形は何かどこかで見たことがある。……永島ながしまの携帯電話と同じなのだ。

「あれ、同じ携帯。」

「あつ、そうなんだ。ナガシイの場合性能とかそういうので携帯選ケータイばないからなあ。多分形だけで見ればこれかなあって思ったんだけど、マジで同じとは思わなかった。」

「……」

（坂口さんには永島ながしまの思考回路全部がコピーされてるのか。）

「て、そんなことどうでもいい。」

自分が言いだした言葉に歯止めをかけて、赤外線受信の機能を起動させる。

「ああ、あと。私のことは萌もえって呼んでいいからね。」

自分も携帯を出そうとしているときにそう言われた。

「木ノ本きのもとさんって何て呼ばれない。部活の中じゃハルナンだったよねえ。でもハルナンは嫌だよねえ……。じゃあ、榛名はるなちゃんでもいい。」

「……。なんでもいいよ。つうか、いまその話関係ないでしょ。」

この後二人はアドレスを交換し、進路が確定するまで永島ながしまには秘密で計画を押し進めていくことを正式に決めたのだ。

翌日。宗谷学園そうやがくえんでは……

「うーん。確か今日浜北で入れ替えた編成やつが1001で、上島かみじまで入れ替えたやつが2003で、八幡はちまんで入れ替えた編成やつが1007と1005で、乗ってきた編成やつが2004と2002。今日は1001と1005と2002が車庫に入って、2003と1007と2004がふつうに走る……」

今日はなぜか独り言を言っている。それが気になって黒崎くろさきが話しか

けた。

「今日はどうしたの。なんかさっきから1001がどうの言ってるけど。」

「えっ。ああ。帰りに乗る電車何かなあって思ってた。」

（やっぱりそれなんだ。）

「帰るときに乗る電車なんてわかるの。」

「そんなの簡単だよ。たくさん乗ったらどういいう運用してるか一発で分かるし。」

（それが一発で分かるって。相当イッテルよなあ。）

「でも、遠江急行だけはわかんないなあ。あれ先頭の右側のところに小さく編成番号が書いてあるだけだから。あれさえわかればどういいう運用してるかわかるのに。」

「・・・。」

話には到底ついていけないと思いその場を離れた。

「15時42分に来るのが2003で、54分に来るのが1007。16時06分に来るのが2004。部活もやってないからそこまで待つのはちよつとなあ。」

「・・・。」

席がちよつと離れている萌の友達。端岡に今のことを振ってみた。

「ねえ、夏紀。萌どうしちゃったのよ。」

「何。何か変なことでも言ってるの。」

「変なことって言えば、少し変かなあ。さっきから1001がどうのこうなとか一人で喋り捲ってるし。」

「・・・。」

「ねえ、早くどうにかしたほうが・・・。」

「いいよ。あのままで。」

端岡から返ってきたのはまずそれだった。

「多分、何かに目覚めたんだと思うなあ。元気がないってちよつと心配してたけど、あれだったらすぐに立ち直るね。」

「・・・。なんだよそれ。萌が独り言多い時は元気っていう一種の

バロメーターか。」

「そんな感じかなあ。」

「何に目覚めたんだろうなあ。」

黒崎が端岡くろさきはしおかに聞いた質問の回答は蘭田そのだから返ってきた。

「きつと電車の運転手だよ。」

「えっ。まさか。あれって男の子が成るもんだろ。ふつう女の子が就くような……。」

「確かに。女の子が就くとしたら新幹線しんかんせんの乗務員クルーとかだろうな。」

「でも、今ならそんなの関係ないんじゃない。ていうかそこで差別とかしてたら絶対問題になる。それに私たちに偏見があるかもしれないじゃん。」

「……そうだな。」

「ああ、もういいや。2003（こいつ）で。」

「……。」

28列車 進路の密勅（後書き）

ちよつと強引過ぎたかなあ・・・。

でも、アマチュアの小説ですし、アマチュアみたいなまわし方って
いうのもアリなんですよねえ・・・。

本編中で結構バカにしていることが多いですが、現実でも同じという
ことは全くありません。

29 列車 工程 テスト

その日の放課後。岸川^{きしかわ}学園では・・・、

「今日は2日目の工程上げちまうぞ。」

僕がみんなをまとめる。

「ところで、みんな何か考えてきた。」

「全然浮かびません。ディーゼルに乗りとうとするとしても。」

「大体形は考えてきたんですけど、自分が納得いくようには。」

「あっ。考えるの忘れてた。」

「まあ、木ノ本^{きのもと}の場合無理ないよなあ。昨日考えてきたのがボツになったわけだし。そんなにポンポン考えが量産できるような人じゃないしね。」

「・・・。」

何か今日は永島^{ながしま}と話しづらい。萌^{もえ}があそこまでしたい理由が自分の中では一つしか見つからないからだ。自分のほうははるかに彼女より短いのだが、そう思ったことがあるというのは事実だからだ。しかし、話さなくてはならない。鉄道の話に置いて口数が少ない自分は異常。心配かけまいと思って口を開いた。

「そんなの誰でも同じだろ。あれ、相当自信あったんだから。・・・。そういう永島^{ながしま}は何か考えてきたのか。」

「全然。」

（即行否定かよ。）

「でも、昨日佐久間^{さくま}が熊本^{くまもと}行^いくって言ってたじゃん。あれの行先だけパクって行^いこうかなあと。」

「行^いこうかなあって。熊本^{くまもと}にですか。」

「パクっててことはずっと各駅ですよねえ。」

「ああ。それで、いちばん最後のほうは木ノ本^{きのもと}の案も少し入れた。で、これで本当に回れるのかわかんねえから、今から時刻表で調べ^{しら}べてわけ。」

「こら。ちゃんと調べてから来いよ。つうかちゃんと考えてきてるじゃないか。」

「まあまあ。そう怒らずに。じゃあ、醒ヶ井さめがい。時刻表貸して。」

「だから。前にある時刻表取ってくればいいじゃん。」

「お前のほうが前の時刻表に近い。それに取りにいくの面倒だし。」

（さすが。金持ち出身の人だなあ。）

「いいよ。私が取ってくる。」

これをやり続けていてもらちが明かない。そう思った木ノ本きのもとが時刻表をとってくる。その時刻表を渡されて、

「えーと。鹿児島本線かごしまほんせん、鹿児島本線かごしまほんせん。えーと。あった。」

見つけて開くのをやめたところ、開かれたのは鹿児島本線かごしまほんせん「上り」のページ。このページは「上りやつしろ（八代一門司港もじこう）その3」となっている。前にページをめくって、鹿児島本線かごしまほんせん「下り」のページを出す。

「えっと、まず。8時11分発の快速荒尾行きかいそく あらおで、荒尾あらおが9時26分。」

小倉方面こくらからきている快速列車かいそくは大牟田おおむたの一つした。荒尾あらおという駅でその先に時刻の表示がない。これはここ荒尾あらおが終点だという証。当然列車を乗り換える必要がある。荒尾あらおをさした指を右に動かす。右側に行けばいくほど時刻は遅くなる。一本「特急つばめとっきゅう」を挟んで9時44分。普通列車やつしろ八代行きがある。これに乗ると途中熊本くまもとには10時32分。この先八代まで行こうと思えば八代まで行ける。だが、あえてここでとめることにしよう。

「熊本くまもとまで来て10時32分かあ。この先どうするんだよ。」

「熊本くまもとって市電があるんだよ。」

「しでん。」

木ノ本にはそれがわからなかった。まだ元の知識量に戻ってない。

「路面電車ですよ。木ノ本きのもとさんそんなことも分かんないんですか。」

「空河そらかわ。後でシバカレたい。」

「嫌です。」

「その話は置いて、それ乗りつくして、帰りはどうしようかなあ。全部乗りつくすって言ってもそんなにかからないよなあ。なら、13時57分発の普通鳥栖行きに乗って……。」

出る言葉がなくなった。終点鳥栖到着は16時05分。長いのだ。

「これ快速運転やってくれませんかねえ。」

「やっちゃくれないだろうな。」

「この間だけでも「つばめ」とか「有明」とか使いましょうよ。」

「金かかるからやめよう。よし。そこでこれに乗って、鳥栖が

16時05分。これで言って一番早く行ける列車が快速小倉行き。

こいつに乗っていくと博多に16時58分。これに一番早い博多南

線は……。」

ページを白い部分の真ん中あたりから前よりの青いページに変える。

東海道・山陽新幹線の下を探っていたが、博多南線の表示はどこに

も見つからない。散々探して、いま開いているページは「東海道・

山陽新幹線上り その7」。仕方がないので、ページを前に送って

青いページよりも前のページを開いた。ここにはいろんな情報が乗

っている。それはホテルや臨時列車の時刻など様々。しばらくめく

っていくと東京首都圏の拡大された路線図が出てきた。もう1ペー

ジめくると北海道がでかかと載っているページ、次は東北地方、

関東地方、中部地方、近畿地方という風に分かれている。これの九

州地方が乗っているページを出して、博多南線をおった。

(444ページ。)

ページ数を記憶して、そのページまでページをめくる。そのページ

には左上に小ぢんまりと博多南線が載っていた。

「これで一番早い博多南線が17時29分で、博多南着が17時3

9分。これで返ってくるときは……。19時04分のやつでは方

が19時14分。完璧。」

とりあえずこんな感じで頭の中にあった案はこれでようやく実体化した。

あとはこれをアド先生に提出するだけ、

「はい。分かりました。」

この反応は通ったということと受け取っていいらしい。

「永島君。^{ながしま}3日目はどうするつもりですか。」

「えっ。3日目は大阪か新大阪^{おおさか}に缶詰めのつもりですけど。」

「ナヨロンじやあるまいしよくやろうとするな。死ぬぞ。やめとけ、やめとけ。」

そういったのはサヤ先輩だ。

「人を鉄道バカみたいに言うなっつうの。」

「そう言っただって何の説得力もないわ。どこからどう見たって鉄道バカじゃないか。」

「・・・。」

「おいおい。二人ともやめろ。」

アヤケン先輩が仲裁に入った。

「ナヨロンはどこからどう見ても鉄道バカっていうの認めろよ。」

「本人否定してるところであっさりというな。」

「そして、サヤは鉄道好きの天然の際物好きって認めろよ。」

「際物好きってなんだよ。」

「・・・。」

「まあ、そんな話どうでもいいや。でも、このプランからすると、「Red Diesel^{レディー}」とか見ないんだな。」

「「レディー」。」

この言い方には疑問を持った。まず何を言いたいのかが分からなかった。

「あの、名寄先輩^{なよろ}。」

何か心当たりがあるらしく、空河^{そらかわ}が名寄^{なよろ}に話しかけた。

「もしかして「キハ200」のことですか。」

「すっ・・・すごいなあ。通じるやつがいた・・・。」

さすがにこのことまでは予想していなかったようだ。面喰^{めんくら}っていた。

キハ200というのはJR九州^{きゅうしゅう}のディーゼルカーである。この車両は働く線区^{せんく}ごとに色分けされており、赤と青と黄の3色がある。

今、ナヨロン先輩の言ったのは赤いキハ200のこと。他の色は「Blue Diesel」「Yellow Diesel」とあだ名をつけているようだった。

6月24日。佐久間の班が原案を出し、これで全部の班の自由行動の計画が出された。これでテスト前の部活は終了。次の部活はテストが終わってからになる。ここまでくれば一時は安心していいそうである。後はただ、その日が来るのを待つだけだと言っていた。

7月上旬。そうそうテストだ。

「なあ、宿毛。ここ教えてくんない。」

数学？の教科書を持って宿毛のところまで行く。

「お前なあ。数学じゃなくて国語勉強しろよ。国語。」

「いいじゃん。国語なんてどうにでもなりそうだし、それにこれわけわかんねえ。」

「分かんないとかって言うっておきながら、理解してる。お前に多いパターンじゃないか。」

「そ・・・それで教えてくれないとでもいうのか。」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・。」

「じゃあ、教えて。」

「はいはい。」

（学年トップが縋り付いてる・・・。）

そう思いながら、宿毛とのやり取りを見た。

1時間後・・・、

「宿毛、今度はこれ教えて。」

「はっ。それ教えるもんかよ。覚えろよ。お前の短期記憶最強なんだから。」

「いいじゃん。なんか問題出して。」

「問題かあ。じゃあ、生殖細胞ができるときの分裂の名称。」

「減数分裂だろ。」

「正解。次。相同染色体どうしが平行に接着するようになった染色

体は。」

「えーと……。二価にか染色体せんしよくたい。」

「正解。問題出すまでもないだろ。」

「いいからもっともっと。分かんないから。」

「ウソじゃん。」

ずっと問題を出し合って7分後。

「あ、覚えらんねえ。」

「ウソつけ。覚えてるだろ。永島ながしま。今回も生物100点取ったら殺

すからな。」

「大丈夫。今回は取れないから。」

「嘘くさいんだよ。」

「ハハハ。」

「ハハハじゃねえよ。まったく。」

また1時間後……。同じことを繰り返して今日は終了。次の日も同じだった。そして数日たつと……。、

(ゲッ。)

「おい。俺に縫り付くからこういうことになるんだよ。縫り付かなきゃよかったものを。」

耳で宿毛すくもが悪魔みたいな声でささやいた。

「結構できてたと思ったらまたこの結果だもんなあ。なんで宿毛すくもが上じゃないんだよ。」

「知るか。俺のほうはあれだけ勉強してきた結果がこれっていうふうに腹が立つ。」

「。。。。」

「まあいいや。次で抜けばいい。」

「だな。次で抜かれればいい。」

(一番上っていうのがよっぱど気に入くないみたいだな。)

その昼……、

「今回も学年トップって宿毛君すくもっていう子なのか。」

木ノ本きののほんがその話題を振った。

「あつ。木ノ本^{きのもと}まだ知らなかったんだ。」

木ノ本^{きのもと}の対岸に座っている箕島^{みしま}が口を開いた。

「宿毛^{すくも}っていう人が学年トップっていうのは嘘なんだよ。本当の学年トップは・・・。」

箕島^{みしま}は視線を永島^{ながしま}のほうに向けた。

「それ言うなって。」

「マジ。学年トップってこいつなのか。」

「そうだよ。」

疑問には佐久間^{さくま}が答えた。

（マジかよ。今までずっとバカっていう方面で同類って思ってたのに。そもそもなんでそんなに頭いい人が岸川^{きしかわ}に来てるわけ。）

「まあ、ほかの高校狙う気もなかったし、行くの面倒くさかったし。」

「ここは面倒じゃないんだ。」

「うん。ここはね。遊ぶために学校来てるし。」

「そりゃ目的が違うだろ。」

「まあ、いいじゃん。人それぞれ目的が違うっていうのはふつうだし。」

（こいつの場合それがふつうって言うてもふつうじゃないように聞こえる。）

その日の放課後。ソフトボール部。

（ダメだ。なんかやる気しない。でも、夏の大会も近いんだし、どうにかついて行かなきゃ。でも・・・。なんだろうこの気持ち。今までそんなにきつくなかった練習がこんなにきつく感じるのは・・・。）

この頃木ノ本^{きのもと}の表情がともうらやましく思えるのだ。

29 列車 工程 テスト (後書き)

ようやくここまで来ました。

結構現実と違うところ目はつぶりたくなるほどでした
かねえ・・・。

30列車 浜松く米原

8月8日。ついにその日がやってきた。

(今日から行ってくるのかあ。)

それを思いながら萌にメールを打った。

「今日から、博多に行ってくるよ。」

文面はそれだけにした。

6時21分。浜松駅の改札前に到着する。集合時間は6時45分。

まだたつぷりと時間がある。

「おーす。永島・・・。」

木ノ本が既にそこにいた。

「木ノ本早いな。」

「だって4時に目が覚めたんだもん。」

「早っ。」

「早って。しょうがないだろ。」

「・・・。」

「お前ら、早すぎだぞ。」

横から声がした。ナヨロン先輩だ。

「ナヨロン先輩。おはようございます。」

「つうか、永島気付かなかったのか。同じ列車に乗ってたのに。」

「あっ、そうだったんですか。」

「張り切ってるなあ1年生諸君。」

今度は善知鳥先輩の声だ。

「そう言う善知鳥も張り切ってるなあ。」

「だって博多(HKT)いけんだよ。そりゃあワクワクするって。」

「まあ、新幹線ではいけないけどな。」

「ああ、そこだけ嫌だな。」

「・・・。」

6時40分までの間にサヤ先輩と佐久間以外は全員そろった。

「サヤのやつ何してんだろう。」

「いつものことだろ。サヤって時間通りに来た例ないじゃん。」

アヤケン先輩と善知鳥先輩うとうがまだ来ないサヤ先輩に文句を言っていた。その会話を聞いている傍らかたわでナヨロン先輩がその姿を探した。

「あつ、来た、来た。おい、サヤこっちだぞ。」

そう呼ぶとサヤ先輩が走ってきた。

「ナヨロン。俺そこまでバカじゃないぞ・・・。」

集合場所まで来るとそう言っていた。

6時51分。佐久間さくまが6分遅刻してきた。だが、これで全員集合する。全員の集合が確認できるとアド先生が全員に「青春18切符せいしゅんきっぷ」を渡した。

「18切符」を渡されるといさんでホームに向かった。よく聞くことだが、「18切符」には年齢制限があるみたいなことを思っている人が多いらしいがそんなことはない。それを補足しよう。ここから7時06分発。普通岐阜行きふつぎふに乗車する。ホームに上った時間は6時55分。まだその列車は4番線にいない。

「永島ながしま。」

ホームに上がると佐久間さくまが聞いてきた。

「何。」

何のことだろうと思った。

「列車まだ。」

「・・・。」

何を言うのかと思えば・・・。

「まだに決まってるだろ。乗る電車が出るの7時06分だろ。まだ11分あるし。」

醒ヶ井さめがいのツツコミが入った。

7時05分。4番線に列車が入線してきた。東京方面とうきょうほうめんに顔を向けていると、黄色っぽいヘッドライトの車両がこっちに入ってきた。

「311系だ。」

入って来る列車を知っている僕はただつぶやいたつもりだった。だ

が、そうとう声が大きかったらしい。皆からはどうしたというような顔で見られてしまったが、そんなことは関係ない。

「へえ。311系サンイチイチっていうんだ。211系ニイチイチかと思ったよ。」

これには驚いた。撮り鉄の木ノ本きのもとなら分かっていると思ったからだ。

「えっ。木ノ本きのもと知らないんだ。」

「私、こういう奴やつあんまり知らないんだ。313系サンイチサンは分かるんだけどね。」

と言っていた。

311系が4番線にブレーキ音を立てて止まった。停まって1秒くらい経つとドアが開く。その開いたドアから降車こうしゃする客を待って車内に乗り込んだ。車内は半分くらいの混みだった。311系の転換クロスシートはほぼすべて埋まっており、僕達は仕方がなく、ドア付近に固まった。

「4番線ドアが閉まります。ご注意ください。」

「東海道線とうかいどうせん、下り、普通列車ふつう岐阜行きぎふです。ドアが閉まります。ご注意ください。」

ピンポン、ピンポン。発車前のやり取りが聞こえてくる。ドアが閉まると311系はカックンと揺れて浜松駅はままつを発車した。ここから終点博多までは12時間の工程である。

7時38分。まずは豊橋とよはしまでコマを進めてきた。ここ豊橋では特別快速米原行きべつかいそくまいばらに乗り換える。そのために移動をしなければならい。そのためにドアの前にスタンバイした。

7時39分。豊橋とよはしに到着。311系が入線したホームは7番線。ここからダッシュで隣の5番線に行く。

ピンポン、ピンポン。ドアが開いた。ドアが開き切るのを見計らって飛び出した。

7番線を見ると始まったばかりのマラソンのように人でいっぱいだった。

（サヤ先輩達は。）

考えながら足を動かす。何秒たっただろうか。ハクタカ先輩の姿を

とらえた。その後ろ姿をおって階段を駆け上がる。階段も人でいっぱいだ。走って上るのは少しきついくらいはいるだろうか。ハクタカ先輩の姿を見失わないように走ってその後を追った。

階段を上るとハクタカ先輩の姿が左に消えた。特別快速の発車するホームは5番線。5番線は7番線の北側にある。僕も階段を上りきると左にかじをきった。そのころにはハクタカ先輩は5・6番線に通じる階段を降りようとしていた。その階段へ僕も急ぐ。こっちの階段はほんの少し空いていた。人の間をかいくぐり、階段を駆け足で降りた。階段の中腹。踊り場まで来ると5番線に停まっている特別快速が姿を現した。その時、ハクタカ先輩がそこに吸い込まれるように入っていった。

5番線に停まっていたのは313系という通勤電車だった。この車両はJR東海の通勤電車でその顔と言っても過言でないほどの車両が在籍している。今のった車両は5000番台という区分で、車両と車両の間に車体間ダンパを装備している。そうそう、さっき降りた313系はこの313系が登場する前の特別快速に充当されていた車両である。そのため、この二つは内装が非常によく似ている。車内に乗り込むと開いている席を急いで探した。もう40%（パーセント）くらいの席が埋まっている。乗り込んだドアから一番近い席に腰を下ろした。

「永島さん。隣いいですか。」

空河に声をかけられた。ずっと僕の後ろをおっていたのだろう。僕は「窓側がいい」と言って空河に譲った。

7時49分。313系のドアが閉まり、軽快な音とともに動き出した。列車は車体をよじって上り線から下り線へと入って行った。

この時に途中停車駅の案内があった。

蒲郡、岡崎、安城と停車していく。安城まで来ると立っている客が僕達の前の視界を遮った。このころになると、何となく席を立ちたい気分になった。

「んっ、ナガシイどうした。」

「いや、何となくたっていたんだけど・・・。」
「座つとけて。こっから長いぞ。」

サヤ先輩の言うとおりだ。まだ1時間くらいしかたっていない。

「いえ、サヤ先輩達も座つといた方がいいですよ。」

「いいよ。後輩に言われて座る先輩がどこに・・・いた。」

サヤ先輩の顔が引きつっていた。見てみるといつの間にか善知鳥先輩が僕の座っていたところに座っていた。

「いいじゃん。立ってるの疲れたんだから。」

「いや、そうじゃないだろ。」

「いえ、いいです。僕は次ので座りますから。」

「永島、そう思っとかないほうがいいぞ。」

僕から見ると左側にいたナヨン先輩がそう忠告した。

「えっ、なんで。」

「関西の新快速って結構需要あるみたいだから、座れないかもよ。」

「223系なら座れなくてもいいって。」

（何、すべては車両。）

「ふうん。永島って223系好きなんだな。」

「はい。僕が一番好きな車両ですから。」

「じゃあ、一つ聞いていいか。」

「なんですか。」

「223系なら「関空快速」か「新快速」か。どっちがいい。」

「断然223系—1000番台です。」

その後ナヨン先輩とはこんな話になった。

8時37分。名古屋に到着する。名古屋では客の入れ替えがあり、僕は自分の席に戻った。善知鳥先輩はというと開いた他の席に移っていた。

木曾川あたりに差し掛かったころだっただろうか。隣をグレーとオレンジのラインが目立つ車両が隣を通った。

（「しなの」かなあ。でも、なんでここに・・・。）
頭の中に考えを巡らせていた。

9時09分。大垣^{おおがき}に到着。ここで後ろにくつついていた313系を切り離して、さらにその先を目指した。この列車が終点米原^{まいばら}に到着したのは9時48分だった。そして、この先にコマを進めるためには2分後に発車する新快足姫路^{しんかいそくひめじ}行きに乗車しなければならなかった。

30列車 浜松～米原（後書き）

今回は結構説明文が多くなってすみません。後これまでより作風が固いと思われませんが、読んでくれる人には感謝。

31列車 裏切りと「トワイライト」と死亡

9時48分。米原まいばらに到着。2番線に入線すると反対側3番線にはすでにシルバーの車体かまが構えていた。構えていたといってもドアが開いているわけではなかった。

（発車時刻でもないのに、なんでドアが閉まっているのだろうか。）
と思いながら、313系から降りた。隣に行くと、なるほど納得できた。隣にいる223系に乗り込む人は一樣にドアの横にあるボタンを押して乗車していった。ここでは半自動はんじどうでドア開閉かいへいを行っているらしい。

9時49分。僕の班が全員いることを確認した。

9時50分。ティントウーン、ティントウーン。開いたままだったドアが一斉いっせいに閉まった。ドアが閉まると甲高い息抜きかんだかのような音がした。ブレーキが解除かいじょされる音だ。この音が頭の遠くで聞こえるようになると、床下のモーター音を発し始めた。音階おんかいが少し変わろうとしているところには既に米原のホームを後にしていた。

傍らかたわに「300X」エックス「WIN350」ウイン「STAR21」スターが見えてくるころ、大阪までの途中停車駅とちゅうていしやえきが告げられた。この案内の途中に新快速は右にかじを切り、新幹線の高架橋をくぐって、次駅彦根じえき ひこねへと急いでいた。

「ナヨロン先輩。さっきのこと聞いとけばよかったと思いました。」
足の裏が少し痛かった。

「だから言っただろ。新快速は結構需要があるって。大阪までこのままだっと思っていただけの方がいいぞ。」
ナヨロン先輩にはそう怒られた。

この先、この新快速に揺られること83分。11時13分には大阪駅おおさかに滑り込んだ。この列車にはそんなに長い間乗っていたという感覚かんかくがなかった。むしろ、新快速の方が新幹線よりも速いのではないかと錯覚さくかくしたくらいだった。

ホームに降り立つと衝撃的な事実が目飛び込んできた。

(ウツ・・・ウソだろ・・・)

後ろに連結されていたのは僕の好きな223系。1000番台。

(そんな・・・。1両後ろだったら、こいつに乗れていたのか・・・)。

何も言うことができなかった。

11時15分。1000番台の後姿を見送って、全員が集合しているところに行った。

「聞け諸君。12時発の新幹線に乗るからな。みんなここに集合しろよ。」

善知鳥先輩が右手を上げてみんなに教えている。

(新幹線・・・。新快速じゃなくて・・・。)

「それでは、皆さんお昼にしてください。ええ、ここには11時5分ごろに集合してください。」

アド先生の説明を受けて解散した。

「なあ、善知鳥。今お前新快速じゃなくて、新幹線って言ってただろ。」

「まあいいんじゃないか。俺達には間違えられても通じるし、どんなバカでもここから乗る列車は新幹線じゃないってわかるから。」

耳の遠くで聞こえている。

「永島、「トワイライトエクスプレス」見に行かないか。」

誰かにそう話しかけられる。

「永島。」

木ノ本が僕を覗き込んだ。その時になって今話しかけてきたのが木ノ本だと分かった。

「なっ・・・何。」

「何じゃないよ。「トワイライト」見に行かないかってこと。」

「ああ、「トワイライト」かあ。うん、見に行こう。」

僕はすぐに賛成した。

11時30分ごろだっただろうか。大阪駅の10番線に「寝台特

急トワイライトエクスプレス」が入線してきた。編成はEF81-113号機を先頭に10両の24系寝台客車が続く。この列車も寝台特急と呼ばれているため、ブルートレインの仲間である。しかし、その車体はブルーではなく深緑で、ブルートレインと呼ばれた時の面影は車内で寝ることができる以外残っていない。

「永島。これ乗りたいって思わない。」

「ああ・・・。」

（できれば萌と一緒に・・・。）

いつか乗りたいと思いながら、先頭のEF81を携帯に収めた。

「木ノ本達も来てたのか。」

その声が「トワイライトエクスプレス」の方からした。ナヨロン先輩とアヤケン先輩だった。

「はい。」

「「トワイライトエクスプレス」。いつか乗りたいよなあ。」

「やっぱり乗るんだったら、一番後ろですか。」

「そうだな。乗るんだったら一番後ろだな。」

一番後ろの車両はスイートルームと言って「トワイライトエクスプレス」に二つしかない部屋の一つがある。

「まあ、その前に名寄は彼女ができるかどうかだけだなあ。」

「うっさい。」

「木ノ本、俺たちは行こうか。」

「あつ、うん。ナヨロン先輩達も早く戻ってきてくださいね。もう集合まで5分くらいしかありませんよ。」

木ノ本がそう言っているのが聞こえた。

4番線に足を運んでいると向こうから走ってくる人影があった。サヤ先輩と善知鳥先輩だった。

「あつ、ナガシィ・・・」「トワイライト」今停まってる・・・。」

「はい、停まってますよ。」

「そう、ありがと。行くぞ。」

「サヤ待ってよ。」

そんな後姿を見送った。

「サヤ先輩達って何してたんだろう。」

「さあ。お昼でも食べに行こうとして、それで失敗したみたいな感じだよなあ。」

そう話しながら、4番線に通じる階段を上った。

12時00分。大阪おおさかを発はった。ここからはまた223系新快速しんかいそくにお世話になる。この新快速は播州赤穂行きばんしゅうあこうゆ。途中で乗り換えをしながらでも相生あいおいまで行くことができる。

この列車に乗り込んで見ると、座れる席が全くなかった。僕たちはアド先生の誘導ゆうどうで空いているごくわずかな席に座った。僕が席に掛けるときにはドアが閉まり大阪を発車おおさかしていた。この新快速しんかいそくに乗って30分くらいがたった。兵庫ひょうごを通過したくらいだっただろうか。ふとした拍子ひょうしに意識が飛んでしまった。

目が覚めたさ。今走っているところがどこなのか。それが気になった。外に目を向けてみる。当然のことだが、僕の知っている建物は一つもなかった。次に、車内に目をやった。僕の位置いちから見て左斜め後ろ。佐久間さくま、諫早いさはや、空河そらかわ、醒さめヶ井がが固まって座っていた。だが、全員寝てしまっている。

（他の人はどこにいるんだろう。）

と思って車内を見回す前に次の停車駅が目に入った。

（かっ・・・加古川かこがわっ。）

「ご乗車ありがとうございます。加古川かこがわー、加古川です。・・・。」

（イカン。神戸発車しんこうしてから寝ちゃった。）

そう寝てしまった自分を悔くやんだ。

僕の座っている2号車の座席には夏の太陽がギラギラと入っている。まだ瞼まぶたが重い。こういう状況だとまたいつ寝てしまうか分からない。そのため、ドア付近の椅子いすの背もたれに取り付けてある補助椅子ほじょいすに掛けようかと思った時、加古川かこがわに到着した。

加古川では何人もの客が降りていった。そのうちの一人が荷物を

忘れて取りに来ていたが、取りに来た直後にドアが閉まってしまいうという災難に遭っていた。

加古川を発車すると僕は補助椅子の方に移った。

補助椅子を前に引き倒して座る。

「なんじやこりや。」

つい声が出てしまった。この補助椅子には何か空洞の様なものを感じた。座るとそこにクッションがないかのように沈みこんだ。そして、そこには金網の様なものしかないという感覚しか生まれなかった。

13時01分。姫路に到着。ここから新快速は堂々（どうどう）の12両編成から8両編成になる。僕達の乗っている基本編成がそのまま播州赤穂まで行き、おいていかれる付属編成は新快速か普通として大阪方面に折り返していくのであろう。13時06分。新快速播州赤穂行きが姫路を発車した。

途中の相生に着いたのは13時24分だった。降りて見ると何とも小さな駅である。とても新幹線の停車駅とは思えないくらい小さかった。相生のホームに降り立つとまた乗り換える。13時30分発。普通三原行きに身を任せて途中の糸崎まで揺られる。車両は113系だった。

「体質改善車かあ。」

停まっていた113系を見てナヨロン先輩が言っていた。

「ダイエットって。」

「だってこの車両は延命手術を受けてダイエットに成功したんだよ。」

「あのナヨロン先輩。それダイエットじゃなくてリニューアルって言うんじゃないんですか。」

「体質を改善したら、全部ダイエットしたんだよ。」

読者の皆様にとってはこんなことどうでもいいだろう。しかし、僕達にはどうでもいい問題ではない。これから2時間以上普通に揺られるのである。いくら電車好きといっても2時間以上普通に乗って

いるというのは抵抗ていこうがある。これが新快速しんかいそくとかだったら話は変わるのだが・・・。

13時30分。相生あいおいを発車はつしやする。この列車で前述したとおり2時間以上揺られるのだ。

何分だっただろうか。岡山おかやまに着いた。

（まだ岡山かよ。）

心の中でそれを嘆なげいた。いくらなんでも長過ぎる。これなら、サヤ先輩が言っていた博多はかたまで行って、病院びょういんに行くという意味が分かった気がした。

さらに1時間がたった。今いる駅は大門だいもん。まだ1時間以上乗車していなければならぬ。ふと周りを見回してみた。ほとんどの人が眠りに就ついていた。

（できることなら、俺も眠りたい・・・。）

そこから41分が経過した。ようやく乗り換え駅、糸崎いとさきに到着する。

（やっとここまで来たのかあ。）

降りると同時にため息をついた。ここからは少しは楽になるのだろうか。16時14分発の「快速シティーライナー」に期待きたいすることにした。

だが、その期待もすぐに打ち砕くだかれてしまった。「快速シティーライナー」に充当されている車両はさっきまで乗っていた113系。好きでも嫌いでもないが、また同じ車両というのには抵抗ていこうがある。

16時14分。「快速シティーライナー」糸崎いとさき発車。

そこから何分経っただろうか。瀬野せのまで来た。ふと外に目をやると見たことのないオレンジ色の電気機関車でんききかんしゃが止まっていた。

「なんだ。これ。」

誰かに問いかけたわけではないが、ナヨロン先輩が反応してくれた。「EF67。瀬野峠用せのとうげようの後押機関車あとおしきかんしゃだよ。「セノハチ」って聞いたことないか。それがここのことだよ。」

「「セノハチ」。」

首をかしげた。

「ああ、知らないんだ。永島ながしまなら知ってると思ったんだけどなあ。そうか。永島ながしまでも知らないことがあるのか。」

自分に言い聞かせるように言った。

「山陽本線を敷設ふせつした山陽鉄道が、ここだけは経済性を優先ゆうせんしましょうって作っちゃったんだよ。そしたら、22・6%（パーミル）の急勾配きゅうがいになっちゃってね。この勾配は山陽本線を走ってる貨物列車かもは上ることができない。だからああいうのが走るのを手伝ってくれてるってこと。」

そう教えてくれた。

この列車が途中の広島ひろしまに着いたのは17時28分であった。

31列車 裏切りと「トワイライト」と死亡（後書き）

まだまだ。この先は飛ばせたからいいですけど・・・。

32列車 ようやっ

広島ひろしまのホームに降り立った。全員の顔は疲れ果てていた。と言ってもすぐ元気な人もいた。

「ようやっ和新幹線しんかんせんに乗れる。」

善知鳥先輩うやうが体を伸ばした。

「やっ」と「レールスター」のお出ましかあ。」

（100系も見れる。）

「はい、皆さんいますね。それでは乗ります。私の後に付いてきてください。」

アド先生の誘導しんかんせんで新幹線の改札を通り抜ける。ここからは本当に乗ができる。そして、僕が今まで乗ったことのなかった山陽新幹線さんようしんかんせん広島しま博多間はかたを乗車するのにも達成できるのだ。

17時35分。新幹線しんかんせんのホームに立った。この構内こうないに響き渡る音。それらが新幹線しんかんせんというにおいを僕に運んできている。そのにおいを堪能たんのうしていると誰かだれが僕の背中に手を当てた。

「永島ながしま。17時49分発の「こだま」があるぞ。もしかしたら100系じゃない。4両編成コンプリートで出てるし。」

（「こだま759号」・・・間違いない・・・100系だ。）

4両という表示が僕の心を支配した。

17時48分。「こだま759号」が12番線に入線してきた。

黄色すねいつぽく光る鋭く、キリットした細い目。100系。この車両しんが4両や6両となってしまっている編成があるというのは未だいまに信じられない。100系は16両で白く美しい車体に2階建てが連結しんかんせんされた新幹線車両である。僕としてはそっちの方が好きである。もしかしたら、どんなものよりも好きなかもしれない。

「100系じゃん。」

佐久間さくまが隣でそう言っていた。

興味きょうみがないわけではないが、僕の前に姿を現した100系は何と

なく好きになれなかった。

「ああ・・・。」

鈍い反応しかできなかった。

17時49分。「こだま759号」博多行き発車。100系が発車する後姿を携帯に捉える事が出来た。その後ろ姿は僕の思っているカッコよさよりも、悲しさと寂しさが入り混じった顔をしていると思った。

（なんだ。今のは・・・。）

この時、僕は100系が何か訴えているように聞こえて仕方がなかった。

17時54分。さっき100系が発車した12番線に「ひかりレールスター1573号」博多行きが入線してきた。8両編成の700系新幹線は、JR西日本独自の設備がある。その一つが備えられている4号車が僕達の乗る車両だ。

17時55分。「レールスター」は何の揺れもなく発車した。広島を出るとすぐさま外に目を向けた。さっき感じたことが何度も、何度も頭の中に思い出された。好きなやつほど伝わってくるこの気持ちは何なんだろうか。それだけが頭の中に広がり、何も考えられなくなった。

19時00分ごろ。「間もなく終点博多です。」とアナウンスが入った。これで今日は終了ホテルに行つて、あとは休むだけである。そのはずである。

19時06分。博多に到着。ようやくと来たのである。

「皆さん。これからホテルの方に向かいますが、バスがあるそうです。乗りたい人は乗ってください。」

アド先生がそう教えてくれた。

「よし、3年生は全員乗るぞ。2年生と1年生諸君は歩いてこい。」

「おい。少しは後輩に譲るとかしてやれよ。」

「いいだろ。あたしは早く部屋に入って寝たいんだよ。」

善知鳥先輩の振る舞いははつきり嫌ではあるが、1年生にはとても反抗できそうもない。

「頼んだぞ。ハクタカ、アヤノン。しっかり連れてこいよ。道迷ったりするなよな。」

といつてバスに乗る人はそっちへそれていった。それていったといつても行つたのはアド先生とサヤ先輩と善知鳥先輩だけなのだ。

「はあ、善知鳥先輩もあじゃなきゃいいのになあ。」

「後で絢乃がそう言つてたつて善知鳥先輩に言いつけていいか。」

「絶対言うなよ。」

「まあ、言いたい気持ちは分からんわけじゃないな。あの性格がなければハイテンションでも問題ないんだけどなあ。」

「おーい。それより俺達もホテルに行くぞ。」

「ああ、待つて……。つうか、ホテルどこにあるか分かつてんの。」

会話をずっと聞き流していたが、

「えっ。」

「ナヨロン分かつてる。」

「分かつてると思う。」

「だよなあ。誰か分かつてる人いないの。」

「アケ先輩大丈夫ですよ。どっか歩いてればたどり着きますって。」

「いやそうは言つても……。」

「いいんじゃないんですか。迷いながら、歩いて行くのも。」

「いや、それ問題でしょ。なんで、そういうこと考えてないんですか。それも全員。」

「ナヨロン先輩。地図見ればいいじゃないですか。」

「ああ、地図は貰つた次の日にゴミと間違えて捨てちゃつた。」

「おい、何捨ててんの。」

「なあ、ハクタカ。あたしのバッグに地図入つてると思うから出して。」

「はっ。自分で出せよ。」

「えっ。いいじゃん。バッグある方向にいたんだから。」

「なんじゃそりゃ。」

絢乃先輩が背負っているバッグのチャックを開けて中を探す。

「……。あっ、あったぞ。」

「ありがとう、ハクタカ。」

ナヨロン先輩のほうに歩いて行って、

「ナヨ先輩。これ見てくださいよ。」

「地図あったんだ……。アヤケン、見て。」

「おい。ふつう地図読めるだろ。」

「うっさい。」

僕と木ノ本は少し会話に入った。そして箕島たちはというと唾然とした顔でこのやり取りを聞いていた。

歩き出すと晩御飯の話になった。

「永島、木ノ本。一緒に博多ラーメン食べに行こうぜ。」

佐久間に誘われた。

「博多ラーメンねえ……。」

「別に、そんなの食べに行かなくてもいいじゃん。」

「はっ。博多まで来てラーメン食べてかないってどうよ。」

「夕ごはんなんてコンビニで十分だよ。それに、博多ラーメンなんて浜松でも食べれるだろ。本場がどうとは思わないな。」

「そう言わずに、食っとうぜ。」

「私はいいよ。そこにローソンあったからそれでいいし。」

「あっそ。永島は。」

「夕飯食う気しないからいいよ。」

「ああ、そうかい。なんで二人とも食い物にルーズなんだよ。」

博多の街を歩いて何分くらい経っただろう。ようやくと宿泊するホテルに到着した。もらったカードキーの示す部屋にすぐに入った。夕飯を食べに佐久間達が出ていったことと僕の部屋に遊びに来たこと以外は平和にベットの上で休んでいた。

21時39分。だんだん瞼が重くなってきた。そして、いつのま

にか寝てしまった。

32列車 ようやっど（後書き）

今回は短かった・・・。

本当ならそこのご当地グルメを食べたいと思うのがふつうですが、そういうことに興味ない人もいると思いました。

こういうこと思うのは・・・だけかなあ。

あと皆さんに報告します。累計アクセス回数1000突破いたしました。ユニークのほうは201・・・。やっぱりネタがネタだったかなあ・・・。

33列車 聞けない

ふと目が覚めた。体を起こし、猫ねこのように体を伸ばす。

(今何時だ。)

と思って携帯の端末たんまつを開いた。

(5時48分かあ。)

もう少しで6時だ。もう寝てしまうのは二度寝の原因になると思っ
て、少しの間部屋の中でゆっくりした。その間にメールが一通来た。
確認してみると、木ノ本きのもとからだった。それともう一通来ていること
に気付いた。誰なのかと思って確認してみる。

(んっ。)

迷惑メールとかいう奴でもチェンメールとかいう奴でもなかった。
だが、すぐに閉じてしまった。

6時55分。そろそろ朝御飯を食べに行こうと思って下の階に行
った。今日は前に考えた自由行動を実行する日である。

「オッハー。ナガシィ。」

途中エレベーターで下に行こうとしている時善知鳥先輩とばったり
会った。

「おはようございます。」

「そんな堅苦かたくるしくなるなって。」

肩を叩いて気持ちをほぐそうとする。

「そえば、ナガシィ達どこに行くんだっけ。」

「熊本くまもとです。」

「そっか。熊本くまもとかあ。何もないこと祈いのった方がいいよ。」

僕にはこういった意味が分からなかった。

7時41分。僕達の班はいつでも出発できる状態になった。といっ
ても乗る列車まではまだ31分ある。その間ホテルのロビーで暇を
つぶし、7時50分ごろ。ホテルを発たった。

5分くらい歩いて、博多駅はかたに来了。在来線の改札口を通り、僕達が

のる快速荒尾行きを待った。8時07分。快速荒尾行きが博多駅の5番線に入線した。すぐに車内に乗り込み自分達の席を確保した。席を確保すると、みんなが入線した車両を取りに行った。この快速に充当されている車両は813系。JR九州のベシック通勤電車だ。

「「赤い子」だったな。」

木ノ本が車両を取りに行ってきた僕達に向かってそういった。

「「赤い子」。」

「だってそうだろ。前面赤いじゃん。」

「ああ、納得。」

納得していいのかどうかは分からない。でも、一つ言えることがある。僕と木ノ本が考えていたことはさほど変わらないということだ。

その後、この列車が発車する8時11分まで「特急ソニック」、

「特急かもめ」に充当されている885系、813系と並ぶ通勤電車811系などを見た。ひっきりなしに電車が来るとするのは、博多という九州の中枢だからだろう。そう思った。

この快速列車は南福岡まで各駅に停まる。そして、南福岡を過ぎると快速運転になり、鹿児島本線の主要駅にしか停車しなくなる。

雑談をしている間にも、813系は南福岡までコマを進めてきていた。ここ南福岡ではちょっと長い間停車していた。昔はこんなことも気にも留めなかったのに。今となってはこの小さな停車にも意味があるというのを理解できる。

「あつ、「つばめ」だ。」

ずっと外を眺めていた朝風がつぶやいた。僕もその方向へ目線移動す。すると視界にシルバーの車体が特徴の787系が通過していくのが見えた。

「佐久間、あれに乗ってったのかなあ。」

ふとそんなことを思った。

その後は「つばめ」が通って行った方向とは逆の方向に目を向けていた。ずっと景色を眺めていたのである。今でも流れていく景色

を見ることは楽しいと思っている。しかし、なぜこれが楽しいのかと聞かれると答えられなくなる。たぶん、理由にできない楽しさがあるのだろう。南福岡の次。春日を通過すると春日の前に広がる広場が目に入ってきた。たくさんの人が何かの準備をしていた。たぶん、お祭りか何かだろう。準備中の屋台と上に架けられた提灯を見て直感した。

春日を通り過ぎると見るものが何もないわけではないが、ボーっとしている以外することがなくなった。ゲームとかはしないの思っているだろう。ゲームなんて電車に乗ってするものではない。僕は電車に乗ってすることは景色を楽しむことだけではないと思っている。暇ではないかと思っているかもしれないが、案外暇ではない。

9時16分。快速列車に揺られるのはここまでである。ここは終点の荒尾ではなく一つ手前の大牟田。ここで列車を乗り換え、目的地の熊本まで行く。

「まずはここまで来たな。」

大牟田のホームに降り立って体を伸ばす。

「なんで、荒尾まで行かないんですか。」

空河はこの途中下車について疑問に思っているようだった。

「荒尾まで行っても、ここで降りても同じだからさ。」

僕はそう説明した。

「永島さん。次の「特急つばめ5号」がやってきますよ。」

電光掲示板に目をやっていた朝風が教えてくれた。

「おお、787系が見れるじゃん。写真撮ってこう。」

「まあ、熊本に行ってからでも見れるんだけど・・・。」

見れるんだけど。いずれ見る列車である。いつ見ようが関係ないか。そうは思ったが携帯は撮りださなかった。もっとしっかりと収めるためである。

9時27分。1番線に「特急つばめ5号」西鹿児島行きが入線してきた。綺麗なシルバーの車体。これが9両連なっている。到着するとホームにアナウンスが流れる。

「大牟田おおむたー、大牟田おおむたです。」

「クドイー。」

空河そらかわがこのアナウンスを聞いてこういった。さっきも聞いたのであるが、何か言い方がクドイ。

「ああ、確かにクドイなあ。」

「まあ、お客さんに分かりやすいようにしてあるだけだからしょうがないだろ。」

「いや、それは分かるんだけどね・・・。」

9時27分。「特急つばめ5号」西鹿兒島にしかりしま行き発車。787系の後姿を見送って、僕はまた自分達がのる列車を待った。

何分か経つと1番線に僕達の乗る9時40分発。普通熊本くまもと行きが入線した。

「今度はどんな子かなあ。」

入線してくる車両を凝視ぎょうしする。

「うーん・・・。「赤いようで赤くない子」かなあ。」

「どういう奴だよ。」

「だってそうじゃない。」

「確かにそうだけどさあ。」

「「赤いようで赤くない子」。」

中学生の方にはすぐにこの呼び方が浸透しんとつうした。

今「赤いようで赤くない子」と僕が命名した車両は815系。813系や811系と同じ通勤電車ではあるが、編成は3両、4両編成ではなく2両編成。僕は地元を走っている遠州鉄道えんしゅうてつどう、通称「赤電あかでん」のでっかいバージョンを見ている気になった。

ドアが開き、車内に入った。815系の車内はこれまで乗ってきた813系とは違い横1列に座席が並んでいた。こういうシート配置のことを「ロングシート」と呼ぶ。いくら鉄道に興味がないとはいえこれくらいのは覚えてほしいものである。

「変わったロングシートだな。」

木ノ本きののほんが「ロングシート」に目をやった。

「確かに変わってるな。」

そういうのはこれが今までに見たことのある「ロングシート」ではないからだ。僕達が思っている「ロングシート」はベンチが並んでいるようになっていいるもの。しかし815系の「ロングシート」は椅子が横1列に礼儀正しく並んでいる状態だった。「こんなことを考えているとすぐに席が埋まってしまう。」と思い腰をかけた。

9時40分。普通熊本行きが大牟田を発車した。どのくらい席が埋まるか分からなかったが発車するとその答えが出た。席は埋まるどころか空いているのが目立つくらいだった。

「次は、荒尾ー、荒尾。」

大牟田を発車するとお約束のアナウンスである。

「荒尾では、ホーム側の全てのドアが開きます。」

「何今の・・・。」

「ふつう言うか。あんなこと。」

浜松の方では聞いたことのないアナウンスを聞いた。

荒尾駅に近づいた。

「間もなく、荒尾ー、荒尾です。荒尾ではホーム側の全てのドアが開きます。」

「さっきのあれといい、これもクドイですねえ。」

「全部開くんだったら、言わなくていいじゃん。開かない駅だけ言えばいいのに。」

「これって、現実にそういう駅があるってことだよなあ。」

「じゃあ、乗ってる間に全部開かない駅があるっていうの。」

「たぶんあるんじゃない。」

「それだったら面白いなあ。」

ドアが開かない駅がある。そのことだけに期待した。

「次は南荒尾ー、南荒尾。南荒尾ではホーム側の全てのドアが開きます。」

次は違った。

「次は長洲ー、長洲。長洲ではホーム側の全てのドアが開きます。」

次も違った。

その後も全部開かない駅があるかと思っていたが、「一番前のドアのみ開きます。」の様なアナウンスは僕の記憶では来なかった。

10時15分ごろ。

「間もなく植木^{うえき}ー、植木^{うえき}。植木^{うえき}ではホーム側の全てのドアが開きます。」

「いい加減にしてくれませんかねえこのアナウンス。」

「何言っても無駄^{むだ}だろうなあ。この列車ワンマンだからアナウンスは全部コンピューターがやってる。コンピューターぶっ壊^{こわ}さないと黙^{だま}らないね。」

「もういいでしょう。」

「うん、どうでもいいよ。つうか、「ホーム側の全てのドアが開きます」って完全にウケ狙^ねってるだろ。」

（いや、ウケ狙^ねってるはないと思うけど・・・。）

「1枚目と3枚目のドアが閉まります。ご注意ください。」

「んっ。どうかしたのかなあ。」

「何か通過する（おいぬく）んじゃないんですか。ほら、本線の出^し発^{はつ}信号^{しんごう}機^きが青^{あさかぜ}になってますし。」

朝風^{あさかぜ}が本線の信号^{しんごう}を指^さした。

数分経つとさっき大牟田^{おおむた}で見た787系が放たれた矢のごとく通過していった。僕達のいる進行方向右側の席からは西鹿^{にししか}児島^{こしま}へと急いで行く787系が見えた。その姿を見えなくなるまで僕達はその姿をおった。

787系が通過してから1分くらいがたった。僕達の815系も植木^{うえき}を発車^{はつしや}する。ここ植木^{うえき}を出ると終点熊本^{くまもと}までは4駅である。

さっきと同じくすることがないのは変わらない。僕はボーっと外を見ていた。

（萌もつれてきたかったなあ・・・。）

「えっ。」

なぜか木ノ本^{きののもと}が反応した。心の声ではなく、本当の声になっていた

ようだ。

「なっ・・・何か言ってた。」

（顔が赤い・・・。）

「別に、何も言ってなかったけど。」

「そっ・・・そう。ならいいや・・・。」

（知ってるよ・・・。私よりも好きな人いるって・・・。でも、すごいもんだよなあ。学校離れちゃったらふう終わるって。永島ながしまと坂口さかくちさんの間は一言じゃ語れない恋だよなあ・・・。そう言えば、坂口さかくちさんから永島ながしまの進路聞きだしてって言われてるけど、まだ考えてないよなあ。いや、考えてるはずがないかあ・・・。）

10時32分。熊本くまもとに到着した。

33列車 聞けない（後書き）

エクセルの書いてある設定表を見てみたら、アヤケン先輩と永島は眼鏡をかけていました。文中にその描写がなくてすみません。

なお、今回みたいにな場所が変わるとこういうこともあるんだということとはよくある話だと思います。この話みたいにな「すべてのドアが開かない時にそう言えよ。」とも言いたくなるのがたまにありませんか・・・。

34列車 熊本市電

10時32分。熊本くまもとに到着とうちやくした。

「さて、これからどうしようか。」

「とりあえず、市電しでんに乗ってこないか。だいたいここにきて乗る目的がそれしかないだろ。」

「そうだったな。んじゃあ行こうか。」

皆みなを促うながして改札口ぬを抜けた。

「市電しでんに乗るのはいいですけど、どこまで行くんですか。」

「とりあえず、終点までだろ。」

「そうだな。」

「全区間乗りつくしはできないにしても、一番長い系統ろせん乗りつくしよっか。」

熊本くまもとの駅舎えきやを出て最初に飛び込んでくる路面電車の電停でんていに向かう。

「あっ、あの車両は。」

空河そらかわが入ってきた白い車両を指差した。

「超低床車（LRT）かあ。」

「何系とかそういうのは分からないけど、ああいうのもあったなあ。」

話しながら、電停でんていまで足を運んだ。

電停まで行くと、最初に来た健軍町けんぐんまち行きの路面電車に乗り込んだ。車内に乗り込むとほぼ一番乗り状態だった。僕たちは誰も座っていない運転席の後ろの席を占拠した。

「超低床車（LRT）に乗れて感激です。」

「これだけで感激してもどうだろうか。」

「そんなことより、財布の中身確認したか。」

「なんですか。財布ならちゃんと持ってますし、パクられてもいけませんけど・・・。」

「そうじゃなくて、150円しっかりあるかってことよ。もし50

0円とかで運賃出したらお釣りが返ってこないぞ。」

「あつ、そっか。」

皆財布の中身を調べた。その後両替をしたのは僕と空河そらかわだけであった。木ノ本きのもとと朝風あさかせはちゃんと150円あったらしい。

路面電車で揺られて42分。熊本市電の終点健軍町けんぐんまちに到着した。

「ちょうどいい時間だし、お昼にしない。」

「そうだな、どっかマックスでも探して食べちゃうか。」

「いや、マックスはどうだろうか。せめてでもコンビニだろ。」

「うーん、そうか。空河そらかわ、朝風あさかせ。どっか行きたい所ある。」

「僕は昼が食べられればどこでも。」

「僕もどこでもいいです。」

（これだ・・・。）

「うーん、仕方がないからそこらへんでコンビニでも探すか。」

「探すって言うてもどうするんですか。ぱつと見、このあたりにはコンビニとかもないと思いますけど。」

「あっちのアーケードの方とかないのかなあ。」

「ないと思うけどなあ。パチンコ店ならあるけど・・・。」

「じゃあ、どうすんのよ。」

「さっきマックスがありましたけど。」

「ああ、じゃあそこにするか。」

というわけで健軍町けんぐんまちの一つ手前健軍交番前まで歩いて行くことにした。しかし、そこにたどり着いてみると、

「なあ、永島ながしま。こんな人たくさんいて、入りたいって思うか。」

「うん、確かに思わないな。」

「ここまで並んで物を食べるっていう人の気がしれませんね。」

「ここまで並んでると、食べる気を失うせますねえ。」

「うーん、じゃあどうしようか・・・。」

「まず、ここから出よう。それから考えればいいよ。」

なのでここにいたのは10分くらいだったかもしれない。

「そう言えば、交通局前こうつうきょくまえとかっていうところに車庫があったろ。あ

れ見ていかないか。」

「ああ、いいね。空河^{そらかわ}、朝風^{あさかぜ}。どう思う。」

「別にいいですよ。」

「はい。」

全員一致^{ぜんいんいちち}。交通局前^{とちゅうきゅうげしや}で途中下車することにした。

「そういや、乗務員^{じようむいん}の交代もここでやってたよなあ。」

「ああ、そうだったな。」

そういう雑談をしながら、交通局前まで戻ってきた。

「案外暇なところだな。」

「何言ってるんですか。木ノ本^{きのもと}さんの提案でしょ。」

「いや、そうだけどさ……。」

「でも、熊本市電^{くまもと}っていっぱい車両あるんだな。一枚くらい写真撮って行くか。」

遠くに留置^{りゅうち}されている熊本市電の車両^{けーたい}を携帯に収め、すぐに交通局前に戻った。

「で、これからどうするつもり。」

「そうだな……。」

「もういいですよ。熊本駅^{くまもと}戻っちゃいます。」

「熊本城とか行かないのか。」

「楽しめる人は楽しめますけど、僕たちじゃ楽しめませんよ。」

「まあ、それで集まったようなもんだしなあ。」

「んじゃ、熊本^{くまもと}に戻って昼飯でいいか。」

「それでいいよ。」

「確か構内にコンビニありましたよね。」

「ああ、あったね。」

「それで決まりでいいか。」

結局健軍町^{けんぐんまち}までいった意味は熊本市電^{くまもと}に乗りたかっただけでしかなかった。

熊本^{くまもと}に戻ってきて、お昼を食べて12時47分。ホームに入り、車両撮影を行うことにした。たぶん僕たちなら乗りきることができ

るだろう。

「永島、13時07分に「特急くまがわ」^{ながしま}って言うのが来るけど、これ知ってる。」

「くまがわ」。知らないけど。」

「あつ、それキハ185で運転されてる特急です。」

「空河詳^{そらかわくわ}しいなあ。」

「この位常識ですよ。木ノ本^{きのもと}さん。」

「あれ、キハ185ってJR四国の車両じゃなかったっけ。」

「確かに四国の車両です。でも九州に走っているキハ185は九州が買ったやつなんです。」

「へえ。そうなのか。」

「空河^{そらかわ}、本当に詳しいな。」

「これでも知らない方ですよ。僕が一番知っているのは北海道^{ほっかいどう}のデイズルカーですから。」

「そこまで知ってれば困らないって。」

13時07分。「特急くまがわ」を撮影。その後は4・5番線に行つて、僕達がのる列車をゆっくりと待った。

「おい、隣に「つばめ」が止まってるぞ。」

「あつ、本当^{ほんと}だ。」

「撮りに行かないのか。」

「もう、間に合わねえよ。」

「ああ……。それもそうだな。」

それから何分経つただろうか。

「永島^{ながしま}さん。あすこに787系いますけど。」

「どうせ、「有明」か「つばめ」だろ。」

「いや、そうじゃなくて……。」

僕の肩^{かた}を叩いて、こっちに来てという動作をする。

「ホームに入らずに止まったままなんです。」

34列車 熊本市電（後書き）

研修の2日目。これって作ってくと研修じゃなくて完全な旅行になるんですよ。まあ、実際がそうだったということもありますから・・・。

35列車 トラブル

それから何分経っただろうか。

「永島^{ながしま}さん。あすこに787系いますけど。」

「どうせ、「有明」か「つばめ」だろ。」

「いや、そうじゃなくて・・・。」

僕の肩^{かた}を叩^{たた}いて、こっちに来てという動作をする。

「ホームに入らずに止まったままなんです。」

「ホントだ。何やってんだろ。」

「ちよつと。大事な放送が聞きとれないだろ。静かにして。」

木ノ本^{きのもと}は耳に手を当て、構内放送に聞き耳を立てた。しばらくすると、耳にあてた手を下した。

「なんて言ってたんですか。」

「よくは聞きとれなかったけど、人身^{じんしんじこ}事故だって。」

満面^{まんめん}の笑^えみを浮かべていった。

「へえ、人身事故かあ。」

「なんだ。人身事故か。」

「人身事故ねえ。」

しばらく沈黙^{ちんもく}があった。

「・・・はっ。人身事故。」

「事故ってやばくないですか。」

「列車遅れてるんじゃないんですか。」

「いや、電光掲示板見てみたけど遅れてないよ。」

「そんなになって何分くらい。」

「7分って書いてあるけど。」

「上りが7分ってことは事故があったのは下り線ですね。」

「なーんだ。下りなら、関係ないじゃん。」

事故が下り線であったということを知ると全員安心した。本当は安心してはいけな^いのかもしれないが・・・。

結局僕達がのる列車は10分くらい遅れて熊本くまもとに入線してきた。

「行きは「赤いようで赤くない子」。帰りは「黒い子」かあ。」

入線してきた817系に部活内でのあだ名をつけた。

「今度は「赤電」あかでんが黒になったバージョンかあ。」

「永島さんながしま。早く来てくださいよ。席とっておきましたから。」

空河の呼び掛けに応じて、僕達も817系に乗り込んだ。

そのころ名寄なよろ、箕島班みしまはというと、

「名寄先輩どうするんですか。」

「ああ、ハマっちゃったな。」

「ハマっちゃったじゃなくて・・・。」

「なんでこう俺たちの行くところは何かあるんだ。」

名寄の口調はいつになく荒かった。

(そんな文句言ってる場合ですか・・・。)

綾瀬あやせ、醒ヶ井班さめがいはというと、

「アヤケン先輩どうするんですか。」

「まあ落ち着けて。」

「おちついてられますか。事故にハマったうえ、列車遅れてるんですよ。」

「そんなことより、この景色いいと思わないか。これをモジュールにしたらどうだ。」

アヤケン先輩は窓の外を流れる景色を見て手を右から左に動かした。

「アヤケン先輩。」

「何。」

「僕の話まともに聞く気ないでしょ。」

「ないよ。」

(こら。)

鷹倉たかくら、楠班くすのきは、

「なんであたし達の行くところはこうやって何かあるのかなあ。」

「嫌われてるんじゃないの。」

「そうかもしれないけどさあ。」

「そんなことより寝とけて。まだ先長いんだぞ。」

「ハクタカに寝とけて言われても、安心できなよ。」

「なんでだよ。線路のポイントが変な方向向いてない限り、死にはしないんだから安心して寝ろって。夜行バスの中で寝れなくても、知らないからな。」

「いや……。そうじゃなくてね……。つうか、それハクタカの方だろ。」

北斎院、善知鳥班はというと、

「サヤ、熊本の方で人身事故あったんだって。」

「はっ、ザマア。」

「いや、帰りの心配……。」

「いいよ。いざとなったら新幹線使うから。20分でワープできるぜ。」

(あんたねえ。)

佐久間、諫早班はというと、

「おい、あすこにN7(エヌなな)がいるぞ。」

「それ、浜松でも見れるじゃないですか。」

「あっ、それもそうだな。」

会話を聞いていて分かるだろう。一番平和なのは佐久間の班である。

13時57分発の普通鳥栖行きに乗り込んで植木までやってきた。

「うわ。下り最悪だな。」

「「つばめ」停まってし。」

「佐久間さんも熊本きてますよねえ。」

「ああ、事故のことかあ。「つばめ」が遅れてるもんなあ。」

「大丈夫ですかねえ。」

「大丈夫だろ。心配しなくていいよ。」

その後はこの「817系」に揺られて鳥栖駅まで向かった。

その間に木ノ本達は寝入ってしまった。僕はというととりあえずこの班の班長として責任を全うしなければいけないと思い、眠いのを

我慢がまんして起きていた。

817系に乗って何時間経っただろうか。次がようやくと大牟田おおむたである。さすが鹿児島本線の普通列車。13時57分に熊本くまもとを発車して、終点鳥栖とすの到着は16時09分。さらに、ここに人身事故による遅れが拍車はくしゃをかけた。

途中、久留米くるめだか、なんとかという駅に長時間停車した。本当なら、「つばめ」が追い越していく模様で、電光掲示板にはその案内が出ていた。しかし今になってはそんな表示何の役にも立たない。

結局あの時の停車もかさんで、終点鳥栖とすに着いたのは、定刻ていこくより30分近く遅れていた。

「こっから快速かいそくかあ。長かったなあ。」

「寝てたのに、そんなに長く感じてないだろ。」

「うん。そうかもね。今度は永島ながしまが寝れば。」

「バツ、バカ。電車に乗って寝れるかよ。」

「まあ、そういうと思ったけどな。」

817系から降りて、対面のホームにいる811系に乗り込む。

「最後は「白い子」なんだな。」

「これで九州の通勤電車、ほとんど乗車しちゃったな。」
コンプシート

「へえ。九州って思ったより電車少ないですね。やっぱ大半はディゼルなんですね。」

「これが最後ですか。」

一言ずつ言って、車内に入った。

車内は思っていたより空いていた。4人掛けることができる転換クロスシートに座って発車を待った。

発車すると、全列車お約束の車内放送である。

「鳥栖とす駅からご乗車のお客様、快速小倉行きです。この先、基山きやま、
原田はるだ、二日市ふつかいち、大野城おおのじょう、南福岡みなみふくおか、・・・。」

「なお、この列車は途中春日かすがに臨時停車をいたします。」
「はっ。」

全員の声がそろった。

「あれ。朝、春日かすがに停まりましたっけ。」

「んっ。停まらなかったと思うけど。」

「思っしうんじゃなくて、停とまってない。」

「なんで停とまるんだよ。朝あさ通過とほしてっただから通過とほしてけよ。」

「まったくだ。」

「あんな駅停とまる必要ないじゃん。」

「何なにのために停とまるんだろうなあ。」

朝風あさかぜの言いった何なにのためにというのが引ひっ掛かかった。とりあえず今日一日のことを整理してみる。すると……。

「もしかして……。」

皆みんなの目線が僕に集中する。

「お祭りのために停とまるのかも。」

「祭りのため。」

「うん。車内見てみても分かるけど、浴衣ゆかた着きてる人がある。浴衣着ゆかたてる人がいるってことは、どっかでお祭りがあつて、それに行く途とち中ちゆうだうっていうこと。そして、朝春日かすがを通過つうかした時にお祭りかもしれない準備してた。」

「はい、その祭り死しね。」

「そのためだけに停とまるんですか。」

「たぶん……。いや、絶対。」

「マジすか。ただでさえ遅れてるのに、そんな駅に停と車しやしてる場合かよ。」

当然、どんな文句もんくを言おうが春日かすがに停と車しやすることは確定なのである。文句も言うのはやめにしてと言いたいところだが、その春日かすが駅が近づいてくると、また文句もんくの嵐あらしになった。しかし、過ぎてしまえば文句の嵐も治なまった。

春日かすがの次は南福岡みなみふくおかに停と車しやする。ここに停と車しやすれば、戻かえってきたという感覚が持もてる。

「やっと南福岡みなみふくおかか。戻かえって来たなあ。」

「ああ。」

南福岡停車。ドアが開いた。

すると、またここでもアクシデントがあった。

「あの男の子どうしたんだろう。」

本ノ本がそうつぶやいた。一人で泣いている男の子が気になったらいい。

「んっ。ただ親とはぐれただけだろ。」

「永島、お前頭ちゃんとおる。」

あきれられてしまった。

「どうかしたんですか。」

「ちよっと黙ってくれない。聞きとれないんだけど。」

こういうことがあると何でも聞き耳を立てたくなるというのは一種の癖なのだろうか。僕も同じように聞き耳を立てた。

「Tシャツの・・・が・・・刺さってるねえ。」

「これ取り替えて・・・。」

「・・・わかりました。」

車掌と駆けつけてきた駅員が話している。

このやり取りが終わると、そこから目線をそらした。

「なんて言ってたんですか。」

「んっ。Tシャツのなんかがどうとかって言ってたけど・・・、よくは聞きとれなかったよ。」

「そうですか。」

「はあ、終わったんだったらさっさと発車しろって。」

「まあまあ。」

「お待ちたせいたしました。」

「待たせ過ぎだよ。」

「快速小倉行き発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」
ドアが閉まるとため息をついた。

「どうした。色々ありすぎたからため息でも出ちゃったか。」

「ああ。それもあるけど、善知鳥先輩が朝言ってたことがようやくつと分かった気がした。」

「なんて言ってたの。」

「んっ。何もな^いことを祈^{いの}っつけてね。」

「ああ、納^な得^{とく}。」

博^は多^{かた}に到^と着^{ちやく}すると、改^{かい}札^{さつ}を出^いた。

35列車 トラブル（後書き）

事故は実際ありました。

今になってこのときあったことをちゃんと書きためておくべきだったなあと後悔しています。

36列車 夜行バスで

博多^{はかた}に到着^{とうちやく}すると、改札^{かいさつ}を出た。

「どうする。17時29分発の博多^{はかた}南行^{みなぎやう}きに乗ろうと思えばまだ乗れると思うけど・・・。」

腕時計を見て今後の予定を話した。

「もういいよ。どこにも行きたくないもん。」

「空河^{そらかわ}は。」

「別にいいです。」

「朝風^{あさかせ}は。」

「新幹線^{しんかんせん}だったらいつでも見れますしね。」

「で、永島^{ながしま}は行きたいのか。」

「別に。」

「んじゃ、入場券^{にゆうじょうけん}買って入って、新幹線^{しんかんせん}でも車撮^{しゃさつ}するか。」

「140円払ってまで車撮^{しゃさつ}に行くんですか。」

「もう動きたくないですよ。」

「そうだろうなあ。私はまだ行けるんだけどみんながダメじゃあなあ。」

「えっ。俺もダメじゃないけど。」

「・・・。」

「で、どうする。」

考え込んだ。皆^{みんな}の体力はすでに限界に達している。これ以上無理をさせることもないだろう。

「んじゃあ、終わりにするか。」

17時25分くらいだろう。僕達の自由行動はここに終了^{しゆうりよう}した。その後、バスの発着する筑紫口^{つくしぐち}の方に足を運んだ。

「永島^{ながしま}。」

筑紫口をもうちょっとで出ようとした時、誰かに呼ばれた気がした。
「永島^{ながしま}さん。」

声のする方向を探してみる。

「あっ、あすこ。」

木ノ本が上を指差した。長い階段とエスカレーターの向こうにいるのは佐久間と諫早だった。僕達はそこまで続くエスカレーターを上り、上まで行った。

「佐久間来てたんだ。」

「人身事故とかって大丈夫だったか。」

「えっ事故って……。」

「……。しっ、知らないの。」

「ああ。そっち事故あったの。」

「あったよ。おかげで列車は遅れるわ、春日とかいうところに臨時停車がするわで散々（さんざん）だったんだからな。」

（いや、臨時停車の方はそのせいじゃないと思うけど……。）

「それいつくらいにあったの。」

「たぶん13時30分とか、それくらいだよな。」

「そんなとき俺ら、熊本にいないからね。」

「はっ。」

「さっさと「つばめ」で帰ってきてたから全く関係ないよ。」

（それ、普通で行って俺らがバカみたいに見えるじゃないか……。）

「でさあ、「つばめ」途中で……で乗ってきた。」

「何やってんだよお前ら。」

僕と木ノ本の声がそろう。

「フハハハハハ。スリル満点で楽しかったよ。」

あきれて言葉も出なくなった。

「スリル満点だろうがなんだろうが、何やってんだよ。」

「前々から、やるやるとは言ってたけど、本当にやるとは……。ここで言っていることは読者の皆様には実行してほしくない。」

その後は21時に出る夜行バスまでゆっくりと待った。今度は待つ時間が長い。そして、僕は夜行バスの中で寝れるのかと思ってい

た。正直言うと僕が乗り物で一番嫌いなものがバスなのである。

「なんで「ムーンライト山陽」^{さんよう}とか「ムーンライト九州」^{きゅうしゅう}じゃないんだよ。」

同じ文句を言っているのは木ノ本^{きのもと}である。なお、説明が遅れたが、

「ムーンライト山陽」^{さんよう}は下関^{しもせき}までなので博多^{はかた}には乗り入れない。

「ホント、バスって死ねばいいと思う。」

「バスってどこがおもしろいんですかねえ。僕には全然分りません。」

朝風^{あさかぜ}が話しに入ってくる。

「それプラス格安^{かくやす}でしょう。」

空河^{そらかわ}も入ってくる。

「そうだな。アドの爺^{ぢやう}のことだから格安のやつだよなあ。」

「夜行バスと「ムーンライト」だったら、まだ「ムーンライト」の方がましですねえ。」

「だな。夜行バスって乗ったら最後監禁^{さんきん}されないといけないからな。」

「もう、走るホテルじゃなくて走る牢屋^{ろうや}だよ。あんなの乗ったら死んじやう。」

「走る牢屋^{ろうや}って。そこまでひどいのか。」

「ひどいってもんじゃありませんよ。ゴミです。ゴミ。」

すると、怒ったような口調になって続けた。

「僕一度に夜行バス乗りましたけど、寝^ねれるようなもんじゃありません。床下^{ゆかし}からのエンジン音はうるさいし、縦^{たて}や横^{よこ}に揺^ゆれまくって寝れません。で、寝れなかったら外見^{そと}てればいいやって思って外見よう^{ねむ}とすると、車内に明かりがちらついて他の客が眠^{ねむ}れないだの。うるさいですよ。」

「朝風^{あさかぜ}いいこと教えてあげようか。」

今度は後ろで声がした。この会話を聞いていたのだろう。ハクタカ先輩が立っていた。

「いいか、夜行バスって、麻酔薬^{ますいやく}を常備^{じょうび}して乗るもんだぞ。あんな

のの中で寝られる人は神経がおかしいんだ。」

（うっ、そこまで言うか・・・。）

「えっじゃあ、ハクタカ先輩って眠り薬持ってきてるんですか。」

「んっ。ああ。麻酔薬ないと眠れないって。バスに乗った段階でこれ飲んじやえば発車する時にはたぶん寝入れると思うから。」

「そんなの持ってきてたんだ。」

「うるさいな。ないと眠れないんだよ。」

「えっ、ハクタカ先輩って不眠症ですか。」

「違う。バスがゴミだから眠れないだけ。」

「違う」の言葉の後は胸を張って言っていた。そして、「ゴミ」を強調していた。

21時20分。自分達が乗るバスに乗り込み、発車を待った。

21時51分。発車時刻から1分が経った。まだバスはエンジンをフル回転させていない。その後5分経っても、10分経っても、15分経っても発車する気配はなかった。

「なあ、朝風。バスってこんなにトロイもんか。」

木ノ本が前の席にいる朝風に話しかける。

「トロイもんですよ。これだからバスは嫌いなんです。できれば「寝台特急」とか「寝台特急」に乗りたかったですけど。」

「まあ、乗してくれるわけないな。」

「そうなんですかねえ。」

「そんなに寝台特急に乗りたいのか。」

木ノ本の隣に座っている楠が朝風に聞いた。

「はい。寝台特急にはこんなのにない良さがいっぱいありますから。」

（こんなのに（バス）ない良さ・・・。）

「うん。朝風、君は立派だよ。」

「でも、なんでそんなこと聞くんですか。」

「んっ。ああ、ちょっと気になったただけだから。」

22時15分。ようやく九州福岡を発った。

バスは発車するとすぐに高速道路に入った。高速道路に入るとすぐに車内灯しゃないとうが消される。車内灯が消えるのはいいのだが、どうにもならないものがあつた。バスのエンジンである。この床下から聞こえてくる電車のモーター（吊り掛け）よりもひどいこの音はどうにかならないのだろうか。ずっと思っていた。しかし、こんなこと思つてもどうにもならないのは分かっている。その夜、僕はこれのせいで眠れねむなかった。

36列車 夜行バスで（後書き）

これはひどすぎでは・・・。

言動は確かにひどいですが2日目終了。次からようやくやっと最終日に入れる。

37列車 大阪にて

時計をしてみる。指していたのは2時56分。

(あと4時間くらいどうすればいいの・・・。)

今この時間まで起きていたことは初めてだ。どっかで記憶きおくが飛んでくれればいいのだから、なかなか思っているようにならない。僕はいつになったら眠ねむれるのだろうか。下手へたをすると電車の中で寝ねてしまうことになる。どうしてもそれだけは避さけたい。

後ろをしてみる。僕は夜行バスの真ん中くらいの通路側の席に座っている。後ろは真っ暗だった。霧きりに包つつまれているわけではないのだが、何だか怖こわく感じた。そんなに臆病おくびょうなつもりではないのだが・・・。

それから何分経っただろうか。夜行バスはどこかのサービスエリアに入った。車内灯しゃないとうがつけられたが、起きたのは僕だけだった。

バスの外に出て伸びをする。ずっとバスという監獄かんごくの中にいたのだ。エコノミー症候群しやうこうぐんになる人の気持ち分かる気がする。

「ああ、眠ねむい。」

ふと声が漏もれた。

(こんなんでも耐たえられるのか。)

自問自答じもんじどうした。

5時00分。今いるところがどこかは分からない。バスの進行方向に夏の太陽が昇のぼり、バスの中を少し明るくした。

(早く着いてくれないかなあ。)

今がとても暇な僕に5時という時間は牙きばをむいていた。

6時34分。大阪おおさかの中心部に到着とちやくする。本当はこんなに早く着かないのに・・・。

「皆さん。ここに14時30分に集合してください。」

バスを降りて少し歩いたビルの下で集合場所の説明がある。この集合の説明を受けたら、また自由行動だ。

「永島。^{ながしま}」きたぐに」でも撮りに行くか。」

木ノ本^{きのもと}が誘ってくれた。

「うん。早く行こうぜ。」

「あのう、「銀河」^{ぎんが}も見れるんじゃないんですか。」

「ああ、「銀河」^{ぎんが}もあつたか。」

説明しよう。今話しに出てきた「銀河」^{ぎんが}とは、東京^{とうきょう}↪大阪間^{おおさか}を走っている夜行列車の名前である。24系客車という「寝台特急」^{ブルートレイン}に使われている車両^{しゅうりょう}が充当されている。また、日本に数少なくなつてしまった急行列車の一員でもある。

もう一つの「きたぐに」とは、大阪^{おおさか}↪新潟間^{にいがた}を走っている夜行列車の名前である。この列車も「銀河」^{ぎんが}と並ぶ急行列車で、今も定期運行をしている貴重^{きちゆう}な存在である。この「きたぐに」に充当^{じゅうたう}されている車両は583系。日本ではもうこれではしか味わうことのできない3段寝台も備えている。なので、この意味でも貴重な存在なのだ。「何言ってるんですか。「銀河」^{ぎんが}撮れるわけないでしょ。大阪着7時19分なんですから。」

朝風^{あさかぜ}が入れ知恵する。

「あれ、「銀河」^{ぎんが}ってそんなに到着する（くる）の遅かつたつけ。」
「ええ。それに7時19分に大阪にいたら「彗星」^{すいせい}をゆっくり見ることができませんよ。」

「うーん。「銀河」^{ぎんが}か、「彗星」^{すいせい}か・・・。」

考え込む。

「僕^{おれ}だったら断然「彗星」^{すいせい}ですね。「銀河」^{ぎんが}だったら浜松でも見れますから。」

朝風^{あさかぜ}が言う。

「夜遅いけどな・・・。やっぱ「彗星」^{すいせい}かな。「彗星」^{あいつ}は大阪でないと撮れないからなあ・・・。」

「て、お前^{おまえ}らがそんなことより、まず「きたぐに」だろ。」
やれやれ。僕^{おれ}がこの仲^{ちゆう}を仲裁^{ちんさい}していなかったら「きたぐに」も見れなくなってしまう。

大阪駅^{おおさか}4番線に到着すると、

「銀河^{ぎんが}」、撮れないのかあ。」

木ノ本は不機嫌^{ふきげん}な顔をしてぼやいている。

「まったく。銀河^{ぎんが}」も「彗星^{すいせい}」もKY^{ケーワイ}なんだよ。」

（いや、「銀河^{ぎんが}」や「彗星^{すいせい}」に「空気読め^{きうきよめ}」っていう方が無理なんじゃ・・・。）

「そんなこといいじゃないですか。「きたぐに」が見れるんですから。」

ちよつと考えてから、

「それもそうだな。」

「銀河^{ぎんが}」のことは吹っ切^{ふき}れてくれたのだろう。笑いながら、カメラを取り出していた。

6時49分。4番線に「急行きたぐに」が入線する。入線してく
る間、「きたぐに」をずっと見ていれなかった。黄色く光るヘッド
ライトがとても眩^{まぶ}しかったからだろう。「きたぐに」はゆっくりと
入線し、僕達の少し手前でブレーキをきしませ、停車した。

「583系^{ゴハサン}かあ。一度は乗ってみたいですわね。」

朝風^{あさかぜ}は目を細めて、583系の体を触っていた。

「朝風^{あさかぜ}、ちよつとどいて。」

その声を聞くと朝風^{あさかぜ}が583系から離れた。朝風の姿がカメラに映^{うつ}
らないことを確認して、シャッターをきった。

「よく撮^とれたか。」

シャッターをきり終わると木ノ本^{きのもと}が話しかけた。

「まあ。」

「へえ。」

木ノ本は携帯^{きのもとケータイ}を覗き込むと、

「彼女か誰かに送^きってやれよ。」

彼女という言葉に面喰^{めんくら}った。

「バツ、送^きんねえよ。つうか、送^きったところで分かんねえよ。」

「それもそうか。」

冷やかしだろう。木ノ本は少し笑っていた。

「あっ、そうだ永島。^{ながしま}「きたぐに」に使われてるあの車両。なんていうんだ。」

木ノ本のその言動にはよろめいた。知らないはずはないんだけど・・・。

「さっき朝風^{あさかぜ}が言ってただろ。583系^{ゴハサン}って。」

「へえ583系^{ゴハサン}っていうんだ。私はてっきり「雷鳥^{ライチュウ}」とかの485系^{ヨンパゴ}だと思ったよ。」

「まあ、無理もないよな485系^{ヨンパゴ}と583系^{ゴハサン}ってよく似てるもんな。」

「よく似てる恰好^{かっこう}してて、中身がすごく違うんだろ。ああ覚えづらい。」

その後独り言のように、

「ダメだ。結構長い間電車と離^{はな}れてたから、記憶が何かと混ざっちゃってる。」

と言っていた。こういうわけは、自分の趣味を長い間隠^{かく}していたからである。4月の時に言っていたが、僕ら以外で木ノ本の電車好きを知っているのは親と親友だけらしい。そして、その数は10人もいないと言っていた。

「まあ、そのうちまた覚えるって。国鉄ほど覚えやすいものないから。」

「ナヨロン先輩からの受け売りか。」

「まあ、そんなとこ・・・。」

その後は「きたぐに」も車庫に回送されるまで写真を撮り続けた。そして、回送される時は全員でその後ろ姿を見送った。

JR西日本色の583系が隣を通り過ぎていく。

「行っちゃいましたね。」

朝風^{あさかぜ}が名残惜^{なごりお}しそうに言った。

「できれば、国鉄色の方がよかったなあ、俺あれの方が好きなんだけど・・・。」

その国鉄色という色は窓周りが青でそれ以外のところがクリーム色になっていて塗装だ。

（こいつ、彼女いるのに「好き」とか「嫌い」とかふつうに言うよな。絶対、彼女に勘違いされるぞ。）

「どれくらい。やっぱ彼女くらいか。」

「そんなの比べられないよ。」
腕組をして目を閉じた。

「一つ言えるのは、100系以下だってことだな。」

「100系好きだな。」

「うるさいな。好きなんだからしょうがないだろ。」

（・・・）

勘違いされるかどうかは別として話を進めよう。

「永島さん。今度は何車撮するんですか。」

「うーん、ちよつと待ってね。」

ポケットから臨地研修のために持ってきたカンニングペーパーを取り出した。このペーパーには電車の発車時刻だけが記されている。

「えーと次は・・・、「彗星」だ。」

「「彗星」来たー。」

朝風のテンションがハイになる。僕にも分からないわけではない。

読者の皆様に説明しよう。「彗星」とは、新大阪と九州の南宮崎を結んでいる寝台特急の名前である。使用客車は24系寝台客車で、さつき見た583系が充当されていた時代もある。

「「彗星」かあ。名前のにはカッコいいよな。」

「それどういう意味だよ。」

「まあ、そりゃおいといて・・・、新大阪まで移動しないといけないのか。」

「でる方法だったら、いくらでもありますけどねえ・・・。」

「「サンダーバード（とつきゅう）」使わない。」

「はっ。佐久間バカだろ。」

ここにいる全員の声がそろそろ。

「そんな一区間だけ「サンダーバード」使うって。新快速しんかいそくや快速かいそく、ましてや、普通ふつうでも所要時間しよようじかん変わらないのに……。」
空河そらかわが文句を言ってる、

「分かってる、分かってる。使わねえよ。」

「んじゃあ、7番か8番線に行くか。」

木ノ本きのもとが全体を促してくれる。こういうときは撮り鉄として頼りになるのだろうか。それとも……。

「ちようどいい列車がないのか。」

来てみるとこのありさまであった。ほんのちよつとではあるが、発車かいそくする列車を待つことになった。

「早くしないと、「彗星すいせい」来ちゃうじゃん。もう電光掲示板でんこうけいじばんにも出てるし……。」

「まだ、大丈夫だって。」

7番線を諫早いさはやが指差した。

「すぐに発車する列車あるじゃないですか。一区間だけだし、我慢がまんして乗りますか。」

諫早の指の先にはステンレスの通勤電車が止まっていた。207系という車両だ。

「そうだな。ここは207系あれに我慢して乗るか。」

「はあ。しょうがないなあ。」

「7番のりばから、普通……。」

「ヤベ。もう発車しちゃうじゃん。」

「早く乗るぞ。飛び乗ろうが、滑り込もうがなんでもいいから。」
4枚あるドアに流れ込んだ。さすが、この時間帯（通勤ラッシュ）だと思った。車内は人でいっぱいだ。関西かんさいの人も多さをあからさまに見せつけられた。

37列車 大阪にて（後書き）

この物語には自分の理想も含まれています。特にこんなにたくさんのあれがあつたらなあ・・・。

自分でも創作で鉄道会社を作ったりしていますが、そこに必ずあるのはあれなんです。寝台特急という響きだけで夢を感じます。

38列車 車撮

5分後。新大阪しんおおさかに到着。新大阪しんおおさかに停車すると押し出されるようにしてホームに降りた。

「ヤバかったなあ。あの人の数。」

「ヤバすぎだよ。関西ってもっと車両増やせばいいと思うんだけどなあ。」

「そういうわけにもいかないんじゃないんですか。」

「まあ、そうだろうけど・・・。」

「前来たことありますけど、あすこまで人が多いのは通勤ラッシュだけで、昼とかそういう時間帯はそんなに混んでませんよ。」

「へえ、そうなのか。」

「の前に、朝風あさかせっていろんな所行きすぎじゃない。」

「あつ、バレました。」

「おい。そんなことより「彗星すいせい」だろ。」

諫早いさはやに怒られてしまった。

「早くしてくださいよ。もう後5分くらいしかないんですから。」

「んじゃ、聞くけど、「彗星すいせい」って何番線に入線くるんだよ。」

「12番線です。このホームは13・14番線ですから、隣です。」
中学生の方が情報通じょうほうつうだ。高校生の方がしきられてしまっている。

「分かった。早い所行こう。」

降りたホームから階段を使い線路の上に行く。さらにこの上は新幹線しんかんせんホームだ。だが、今は新幹線しんかんせんなどにかまっていられない。早い所

「彗星すいせい」を達成しなければ。」

11・12番線に降り立つ。ここは特急専用ホームだ。11番線には紀勢本線きせいほんせんの「特急くろしお」。「特急スーパークろしお」。「特急オーシャンアロー」と「関空特急はるか」が、12番線には山陰本線さんいんほんせんの「L特急北近畿エルとっきゅうきたきんき」。「特急文殊もんじゅ」。また北陸本線ほくりくほんせんの「L特急雷鳥エルとっきゅうらいちょう」。「特急サンダーバード」が発着する。そして、大阪と九州各地を結

んでいる「寝台特急あかつき（あかつき）」、「寝台特急彗星」
「寝台特急なは（なは）」と「寝台特急トワイライトエクスプレス
（Twilight Express）」、「寝台特急日本海」が発
着する。

7時22分。

「12番のりばに、当駅どまりの、列車が、参ります。黄色い線の、
内側まで、お下がりください。」

アナウンスが入る。「寝台特急彗星」の接近がここに告げられた。

全員の顔が曲がって何も見通せない大阪方面を向いた。

7時23分。大阪方面から甲高い汽笛が聞こえた。

「EF65（ぼく）は今日も元気です。」って言ってるみたいだ
な。」

「ああ、そうかもな。」

そして、姿をあらわす。前を見ている黄色い二つのヘッドライト。

真ん中に掲げられている寝台特急の象徴。ヘッドマーク。そして、

その後ろに続く7両の青い車体。新大阪―南宮崎間を結んでいる「
寝台特急彗星」だ。

入ってくる「彗星」を僕達はシャッターの嵐で出迎えた。「彗星」

は僕達がそんなに移動しないよう加減して停まったのだろうか。ゆ
っくり、ゆっくりとスピードを落とし、ギギギギギという鈍い音
を立てて、停車した。

（一度でいいから、運転してみたいなあ。）

心の中でその日が来ることを願った。

「一度でいいから、運転室中に入ってみたいなあ。」

僕の傍らで木ノ本がそうつぶやいていた。

「早い所撮ってくださいよ。「あかつき」がすぐに来るんですから。」

僕も木ノ本も我に返って、

「あっ、そうだった。ここまで来て撮り損ねたんじゃ来た意味がな
いよ。」

（ヤベ、お土産^{みやげ}一個減るところだった・・・。）

我に帰った後は「寝台特急彗星^{しんたいとっきゅうせいせい}」を牽引してきたEF65-1123号機と、ヘッドマークのアップ。24系のトレインマークなどなど。ざっと撮れる部分は撮り終えてしまった。そして、僕達が満足したことを見計^{みはか}らったのか。「寝台特急彗星^{しんたいとっきゅうせいせい}」は新大阪^{しんおおさか}駅から走り去った。

「お疲れ様^{つか}。」

その後ろ姿を見送りながら、つぶやいた。女の子がティディベアに話しかけると、何ら変わりはないだろう。ただ、話しかけている対象が違うだけである。話しかけると、電車が「ありがとう。」と答えしてくれる気がするのだ。

「さて、今度は「あかつき」だな。」

「ああ。「あかつき」も仕留^{しと}めてやる。」
仕留めると言う言葉に朝風^{あさかぜ}があきれる。

「仕留めるって・・・。動物じゃないんだから・・・。」
「よし、どこからでもかかってこい。」

聞く気のない木ノ本^{きのもと}を見て、

「永島^{ながしま}さん。木ノ本^{きのもと}さんって、カメラ握ると10歳くらい若返りますよねえ。」

「んっ。そうなのか。」

「そうなのかって・・・。木ノ本^{きのもと}さんだけじゃなくて、永島^{ながしま}さんもそうなんですからね。・・・。」

その後朝風^{あさかぜ}が何と言ったかは分からなかった。

「あっ、やっぱりそう見えるんだ。」

「・・・。あの・・・自覚^{じかく}したことないんですか。」

「ないけど、友達からよく言われてたから。目だけ子供のままだって。」

「・・・。」

「そんなことより、「あかつき」のためにスタンバらなきゃ。」
固^いまったままにいる朝風^{あさかぜ}を促^{うなが}して、「寝台特急あかつき^{しんたいとっきゅう}」の停止目^{ていし}標^{いち}

標まで足を運んだ。

7時29分。大阪方面^{おおさか}にこっちに向かってくる二つのライトが姿を現した。それに向けてカメラを構える。

「間もなく、12番のりばに、寝台特急^{しんだいとっきゅう}、「あかつき号」^{きょうと}、京都、行きが、参ります^{まい}。黄色い線の、内側まで、お下がりください。」

7時30分。EF65-1120号機^{けんいん}に牽引された、14系寝台客車^{きやうさか}13両が新大阪^{すべ}に滑り込んだ。

「・・・」

木ノ本^{きのもと}は一人12番線の大阪側の突端^{とつたん}で固まっていた。

7時30分。

「12番のりばから、寝台特急^{しんだいとっきゅう}、「あかつき号」^{きょうと}、京都、行きが、発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」

「寝台特急あかつき」の発車が告げられた。このアナウンスが終了すると、14系の折り戸^{おど}が閉まった。ブルーの車体についていた赤いランプも消える。

「ポッ。」

「あかつき」が短く挨拶^{あいさつ}をした。「もうちょっと、頑張ってくるよ。」
「とっている気がする。」

(頑張ってるね。)

心の中で「あかつき」を送り出す。そのやり取りをしているうちに、「あかつき」はゆっくりと走りだした。傍ら^{かたわ}を通して行くEF65のモーターがうなりを上げる。何とも腹^{はら}に響く地声^{じこえ}である。

この地声の後は、足から伝わる振動^{ゆれ}と耳にする勇ましい音を聞いて「あかつき」のラストスパートを見送る。

ラストスパートを見送り終わると木ノ本^{きのもと}と合流した。

「なーあ、永島^{ながしま}。」

「何。どうしたのか。」

「「あかつき」シクツタよ。」

「あっ、そういうことね・・・。」

するとため息をついて、

「私「あかつき」に嫌きらわれてるのかなあ・・・。」
「・・・。」

どう言えればいいのだろうか。それに困る。

「うーん。木ノ本きのもとは「あかつき」のこと好きかも知れないけど、カメラが拒きよ否ひってるかも。」

「えー。「レフちゃん」が「あかつき」のこと嫌きらいのなの。」
(レフちゃんって・・・。)

「ようし、決めた。今日から「レフちゃん」を特訓とくくんさせるぞ。」

(特訓とくくんって・・・。)

「あの、木ノ本きのもとさん。言いづらいんですけど、それ一いち眼がんレフを特訓とくくんしても意味がないと思いますが。」

「うるさい。撮とった写真がブレるのは「レフちゃん」がゴミだからだ。だから、そのゴミ要素ようそをなくせば大丈夫だ。」
ちよつと救助きゅうじょを頼たのみたい。

それから、ちようどいぐらいの朝御飯あそひめを食べて、9時26分に到着する「寝台特急しんだいとっきゅうなは」に備えた。

「「なは」が来るのって何時ですか。」

「9時26分。」

「あつ、そんなに遅おそいんですね。」

「まだ、遅い方じゃないだろ。「さくら」が東京に着くのが11時29分だから、そういう意味では「さくら」が一番遅いよ。」

「「さくら」も遅いけど、「はやぶさ」と「富士ふじ」も遅いよ。東京のぼ着は遅くないけど、西鹿児島着と南宮崎くんだり着は15時10分と13時23分だから。」

「そんな時間について何するんだよ。」

「だから、飛行機ひこうきとかに客が流れるんですよ。あんなのどこがいいんですかねえ。」

朝風あさかぜが腕組うでくみをする。

「飛行機はただ速いだけだし、夜行バスはただ安いだけだし、車は窮屈きゆうくつなだけだし、自分で運転するから疲れるし・・・。」

（まだ、自分で運転してませんよねえ。）

「まあ、そこは人それぞれだから……。ただ速いだけに見せられる人もいるかもしれないし……。」

「これだから、地球温暖化に貢献するんですよ。」

あさかせ

ブルトレ

朝風は寝台特急の話になると燃える。というのが今回の臨地研修で分かったこともある。

朝御飯を食べ終わるとすることもない。それも人それぞれなのが……。

「12番のりばに、」特急、雷鳥、5号、「金沢、行きが、参ります。……。」

この放送を聞くと木ノ本が12番線の京都側に飛んでいった。今度こそ失敗しないためだろう。僕達もその後ろを追う。

「雷鳥」って485系ですよねえ。」

そらかわ

空河が聞いた。

「ああ、そうだな。」

「雷鳥5号（5ごう）」ってパノラマグリーン連結してましたっけ。」

「知らねえよ。俺そこまで守備範囲じゃない。」

しばらく間をおいて、

「ただ、一つ言えるのは……。今木ノ本が行った方向はもしパノラマグリーンが連結されてるとしてアウトだってこと。」

「あれ、パノラマグリーンって大阪側でしたっけ。」

おおさがた

「大阪方だよ。」

「そうでしたっけ。」

「そうだよ。」

「あつ、僕てっきり金沢側だと思ってました。」

かなざわがた

「まあ、デビューした時に金沢方にあつたからな。無理もないかも。」

「

後ろから。カン、カン。コン、コン。軽快に新大阪のレールをたたく。その音がだんだん自分の方に近づいてくる。

チラツと後ろを振り向く。

僕の視界しかいに三つのヘッドライトをつけた顔がある。

（早く行かなきゃ・・・。）

そう思い走り出す。すると、すぐに追い抜かれる。追い抜かれてもなお、その後を追う。ついにその速度に追いつき、僕が抜き返そうとしている時には、485系は鈍い音にぶを立てて止まるころだった。

先頭には既に木ノ本きのもとがスタンバイしていた。

「あれ、「雷鳥」ってパノラマグリーン連結してたよねえ。」

「連結してるよ。」

「もしかしてこれハズレかな。」

そうつぶやいていた。

「ハズレかもしれないけどさあ・・・」

と言った時「雷鳥」の発車が告げられる。

「もう発車かよ。早いなあ。」

と言うと、カメラ片手に12番線の京都側の突端とつたんに走って行った。

僕も顔を「雷鳥」に向けて見送る準備をした。別れるときになるとどんな列車でも名残惜しい。

「雷鳥」は信号が青のことを確認すると、ゆっくりと新大阪を発った。軽く継目を叩いて、重く継目をたたく。少し重々しいのはモーターを積つんでいるからだろう。4号車、3号車、2号車。そして、金沢行きの最後尾。1号車が通過した。

（んっ。これは・・・。）

1号車が横を通った時あることが脳裏のうりに映し出された。

「パノラマグリーンってふつうのやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつうのほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。・・・。」

これは文化祭の時にナヨロン先輩が教えてくれたことだ。

今自分の隣を走って行った車両の特徴はナヨロン先輩に教えてもらったこと全てに当てはまったのだ。

（間違いない・・・。）

今から携帯ケータイを出しても間に合うはずがない。それなら……。今は恥はずかしいだのなんだの言っている場合ではない。

「木ノ本きのもと。後ろだ。後ろがパノラマグリーンだ。」

大声で、構かまえている木ノ本きのもとに情報を提供した。

木ノ本きのもとの横を485系が通り過ぎる。

しばらくすると、木ノ本きのもとが高く手を上げた。親指を立てている。口が動いていたが、何と言っているのかは分からなかった。

また、合流すると、

「ありがと。永島ながしまのおかげで失敗せずに済んだよ。」

とお礼を言っていた。

「失敗しっぱいされちゃ困ると思ったからな。」

「でも、向こうに行く奴だったとはなあ。テールライトだったのが惜おしかったなあ。」

「何だと、貴様きさま。せっかく教えてやったのに……。」「

「まあまあ。」

空河そらかわが止めに入る。

「で、今からどうするんですか。まだ1時間以上ありますよ。」

「ベンチとかに座ってればいいだろ。」

「絶対座ってれませんって。車両たびが来る度にどっか行っちゃいますよ。」

「ハハ、それもそうだな。」

結局、「寝台特急おおさかなは」車くるまで新大阪の在来線ホームで待つことになった。その間に「雷鳥4号」が来たが、ハズレだと言って撮りには行かなかった。

9時25分。

「12番のりばに、当駅どまりの列車が、参ります。黄色い線の内側までお下がりでください。」

「ようやくと来たな。」

「でも、車撮しやつとかで時間使ってそんなに長くなかったじゃないですか。」

「来たぞ。」

「寝台特急^{しんだいとっきゅう}なは」姿を視界^{とら}に捉えた。

この後、「寝台特急^{しんだいとっきゅう}なは」が回送^{かいそう}されるまで撮影を続け、「なは」が撮り終わると、佐久間^{さくま}達と別れた。佐久間^{さくま}と別れた後何をしていたかと言うと、ほとんどの時間をホームで過ごしていた。具体的に何をカメラにおさめたかというと、「特急オーシャンアロー」の283系。「特急北近畿^{きたきんぎ}」の183系。「特急くろしお」の381系。「特急はまかぜ」のキハ181系などなど。大阪^{おおさか}に集結^{にじに}するJR西日本の車両のほとんどを撮りつくした。さすがに12時を過ぎると精神的にもまいってしまい、大阪^{おおさか}のベンチに腰掛け^{こしか}、来る車両を眺めていた。

38列車 車撮（後書き）

・・・。

ようやくと臨地研修にも終わりが見えてきました。

何とか頑張ってきましたが、まだコメントが一つもないという状況が続いています。書いてくれると本当に助かります。

それとも話が話で書きづらいですか・・・。

39 列車 寝たら死ぬぞ

14時30分。朝言われた集合場所に赴いた。おもむ

「サヤ先輩と善知鳥先輩何してるんですかねえ。」
疲れた言い方で今二人を待っている状態である。つか

「特にサヤの方は時間守った例がないもんな。」ためし

「それ8日の朝も言っていました。」

しばらくするとサヤ先輩達が戻ってきた。

「ちゃんと時間を守ってくれないと困ります。」

とアド先生に叱られていた。しか まあ、当然のことだろう。

「遊ぶのもいいけど、程々にな。」

アヤケン先輩がそう言っているのが嫌でも聞こえてきた。

14時43分。大阪駅のホームに再び戻ってくる。今日何時間見たホームだろうか。ハッキリの光景を見るのは嫌になった。だが、来る車両によりその光景も新鮮になる。おおさか

14時58分。いくら車両でも新鮮に感じられなくなった大阪駅を後にする時間がやってきた。

最後に乗るJR西日本の車両である。その車両に目を向けた。

(マジ・・・)

飛びはねたくなった。僕達の乗る新快速長浜行きは223系-1000番台だったのだ。しんかいそくながはま

「運が良かったな、自分の好きなやつに乗れて。」かた

後ろでナヨン先輩が僕の肩を叩いて言ってくれた。

乗り込むと人でいっぱいだった。12両編成のはずではあるが、こんなに混むものなのだろう。

ティントウーン、ティントウーン。14時59分。223系のドアが一斉に閉まる。いっせいに 15時00分。223系がブレーキのストッパーを外した。ここから米原まで81分。浜松まで264分の行程のスタートである。まいばらつ はままつ

新快速は130km/hで米原を目指す。14時55分発の快速
米原行きとは途中の長岡京でござう抜きした。京都までコマを進め
ると乗客の入れ替えがある。ここで運転席の右斜め後ろ。一番前の
補助席を確保した。

その後は、運転手と同じ目線で前を見つめていた。12両編成と
いうこともあって僕の視界は人で遮られていない。そのためゆっく
りと前の視界を楽しむことができた。走っている途中、何本もの旅
客列車と数本の貨物列車とすれ違い、そのたびに空河と「何か来た
な。」と言い合っていた。

16時20分。

「ご乗車ありがとうございます。米原、米原です。」
このアナウンスで耳に残るものがあつた。

「なお、ドア付近にございます、ドア開閉ボタンを押して、お降り
ください。」

「ドア開閉ボタン。」
ドア付近にあると言っていたボタンを探した。見つけると何とも分
かりやすいものである。

「僕が押します。」
空河が緑色の「開く」ボタンに手を添えた。

「おう、任せたよ。」

16時21分。米原の6番線に入線。停車するとドア開閉ボタン
の上にあつた黒い部分に赤くドアという文字が浮かんだ。この合図
で空河がボタンを押した。

ティントウーン、ティントウーン。聞きなれた音を立てて、ドア
が両側に開く。開き切るのを待たずに、ホームに飛び出した。

ホームには他のドアから降りた人もいる。真ん中のドアから降り
るアド先生を視界の隅に捉えてから、階段のある方向へ歩いて行っ
た。

次の列車は16時30分発。普通大垣行きだ。この列車はすでに
8番線に控えている。それに向かって階段を駆け上がり、人の波を

かいくぐって8番線に向かう。新快速しんかいそくから大垣おおがき行きの普通列車の乗り換えは案外多い。行く手を阻はばまれながら向かった。

8番線来るとオレンジ色のラインの入った白い車体があった。117系という車両であることはすぐに分かったが、中身はよく知らない。

（117系イイナイイナかあ。）

と思って片側に2枚しか付いていないドアから乗り込んだ。車内をざっと見まわしてみれば、ほとんどの席が埋うまっていた。その中で空いている席を見つけ、そこに陣取じんどった。

「おい、永島ながしま。そこ私わたしと変われよ。」
顔を上げてみれば、木ノ本の顔きのもとがそこにあった。

「なんでだよ。」

「私しんかいそく、新快速の中でずっと立ってたんだからね。足が棒になってるから変わって欲しいなあって事。」

「・・・。」

「なあ、お願いだよ。」

「分かったよ。」

木ノ本きのもとに席ゆずを譲り、僕は立つことにした。この列車は途中醒ヶ井さめがい、近江長岡おうみながおかと終点大垣おおがきまでの各駅かくえきに停まって行く。さっきまでの新快速しんかいそくとは違いゆっくりとコマを進めていく。そのため、この区間はクソがつくほど長く感じてしまう。

「あーあ、さっきまでスッゲーカッTONで来たのに・・・。」
さっきの223系の姿が脳裏のうりによみがえる。確かに大阪おおさか、米原あのみだは早すぎるのだ。110.5kmキロを81分で結んでしまうのだ。他だったら考えられない距離きよりを通勤可能区域つうきんかのうくいきにしてしまっているのだ。

「まあ、しょうがないだろ。」

「そりゃ、分かってますけど・・・。」
諫早いさはやがさっき発車した柏原かしわばらの方向に目を向けた。

17時04分。117系に乗車するのはここまでだ。大垣おおがきに到着とうちやくする直前局地的な雨に見舞われたもののホームの屋根の下にいる僕

達には関係のないことである。

17時09分。今度はJR東海の新快速の出番である。この313系の新快速で終点豊橋まで揺られる。僕は途中の木曽川までは起きていた。木曽川を過ぎると空いている席にフラフラと歩いて行った。ちょうど楠先輩の隣が空いている。

楠先輩。隣いいですか。」

「んっ。いいよ。」

窓側に行きたいと言ったわけではないが、楠先輩は窓側の席を開けてくれた。

「ナガシイすごく疲れてるみたいだけど、大丈夫。」

「大丈夫です。」

「そう。なら・・・い・・・。」

楠先輩の声がはるか遠くで聞こえていた。

18時30分くらいだろうか。

「・・・シイ、ナガシイ。」

身体をゆすっているのは誰だろうか。

「どうしたんですか。」

「ああ、榛名。次で乗り換えだから起こそうとしてるんだけど、起きないんだよ。」

楠先輩の隣に目を向けると窓に頭を押し付けた状態で寝ている永島が視界に入った。

（夜行バスの中で寝れなかったって言ってたもんな。ここで嘔き出たか。）

「なんかいい方法ないかな。」

ちよっと考えてから、

「入れ知恵してくれる人だったらいるかもしれません。」
携帯電話を取り出し、ある人にメールを送った。

1分後その内容の答え返ってきた。

「ナガシイが寝ちゃった時は、くすぐってやれば一発だよ。」
メールはこうなっていた。

（マジかよ。）

「で、どうだって。」
楠くすのきが聞いた。

「ああ、知ってる人が言うにはくすぐってやれば起きるって。」

「はっ。くすぐるって……。」

「んっ。どうかしたんですか。」

「いや、どうもしないけど……。」

「じゃあ、早くしてくださいよ。」

「間もなく終点豊橋とよはしー、豊橋です。乗り換えのご案内をいたします。
……。」

車内に聞きなれたアナウンスが流れる。

「もうすぐ豊橋とよはしに着くんですから早くしてください。」
なかなかやりだそうとしない楠くすのきを急せかす。

「榛名はるな、変わって。」

「えー。」

「早く。お願い。」

「わ……、分かりました。」

楠くすのきと場所を変わり、永島ながしまの横に行く。

（本当に起きるんだよねえ。）

ために彼女の言っていたたたき起たこす方法を試ためしてみた。すると、

「な……。何。」

（起きた……。）

「豊橋とよはしだよ。降りるんだから、早く準備しろよ。」

「あっ、もう豊橋とよはしかあ。」

と言って伸びをした。だが、一つ引っ掛かることがある。

（今の起あいつこし方って、萌あいつしかやらないはずだけどなあ。うーん……。
まあいつか。）

18時38分。313系は終点豊橋とよはしに滑り込み、僕達は今ここで運
んでくれたことに礼を言い313系と別れた。

次に乗る列車は18時50分発。新快速浜松行きしんかいそくはままつゆ。これが、最後

である。

「はあ、ようやく戻ってきたー。」

「そうだな。」

「永ながかったですね。特に今日。」

「本当だよ。ほとんどの時間ホームにいたんだもん。」

「そうか。私はそんなに永くなかったと思うけどなあ。」

「そりゃ、木ノ本きのもとが月に何回もそういうことしてるからだろ。」

「おい、醒さめヶ井がいくん君が知らないかい。」

アド先生が僕達に聞いた。

「ナニナニ、サメちゃんがどうかしたって。」

いつの間にか善知鳥うとづ先輩達が僕の後ろに立っていた。

「まさか、乗り遅おくれたとかっていうことないよな。」

「いや、降り忘おれたかもしれないぜ。」

「精神せいしんが負けたか。」

「おい、みんな手を合わせろ。」

「えっ。」

ハクタカ先輩に言われるがまま、名古屋なごや方面に手を合わせる。横目で3年生を見てみると同じように手を合わせていた。ざっと確認したところ、手を合わせてないのは楠先輩くすのきと箕島みしまだけだった。佐久間さくまはというと、ここにはいない。別の車両にいる。

「バカ。何かってに後輩殺してんだよ。」

「えー、後輩殺しじゃないよ、ハクタカ先輩。」

するとアド先生の携帯ケータイが鳴った。

「サメちゃん今どこだった。」

「今、蒲郡がまじおにいるそうです。」

「あいつバカだな。降り忘れて313に蒲郡まで連れてかれたのか。」

「

「なんだ、死んだんじゃないかったのか。」

「ハクタカって後輩殺すの好きだな。」

列車の中でこういうことを話しながら、終点浜松に19時24分に

着いた。

「ウーン。アッ。」

313系から降りて、ほかの乗客の邪魔にならない位置まで行って伸びをした。

「戻ってきたー。」

改札を出て、ようやく解散のはずだったが、醒ヶ井さめがいがいなくなるとそういうわけにもいかないだろう。そう思っていた。

「1年生と中学生は帰ってもいいよ。サメちゃんだったらあたしたちで何とかするから。」

善知鳥先輩にそう言われたが、帰るつもりもなかった。

「いえ、いますよ。」

「そうか。じゃあ、今ここに残ってる人は私と同類だな。」
満面まんめんの笑みえで言っている善知鳥先輩が少し怖かった。

「醒ヶ井さめがいのやつ電車の知識0だよなあ。」

ナヨロン先輩が分かりきっていることを言う。

「へえ、私と同じかあ。でも、私は帰ってこれたけど。」

「あのなあ、それは俺がいたからであってだなあ・・・。」

「大丈夫。何とかなるって。私でも何とかなってるんだから。」

「サヤ、諦めろ。何言っても無駄だ。」

「このやろう・・・。」

その後20時13分まで浜松駅はままつの在来線改札前ざいらいせんかいさつまえで醒ヶ井さめがいを待った。

この時間から推測すれば、豊橋とよはしどまりの新快速しんかいそくと浜松まで直通する新快速しんかいそくを乗り継いできたようだった。

「お帰り。サメちゃん。」

「まったく。2日目みたいに精神的せいしんてきに死んでくれば面白いのに。」

アヤケン先輩が2日目に精神的にまいていた時のことを言う。

「まったく。本当に死んでくれば面白いのに。」

「アヤケン先輩もハクタカ先輩も心配じゃなくてそんなこと考えてたんですか。」

すかさず醒ヶ井さめがいのツツコミが飛んだ。

「はいはい、人を勝手に殺さない。」

「あつ、面白がつてる途中なのに。」

（あーあ・・・。）

ハクタカ先輩と楠先輩は醒ヶ井さめがゐが来るとすぐに帰って行った。まあ、ハクタカ先輩にしてみれば強制的きやうせいてきに帰らされたと言った方がいいだろう。

「よし。サメちゃんも帰ってきたことだし、私達も帰るか。」

善知鳥先輩が伸びをする。

「はあ、ようやくと終わりかあ。よし、遠江急行班とうきやうきゆうはんも帰るか。」

ナヨロン先輩が帰ろうと言う。

「はい。」

「じゃあ、アド先生。さようなら。」

「あつ、永島君ながしまくん。18切符返してくれないかな。」

「あつ、はい。」

うっかり忘れるところだった。

「あれ、ナヨロン先輩は返さないんですか。」

「んっ。俺は何かと使うからね。」

アド先生に今回お世話になった18切符を渡す。

「後、返してもらうのは醒ヶ井君さめがゐだけだね。」

この言葉を後ろに受けながら、歩いて行った。

39 列車 寝たら死ぬぞ（後書き）

臨地研修がようやくと終了しました。これから9月などまた活動に入っていきます。

一つ思いましたが、これって説教してるように見えますかねえ。説教してると思った方には謝ります。

とにかくここまで読んでくれた人には感謝。

40列車 終了

臨地研修終了から数日。

「へえ、行って来たのかあ。榛名達はるなってホントに楽しそうだな。」

「さくらも来ればいいのに。」

「いや、私は練習あるし・・・。」

「そうか。そうだね。練習頑張ってこいよ。」

かるくさよならを言って別れる。

(榛名はるな・・・。私ソフト部辞めて、鉄研いくことにしたから。友紀ゆきも榛名はるなも分かってくれるよね。)

木ノ本の後姿を見送りながら、遠くで聞こえる足音を聞いた。

そして、僕は何をしているかと言うと、離れにある模型部屋に来ていた。

「智ともって本当にここ好きだな。」

「いいじゃん。駿兄ちゃんだってここが好きなんですよ。」

「まあ、人のことは言えないか・・・。」

しばらくの間、自分の前を走る鉄道模型に目をやり、その迫力に惚れる。

「そいや、行って来たんだろ。どうだった。」

「夜行バスは寝れるようなもんじゃない。」

「それだけかよ。」

「先輩が言っていましたけど、夜行バスは眠り薬を持って乗るもんだって。なんかそれが分かった気がした。」

「ハハハ。それ鷹倉たかくらの言い分だろ。」

持ってきた383系「しなの」の模型をレールに置きながら笑う。

「まあ、いいじゃねえか。楽しかったんだから。萌もえにもそのこと言っ

てやったらどうだ。」

「もう言ったよ。」

「だと思った。」

その後は持っている模型を走らせることだけにひたった。

ずっと離れにこもっていた生活が終わる9月1日。40日。多分それくらい。久しぶりに岸川^{きしかわ}学園に向かった。

自転車をはたすら西にこいて遠州鉄道^{えんてつ}の芝本踏切を通過。また少し自転車をこいで行くと高架橋になっている遠江急行^{こうきゅう}が見える。駅舎の下は程よい大きさのスペースがある。ここは駐輪場として活用されている。よっぽど東風が強くない限り雨は降りこまない。高架橋が大きな傘の役割をしている。ちょうど真ん中あたりに自転車を置いて、鍵をかける。鍵をポロシャツの胸ポケットに入れて、カードタッチ式の改札を通り抜け、階段を上がる。

「よしす、永島^{ながしま}。」

階段を上がったところにいたのは宿毛^{すくも}だった。

「おーす。」

「ちゃんと来たな。お前のことだから、家でずっと模型いじってて学校に来ないかもなあって思ったよ。」

「人をひきこもりみたいに……。俺そこまでひどくないからな。あくまで暇なときに遊んでるだけ。」

「暇な時って。毎日遊んでるようなもんだろ。毎日同じ遊びしてて飽きないのか。」

「飽きないんだからいいじゃん。楽しければそれでよし。」

「永島^{ながしま}らしいなあ。そういうのは……。」

しばらくホームから目の前にある線路を見下ろして、

「なあ宿毛^{すくも}。今日って授業あったっけ。」

「あるわけねえだろ。お前バカか……。バカかじゃないか。バカだったな。」

「ないか。よかった一瞬忘れたかと思った。……。話変わるけどさあ、ここから乗るのがやめない。」

「どうしてだよ。」

「いやあ。浜松^{はままつ}行った時混むから。ずっと乗ってて分かったんだけど、鹿島^{かしま}側に乗るのが一番賢いかもって思った。」

「あっちだったら混まないのか。」

「大体ね。」

言い始めたか言い始めなかったぐらいの時に列車が接近してくるというアナウンスが入った。40秒ほどたって西鹿島のほうから列車がやってきた。10日ぶりに見た車両はなんかどこかで見たことのある車両に思えた。

（311系……。改めてみると似てるなあ。兄弟。）

高架橋の線路の継ぎ目を「チャチャ、チャチャ」っと軽快にたたく音に混じってだんだん低くなっていく音が入る。

（2000系。第6編成。）

入ってきた車両の浜松側1枚目と真ん中2枚目のドアの間を見る。そこに書かれていた数字は「2106」。遠江急行が所有する2000系という車両グループ。第6編成の制御車。この数字だけでここまで読み取ることができる。もちろん、ここまで読み取れるようになったのは岸川高校に通い始めてからだ。他にどんな付番をしているかというところの第6編成の場合浜松側から2106+2206+2306+2406と付番されている。それぞれの車両の意味は制御車+電動車+付随車+制御電動車。それぞれの数字でそのことを示している。

さて、少し話がそれた。2000系は小さくキーという音を立てて停車。僕たちの前には2406の一番西鹿島寄りのドアが前に来た。ドアが開くと同時に視覚障害のある人のためになる音が出る。車内に乗りこんで僕から見て左手に体を持っていく。こっち側には4人ほどが座れるロングシートがある。一方反対側はというとこちらと同じロングシートがある。違うのは長さだけである。

「宿毛。宿題片付けた。」

一番乗務員室に近いところに座る。

「ああ、生物の宿題ははっきりどうでもいいって思ってたほんの数ページしか片づけてないけど、他のはちゃんと全部やった。」

「真面目なんだな。」

「……何。永島は全部終わってないのかよ。」

「読書感想文以外全部終わってる。」

「……お前。読書感想文一度も出したことないよなあ。」

「だって面倒だし。それに四ツ谷のあれ見ると読む気にもなれない
って。」

「だな。あれ見て読む気になる人がおかしいと思うよ。俺だってあれほとんど読んでないし、落ちて当たり前って思ってるけどなあ。」

「……。」

「永島……。」

反応のない永島のほうを見てみると、永島は乗務員室のほうを向いていた。どこに目をやっているのか多少気になる。その視線の先をおってみるとメーターがいくつもあった。その中で真ん中にあるメーターがアナログとデジタルで82 km/hと示していた。

（ああ。これ見てるのか。）

心の中でつぶやいた。

しばらくはしって芝本の次駅南高島に停車。数十秒の停車後発車。そして次駅美蘭に停車。しばらく停車して、また発車。ちよつと走

って小楠に停車した。

「永島。乗り換えないのか。」

宿毛が席を立ちながら言う。

「いいよ。たまにはゆっくり行こうぜ。急行混むし。」

「本当に人ごみ嫌いだな。」

「それもあるけど……電車に乗ってきてドア付近に固まる人も好きじゃないんだよねえ。特に朝のラッシュの時とか。ドア付近メチャクチャ混んでるのにシートのところはすいてる。これある意味のいじめじゃない。」

「いじめって。誰対象に何をやってるんだよ。」

「えっ。降りる人対象に降ろすまいとしてる。」

「……。」

「でも、東京とか大阪とかそういうことないんだよなあ。ここだけ

だよ。ドアに固まってそこから動かないの。」

「だから、東京と大阪とここを比べられても……。」

「ああ、あと時折クソKYなやつもいるよなあ。電車の番号が見えないつうの。前通るんじゃないやねえって。」

「だから……。」

そんな話をしていた。

その頃……、

（ヤバい。今日も間に合いそうにないや。また遠鉄かよ。でもまあいいか。帰りはふつうに分かるんだし。）

小ぢんまりとしたスーパーの駐車場を横切って西側にある搬入口らしきところを自転車で通過。すると線路が自分の右隣にくる。ちょっと走ったところに駐輪場がある。そこに自転車を置いて、駅に向かった。

（今7時02分。よかった30系じゃなくて。）

内心そう思った。

ホームにはすでに友達がいた。端岡という人である。

「夏紀。よーす。」

「あつ、萌。」

「ああ。新学期そうそう遅刻かと思ったよ。」

（今この時間で遅刻を心配するのかもしれないと思うけど。）

「遅刻って。まだたっぷり時間はあるじゃない。」

「いや、たっぷりあるように見えてたっぷりないんだよ。7時04分の電車が行っちゃったら次は7時16分。12分待つのもつらいし、その列車の車両30系だよ。」

「だから何。」

「だから何って。4両編成中にドアが8枚しかない車両に乗りたと思う。この朝メチャクチャ混む時間に。」

「……。」

（ほんと。萌と永島君って同類だわ……。）

今日9月1日はこんな感じでスタートした。まだ、2学期の鉄道研

究部は指導しないが、そのうち指導する。僕は授業が始まる次の日より、その日のほうが待ち遠しい。もちろん。このときにはそれしか考えてない。

9月中旬。9月11日。お昼休み。

「今日部活あるって。さっきアド先生がそう言ってた。」

「へえ。2学期も今日からスタートか。」

「永島^{ながしま}。今日は塾でいけないって言っというて。」

「ああ、今日は髪切りに行かないと。」

「ごめん、今日はいけそうにないから。」

本ノ本^{ほんのほん}、醒ヶ井^{さめがい}、佐久間^{さくま}、箕島^{みしま}の順に回答を得た。

「バカたれ。それ伝えるの全部俺だぞ。」

「いいよ。私もいるし。醒ヶ井^{さめがい}は女の子と遊んで、佐久間^{さくま}が床屋に行って箕島^{みしま}は・・・。」

「とても話せる内容じゃないから・・・。」

「なら家庭の事情と。」

「おい。ちよっと待て。俺が休む理由女の子と遊ぶってどういうことだよ。」

「だって、醒ヶ井^{さめがい}って彼女募集中だろ。彼女募集するために自分から行くんじゃないのか。」

「誰がそんなことするか。」

「分かった、分かった。」

僕がその中を仲裁する。

「理由は「じゅくじょ」と遊ぶな。」

「おい、余計ひどくなってる。」

「大丈夫。響きは悪いけど漢字は塾に女だから。つまり同じ塾に行っている女の子。」

「・・・。」

「じゃあ、そう伝えておくから心配しないで。」

「心配だわ。ボケ。」

そんなこんなで放課後。

「さてと、私も早いくこうかなあ。」

独り言を言って、カバンを腕に通した。さっさと立って教室から出ていく。

「……。」

「留萌。私たちも行こうか。」

「えっ。うん。」

（榛名。この頃とっても楽しそうだなあ。私もああいう風になりたい。なら……。）

心ではそう思っているけど、体が言うことを聞かなかった。

いつものようにグラウンドに出て、練習をした。

（はあ。なんで言えないんだよ。私のバカバカバカ。ただ友紀にそうしたいって言えばいいだけの話じゃない。なのに。なんで。こんなに言いづらくなってるのよ。）

「留萌。そっちに行っただぞ。」

そう言われた時にはもう遅かった。ボールは自分の足の間を通り抜けて行ってしまっていた。

「おい、今のボール取れないんじゃないんだぞ。どうしたんだ。」

「……。すみません。」

（留萌……。まさか、これって木ノ本の影響。だったら……。）
普段と様子が違う。このことはソフト部の誰もが気付いていることだろう。しかし、ここまで思っているのはおそらく自分ひとりのはずだ。

（久しぶりの部室だなあ。）

そう思いながら、体育館の外側にあるドアに手をかけた。

「ちよつと。木ノ本さん。」

誰かが自分の名前を呼んだ。その方向を見てみると誰かが息を切らして、こちらに向かってきている。

「永島いる。」

その人はそばまで来るとそう言った。

「永島。^{ながしま} あいつだったら部室にいると思うけど……。」

「ちよっとそこまで連れてって。」

彼はそう言った。

部室のドアを開けてみると先輩たちがいた。相変わらず集合だけは早いのである。

「おーす。ナガシィ。よく来た。夏休みに間死んでなかったか。」

「死んでませんよ。楽しいですから。夏休みの間は家の模型いじり放題。」

「……。」

そう言い切ったか言い切れなかったぐらいの時だった。部室のドアが開いた。振り向いてみるとそこにいたのは木ノ本^{きのもと}と宿毛^{すくも}だった。

「宿毛^{すくも}。どうしたの。」

「永島。^{ながしま} 教室集合。」

「えっ、何で。」

「いいから。理由は後で話す。」

宿毛^{すくも}はそういうと僕のバッグを持ってすたすたと走っていった。僕はそれを取り返そうと宿毛^{すくも}の後を追った。

「永島^{ながしま}連れて行かれちゃったよ。」

「ついに四ツ谷^{よつや}が本気を出したか。」

「嫌すぎるなあ。」体育館から出て、駐車を横切り、北校舎と南校舎の間を通り抜け、昇降口を通る。宿毛^{すくも}はそのまま教室のほうに行ったらしい。昇降口から右にかじを切って突き当たったら左にかじを切る。教室のドアに手をかけようとした時、クラスの人全員何かやっているのが目に入った。

「永島。^{ながしま} いくらできるからって抜け駆けはダメだぞ。」

そう言ったのはクラス担任の四ツ谷^{よつや}先生だ。四ツ谷^{よつや}は何かプリントらしきものを僕に手渡した。

「それにひたすら書け。200ページになるまで。」

「……。」

（四ツ谷^{よつや}の夏休みノート200ページと補修は本当だった。）

そう思いながら、自分の席に行ってシャープペンを走らせる。これはとてもきつい。今までノートを出した回数実に0回。クラスの中には宿毛すくも以外に今でもこの死の学習ノートを出している人はいるらしいがその数は多い日で5冊。少ない日は2冊。もう出さなくてもいいのではないかという提出率だ。

何を書いていいのかわからない。だから、自分の持ちネタを書くことにした。これで少しはその痛みが和らぐ。書いているとだんだん右手と右腕が痛くなってくる。少し手を休めながら、自分にしか聞こえない程度の声で歌を歌いながら、乗ってやる。でもこの行数は多い。ためにその行数を数えてみた。

「1、2、3、4、・・・56、57、58、59、60・・・」

（数えるんじゃないかった。）

書く気が一気に失せた。しばらくシャープを置いてそのままにいる。ドアを開ける音がして、四ツ谷先生よつやが教室から出て行った。するとこれまでシーンとしていた教室は少しにぎやかになった。先生という重圧がなくなったからだろう。

「永島ながしま。お前バカだろ。」

隣の宿毛すくもが話しかけてきた。

「の前に教室に集合ってこのことだったのか。」

「ああ。四ツ谷返よつやったやつ全員連れ戻して来いって言ってな。俺が同じ中学だからっていう理由で連れ戻しに行けって言われたわけ。」

「なるほどなあ。でも、やっててこんなにダルイもってないだろ。」

「あるわけねえだろ。俺も夏休み分50ページくらいは片づけたけど、それでも死んだ。」

「やる量がハンパじゃないんだよ。ノート一日5ページやってくるそんな勉強バカいるかつうの。」

「いるかもしれないぜ。一番やったやつは佐久間さくまで185ページって言ってたからなあ。」

「佐久間さくま。何気にすごいなあ。」

「うん。俺もそれには感心した。」

「宿毛^{すくも}。これどこどうやったらごまかせるかなあ。」

「ごまかすって。どうやってごまかす気だよ。」

「えっ。宿毛^{すくも}が今までやってきたノートを自分がやりましたって言うて提出する。」

「お前。セコイ。」

お互いシャープを走らせながら、文字を書いた。

「そーいやあ、お前さっきから何書いてるんだ。」

「電車の駅とか名前とか。」

「そんなの覚えて何になるんだよ。」

「電車の勉強。」

「学校の勉強しろよ。」

「だってしたくないもん。あんなのやったって使うっていうのはほんの少ししかないんだからさあ。だったら自分の趣味覚えたほうが100倍楽しい。」

「ある意味うらやましいなあ。そう考えれる頭が。」

「どういう人間でもそういうこと考えるよなあ。ふつう。」

「考えるけどさあ。」

「ああ。部活いきてえ。家帰って模型いじりてえ。誰だよ。夏休みノート200ページとか言ったやつ。」

「それ。四ツ谷^{よつや}の前で言ったら殺されるぞ。」

「あ、そうか。殺されたら元も子もないから、じゃあ、ボイコットして帰るか。」

「ボイコットねえ。実際帰ってる人もいるけど、それやったらつけが怖いだろ。」

「ですなあ。俺はそこまで度胸ある人じゃないし。」

話しながらも、数行は埋まっていくな。

「今まで何行書いたのかなあ。」

「数えるなって。また書く気失せるだけだぞ。」

「・・・。13。まだ13行しか書いてないの・・・。もういいや。」

やーめた。」

「だからやめろって言ったのに。」

「でも……。とりあえず出されたものはやるかあ。」

「……永島^{ながしま}。」

「何。」

「時折お前のが天才なのかバカなのかどっちなんだって思うときがいっぱいあるんだけど。」

「じゃあ、そこは俺イコールバカって思ってください。」

どこかで聞いたことのあるような声を出した。

「……。」

18時。

「はい。それじゃあ、終わってください。」

ようやくこのノート地獄から解放される。

「あれ、200ページ終わるまでやるんだって。」

「無理じゃん。あの60行のやつが200ページ……。1200行。今日終わったのが60行。単純にあと200日かかる計算じゃん。ああ、気が狂う。そこまで持たせるための鉄道ネタないし。」

嘆きながら門まで歩いて行った。

「あれ、永島^{ながしま}。部活にはいかないのか。」

「四ツ谷^{よつや}のおかげで行く気失せました。」

「ある意味究極の兵器だな。」

「兵器かあ。その兵器を核爆弾で破壊すれば……。あ、でも核爆弾だけじゃまだ手ぬるいか。戦艦^{せんかん}大和と武蔵^{むさし}からの艦砲^{かんぱう}射撃^{しゃげき}とB-29からの爆弾攻撃。これでこの学校は壊滅する。ハハハハ。」
(残虐化した。)

「あ。ついでに要らない車も処分するか。」

「……。」

40列車 終了（後書き）

昨日でユニーク数「成田エクスプレス」（253）になりました。なんかうれしいです。ちょっと前は223でした。このままいったら485で止まったりして・・・。

補足します。タイトルが終了となってもまだ終わりませんよ。

41列車 補修 掃除

9月14日。

「ああ。今日もノートの補修かあ。ボイコットしていい。」

「って言ってもしてないだろうが。」

「いや、そうなんだけどさあ。……。ああ、やっぱり昨日実行しておくべきだったかなあ。学校を核爆弾で破壊する。」

（言うことが怖いなあ。）

「でも、それやったらおれたちまで被害出るだろ。そこはどうするんだよ。」

「なら、学校の周りにシールド発生装置置いて、まず学校以外をシールドで覆う。次でB-29をここまで飛ばしてきて、核爆弾リトルボーイ500発を投下する。そのあとは大和と武蔵でお祭り。すばらしいショーじゃないか。」

「確かに。それができれば素晴らしいショーだけど。まずリトルボーイ500発ってどうやって集める気だよ。」

「気合。」

「もっと現実性のある答えにしようぜ。せめて。」

「あっ。の前に自衛隊が正当防衛にやってきちゃうか。」

「やってきちゃうなあ。」

「よし。やってきたら撃ち落とすか。」

「永島。そういう怖いことさらつと言わない。」

この日も18時までやって全員を解放。その翌日も同じ。だんだん残る人が減っていった。残る人が減っているのは四ツ谷先生がいな
い時を見計らって帰っている人がいるからだ。

「帰ってる人多いなあ。宿毛今やっているので何ページ目。」

「198ページ目。」

「マジかよ。もうちょつとで終わるじゃん。俺なんかまだ3ページしか終わってないのに。」

「どっかで打ち切りになってくれないかなあ。」

「でもさあ、宿毛すくもそこまで行って明日で打ち切られたら死にたいよねえ。」

「ああ。マジでそうしたい。」

翌日。

「……。」

「……。」

「永島ながしま。昨日言ったこと本当になったな。」

「ああ。でも、終わってくれてありがたいけどな。」

「そういわないでくれよ。200ページ昨日でやり終わった俺の立場がなくなるだろ。」

「まあ、ドンマイ。」

「そういわれてもなあ。慰めにもなんねえよ。」

「……。とまあ。俺は部活あるから行ってきます。」

「永島ながしま。今のお前が本当にうらやましい。打ち込むものがあつていいよなあ……。」

永島ながしまがいたと思った方向を見てみると、すでに永島ながしまの姿はなかった。
(……。あいつらしいな。)

ふと永島ながしまの机の上を見ると、筆箱が置きっぱなしになっていた。
(あいつ。また家で筆箱がないってパニック探し回るんだろうなあ。届けてやるか。)

その頃部室では、

「四ツ谷よつやのノート地獄からようやと解放されたか。おい。衛生兵。早くナガシながしィを看病してあげて。」

善知鳥先輩うしろは楠先輩くすのきのほうを見て叫んだ。

「あの。衛生兵ってもしかしてあたしのことですか。」

「アヤノン以外誰が衛生兵なのよ。早く治療道具もってきて。」

「そんなのどうでもいいですから、ふつうでいてください。」

僕うしろが善知鳥先輩の暴走を止め席に着く。

「永島ながしま。お疲れ。」

後ろからナヨロン先輩が話しかけてきた。

「なんか数日見ない間にやつれたな。」

「そんなにやつれてますかねえ。」

「うん。目が死んでる。」

「・・・。」

「まあ、永島ながしまならすぐに回復するか。こういう方面ならお前は困らないからな。」

褒められているのか、バカにされているのか。

「永島ながしま。これ。」

本きんノ本が僕に向かって紙を投げた。それに目をやると今後の活動予定が書かれている。なお、今日の日付はどこにも書かれていない。先輩たちが作った活動日なのだ。

「永島ながしま。それ当てにしてたら死ぬぜ。」

「もう半年もたちますから、予定表が当てにならないっていうのは分かってますけど・・・。なんで書いてない日までやるんですか。」

「いいだろ。楽しければそれでいい部活なんだから。」

「・・・。まあ、そうですね。」

そのあとはいつもと同じバカ騒ぎ大会。今日は部室が少し汚くなっているといったので、掃除をやった。でも、ただの掃除ではない。

「この四ツ谷よつや死ねー。」

「バカたれ。言うことが違う。くたばれ。700系。」カモノハシ

「なんでカモノハシがくたばらなきゃいけないんですか。かつこいというのには少しかけ離れてるかもしれませんが、かわいいじゃない。」

「あれのどこがかわいいんだよ。俺には全然わからん。ていうか、善知鳥うしろカモノハシの意味わかってるか。」

「え。オーストラリアにいる動物のことでしょ。あれかわいいじゃん。」

「なるほど。カルチャーギャップな。確かにあれはかわいいかもしれないけど。リアリティのカモノハシはかわいくない。」

「もういいからそんな話。手が止まってる。」

「おい。誰かゴミ捨てに行つて。」

「おい。これ必要なやついるか。……。ゴミー。善知鳥うぐいすこいつもダストボックス行き。」

「はい。サヤの手経由ダストボックス行きです。整理券をお取りください。」

「あの。これゴミですか。」

「バカ。この部活では迷ったら信じたことやればいいんだよ。1秒迷ったらごみ箱に捨てろ。」

「アヤケン違う。迷わずに捨てろ。」

「分かりました。これからは迷わずに捨てます。」

「ナガシィ。この発泡砕いてください。お願いします。」

善知鳥先輩がちょっと小さめの発泡スチロールを構える。

「んじゃあ。E233のゴミー。」

「えっ。あいつゴミじゃないだろ。」

「サヤは際物好きなんだからゴミじゃないだけ。俺あれ好きじゃない。」

「だから。ナヨロンはいつまで電車が恋人って言ってるんだよ。」

「はっ。俺がいつそんなこと言ったんだよ。」

「だって今E231系は好きじゃないって言ったじゃん。」

（しょうもない間違い方だな。）

「バカ。俺はE231はすきとも言わないし、嫌いとも言わない。」

「じゃあ、なんだったら好きっていうのよ。」

「えっ。C62（シロクニ）。」

「お前はあれのどこに萌えてるんだよ。」

「萌てねえよ。」

「……。」

「サヤ先輩。アケ先輩。ナヨ先輩。あなたたちのせいでゴミが散らってます。」

「あー。バカたれ捨てろ。全部。鉄研部員の手経由ダストボックス

方面、ダストシュート行きです。整理券をお取りください。整理券をお取りください。整理券をお取りください。危険物は核爆弾以外持ち込んでいいです。」

「そんなことどうでもいいですから。」

「はい。アヤノン。これ持って。」

善知鳥先輩が楠先輩くすのきの手に二つずつゴミ袋を持たせる。

「朝の忙しい主婦。」

「ハハハハ。」

「何笑ってるんだよ。バカタカ。お前が捨てに行けー。」

「はい。アヤノンこっちこっち。もつといいのあった。」

今度は楠先輩くすのきに8つゴミ袋を持たせる。もちろん、全部もていない。三つずつ果てに。一つは左腕で抱えるように。最後は口にかませた。

「スーパー朝の忙しい主婦。」

「どっからこんなにゴミ袋集めたんですか。ゴミありすぎでしょ。」
しゃべったので口にくわえられていたゴミ袋が落ちる。

「落とすな。試験にも落ちるだろ。」

それを聞くと次は左腕に抱えていたゴミ袋を。最後は両手でつかんでいるごみ袋の手を放す。

「ハカタカ。まだ近くにいます。」

「さっきゴミ捨てに……。」

「はい。いますよ。」

「ちよっとゴミ袋三つもってきて。」

「よーし。ハイパー朝の忙しい主婦にしてやる。」

「やめてください。」

そう言った声が泣きそうだった。

「……。」

こんなことで18時まで。

「よーし。後はだれがこのゴミ袋を向こうまで持ってくか。」

「バスケ部いるから。直通運転できないな。」

「確かに。今ゴミ袋が11あるわけだし全員で分担しても一つは持ちことになるんだよなあ。じゃあ、やっぱりジャンケンで決め・・・」

「それ嫌です。」

ハクタカ先輩がまずダッシュ。善知鳥先輩の足元に置かれているゴミ袋を二つ持って階段を駆け下り始めた。

「あっ。ハクタカ。フライング。」

善知鳥先輩も二つ持って部室から出る。

「はい。後は朝の忙しい主婦さんお願いします。」

「お願いされません。」

「バカ。い・・・今の確実に腹に入っただ。内臓飛び出るかと思っただじゃないか。」

「あっ。ごめんなさい。」

「はあ。しょうがない。残りは俺たちで分担するか。」

「お先に失礼します。お疲れ様です。」

僕と木ノ本と楠先輩はそれを聞くとさっさと荷物を持って部室を後にした。

「よし。俺たちも帰るか。」

「待て。貴様らは絶対返さん。」

「なんでだよ。ナヨロンだけで運べばいいじゃないか。」

「一人だときついんだよ。」

残りは残された3年生が処理することになったらしい。

41列車 補修 掃除（後書き）

書いてませんでした。が、筆箱はちゃんと永島のところに戻ってきましたよ。

話は変わりますが、この小説は変に場面転換が多いと思います。恐らく僕自身の癖なのだと思います。この頃原作作って嫌って言うほどよく感じます。

そういう散らかったものでも読んでくれる人には感謝。

42列車 どうしたい

それから一週間。今は9月20日から9月23日までの4連休の真っただ中。9月21日。

「あれ。今日は留萌練習来てないけど。どうかしたのか。」
部活の先輩が室蘭にそう聞いた。

「えっ。」

練習の時はそんなのどうでもいいという感じだったが、昼になって全員それに気づいたらしい。

「練習休むってことあいつなかったのになあ。今のところ出席率100%（パー）だったのに。」

「でも、ちょっとこの頃ダルそうなところあったよな。」

「ついに噴き出たかあ。ふつうなら噴き出ないと思うんだけどねえ。」

「……。」

「まあ、毎日練習で体調崩したってこともあるかもしれないだろ。室蘭。今日練習終わったら今日どうしたか聞いてくんない。」

「ああ……はい。」

（留萌……まさかとは思うけど……。）

心の中で思っているだけにしておいた。

19時。練習終了。全員友達と帰ったり足早に帰ったりするやつと帰り方は様々。室蘭はある程度のところまでは足早に帰って、携帯電話を取り出した。メール機能を起動させて、あて先を留萌にして内容を書いた。

「今日練習来なかったけど、大丈夫。風邪？」

返信はすぐにあった。

「ごめん。忘れてた（汗）」

文面はこうなっていた。しかし、練習は毎日ある。そして、この文面からして、博多先輩が言っていた体調を崩しているということは

ない。

（忘れるようなやつじゃないと思うんだけどなあ……。）

今度は思ったことをそのまま文面にして、返信する。

「忘れるようなやつじゃないだろ。毎日練習してるんだし、ちゃんと来いよな。休みたいのは分かるけどさあ……。」

またしばらくたって留萌るもいからの返信が返ってくると思っていたが、その返信がなかなか返ってこない。いつもならすぐに返ってくるのだが……。

（なかなか来ないなあ。もう返事来てもいい時間なのになあ。なんで……。）

その頃留萌るもいは……。

（なんて返信すればいい……。自分の中でイメージはできてるのに言葉にできない。）

返信の内容に苦しんでいた。いつもならすぐに言葉が浮かんでくるのだが、今日はそうはいかない。なぜか言葉にする部分がくすぶっている。

「……。」

（言わなきゃいけない。それは分かってる。それだけなのに……。）

（忘れてたって言ってもやっぱり風邪だったのかなあ。ちょっと心配だし、電話してみるか。）

今度は電話帳を開いて、留萌るもいの電話帳を出した。

携帯電話けいたいでんわが鳴る。

（誰だろう。）

端末を覗き込むと携帯番号と室蘭友紀むろらん ゆきの名前がおどっていた。

「友紀ゆきからだ。」

言葉に出すつもりはなくても体が言うことを聞かない。携帯ケータイをとって決定ボタンを押して、耳元に当てる。

「留萌るもい。」

電話の向こうから室蘭むろらんの声がする。

「さつきメールしたけど、返事とか返ってきそうにないから電話しただけけどさあ。大丈夫。」

「うん。大丈夫だよ。心配かけちゃってごめん。」

留萌るもいのほうはいつもの応対をしたつもりだった。

（元気がない……。留萌るもいはいつもと同じようにしようとしてるのかも知れないけど……。やっぱ何かおかしい……。そういえば、このごろ留萌るもい、木ノ本きのもとのことなんか友達じゃないように見てるのは……。もしかして、本当に。）

「友紀。」

「留萌るもい。正直に答えて。ソフト部辞めたいと思ってるの。」

「……。」

自分が言いたいことを向こうから射抜かれる。

「何。なんでそんなこと言うの。別にやめたいなんて……。」

「どんなに自分の気持ちを隠せてもあたしにはわかるよ。」

「……。」

「やりたくないんだろ。だったら辞めろよ。」

そういうと返事は返ってこなくなった。さらに言葉が続ける。

「このところ木ノ本きのもとのこと気にしてるのには気づいてたけどさあ、本心じゃあ鉄研行きたいんだろ。辛いソフト部続けてるより、そっちにいたほうが自分にとっては楽しいんだろ。」

「そんなこと言わなくても……。」

「今だからそういいたいよ。そんな気持ちで部活に来る人なんかと練習したくないから。」

言葉のたびに声が大きくなる。

「このごろ鉄研に言った木ノ本きのもとのことがうらやましいんだろ。自分もいつかは木ノ本きのもとたちと一緒に笑いたいって思ってるんだろ。でも、今のままじゃそれができない。」

「……。」

「素直になって。留萌るもいはどうしたいわけ。」

「……。」

しばらく黙りこんだ。

「友紀^{ゆき}って何でもお見通しだね。」

「・・・。」

「もしかして、私が岸川^{きしかわ}に言った本当の理由も。最初から。」

「ああ。オープンキャンパス行って以来なんか変わったところがあるとは思ってたよ。」

「そう・・・。なら、友紀^{ゆき}は・・・。」

「認めるも何もないって。行けよ。」

「・・・。」

またしばらく黙っている。

「友紀^{ゆき}。ありがと。友紀^{ゆき}のおかげで目が覚めたよ。私ってバカだよねえ。これだけのこと言うだけなのに、何十日もかかって・・・。」
「やっぱり女子鉄って複雑なんだな。あたしには何もわからないけど、これだけ迷うんだからな。」

「ハハ。」

「でも、留萌^{るもい}の母さんたち鉄研行くてこと許してくれるのか。」

「そんなの今考えても仕方ないよ。これからどうにでもする。」

「そう。・・・。留萌^{るもい}。また戻ってこいよ。」

そう室蘭^{むろらん}が言葉にする。すぐにその意図が読めなかったが恐らくこういうことだろう。

「戻って来いって。もうソフト部に戻ることはないと思うけど。もしかして友紀^{ゆき}もバカになったの。」

「・・・。そ・・・そうだな。」

「ハハ。友紀^{ゆき}にもそういうところあるんだ。」

「・・・。」

「じゃあね。友紀^{ゆき}。」

「ああ。」

そう言って電話を切った。

（バカはどっちだよ。言葉足りなかったかなあ。）

ふと、自分が高校受験するときのことを思い出した。

「友紀^{ゆき}早く、早く。見れなくなるよ。」

「何こんなところまで連れてきて。何か珍しいもんでも見れるわけ。」

連れてこられた場所は新幹線^{しんかんせん}の線路沿い。新幹線^{しんかんせん}は盛土^{もりど}でいまいる道をまたいでいる。

右からキーンという音がしてくる。すると木ノ本^{きのもと}と留萌^{るもい}が手を合わせて、

「友紀^{ゆき}が岸川^{きしかわ}に受かりますように。」

するとあたりを轟音^{ごうおん}がつつんだ。ちよつと視線を上げると黄色い車両が通り過ぎていくのが見えた。

「これで友紀^{ゆき}はきつと岸川^{きしかわ}に受かるね。」

「えっ。どうして。」

すると二人は自分のほうを向いてニツと笑う。

「今見たでしょ。黄色い新幹線^{しんかんせん}。あれ「ドクターイエロー」っていうんだけど、またの名を知ってる。」

当然知るわけがない。

「「幸せ^{しあわせ}の黄色^{きいろ}い新幹線^{しんかんせん}」っていうんだよ。これで友紀^{ゆき}には必ず幸せなことが起こるんだよ。」

（単純^{たんじゆん}というか、子供^{こども}というか・・・。）

「友紀^{ゆき}っていま私たちのこと子供^{こども}っぽいなあって思ってるでしょ。でもそれでいい。それぐらいじゃなきゃ面白くないし。」

その時自分の後ろでそう言ったのが留萌^{るもい}だった。

（戻って来いって言ったのは電車が好きなことを隠してなかったあの時。あの時になって戻って来いってこと。子供^{こども}っぽいって思われるくらいになって戻ってくればそれでいい。）

42列車 どうしたい（後書き）

東海道・山陽新幹線沿線だったら「ドクターイエロー」。
なら、東北新幹線などの沿線だったら「East I」が同じ立場
になりますね。

43列車 新たなクルー

9月23日。夜。

「何。話って。」

いつかは通らなければならぬところである。いつもは共働家で家にいないことが多い。だからこの申し出を言うのが今日になった。

「私。ソフト部辞めようと思ってる。」

いきなりこんなことを言うとは絶対反対される。それは承知だ。

「ダメに決まってるでしょ。さくら分かってるの。」

「分かってるよ。でも……。今のままじゃいつか行き詰まるのは自分でもわかってる。だからいつそのことやめて、違う部活に入部しようと思ってる。」

「違う部活って。何に入るつもりよ。」

「鉄道研究部。」

「ふうん。それで、部費とかまた集めなきゃいけないものとかあるの。」

「部費は年間で14000円。私が入部するときは10月ぐらいからだと思うからまずは7000円。後年に1回いく臨地研修代が20000円くらいかかる。」

「また、そんな……。」

話し始めようとした時、

「みずほ。お前席外せ。」

お父さんが部屋に入ってきた。

「あなた。」

（父さん。）

「みずほは席外せって言っただろ。聞こえなかったか。今この話にお前は邪魔なだけだ。」

「……。」

それを聞くとみずほはさっさと席を立ちどっかにいった。

「さくら。まず聞くぞ。本当にやりたいって思ってるのか。」
うなずく。

「そうか。分かった。やる気があるならそれでいい。」
「いいの。」

「ああ。その代りやる気がなくなったらさっさとやめろ。そんな部活入ったって仕方ないからな。……。さて、また俺の懐が寒くなるなあ。」

「えっ。部費とかも出してくれるわけ。」

「……。節約すればそれくらいどうにでもなる。」

「父さん。そんなことしてくれなくていいよ。バイトするから。」
「。。。。」

そういうとすぐにリビングを出た。
思わず飛び跳ねたくなった。

その話が終わるとみずほがリビングに戻ってきた。

「あなた。。。。」

「いいんだよ。あれで。ずっと親の敷いたレールなんて走りたくないだろ。ようやくとやりたいものが見つかったんだ。それを反対するなんて親としておかしいだろ。あれでいい。」
「。。。。」

「俺はもう寝る。」

「えっ。寝るってまだ。」

「明日早いんだ。」

そう言ってさっさと寝室のほうに歩いて行った。

翌日。

「えっ。さくらがソフト部を辞めるっ。」

朝学校に行って一番最初に聞かされたことがそれだった。

「またどうして。」

「まあ半分は木ノ本のせい^{木ノ本のせい}って思ってたほうがいいよ。あんたが鉄研に入ってなかったら留萌^{るもい}だってこういうことはなかったんだけどさあ。」

「なんで私のせいなのよ。どんな部活に入ろうが自由じゃないんだっけ。」

「そりゃそうだけどさあ……。」

噂をしていると留萌が教室に入ってきた。

「あれ。榛名早いじゃん。浜松駅で「富士」と「はやぶさ」撮って来るんじゃないかったの。」

「その前に何でソフト部辞めるんだよ。」

木ノ本は留萌に当然の質問をする。

「……。もうする気がなくなったから。じゃダメかな。」

「……。」

「木ノ本。そういうことはあまり詮索しないで置いて。」
すると室蘭は耳元で、

「中学の時にソフト部辞めてったあんたと同じ気持ちだと思うから。」
と耳打ちした。

（中学の時の私と同じか。……。）

「分かった。理由はそれでいいよ。」

「ところでさあ、話変わるけど、いちばん早い部活っていつ。」

一番答えづらい質問である。活動日は決まっていない。プラス先輩たち。特に善知鳥先輩が増やす部活がいつあるかなんて分からない。

「いや、いつあるかなんて分からないし。」

「なんで分かんないのよ。鉄研だろ。」

「鉄研でも分かんないもんは分かんないんだよ。」

すると誰かが木ノ本を読んだ。ドアのほうを見ると永島がそこに立っている。

「永島。何しに来たんだよ。」

「いやあ箕島に教科書借りようと思ってさあ。箕島いる。」

「今日あいつ日直だし今はいないよ。」

「あっ。そうなの。……後、善知鳥先輩が言ってたけど、今日部活あるってさ。」

「そう。了解。」

木ノ本きののもとがそう言っているときドアのすぐ近くにはられている日課に目を通した。木曜日は国語総合、数学？、芸術、芸術、英語？、生物？。

「ダメだこりゃ。今日ないのかあ。」

「えっ。何借りに来たの。」

「現代社会。」

「ああ。そうなのか。ドンマイ。」

ため息をついて帰っていった。

「今の人って誰。」

席に戻ると留萌るもいが問いてきた。

「同じ鉄研仲間。昼になったら紹介するね。箕島君みしま以外。」

「で、今日活動あるの。」

「ああ、今日はあるって。だから先輩たちも後で紹介するから。」
今の心配は先輩たちのカオスさに留萌るもいがついていけるかどうかだけだ。

昼休み。

「今日から鉄研に入る友達の留萌るもいさくらちゃん。」

「へえ。「さくら」かあ。」

「永島ながしま想像してるものが多分違うと思う。」

「あっ、バレた。」

「バレバレだよ。」

（さっきの人この人かあ。）

「じゃあ何。もし名前があずさだったら想像するものが183系かE257系イか知らないけどあの「あずさ」になるってこと。」

「まあ、そんなところかなあ。」

「て、話脱線してる。」

木ノ本きののもとが話の脱線を訂正して、部員の紹介を進める。

「永島ながしまの隣に座ってるのが佐久間君さくま。佐久間君の隣が醒ヶ井君さめがゐ。後は中学生と2年生と3年生だから。」

「ねえちよつと聞いていい。よく榛名^{はるな}から3年生は全員おかしいって聞いたけど、本当にそうなの。」

「うん。そういうところ多い人の集まりだよ。」

（こいつ。今はつきり言ったなあ。）

「まあ、今日部活あるんだし、その時になればわかるよ。」

というわけで、放課後。

「今日から皆さんの鉄研部に入る留萌^{るもい}さくらです。よろしくお願ひします。」

「留萌^{るもい}さくら。留萌^{るもい}さくら……。うーん。あつ。あだ名はルモタンでいい。」

善知鳥先輩がまず勝手にあだ名を考える。

「えっ。あだ名なんて。ふつうにさくらでいいです。」

「さくらじゃふつうすぎるもんねえ。サヤ。」

「また不法侵入部員かあ。」

「あの。入ってきた人がヒクからそういうこと言うのやめましょう。」

「……。」

「さくら。これが鉄研の先輩たちだけど、ついてこれる自信ある。」
木ノ本^{きのもと}が耳打ちした。

「多分無理。」

「ですよー。紹介するけど、今さくらにあだ名つけたのが善知鳥^{うしろ}菜衣先輩。サヤって呼ばれた人は北斎院^{きたさいや}大智先輩。その奥にいる人名寄真佐哉^{なよろ まさぎや}先輩。通称ナヨロン先輩。多分話するならナヨロン先輩が一番いいと思うけど。そして、そのナヨロン先輩の隣にいるのが綾瀬健人^{あやせ けんと}先輩。通称アヤケン先輩。で、今ここにいないけど現部長の鷹倉俊也^{たかくらしゅんや}先輩と桜の隣にいる女の人が楠絢乃^{くすのあやの}先輩。」

「そうか。本当にすごいインパクトのある部活だな。」

「ハハ。そうでしょうね。」

「ていうか、あの永島^{ながしま}の適応能力ってすごくない。あんな先輩たちとふつうに話せてるわけだし。」

「いや、あんな先輩って。永島ながしまだって善知鳥うと先輩とはあんまり話さないよ。永島ながしまがよく話すのはナヨロン先輩のほうだから。」

「ふうん。ナヨロン先輩ってなんかジャンルとかあるの。」

「車両鉄だからねえ。それもディープな。」

「へえ。あたしと同じだね。」

「いや、同じって思うのはどうかなあ。さくらSL分かる。」

「分かんないけど。なんで。」

「ナヨロン先輩そこまでわかるから。」

「へえ。すごいなあ。」

永島ながしまと話しているナヨロン先輩のことが何となく神に見えてくる。

「何かほかの人はそういうことないのか。」

「えっ。アヤケン先輩は物作りが得意で、部活のモジュールも結構作ってるらしいけど、完成するとその呼ばわりがゴミになるとか。」

「何それ。」

「サヤ先輩は電車が好きなのはわかるんだけど、時折間違うとか、鈍感とかそういうことがあって、善知鳥うと先輩は新快速しんかいそくを新幹線しんかんせんって言っちゃったり、「ムーンライトながら」の373系を313系と言い間違えたり……。」

「な……。それって間違うようなやつじゃないよねえ。どこをどう間違えたら特急列車が通勤電車になるのよ……。あつ、そうか。「ホームライナー」とか373系使ってるか。それで言い間違えるのね。」

「いや、善知鳥うと先輩そういうこと全然分かんないから。」

「……。ようするに天然ってわけね。」

「そう。天然。」

「おい。そこさっきからあたしのこと天然って丸聞こえだぞ。アヤノンの次のいじられ対象にするぞ。ルモタン。」

「えっ。どういうこと。」

「つまり、楠くすのき先輩の次にいじられる人。」

「いや、それ分かるけど、いじるって何するつもり。まさかコスプ

レ。」

「今のところいじるでコスプレはないから。」

「・・・。」

「コスプレかあ。いいかも。」

「・・・。」

「じゃあ、コスプレするんなら何が・・・。」

そう留萌るもいに聞こうとすると

「ここをメイド部にするなー。」

男子全員が声をそろえて言う。

「演劇部にもしないでください。」

楠先輩くすのきも続けた。

「分かったよ。全員なんでそういうこと嫌いなのかなあ。」

「文化祭の時に被った制帽だけならまだ許しますけど、それ以上は許せません。」

「それ以上って制服もダメなのか。真似て作ったやつ。」

「そういう方面だけに凝りすぎ。」

「だってあたし家庭科以外得意な教科ないし。」

「だからって懲りすぎ。」

「・・・。」

（私この部活でやってけるのかなあ。）

鉄道研究部という船にまた一人クルーが加わったのだ。

数日後。宗谷学園では・・・、

「あれ。何か入ってる。」

下駄箱のスリッパの上に何かが乗っていた。

今回からの登場人物

留萌寛太るもい かんた 留萌みずほるもい

43列車 新たなクルー（後書き）

この部活動に萌えはありません。

44列車 差出人ヘッドマーク

宗谷学園では・・・、

「あれ。何か入ってる。」

下駄箱を開けてみると何かのスリッパの上に乗っていた。取り出してみると手紙だった。差出人は結構几帳面な人らしく封筒の中に入っている。封筒を裏にしてみるとイニシャルがあった。HM。

「差出人ヘッドマークさん。」

なんとなくギャグしてみる。

「これが逆なら差出人ミュージックホーンさんになるんだけどねえ。」

封筒の封を切って中の手紙を取り出す。文面は・・・、

「突然こんな手紙を出してすみません。今日もし、放課後何もう事が必要ければ3時45分に体育館裏に来てください。待ってます。」
となっていた。

「明らかにラブレターじゃん。このヘッドマークさん、私に彼氏いること知ってて送ってきたのかなあ。」

「ラブレターだって。」

振り向いてみるとそこにはそのだ蘭田とくろさき黒崎がいた。そのだ蘭田のほうはラブレターという言葉に反応したのか目を光らせている。

「そんなのに首ツッコむなよ。」

「えっ。あずさ梓だって気になるでしょ。もしこれがあずさ梓の大好きなとりがや鳥峨家君だったら。心配くろさきなんでしょ。」

そう言われるとくろさき黒崎の顔が真っ赤になる。

「べ・・・別にそういう意味じゃないってば。それに、あたしは・・・。」

「ねえ、萌もえどう思う。」

「凶星だよねえ。」

言い返せなくなったようだ。目線をそらした。

「まあ。梓^{あずさ}は心配しなくても大丈夫だよ。差出人はヘッドマーク。鳥峨^{とりがや}家君のイニシャルはTDだもんね。」

「よかったねえ。梓^{あずさ}。彼氏は浮気してなくて。」

「う・・・うるさい。」

そうはいつでも、今こう言った自分が恥ずかしくなった。全員の視線がこっちを見ている気がしたからだ。

「ちょっと場所変えない。」

「じゃあ、美術室行こうか。」

「私入っていいの。」

「分かった。教室に変えよう。」

「教室なんかでこんな話できないじゃん。」

「それ言ったら美術室でもこんな話できないだろ。」

「・・・。」

「よし。やっぱり教室で話そう。男子全然いないし。早い人でも8時だし。」

というわけで、教室に来てみると普段しまっている鍵が開いていた。そしてなかには男子が一人。

「・・・。」

「どこに行っても話せない話題じゃないか。」

黒崎^{くろさき}が声を潜めて話しかける。

「じゃあ、小声で話せばいいじゃん。」

「多分それ無理。男子もそうかもしれないけどさあ、こういう話って話してるうちに声が大きくなってって、ヒソヒソ話にも何にもならないんじゃない。」

「ですよー。」

そんなこんなで放課後・・・。

「結局これの差出人が誰かも分からなかったけどさあ、本当に行く気。」

「うん。だってこの人のこと好きじゃないし。まあ、嫌いでもないけど。それに・・・今日は15時42分も54分も16時06分も

1000形だったからある意味助かった。」

（この人に会いに行く真の目的はそっちかよ・・・。）
（この人かわいそうだな。）

そう思いながら萌の後をつける。お互い気になるのだ。萌が体育館裏に入り込んでいくと誰かが立っている。それも初めて会う顔ではない。クラスの萩雅紀という人だった。

「坂口さん・・・。」

（萩君。確か萩君の下の名前って雅紀だったか。差出人ヘッドマークさん。）

「あ・・・あの。こういうこといきなりいう・・・。」

「ああ。ごめんね。私好きな人いるから。」

（単刀直入・・・。）

「あつ。そうなんだ。」

「そうだから。萩君とは付き合えない。ごめんね。」

「・・・。なら・・・。」

そのあとにどう言葉が続いたのだろうか。萩はすぐに言うのをやめて坂口の横を歩いて行った。歩いていくと坂口の後ろをついてきた蘭田と黒崎の姿が見えたようで、目線をそらした。その姿が見えなくなるまで坂口に駆け寄った。

「まさか差出人が萩君だったとはなあ。」

よってきた黒崎がまず口を開いた。

「えっ。梓今頃。あたしはこのイニシャル見てすぐに萩君かなあって思ったけど、あたしの知ってる萩君の字じゃなかったから自信持てなかったんだよねえ。」

「だから。安希はそういうことに首ツツコまない。」

「ていうか。萌にも好きな人いるんだ。」

「えっ。」

萌自身すべてが筒抜けだったとは思わなかった。

「なんだ全部聞いてたんだ。」

「うん。まあ。どうしても気になって。」

「まあ。分からないわけじゃないけどねえ。」

「ああ。せっかくだから携帯ケータイに録音しとけばよかったかなあ。」

「だから。安希あきはそういうことしないの。」

「大丈夫だよ。梓あずさ。安心して。鳥峨家君とりがやがコクツたり梓あずさがコクツたりするときは全部携帯ケータイに録音して、綾あやに送るから。」

「やめろ。ていうか、何であたし限定。」

「ダメじゃないでしょ。」

「ダメに決まってる。綾あやなんかそれにそれ送ったらクラス中に広がっちゃうじゃん。」

「大丈夫だって。あさひが広げたときは学年中だったじゃない。それに比べれば規模は小さいよ。」

「いや。それあったからトラウマになってるんじゃないの。ていうか、学年中に広がった話って何。」

「聞かなくていいし、教えなくていい。」

黒崎くろさきはそう言ったが蘭田そのだはそんな黒崎くろさきそっちのけでべらべらしやべりでした。

「中学の時に林間学校みたいなの行った。」

「うん。行った。」

「ナイトウォークラリーとかやった。」

「うん。」

「梓あずさってこう見えてもお化けとか全然ダメでさあ。ナイトウォークラリーやってる途中に同じ班の人がお化けの真似して梓あずさのこと脅かしたのよ。そしたら梓涙目あずさになって叫んでさあ。それで友達のはうはドッキリ大成功みたいなこと言ってるじゃない。それ聞いて少しは梓あずさも落ち着いたんだけど、さっきのショックが強烈だったみたいでさあ。腰抜かしたのよ。」

萌もえの傍らで聞いている黒崎くろさきの顔がどんどん赤くなる。

「それで、みんなでどうしようってなった時に鳥峨家君とりがやが「俺が集合場所までおぶってく」って言ってね。」

「このバカ安希あき。」

「それで助けられたことあるんだ。」

「そう。それでそのあとどうも梓鳥峨家君あずさとりがやのことが気になったみたいでさあ。でも、コクレないままなんだよねえ。」

「・・・。」

「ふうん。」

黒崎のほうに目線を向けると、

「見るなー。見るなー。見るなー。」

真っ赤な顔で叫んだ。

「ところで、萌もえが好きな人って誰。」

「えっ。この学校の人じゃないよ。」

「何、別の学校。」

「うん。今岸川きしかわに行ってるんだけどねえ。梓見あずさたことあるでしょ。鳥峨家君に似た人。」

「えっ。あつたつけ。そんなこと。」

「あつ。覚えてない。なら、いいや。」

「岸川きしかわって言ったらソフト部だよねえ。でも男でソフト部はないから・・・。」

「鉄研部てっけんに入ってるよ。」

「鉄研部てっけん。うわあ。その人オタクだなあ。」

「本人の前で言うて怒るんだけどね。」

「何マニアっていえってか。今更どうでもいいだろ。大体オタクもマニアもただ呼び方が違うだけじゃない。」

「ハハハ。でもそこは考慮してあげて。」

「よし。じゃあ本題に入るけど、その人とはいつからの付き合いなの。」

考えるまでもない。

「付き合いっていうわけじゃないけど、その人と知り合ったのは小学校1年生の時。最初のころはその人全然しゃべらなくて、なんか1年生らしくなかった。ずっと一人で外眺めててさあ。」

「何。窓によさやかかってボーっとしてるって感じ。」

「うん。そんな感じ。授業中も先生の言うことまともに聞いてないって感じでさあ45分の授業中に必ず8回外に目をやるんだよ。」

「何か規則性みたいなのでもあったのか。それともその人の癖。」

「規則性みたいなのはなかったなあ。最初は癖って思ってたんだけど、観察してる中でその人が外を向くときは必ずカタンカタンっていう音がしてるってことが分かったんだよねえ。」

（さすが鉄研^{てつけん}だな。）

「それで席が前後ろになった3学期に思い切って話しかけてみたんだよ。そしたら今までのイメージだと想像できないくらい明るくてさあ。電車のことふったらそのあとは電車のこと語りっぱなし。最初は電車のことわかんなかったけど、そのうち私にもわかるようになってさあ。最初はこんな感じ。」

（それで今がこれかあ。）

「じゃあ、そのあとはどうなったんだよ。」

「そのあとはその人の家に鉄道模型のレイアウトがあるんだけど、そこで1日中遊んだり、その人の従兄に浜松駅まで連れてってもらったりしてもらった。そんなこんなで中学まで過ごしてさあ。その人には好きとはいえなかったんだけど、今でもあいつ以外に彼氏創ろうとは思わないなあ。」

「好きって気持ち確認してないのか。それ絶対終わってるだろ。」

「そうかなあ。私そういうこと思ったことないんだよねえ。」

「なんで。」

「なんでかはよく分かんないけど・・・。」

「・・・。」

少し萌^{もえ}から離れる。

「なんでよく分かんないのに好きのまままでいられるんだよ。」

「梓^{あずさ}だったらよく分かるんじゃないの。鳥峨^{とりがや}家君が持つてる雰囲気とか。多分そういうのじゃないの。」

ヒソヒソ話から切り替えて、

「じゃあ、もう一つ聞くけどさあ。なんでその人にそんなにこだわ

るの。」

すると歩みを止めた。すると蘭田そのだたちのほうを向いて、

「それこそ好きだからだよ。」

それだけ返答する。

「なんかそれだけじゃないような気がするんだよねえ。」

蘭田そのだが疑ってかかった。

「なんか将来その人と一緒になるとかって思ってるのかなあ。」

ドキッとした。もちろんこのことを知っているのは木ノ本きのもとしかないな

い。それをなぜ蘭田そのだが知っている。もちろん、蘭田そのだと木ノ本きのもとに接点

はない。木ノ本きのもとは浜松市の芦原地区あわら。場所と言うと浜松工場のある

あたりに住んでいる。蘭田そのだは浜松市の高島たかしま。場所と言うと遠江急行

芝本駅しばもと付近に住んでいる。

「一途にそうなる時を待ってるって感じしない。」

「……。」

「あつ。梓あずさに聞いてもダメかあ。梓あずさも鳥峨家君とりがやと一途な恋愛してるんだからなあ。」

「黙れ。」

（まさか。安希あきってみんなの思考回路高性能コピー機。ああ、いつか私もナガシイの思考回路高性能コピー機になるのかなあ。）
ふとそういう考えが生まれた。

44列車 差出人ヘッドマーク（後書き）

今はこういうことってしないですかねえ・・・。
でも、こういうことがあるからこそ創作なんですよねえ。

45列車 乗務員服（前書き）

発言だけです。．．。

45列車 乗務員服

9月の末。岸川^{きしかわ}学園では体育祭が行われる。

「もうすぐ体育祭かあ。やらなくていいのに。」
ため息が出る。

「本当だな。体育祭やる暇があるなら、車撮に行ってたほうがまだまし。」

木ノ本^{きのもと}が続ける。

今日は部室に集合がかけられている。そのため部員全員が集められているのだ。

「肝心^{うとこ}の善知鳥^{うとこ}がまだ来てないけど。」

「前やらせたコスプレレースでもやらせるんだろ。俺出るの嫌だからな。」

「なんでだよ。ナヨロンは3年連続で出ればいいじゃん。お前のあれ結構似合ってたぜ。」

「恥ずかしいんだよ。クラスの全員がいる前であの格好は。」

「確かに。俺ももうあの恰好だけはしたくないなあ。」

アヤケン先輩も続ける。すると部室のドアが開いた。

「お待たせー。」

息を切らしている善知鳥^{うとこ}先輩の姿がそこにある。片手には岸川^{きしかわ}のバッグではなく紙袋を提げている。

「善知鳥^{うとこ}先輩。それなんですか。」

「えっ。ああ。これ。」

そういうと紙袋の中に手をつ込み帽子を取り出した。ただの帽子でないのはすぐに分かる。

「ジャン。」

そういうとあからさまに僕の頭のをかぶせた。前かぶせられた時と同じような感覚がある。前オープンキャンパスに来たときにかぶせられた制帽だ。

「……これって運転手とかの制帽ですよねえ。」

木ノ本きのもとが問う。

「そうだよ。膳所ぜんぜさんが持ってたやつ借り手あたしたち用に作ったやつ。男子のやつばっか大量生産してたからほとんど男子のだけど、女子もあるよ。ほら。」

「……。」

「いくら得意教科が家庭科しかないって作りこみすぎ。これ凝ってすぎるんだよ。」

サヤ先輩が口をはさむ。

「しょうがないじゃん。部活やってる日以外暇なんだもん。」

「高校3年生になってそう言うのはよそうぜ。」

「あもう。善知鳥先輩うしろ。これをどうしろと。」

「えっ。決まってるじゃない。体育祭の文化部対抗リレーの時これかぶってレースに出るのよ。」

「……。」

「当然1年生がね。」

ちよつとの間自分に渡された制帽を見る。

（これをかぶって走るのかよ。）

「ああ、あと体育祭の時は冬服持って来いよ。」

「えっ。暑いですよ。」

「バカ。伝統事業だぞ。ワイシャツ着て、ネクタイしめて、冬のズボンで走る。これ鉄研てっけんの定番だからな。」

（知るか。）

（やっぱり私入る時期間違えたかも……。）

（よく絢乃先輩あやのこれやったよね。）

（……。）

（マジかよ。）

（なんで冬服。ふざけんな。）

「そういえばさあ、去年の体育祭の部活どう対抗リレーって誰が出たっけ。」

善知鳥先輩が問題を振る。

「えっ。去年は俺とナヨロンとアヤケンとハクタカと膳所さんと上野さんが出た。」

その問いにはサヤ先輩が答えた。

「あれ。アヤノン出てなかったっけ。」

「出てないよ。制服の上がワイシャツでネクタイでも下はどうしたってスカートなんだからさ。それ以前にアヤノン出たくない出たくないってさんざん言ってたじゃん。それで膳所さんと上野さんが出たくない人を無理に出させるなって言ったんだぜ。」

「あれ。そうだったっけ。」

「去年のことぐらいちゃんと覚えとけよ。」

「まあいいわ。で出るやつは・・・、ナガシイとミツシイとサメちゃんユウタンとイサタンとソラタンとアサタンは出ることに決定か。」

「おい。多すぎ。6人で十分だって。6人で。」

「あの。僕実行委員で運営とかの方に回らなきゃいけないので、多分出れません。」

箕島が断りを入れる。

「じゃあ、これで6人じゃん。これでいいよ。」

「ちよっと待って。」

そういうと善知鳥先輩は木ノ本と留萌に最接近した。

「ハルナンとルモタンは出たくないの。」

「出たくないです。とてもじゃないけど恥ずかしすぎて・・・。」
まず留萌が答えた。

「恥ずかしいって。将来運転手とかになったらいやでもこの格好しなきゃいけないんだよ。」

「いや、そうじゃなくて。友達の前でこれをかぶらされるっていうのが・・・。」

「去年アヤノンだってそう言ったって。」

（なんの説得にもなっていない・・・。）

「ハルナンは。」

「私だって出たくないです。」

（そりゃそうだよなあ。部活入るときにも女子が入っていいのかって思った部活だよ。こんな格好できるわけない。蘭にもみられるじゃん。）

「なんだ。二人とも出たくないのかあ。よし。ちよつと男子全員外に出てくんない。」

「何やらせるつもりだよ。」

「着替えさせるの。だから男子全員外に出てって言ってるの。それとも、女の子の裸が見たい変態どもしかないのか。」

「・・・。」

「ハイハイ。とりあえず全員外でろ。」

サヤ先輩が促して、部室の中は善知鳥先輩と楠先輩と木ノ本と留萌だけになる。

「さてと、男子がいなくなったところで着替えさせるか。えーとまず、アヤノンから。」

「なんでまたあたしからなんですか。」

「いいだろ。こういうときはいつもアヤノンからって決まってるんだから。」

「そんな方程式ありません。」

「ていうか善知鳥先輩。冬服もないのにどうやって着替えさせるつもりなんですか。まさか下着だけになれとは言わないですよねえ。」

「それは言わないよ。これを見ろ。女子の制服はあたしが大阪に行っている間に作ったんじゃない。徹夜して。」

（恐ろしい能力だな。）

その頃部室の外では・・・、

（さっきからの会話筒抜けだよ。）

「アヤノンってうざいんだよなあ。あたしよりちよつと胸大きいでしょ。ハルナンはどう思う。」

「そこに注目しないでいいです。」

「早くこれ着ろ。」

「あやの絢乃先輩似合ってますねえ。」

「本当は今ここにいる全員にも見られたくないんだけど・・・。」

「ちよっと写メらせて。そしてこの写真をハクタカに送る。」

「やめてください。こんな格好バカタカにも見られたくないです。」

「よし。次はハルナン。アヤノンそれ脱いで。でハルナン。ハルナンもポロシャツ脱いでね。」

「さらっと脱げて言わないでください。」

「何。もしかしてノーブラ。ノーブラじゃ見られたくないよねえ。」

「そういうわけじゃありません。」

「・・・。」

「ああ。耳が痛くなる。」

「・・・。」

「なんか鉄研てっけんの男子肩身狭いですね。」

「ナヨロン先輩に振ってみる。」

「そうかもな。善知鳥うとがハイテンションすぎるんだって。まあ、あのハイテンションだけならムードメーカーとしての作用は拔群てっけんなんだけどなあ。」

「ナヨロン先輩は相当迷惑そうな顔をした。」

「うわ。ハルナンもあたしより胸大きい。もしかしたら鉄研てっけん一貧乳かも。」

「これ絶対外まで聞こえています。」

「・・・。」

「善知鳥うとのやつ。後輩はお前の着せ替え人形じゃないつうの。」

「また10分くらいたつと部室に入っていていいといわれた。部室に入ってみると留萌るもいがさっき言っていた格好をしている。服の色は黒だから冬服だろう。」

「サヤどう思う。」

「まあ。かわいいんじゃない。」

「とうの留萌るもいは顔が真っ赤だ。こっちを見ないでと言わんばかりに目

線をそらした。

「……。」

こういう描写はちょっと前に自分も経験したことがある。ちょっと前といってももう1年位前のことだが……。

「ナガシィ。ちょっとこっち向いて。」

「えっ。」

振り向いてみるとそこには萌^{もえ}と端岡^{はしおか}と磯部^{いそべ}の顔がある。

「うわ。萌^{もえ}マジでナガシィ君デコっちゃってるよ。」

「顔つきがちょっと女の子よりだから一見したら女子に見えるかも。」

二人がそう言っている。

「何。俺の顔に何かついてるのか。」

「えっ。まさか、ナガシィ君気づいてないの。」

そういうと磯部^{いそべ}がカバンから手鏡を取り出し、

「あっ。」

鏡に映っていた自分は目のあたりまでかかっていた前髪をヘアピンで分けられていた。その時萌^{もえ}が僕の後ろに回って後頭部のあたりを指でなぞった。

「気づいてないとは思わなかったよ。ナガシィって結構鈍感なんだね。」

そう言われて後頭部に手を当ててみる。すると何か髪を束ねられている感覚がある。当てた手をずらしていくと束ねてある根元があることに気付いた。

「おい。萌^{もえ}。これいつやった。」

「朝のバスの中。ナガシィ寝たまんまで起きないんだもん。」

ということは……。今は16時。つまり僕は7時間以上このままでいたことに気付かなかったのである。

「お……お前。」

「ハハハハ。怒らないでね。」

「……」。怒りたくなるわ。ていうか。俺、この格好で写ってる写

真ってないよなあ。」

そっちのことが心配になった。この格好はよく家ではされているが、外でやられたのはこの時が初めてだ。

「さつき法隆寺で、学級写真撮ったわけだし、卒アルにはこの格好で載ることになるね。」

「こらー。」

「ハハハハ。ホテル着くまで取らないでよ。」

こういうわれた時。僕は初めて萌もえと話してて恥ずかしいと思った。

「・・・シィ。ナガシィ。」

「えっ。」

「何ボーつとしてるの。制服のルモタンにうっとりしてたのか。」

横から怒ったような顔で善知鳥先輩うしろの顔がのぞいている。

「してませんよ。」

（ていうかさくらにほれてたら問題だよなあ。永島ながしまの好きなやつさくらじゃないし。）

「ウソだろ。」

「ウソじゃありません。」

こういうときには口調が少し焦るだろう。しかし、なぜか口調が焦らなかった。淡々と返答して、

「いいんじゃないですか。似合ってると思うし。」

「よかったな。ルモタン。みんな似合ってるって。」

「・・・。」

「さあ。もう一度男子全員外に出てよ。これからルモタン脱がすから。」

善知鳥先輩うしろに押し出される形で部室の外に出る。

「さあ、ルモタン脱いでね。脱ぐの大変だったらあたしも手伝うよ。」

「別に手伝ってもらわなくても・・・ちよっ。善知鳥先輩うしろパンツまです脱げちゃいます。」

「大丈夫だよ。脱げちゃうって言っても現実脱げてないから。」

「そういう問題じゃないでしょ。これじゃあ善知鳥先輩が変態なんじゃないかって思っちゃうじゃないですか。」

「何。アヤノン。あたしは変態じゃないぞ。女子が女子を脱がしてどうするんだよ。」

「どうするんだよって……。今現実に行きましたよねえ。」

「スカートは板から次は上か。ワイシャツ脱ぐときはあたしの視界に入らないように脱いでね。もしそうしなかったらブラ取るから。」

「そういうことが変態に等しいです。」

「だってみんなあたしより胸大きいんだもん。なんかイタズラしたくなるんだよねえ。」

「……。」

もちろん着替えているときの会話も筒抜けだった。

45列車 乗務員服（後書き）

どこの鉄道会社もそうだと思いますが、乗務員の制服は男女ともワイシャツ・ネクタイ・上着・ズボンなんです。もちろん夏服・冬服の違いはあります。

46列車 体育祭

数日後・・・。

「ああ。体育祭かあ。ダルイイ。」

大きなため息をついた。

「ハハハ。また家で模型いじってたいって言うのか。」

宿毛すくもが隣で笑っている。

「それしたいよ。学校にあんな大きなレイアウト持ち込めないからさあ。」

「確かに。持ち込めないな。まあ、持ち込めたらそれはそれですけどいけど・・・。」

「そういえばさあ、俺何と何と何に出るんだっけ。」

「それくらい覚えとけよ。」

教室に行つて体育祭の選手名簿を開く。僕の名前は100メートル走と騎馬戦に名前が入っていたが、騎馬戦は補欠だった。

「騎馬戦補欠かあ。まあ補欠でせいせいしたけど。」

「騎馬戦お前弱いもんな。中学の時は開始5秒くらいで落ちたっけ。」

「うん。まさか後ろにすぐ回り込んでくるやつがいるとは思わなかったもん。」

僕は手を頭の後ろに回して窓辺まで行く。窓から外を見てみるとグラウンドが見える。外は当然のことだが体育祭の準備が進行している。

「それもそうかもしれないけど、お前の場合はケンカとかああいうやつやりたくないだけだよなあ。」

「・・・まあそっちのほうが大当たりだね。」

すると教室のドアが開く音がした。入ってきたのは同じクラスの女子。

「早いなあ。いつもこの時間に来てるわけ。」

「ああ。玉名さんこそ今日はやけに早いな。」

「別に体育祭張り切ってるってわけじゃないよ。ただ、朝なら誰もいないかなあって。」

「朝早く来るなら7時40分前に来ないよ。」

「えっ。そんなに早いよ。眠くならない。」

「眠くなったことはないな。勉強の時だけは別。永島の場合は夜見たい番組とかないし、それでさっさと寝ちゃうって感じだけど。」

「ふうん。まあ。人それぞれってことだね。あたしなんか今日の2時に寝たから眠くてしょうがないよ。」

「よく起きてられるなあ。」

「はたから見たらそんな感じだよねえ。永島君って結構夜遅くまで勉強してるって感じるけどそうじゃないんだ。」

その言葉には宿毛も僕も開いた口がふさがらなくなった。

「玉名さんそれ偏見。こいつテスト前あんまり勉強してないでクラストップだし、これまで四ツ谷のノート一度も出したことないぞ。」

「えっ。マジ。」

これには玉名さんもびっくりしたらしく目が点になっている。

「な。うざいだろ。普段こんな感じのオチャラケでクラストップだぜ。」

「いやあ、それほどでも。」

（褒めたつもりはないんだけどなあ。）

「・・・でもさあ、永島君って性格悪くないし女の子から結構モテてるんじゃないかなあ。」

「確かに。性格は悪くないな。」

「なんだよ宿毛。その言い方は。」

「冗談だって。性格も含め全体的に悪くないって。実技を除けば。そう言い合っているところを見ていた玉名が笑いながら、

「永島君ってなんか一つ一つの行動が笑えるからさあ、他クラスでも噂されてることもあるよ。」

「なるほど。この頃風邪ひいたかなあって思ってた根源はそれかあ。」

「・・・。」

「俺って女子と話したことはあってもモテたことないからなあ。・。女子からなんか言われたりされたりしたってことはヘアピンつけられたことがあるとか、でっかい子供って言われたりとか・・・それくらいかなあ。」

「へえ。いじられキャラなんだな。」

「うん。俺結構いじられてるから。」

「それって全部坂口じゃないか。」

「しょうがねえだろ。俺いじるのあいつくらいしかないんだから。」

（鉄研の女子と以外話してるところ見たことないからなあ。でも、その人と恋愛っぽいことはしてるんだ・・・。って十分モテてるじゃないですか。）

「ごめん。ちよっとクラティに着替えてきたいんだけど。」

「いいよ。行つて来い、行つて来い。」

そういうと玉名はクラスティーマッシュとハーフパンツを持って教室を出て行つた。恐らくトイレで着替えるのだろう。数分するとクラスティーマッシュ姿で教室に戻ってきた。

ドアが開く。その音で僕は寝た姿勢から体を起こした。

「永島君。寝てたの。」

「寝てないけど、立ってるのダルかっただけ。」

「えらい違いだよなあ。お前に鉄道が付いただけであれだけ変貌するんだからさあ。」

「鉄研やつてる時の永島君と普段勉強してる時の永島君ってギャップすごいよねえ。まず部活やつてる時と勉強してる時と声違うし。」

「そう。俺はそんなこと意識してないけど。」

（意識せずに変えられるんだからすごいよねえ。）

なんか話が詰んだようで黙り込む。

「なあ。そろそろ外いかねえか。」

「宿毛^{すくも}君気が早い。まだだれも来てないじゃん。」

「そうそう。8時25分くらいになったら行けばいいって。」

「永島^{ながしま}君は気長すぎ。」

8時20分までの間に僕も宿毛^{すくも}もクラスTEEシャツに着替えた。それから運動場に自分の席を持って移動し、1年5組の所定の位置に席を置く。その頃には集まっていなかったメンツも集まった。運動場は色とりどりのクラスTEEシャツが埋めている。それぞれのところで色が違ってカラフルだ。

それに目をやっていると誰かが僕の肩をたたいた。肩をたたいた人は新城^{しんしろ}という人だ。当然だがクラスメイトだ。

「お前100メートル1位とれよ。」

そう話しかけてきた。確か新城^{しんしろ}は200メートル走とホームルーム対抗リレーにエントリーしていた。相当足が速いということだろう。「1位は取りにいけないけどビリも取にいけない。そこそこ頑張るよ。」

「そこそこって。お前クラス1位だろ。それくらい頑張れよ。」

「ヤダ。運動だけは頑張りたいくない。」

そう返答しておいた。

9時。開会式で体育祭が始まる。最初は100メートル走。さつさと終わらせてあとは休む算段。結果は8人中4位。半分くらいがちょうどいい。

そのほかの種目で5組はそこその成績。良くも悪くもないという中間を走る競技もあったが頭一つ出る競技もあった。そんなこんなで午前中の部は残すところ部活どう対抗リレーだけになった。最初は文化部。その次に運動部がやる。

言われていた冬服をクラスTEEシャツの上から着る。いくら残暑がなくなっただけとはいえこの格好になるとさすがに暑い。まだブレザーがないだけましなのだが・・・。

「よし。持ってきたなちゃんと。」

善知鳥^{うしろ}先輩がいつの間にかこっちに來ていた。後ろには同じく冬服

に着替えた醒ヶ井さめがい いさはや、諫早そらかわ、空河あさかせ、朝風の姿がある。

「これで全員そろったな。よし。行けー。」

善知鳥先輩うんぐうに押される形で入場門のところまで行かされる。

「あつ。言い忘れてた。これがバトンよ。汚さないでよね。ちゃんと走るときはこれしてよ。」

持ち出したのはやはり制帽。その制帽のつばの上にはヘルメットのような留め具が収納されている。よくここまで作りに凝ったものである。第1走者は諫早いさはや。これをかぶると嫌でも国鉄の職員に見える。「よし。これでよいい、ドンって言った瞬間にチャカをぶっぱなすか。」

「それで俺の前に言ったら殺すっていうんだろ。」
空河そらかわが続ける。

「いや、動いたら殺すっていうんだろ。」
朝風あさかせが続ける。

「それプラス止まったら殺すっていうんだろ。」
ついでに僕も続けた。

「八方ふさがりじゃねえかよ。それ。走っても殺されるし、動いても殺されるし、止まっても殺される。」

「いや。それって自分が動いてなかったらいいんだろ。チャリという選択肢があるじゃないか。」

醒ヶ井さめがいまで話に入ってきた。

「なんでですか。チャリ使ったら自分が動いちゃうじゃん。」

「考えてみる。確かに動いてるけど動いているのはチャリであって自分じゃない。」

「よし。そう来たらロケランに吹っ飛ばすか。」

「違う。プラスチック爆弾で吹っ飛ばすんだろ。」

「いやいや。チャリの動力源をチャカでヘッドショットするんですよ。」

「いやいや。核爆弾で吹き飛ばすんだろ。」
すごい会話だ。話した順番は諫早いさはや、空河そらかわ、朝風あさかせ、僕の順番。

「あなたは俺たちを殺す気か。」

中学生全員が声をそろえてツッコんだ。

レース開始。順番は諫早^{いさはや}、醒ヶ井^{さめがゐ}、空河^{そらかわ}、朝風^{あさかせ}、僕、佐久間^{さくま}の順番。諫早^{いさはや}がまず10人中4位につけ、醒ヶ井^{さめがゐ}も10人中4位。空河^{そらかわ}のところでも一度5位に落ちたが、朝風^{あさかせ}が快進撃。3位につけ、僕のところでも3位をキープ。最後に佐久間^{さくま}ががんばって2位につけたが、パワーダウンで4位に落ち、そのままゴールした。

終わると制服の中に熱がこもってとても暑い。汗がじわじわにじみでてくる。

「あー。暑い。」

「永島君^{ながしま}。ちょっとそのままでもいい。」

「えっ。」

その声がしたほうには朝話していた玉名^{たまな}さんともう一人別の女子が立っている。

「ちょっと写真撮らしてもらっていいかなあ。それあんまり見れないし、結構似合ってるし。」

結構似合っているというのは頭にかぶったままでいる制帽だろう。これはさつき佐久間^{さくま}が僕にかぶせてきたもの。さつきから頭に照り付けてくる太陽を少しさえぎれるならという思いでかぶったままでいるのだが……。

「マジ。これ暑すぎて死ぬんだけど。」

「そこをなんとか。」

「……。はあ。分かったよ。」

「こいつと一緒に撮らしてもらっていい。」

玉名^{たまな}がそう言ってきた。いくら坂口^{さかぐち}が勘違いしないからってそれはまずい。それだけは断った。写真を撮影が終わったところで元のクラスティーマッスに返る。本当に暑い。クラスティーマッスの中と外の空気を少し入れ替えて、かぶったままだった制帽を善知鳥^{うしろ}先輩に返しに行く。その間はもちろんかぶったまままだ。

校舎側にいる3年生の観覧席に回って善知鳥^{うしろ}先輩を探す。探し始

めて数秒すると見つかった。

「善知鳥先輩。これ返しに来ました。」

そう言うと、

「えっ。部活の後輩。」

善知鳥先輩のクラスの人と思われる人が群がってくる。

「そうだよ。」

「かわいい。」

「・・・。」

「なんか小学生がそのまま高校生になったって感じ。まさかの飛び級とか。」

「こんなに背の高い小学生いるか。いくら背が高いって言ってもうちよつと小さいだろ。」

「あ・・・あのう、これ・・・。」

「あつ。うん。ありがとう。」

「ちよつと待ってよ、茉衣。せっかくだから写メらせて。」

「あつ。そういえばあたしもナガシイの写メ取ってなかった。」

（だからなんでそういう話になる。）

しばらく3年生にいじられまくって、自分の席に戻ってきたころには午前の部は終了していた。

午後の部はお呼ばれしない。騎馬戦はずっと補欠扱いのままだったので呼ばれることはなかった。後は男子・女子のホームルーム対抗リレーくらい。その応援をやって体育祭は終了した。

「はあ。終わった。今の時刻は15時30分。いつものやつじゃ帰れないね。」

「そうだな。まあ、体育祭がいつもと同じ時間に終わるとは思っていないけど。この後終礼があって着替えて解散だろ。まだ15分くらいはかかりそうだな。」

「うーん。帰るやつは1000か2000か。そっちのほうが心配だな。朝1000系だったし。」

「心配することか。それ。」

その頃3年生は・・・、

「今日のあれなんだけどさあ、あれ正直体操服のままでもよかった気がしない。」

「おい。おれ知らないぜ。それ1年生が聞いたら絶対キレるぞ。」

「サヤ。そこはあえて知っというて。」

左手に善知鳥うとが縋り付く。

「ちよつと離せ。」

「知っておくって言うまで・・・。」

「はいはい。分かったよ。」

善知鳥うとがサヤの左手を離すと、

「んじゃ、俺は知らない。そういうことで。」

「あつ。知っとけー。サヤのゴミー。」

なお。これが終了してもまだ新体力テストの持久走のほうが残っているのだ。

今回からの登場人物

たまな
玉名 新城

46列車 体育祭（後書き）

こんな小説でも作ったことに意味がある。この世にあるすべてのものは何らかの形で意味を成す。たとえそれがどんな意味を持つとも。

47列車 持久走

後期に入って最初の金曜。10月2日。

「今日は持久走かあ。」

隣に座っている宿毛すくもがため息をついた。今は遠江急行こうきゅう1000系第4編成の中。

「そうだな。お前制服の下に体操服着てるのか。」

「着てねえよ。その代りっていう感じでシャツは着てるけど。」

「それって駄目だよなあ。校則的に。」

「・・・。かたいこと言うなって。ていうより俺は持久走よりも四ツ谷よつやが今日もノート出せって言わないかっていうほうが心配。今日はやってきてないから。」

「あつ。まだそれやってたんだ。」

「我ながらよく続いていると思うよ。」

「・・・。」

今日はまず学校ではなく持久走を行う。岸川学園きしかわでは新体力テスト持久走は学校ではなく別な場所で行っている。浜松球状の近くにそのグラウンドがあるらしいが。

その場所は江急上島こうきゅうかみじまが一番の最寄り駅。その数百メートル東に遠州鉄道の上島かみじまがある。上島で1004から降りて、改札を出て、駅の外に出る。駅を出るとすぐに道にぶち当たる。その道は幹線道路から外れているので車の数も少し少ない。

「そういえば、今日ふつうに金曜日だったな。」

その光景を見た宿毛すくもが自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

グラウンドのある方向に歩いていくとすぐに坂がある。その坂を上ると片側2車線の道路が現れる。確か名前は飛龍街道だったはずだ。僕は道には全く詳しくない。覚えている道といえば家から駅まで行く道と学校まで通う道だけである。

数分すると目的地であるグラウンドが見えた。そこにはまだだれ

も来ていない。来ていたのは陸上部の人だけ。クラスの陸上部員希望君も来ていた。すると希望は僕たちのことが目に入ったみたいでこちらに歩いてきた。

「よーす。お前ら早いなあ。」

誰もが言ってくる第一声がこれなっている気がするが……。

「ああ。電車混むしな。」

「学校もいつもこれくらいに来てるのか。」

「うん。そのあとの混むから。4号車でも。」

「……。なるほどな。さすが鉄研だ。」

そういうと希望は後ろの観覧席らしきところを指して、

「あっちの席のところに俺たちの座る場所があるからそこ行っときな。」

と言った。

希望が言ったところに行ってみると1組から順番に紙が貼ってあった。ここに座れという意味である。全席指定であるというのはちよつと気に食わないが……。

8時30分になるまでの間に1年生が集合しきったと思う。でも、自分がそう思っているだけに過ぎない。ふつうに遅刻してくる連中はまだいる。その人たちの集合が終わってようやと本題である持久走に入った。

最初は当然のことだが準備運動。準備運動をしたら一周走る。もちろんアップなので飛ばす必要はない。それが終わると観覧席に戻って人休憩。その頃には最初に走る特進コースの男子が準備していた。

「はあ。走るのダルい。」

「だるいとも言ってられないんじゃないか。これクリアしないと体力テストいい結果なんかでないぜ。」

「結果なんてどうでもいいよ。だって走れば問題ないんだもん。途中で歩いたりしなければいいだけじゃん。」

「……。根本はそこかもしれないけど。」

「1年5組と1年6組男子の前半。移動しなさい。」

アナウンスが入って僕の周りにいる男子が席を立ち始める。

「俺たちも行くか。」

宿毛すくもが促した。

観覧席からフィールドに降りて、今走っている1組男子・2組男子・3組男子の前半の邪魔にならないようにトラックの真ん中に入る。

「1位は間違いなく希望のぞみだよなあ。」

独り言を言った。

「希望のぞみかあ。そうだろうな。早そうだもん。」

そう言っていた会話は希望のぞみには聞こえていたらしい。

「そうとも限らないってことはこの世の中多いんじゃないか。俺の予想じゃ1位は新城しんしろだな。」

「なんで。」

「俺どちらかというと短距離だから。長距離苦手なんだ。だから1位は新城しんしろ。」

なんか意外だった。

3組男子の後半と4組男子が走り出したところで次が僕たちの番。それまでの間僕は宿毛すくもと話していた。その中身は何のたわいのない話。その話の間にこのグループのトップがゴール。記録は5分を切ったらしい。しきりにそういうのが聞こえた。

次は僕たちの番だ。スタートラインに並ぶように促される。

「これってビリっていうのとトップっていうの嫌だよなあ。」

「お前はクラストップなんだからこれでもクラストップ取りに行けよ。そうすれば女子にモテモテだぜ。」

「そんなことしたくねえよ。目立つから。」

（いや。今でも十分目立ってると思うけど・・・。）

その会話を交わした直後。スタートの号砲が鳴った。

それと同時に全員が走り出す。この中では比較的前のほうにつけた。そのあとは前の人を見据えてただ引っ張られていくだけ。どこ

までついていけるかは持久戦だ。

1周で400メートル。2周で800メートル。1500メートルある持久走はこれを3周と4分の3周する。ゴールは観覧席の一番南寄り。ここまで走って順位表をもらい先生に提出する。それが僕たちのタイムとなる。

1周目は少々速いペース。2週目からペースがだんだん落ちてきて、3周目ではへとへとの状態。これは自分の配分が悪いだけだ。そう自分に言い聞かせた。何とか走り切ってゴール。タイムはゴールする前にチラッと見た。5分58秒。

ゴールすると態勢が崩れた。ももに手を置いて息を整えようとするが、こんなすぐに息が整うわけない。足を動かそうと思うように動かない。とても足が重いのだ。そんな足で何とか記録員のところまで行つて9と書かれたカードを提出。そのあとは周回遅れの邪魔にならないように観覧席側に戻る。

戻っている間に宿毛すくもが話しかけてきた。

「はあ。ながしま永島。お前何位。」

「9位。」

「そうか。7位。」

「そもそも体力テストで勝負って無理じゃん。俺よりお前のほうが成績いいんだから。」

「そうでもないだろ。数十秒くらい差があるんだったら別だけどころな僅差で得点が違うってことはありえないんじゃないのか。」

「ありえねえけどさあ。ボール投げとか俺致命傷なのが多いしそういうところで逆転とか無理ってこと。」

「ハハハ。」

ところどころ途切れながら肺の中に酸素を送り込む。僕は靴のつま先をずりながら観覧席のところまで行った。

「はあ。疲れたー。」

自分の荷物が置かれている席に座ると大きな声を出した。

「他がびっくりするだろ。ちよっと抑えろって。」

「はあ。」

宿毛すくもがそう言ってもとうの自分にはその気はさらさらない。吐く息のついでに声も出した。

「ああ。この後授業だろ。」

「そうだな。」

「ああー。だるーい。なんで持久走走った後に授業あるんだよ。なくていいじゃん。帰らせろ。」

「……。今日部活とかないのか。」

「ないよ。」

だが、すぐにあることに気付いた。

「あつ。て。明日だった。なんで今日ないんだよ。」
すぐにだれた。

11時ごろ。ようやくと持久走が終了。ここから返れると思うのは大間違い。何度も言っているが午後は授業があるのだ。

「永島ながしま。学校までどうやってく。やっぱりバスか。」

宿毛すくもが提案してきた。路線バスはこれまで出雲工業いずみこうぎょうのオープンキャンパスに行つて以来使ったことがない。実に1年以上路線バスに乗っていないのだ。観光バスはというと臨地研修の時に乗った。そんな話はどうでもいいか。

「なんでバスなんか使ったよ。混むじゃん。」

「そういう理由でバス使いたくないって落ち。」

「うん。」

「……。あつ、そう。じゃあ学校まで歩いてくのか。」

「まあ歩いてくけど……。」

（そう言えば上島かみじまから涼ノ宮すずのみやつて3分かかったなあ。そんなに距離があるようには見えないけど結構あるのかなあ。だったら上島かみじままで戻って電車で行くっていうのも手かあ。……。まてまて。確か今日は1000系に乗ってきたんだよなあ。もしここでまた1000系が来たら。それに当たらないためにはこのまま歩いていくほうが賢いかあ。）

「まあ、どうした。」

「なんでもない。よし歩いて行こう。」

（これ絶対何か考えてたよなあ。）

いつものこと。そう思った。

1組から順番に会場を出ていく。会場の西側はちょっとした坂になっている。その坂を上りきると道が西へ延びている。それを曲がらずにまっすぐ行くと学校に通じている道に突き当たる。その交差点を左に曲がる。近くには櫛町西のバス停がある。そこにはさっき出て行った人たちの姿もあった。バス停には帰りの岸川高校前みたいに人があふれていた。

「あすこまでしてバスに乗る気が起きるのが信じられないな。」

（おいおい。）

「バスは二酸化炭素を吐き出して地球温暖化に貢献してるんだぞ。そんなのに乗るなあ。」

（そこまで言うか。）

「……地球温暖化に貢献してるって。確かに二酸化炭素を排出してるならそういうことになるかもしれないけど貢献って。俺が思うにその貢献度数が一番高いのは車とかバスじゃなくて飛行機だと思うが。」

「よし。じゃあ、飛行機を核爆弾で……。」

「お前の破壊論は核爆弾以外ないのか。」

「えっ。他にもあるよ。ロケットランチャーとか対戦車ライフルとか火炎放射器とかマシンガンとかレーザーキャノンとか。」

（こいつにまともなんて言葉はないかあ。俺がバカだった。）

ずっとこんな話をしていたわけではないが、話をしながら学校を目指す。学校へ歩いている間に数回バスに追い抜かれていったがそのバスはほとんど岸川の生徒で込んでいた。そのたびに僕は「地球温暖化に貢献している。」という話をした。

そんなことで30分ほど。岸川学園に到着した。1年5組のクラスにすぐに向かった。クラスには自転車で先に着いている佐久間の

姿もあった。

「永島^{ながしま}。お疲れ。」

「ああ。疲れたよ。」

「そうだ。お前何位だった。」

「えっ。9位だけど。ていうか佐久間^{さくま}もともと陸上部だったんだし、お前のほうが速いんじゃないのか。」

「そんなことないって俺は21位。」

「ウソ。俺より遅いんだ。」

「お前気づいてなかったのか。俺たちがゴールした後^{さくま}に佐久間^{さくま}が走ったこと。」

その時を思い出してみる。

「あっ。そういえばそうでした。」

「・・・。」

「俺時々わからなくなるんだよなあ。本当は天才なのか。それともバカなのかって。」

「ハハハ。」

「だからそれはバカって・・・。」

「まあ、そうなんだろけど。」

僕の言葉を遮るように宿毛^{すくも}が言った。

「ハハハ。早いところ弁当くったらどうだ。」

「ああ。そうするよ。」

「あっ。」

その声に反応して佐久間^{さくま}と宿毛^{すくも}が僕のほうを見る。

「弁当持ってくるの忘れてた。」

「・・・。」

「それヤバイじゃん。」

「まあいいや。昼くらい一度抜いたって死にはしないからなあ。ハハ。」

「・・・。」

（どういう考えで生きてるんだ。こいつは。）

これで新体力テストも終了。次は明日ある部活だろうだ。

今回からの登場人物
のぞみ
希望

47列車 持久走（後書き）

ある教科担当の人は言いました。

「テキスト（文字）」としてとらえるよりピクチャー（絵）としてとらえたほうが覚えやすい。」

最もですね。この中に登場する車両・列車はすべて実在した。または実在しているものです。今はインターネットで簡単に調べられますから、本作のテキスト（説明文）をピクチャー（写真）としてとらえてください。写真を見たりすれば、少しはどこを説明しているのかつかめるのではないんでしょうか。

48列車 ミーティング

10月中旬。テストを潜り抜けて、また部活どう再開。

「よし。今日からまた部活どうだい。」

いつものハイテンションは善知鳥先輩だ。

「そうだな。部活動がない日ってなんかイライラするからなあ。これでそのイライラもなくなるかあ。」

サヤ先輩もそれに共感しているようだ。するとドアが開いた。

「手を上げる。」

そう言って入ってきたのは諫早だ。

「何度も同じ手は食いませんよ。」

「じゃあ・・・。死んでください。」

「イサタン声変わりすぎ。」

「お前が死んでくださいっていうと本気のように思えて怖いわ。」

「そうですか。」

そう言っているとまたドアが開く。今度はナヨロン先輩だ。でも、ナヨロン先輩はすぐにドアを閉めてどっかに行った。

「バカ。久しぶりに来たんだから部活やってけ。」

善知鳥先輩が返ろうとするナヨロン先輩を止めに部室を出ていく。しばらくするとナヨロン先輩を連れて戻ってきた。ハクタカ先輩と楠先輩も一緒だった。

「だから、いつも冗談って言ってるだろ。」

「久しぶりにやられるとね。そんなこと忘れちゃうのよ。」

「そりゃ、いろんな意味で問題だ。」

「そういえば今日アヤケンは。」

「アヤケン今日学校休んでるよ。」

「へえ。死んだのか。」

「そう死んだ。」

「アヤケンのやつ。死んでんじゃないやねえよ。」

「あのうそれ言うのはちよつと。」

楠先輩くすのきが「死んだ」という言葉を使わないように促そうとしているがそんなに効果は上がっていない。

「ハクタカ先輩。さっきから言ってる死んだってあっちの意味ですか。」

「簡単に言うと「休んだ人」。欠席したらイコール死んだことにされるから気をつけろよ。まあ、俺は善知鳥先輩うとどうが死んでくれたほうがよっぽどありがたいけど……。」

「大丈夫だよ。あたしたちがいるのもあと半年ないんだから。」

（そう言われればそうだな。ナヨロン先輩と話せるのもあと半年なのかあ。言われてみればこの半年だけでも電車のこと結構教え込まれたなあ。223系のこともそうだけど、もっと別の車両のことも……編成も……。）

心の中で今まで萌と楽しく模型で遊んでいた時とは違うということ思った。

「そういえば先輩たちみんな進路とかって決まってるんですか。」

楠先輩くすのきが遊び人の先輩たちのことを心配したが、その必要はなかったらしい。サヤ先輩はすでに名古屋の中京観光専門学校ちゅうきょうかんこう合格している。善知鳥先輩うとどうは岸川学園のグループ大学。瀬戸学院大学せとがくいんへの進学を、ナヨロン先輩は進学先だけは決まっていたあとは受けるだけだそう。そして今日死んでいる……いや、休んでいるアヤケン先輩は瀬戸学院大学せとがくいんを志望しているそう。

「中京観光ちゅうきょうかんこうって東京の帝京観光ていきょうかんこうのグループですよねえ。」

「グループっていか姉妹校っていう感じだな。」

「結構いいところ入りますねえ。」

「いいところって。頭がないからAOで受験したんだろうが。そこだったら実力に受かれつうの。」

「うるせえな。いいだろ。合格しなかったら元も子もないんだし。」

「……。」

そんなことを言い合っていると

「みなさんお集まりですね。」

ドアから顔をのぞかせているのはアド先生だ。なんか久しぶりに見た気がする。いつもホームルームの時にあっているのだが……。

「まずは座ってください。ミーティングをします。」

そう言っただアド先生は部室の一番奥にある机まで歩いて行って腰を下ろした。座ると手に持っていた紙を全員に配布し始める。サヤ先輩からその紙をもらって目を通す。中身はこれからの予定。いつものことだが、この通りにやっただめしはない。

「みなさん見て分かると思いますが、11月の1日と3日の^{あかつき}暁鉄道が主催する^{あかつき}暁フェスタと^{せとがくいん}瀬戸学院大学と^{おりおちよう}折尾町の展示が入っています。しかし、^{せとがくいん}瀬戸学院大学と^{おりおちよう}折尾町の展示が11月の14日にかぶっています。」

^{おりおちよう}折尾町という言葉を聞くと先輩たち全員の顔がゆがんだ。何か嫌なことでもあったのだろうか。その顔をしている先輩たちをほったらかしてさらにアド先生が続ける。

「この14日の展示を分けたいと思います。」

そういうと、

「よし。なら3年生全員とハクタカは大学の文化祭言っただアヤノンと1年生全員で^{おりおちよう}折尾町の展示やればいいと思います。」

まず^{うと}善知鳥先輩が口を開いた。

「なんであたしだけ^{おりおちよう}折尾町なんですか。嫌ですよ。」

「なんで。たくさん子供いるじゃん。」

「だから嫌なんです。」

「^{うと}善知鳥先輩。独壇場で決めるのはやめてください。」

ハクタカ先輩が口をはさむ。

「ていうか^{おりおちよう}折尾町にそんなにいらないだろ。」

サヤ先輩が続けていった。

「そうか。子供がいっぱい来るんだし監視がたくさんいたほうがいいだろ。」

「……。」

「じゃあ、何。9人いる高校1年生と中学生で折尾町の展示をやるってことですか。」

「はい。」

僕たちは何も話すことが泣くことが決まっていく。その結果は・・・となった。

「次。先に行われる暁フェスタの展示について話します。11月の1日と3日にかけて行われます。会場は暁鉄道の天竜暁駅です。この事務所の2階。3年生・2年生ならわかりますね。ここでいきます。」

これまで言われている暁鉄道とは昔国鉄二俣線と呼ばれていた路線を第3セクター化して発足した鉄道会社である。地元を走っている鉄道の3つ目にあたるが遠州鉄道と遠江急行とはまた別。市や県が出資してこの鉄道を経営している。この路線を走っている車両はディーゼルカーでほとんどの列車がそれ1両で動いている。ディーゼルカーは最新であるが建造物には築70年くらいになる建物が多く一部は国の有形文化財に指定させているくらいだ。由緒正しい鉄道と言っても過言じゃないだろう。当然。僕たちが展示を行う場所としていま言われた事務所もその文化財の一員である。

「また階段急なあすこかあ。」

「しょうがねえだろ。それ。」

「話す前にちゃんと聞いてくださいね。」
楠先輩が3年生を抑える。

「ありがとうございます。それで次。瀬戸学院での展示ですが、教室は3021教室です。ここで行います。これも2年生は分かっていますね。そして、折尾町の展示ですがこれは折尾町公会堂の1階で行います。これも2年生ならわかってますね。」

アド先生はハクタ先輩に確認するみたいに言った。するとハクタ先輩は他人事のように目線をそらした。

「ちよっとそれはどういことかなあ。」

そう言い終わると、

「それってまた新幹線^{しんかんせん}使うってことですよねえ。」

ナヨロン先輩が口を開いた。

「はい。そういうことです。」

（永島^{ながしま}は分かるとして、他だよなあ。少しはそういうことができる人がいたほうがいいかあ。）

「じゃあ、新幹線^{しんかんせん}のメンテナンスやったほうがいいんじゃないんですか。」

そう聞いた。

「あつ。じゃあ、明日お願いします。」

「はい。」

ちよっと明日という言葉は効いたらしい。

今日はこれからの展示と予定の確認。それだけで終わった。

48列車 ミーティング（後書き）

ようやくと半年たちました。あと半年分は根性で上がっているので、残り分を根性で上げたいと思います。

しかし、高校生のエピソードが終わると実質×ネタが尽きてしまうんですよねえ。自分の経験が少ないからしょうがないのですが・・・結構長い時間皆さんを待たせる結果になると思います。しかし、このストーリーはいつか完全に完成させます。

49列車 いじるとA編成とB編成(前書き)

このレは濃いです。

49 列車 いじるとA編成とB編成

翌日。土曜日は10時15分に授業が終わる。授業が終わると即行で部室に行ったが、開いてなかった。部室の前でちょっと待つ。

「いい加減に自分で鍵取り行くとかしてくんないかなあ。」
僕の姿を見て呆れているのは楠先輩である。

「ああ。じゃあ取り行ってきます。」

「もういいよ。次からそうしてくれれば。」

「ていうか楠先輩は鍵取りに行っていないんですか。」

「取りに言っていないから今ここでこうしてるんじゃない。」

ため息をついてその場に腰を下ろした。

「永島ー。」

僕を呼ぶ声とともに現れたのは木ノ本と留萌だ。

「おー。二人とも鍵ある。」

「ありません。」

その言葉で僕も楠先輩も一気に力が抜けた。その場にしゃがみ込む。そのすぐ後に箕島が現れて部室を解放した。その数分後には醒ヶ井とナヨロン先輩も集合した。

「ふう。永島。木ノ本。留萌。箕島。醒ヶ井。俺たちは寮に行くぞ。」

そう言ってナヨロン先輩が立ち上がる。

「えっ。それあたしここに一人になるじゃん。」

「分かったよ。来たいなら来てもいいから。」

「あつ。でも今日やるのって車両いじりですよねえ。」

「ああ。」

「じゃあ。やっぱりやめます。」

「・・・よし。じゃあ俺たちは行くか。」

促されて部室を出た。

寮に着くとまずはいつもの部屋と思ったが、ナヨロン先輩は文化

祭前に入った部屋のほうへ歩いていく。階段を上って右に曲がるとすぐのところにプレートがある。それをどかして、自習室1の鍵を開ける。どうやらアド先生から預かってきたらしい。その部屋には布団の敷かれていない2段別途と教員用机と折りたたみ椅子が2脚置かれている。この部屋に15箱ぐらいの折り畳みケースが収納されている。

ナヨロン先輩はまず2段ベッドの下に置かれている折り畳みケースに手を伸ばした。そのの一つをとって木ノ本きののほんに手渡す。外に運んでと指示を出されて、外に運び出す。それを何度か繰り返して、ようやくと新幹線しんかんせんの箱を引っ張り出した。新幹線しんかんせんの箱は2つ。この量からすれば少ないほうだろう。その箱を運び出し終わるとこれまで出した7箱をもとに戻す。それがすんだら今度は教室をいつもの学習室に変えた。

「よし。まずはどれでもいいから一つとってけ。」

そう指示される。その指示で僕たちは新幹線しんかんせんの車両ケースの一つ取り出す。もちろん僕はそう指示を受けると真っ先に100系のケースを選んだ。

「永島ながしま。それ「グランドひかり」だぞ。いいのか。」

「・・・。」

よく背表紙の文字を見ていなかった。ただ100系ということだけしか見ていなかった。

「・・・。」

「どうも不満そうだな。えーと。」

ナヨロン先輩がケースに入っている車両ケースの背表紙を確認しながら指をずらしていく。

「ほれ。こっちがよければこっちにしろ。」

「あ・・・ありがとうございます。」

今更ながらやさしい人だと思った。「グランドひかり」はナヨロン先輩と交換という形で僕のところジェイアールに100系のJR東海編成がやってきた。ちなみに「グランドひかり」はJR西日本の編成である。

「よし。まずはこれの先頭車をとって、車輪を見ろ。」

ケースを開けてケースの一番上に入っている車両を取り出す。白くどがった鼻。横に入るつり目のヘッドライト。窓を包み込む青いライン。0系の登場時と同じ大きな窓。そして、模型でも貫禄のある車体。これらすべて100系の特徴である。

「永島^{ながしま}。好きだから見とれるのはいいけど・・・、ちゃんと聞いてくれよ。」

そう注意された。そのあと全員の顔を見渡していると、

(同類がここにもいた。)

「留萌^{るもい}。0系が好きだから見とれるのはいいけどちゃんと聞いてくれよ。」

留萌にも同じ注意をした。今視界に飛び込んできたことだが、木ノ本^{きのもと}が手に取った車両は500系「のぞみ」。醒ヶ井^{さめがい}は700系「ひかりレールスター」。留萌^{るもい}は0系「こだま」。箕島^{みしま}が300系「のぞみ」。そして僕が100系「ひかり」だった。ものの見事に東海道^{とうかい}・山陽新幹線^{さんようしんかんせん}で活躍する車両たちであった。

「よし。まずはこいつらを裏返せ。」

ナヨロン先輩が「グラントひかり」の先頭車を180度回転される。逆さまになった「グラントひかり」は天井が床を向き、床が天井を向いた。僕たちもそれに倣い持っている先頭車を逆さまにする。

「そうしたらここを見ろ。」

そう言ってナヨロン先輩がスカートのすぐ後ろ。つまり運転席の真下にある台車を指差して、その車輪の軸を抑えて持つ。

「この車輪をゆっくりと回して、黒いところを探せ。」

どういふことだろうか。意味は分からないが言われた通りやってみる。すると僕の持っている100系はほとんど黒い。車輪全体が黒くなっている状態で、車輪の銀が顔をのぞかせているところが全体の10パーセントくらいしかない。

「そして、黒いところが見つかったらこれを使って車輪をきれいにする。この作用の繰り返しだ。」

ナヨン先輩はレールクリナーと綿棒を持ち出す。今の今までレールクリナーは線路にしか使わないと思っていたがそういうわけではないらしい。レールクリナーは鉄道模型のほとんどのものの掃除使用することができそうだ。

僕たちは1本綿棒を手に取り、レールクリナーを順番に綿棒につけてまわす。そして車輪に綿棒の頭を当て、綿棒を当てた反対側の車輪を指でゆっくり回す。1周するとききは10パーセントくらいしかなかった銀の部分が大部分を占めるようになった。当てた綿棒を見ると真ん中らへんに長方形の黒い塊がついている。汚れが取れた証拠だ。この作業を何回も繰り返して一つの台車をきれいにしていく。綿棒は1両につき一本。もしくは台車1つにつき一本消費するくらい。ほぼ浪費状態だ。僕が2両目の車両の台車をきれいにしていると、

「どこまで進んだ。」

ナヨン先輩が自分の作業をしながら聞いた。全員今やっている車両をこたえる。醒ヶ井さめがいは「レールスター」の3号車。留萌るもいは0系の2号車。木ノ本きのもとは500系の4号車。と回答。

「分かった。じゃあ、今やってる車両で一度作業やめろ。」
そう指示を受けた。

その車両が終了するとナヨン先輩は次の説明を始めた。

「次は模型のM車エムのクリーニングな。お前らもその箱の中で一番重い車両探してみろ。」

そう言われる。僕はすぐにどれがM車エムかわかった。上から数えて3番目。3号車がM車だ。木ノ本きのもとには少し難題だったみたいで教えてときかれてきた。留萌るもいと醒ヶ井さめがいはちゃんと見つけられたようだ。

「全員見つけたな。まずは同じように裏を見ろ。」

これまでと同じように裏返す。車輪は今までの車輪とは違い真中は軸剥き出しではない。代わりに目に入ってきたのはギアだ。

「これで今までのやつと違って分かるよな。この車輪をきれいにするにはまずこれを取り外さなきゃいけない。そのためには……。」

」
車両を横倒しにして持ち、車両を持っていないほうの手を台車にかける。そして力を加える。

「はーっ。ってあれ。はずれねえ。おい言うこと聞けーっ。・・・まだ聞かねえなあ。・・・はーっ。」

独り言を言いながら台車と車体を割くようにして台車をとった。台車には何やら付属品があるみたいで、緑色の小さな棒もくっついてきた。

「今やってみたみたいにお前らもやってみろ。」

今ナヨン先輩がやってみたみたい僕たちもやってみる。台車は案外簡単に取れた。そんなに力入らないみたいだ。

「よし。取れたら木ノ本きのもとはこの棒をまわしながらさっきと同じ手順で。永島ながしまと留萌るもいと醒ヶ井さめがいはさっきと同じ手順でやれ。そうすればきれいになる。そして、戻すときはさっきとは逆をすればいい。」
そう説明を受けた。

さっきと同じ要領でこのギア台車もきれいにしていく。それが終わったら今度は掃除を行っていない車両のメンテナンス。それが終わったら次の車両に行く。

「へえ。「ドクターイエロー」もあるんだ。」

そういうと留萌るもいが覗き込んできた。

「んっ。どれどれ。って。それ0系タイプじゃん。これがいたのって2000年以前の話でしょ。懐かしいなあ。」

「あれ。こんなのいたっけ。」

「いたよ。浜松工場はままつこうじょうの新幹線しんかんせんなるほど発見デーで見たことないの。」

「ごめん。記憶にない。」
「・・・。」

「今700系だもんなあ。俺はあっちよりこっちのほうがいいかなあ。」

「永島ながしま分かってるじゃん。今の「ドクチャン」ってなんか好きになれないんだよねえ。まあ見たらテンションあがるのは同じだけど。」

「えっ。それふうじゃないの。」

「ですよねえ。健康そのものですから。」

「ハハハ。留萌^{るもい}って結構車両に詳しいって善知鳥^{うぐいす}から聞いたけど、どれくらい知ってる。」

「今そんなに知らないんですよ。中学の時に一気に忘れたっていう感じで。ああ、でも新幹線^{しんかんせん}の試験で使われてたA編成^{エー}とB編成^{ビー}とそれを新幹線^{しんかんせん}の救援車にしたことぐらいはちゃんと知ってますよ。」

「そうか。お前^{エー}A編成とか好きじゃないのか。」

「A編成^{エー}は2両だけだし、0系と結構イメージ違うでしょ。B編成^{ビー}も同じ理由でそんなに好きじゃないんです。かわいいけど……。」

「まあ。A編成^{エー}よりB編成^{ビー}のほうがましってか。」

「どういうことですか。」

本ノ本^{きのもと}にはこの意味が分からなかったようだ。

「A編成^{エー}ってあの丸い鼻のところが光ったんだよ。B編成^{ビー}は光らなかったけど。」

「えっ。マジ。」

このことには僕もびっくりした。あれは最初から光らないものだと思っていたからだ。

「マジだよ。昔は白花のトナカイみたいな感じで鼻を光らせてたの。だけど光らせないほうがいいっていう考えに多分至って、量産車である0系にはそのシステムがないわけ。」

一つ利口になった。

「確かB編成^{ビー}ですよええ。当時最速の256km/h^{キロ}出したのって。」

「

僕も話に参加した。

「ああ、そうだよ。綾瀬^{あやせ}と鴨宮^{かものみや}の実験線だな。」

「でも、なんかもったいないって思いませんか。0系も260km/h^{キロ}まではメーターふってあるわけだし試作車のB編成^{ビー}でも260km/h^{キロ}は出たはずなんですけどねえ。どうせならあと4km/h^{キロ}頑張っ

て出しちゃえばよかったのに。」

「出せないB編成の事情でもあったんじゃないか。あれ計測してる時に蛇行動も観測したみたいだし、これ以上出すのは危険だって判断したんじゃないか。」

「説得力ないですね。」

「うん。ないな。」

さつきから僕たちが話しているA編成・B編成とは新幹線の試作車。現在の^{しんかんせん}新幹線の礎を築いた車両である。容姿は0系とよく似ているがヘッドライトが縦に楕円形ではなく横に楕円形であること。運転室の窓が湾曲していたことなど。細部に0系との違いがある。またA編成は前述したとおり2両。B編成は4両と量産車である0系よりも身軽。さらに塗装にも違いがあり、A編成は車体の裾に細く。B編成は窓周りに太い青いラインが入っていた。この2編成による各種試験の^{とうかいどうしんかんせん}のうち1964年10月1日に^{とうかいどうしんかんせん}東海道新幹線として開業するのである。なおこの2編成は営業運転には就かず^{とうかいどうしんかんせん}東海道新幹線開業後は生涯を通して救援車としてもしもの場合に備えていた。しかし、安全神話の^{しんかんせん}新幹線に救援車の出番はなく、いい意味で一度も出動せずに「ドクターイエロー」にバトンを渡したのだ。その後車両は廃車されているが今でも鉄道の博物館などでその模型を見ることができる。

「・・・。」

しばらく黙って自分たちの作業を進める。

「そうだ。留萌、お前C編成って知ってるか。」

ナヨロン先輩が振る。

「C編成。」

この反応は分らないということだろう。

「なんですかそれ。初めて聞きましたけど。」

「これも試作車なんだけどな。A編成とB編成は有名だけどC編成は兄ちゃんたちに隠れてそんなに知られてないんだ。容姿はほとんど0系に似てるっていうけど6両編成っていうのが0系と違うところかなあ。」

「へえ。そんなのあったんですね。」

「・・・。そりゃ反応薄くなるよねえ。うん。うん。」

自分に言い聞かせるように言っていた。

49列車 いじるとA編成とB編成（後書き）

この話を作った後に調べましたが、B編成は救援車ではなく線路関連の計測車になっていました。訂正します。

A編成の救援車もB編成の計測車も今日の「ドクターイエロー」と同じく黄色に青のラインをまいている塗装でした。

昨日パソコンのほうのアクセス数で1000突破しました。

ユニークは300を突破。だんだん数が増えていくのは嬉しいですが、このごろアクセス数は低迷したり、のびたりで安定していません。

ユニークアクセス数はアクセス数よりは安定しているのですが・・・。

50列車 文化財へ(前書き)

初掲載の作品で連載して50話です。

このシリーズの最後までまずは頑張ります。

50列車 文化財へ

日曜日。午前中に暁あかつきフェスタに持っていくモジュールを学校のハイエースに詰め込む。そして午後。

「はい。みなさん集まっていますね。」

アド先生が全員の顔ぶれを見る。今日ハクタカこと鷹倉俊也先輩とアヤノンこと楠絢乃先輩くすのあやのはいない。今日は僕たちだけで活動する。

「はい。みなさん、今日は天竜暁駅てんりゅうあかつきに行きます。みなさん荷物を持って私の車に乗ってください。」

そう指示を受けた。とするとハイエースのほうはどうなるのか。

「あとう。バンのほうはだれが・・・。」

「バンは山科先生やましなに運転してもらいます。なので心配ありません。それでは行きます。」

いつものように体育館から出て、正門から入ってすぐのところにある駐車場に車がいくつかとめてある。その駐車してある車のうち1台にアド先生が歩いていく。

「マジ。アド先生の車ってウィッシュじゃん。」
醒ヶ井さめが井が言った。

「へえ。あれウィッシュっていうだ。」

僕は関心が内容に返事をした。その時アド先生は真ん中のシートを倒して後部座席に人が乗れるようにしている。

「はい。乗ってください。」

そう言われて一番最初にウィッシュに乗り込んだのは木ノ本きののもとだ。続いて留萌るもいが乗り込み、助手席には箕島みしまが乗り込んだ。残った醒ヶ井さめが井、佐久間さくま、僕はというと真ん中の座席におしくらまんじゅうで乗り込んだ。

ふと外を見てみた。

「それじゃあ、山科先生やましな。バンのほうよろしくお願いします。」

「はい。分かりました。」

すらりと背の高い先生が返事をした。彼が4月から名前しか聞いていなかった山科先生だそうだ。アド先生の呼ばれ方からして部活のみんなからはヤマ先生かシナ先生と呼ばれる方をしているはずだ。その人がバンに乗り込んだことを確認すると、アド先生も自分の車に乗り込み、ウィツシュのエンジンを起動する。まず最初にウィツシュが動き出し、山科先生の運転するバンが僕たちの後を追っている形で天竜峯まで赴いた。

ゆっくり運転されるハイエースに合わせて40分ほど。普段から見慣れている光景が僕の前に広がる。と言ってももうここは天竜峯地区。いろんな意味で見慣れたといえば見慣れた光景だ。飛龍大橋という天竜川に架かる橋を渡ってすぐの交差点を左に曲がり、またすぐのところにある交差点を左に曲がる。その道に入ったらまたすぐのところを今度は右に曲がり、さっきよりも少し長く走ったところでまた右に曲がる。すると僕たちの前には木造の建物と扇形の車庫が広がる天竜峯構内に入ってきた。

僕たちの乗るウィツシュは木造の建物の北側を通過して、峯鉄道のディーゼルカーが止まっているすぐ隣に車を止める。ハイエースはというと木造の建物の入り口の前に止まっている。

その光景を見た人が木造の建物の中から出てきた。

「どうも。こんにちは。」

アド先生の姿を見るなりその人は話しかけてきた。

「こんにちは。今回もよろしく願います。」

「こちらこそ。よろしく願います。」

アド先生は僕たちのほうを向いて、

「紹介します。今回峯フェスタの運営を担当しています。富士史崇さんです。」

「よろしく願います。」

みんな声をそろえて頭を下げる。

「こちらこそ。よろしく願います。それでは安曇川さん。先日伝えました通り当事務所の二階に展示を行うということでお願いし

ます。」

この富士ふじという人に後ろに立っている建物が暁鉄道あかつきの事務所らしい。僕から見てみるとこの事務所には隣接して2枚の引き戸があることがわかる。その右側の扉の窓には事務室と書かれている。ここが事務室である証拠でもあるが・・・。とは言ったが文字は剥げていたためあくまでも推測ということだけでとっておいてほしい。

話が終わると僕たちを促して、バンに乗せた荷物を下ろし始める。まずは事務所の前に置いておくだけ。さっさと仕事は終了する。空っぽになったハイエースを見て、

「安曇川先生あどがわ。これから中学生の迎えに行ってきます。そろそろ模試が終わったころなので。」

とことわって山科先生やましながハイエースに乗り込む。とその瞬間だった。アド先生の携帯電話けいたいでんわが鳴った。

ここからは電話内でのやり取りです。

「もしもし。」

「あつ。アド先生。今どこにいるんですか。」

「あつ、善知鳥君うんどう。どこっついま事務所の前ですけど。」

「分かりました。私たちもすぐそっちへ行きます。」

と言って電話は切れた。

「誰ですか。」

「善知鳥君うんどうだったよ。」

そういうと山科先生やましなはほっとしたような顔になってハイエースに乗りなおす。そしてすぐ出て行った。それを見送って、

「それではまずは荷物を2階に置いてきてください。そしたらここにあるものを上に運びます。」

そう指示を受けた。

まずは荷物を2階に置いてくるため事務室の中に入る。僕たちが入った扉は左側から。入るとすぐ目の前に急な階段がある。その隣の部屋をのぞいてみたが何があるのかはすぐに分かった。僕の目線から見て左側に机。前のほうにはところどころにつまみがついてい

るパネルがある。このパネルにはこの天竜曉てんりゅうあかつきの線路配置が簡略化して書かれており、ところどころにあるつまみはおそらくポイント操作のために使う機会。ここからポイントを遠隔操作しているのだ。一瞬だけだったから認識できたのはこれくらい。階段を上がって左にある部屋に入る。部屋の天井の梁には進めて色の落ちた棒が2本貼り付けてある。一つは長方形と三角形を組み合わせたような形をしていて黄色い。もう一つは長方形のしっぽを三角形でくりぬいたような形をしている。そして黄色のものより少し長い。佐久間さくまにはそれが気になったらしく、

「永島ながしま。これ何。」

と聞いてきた。

「多分。これ腕木信号うでぎしんごうの腕木だよ。」

「うでぎ。」

これには木ノ本きのもとも声をそろえた。僕はどんなものかわかるように何か令を出したい。そう思って窓のほうへ歩いて行った。確かエスエルの動輪と一緒に腕木信号うでぎしんごうもたっていたはずだ。

「ほら。あれだよ。あれが腕木信号うでぎしんごう。」

エスエルの動輪の隣に立っている腕木信号うでぎしんごうの腕木は黄色くこの天井にある黄色い色をした腕木と形も同じ。

「よくローカル線とかにあった信号だよ。今じゃほとんど見れないけどね。」

と説明を加えて、下に下りて行った。

下に下りていく間に箕島みしまと留萌るもいと醒ヶ井さめがいにすれ違った。階段はすれ違うような幅ではない。箕島みしまと留萌るもいと醒ヶ井さめがいが通った後に僕が入れ替わりに下に下りた。ハイエースが止まっているところまで行くとアド先生にまず白いケースに入ったほうを運んでといわれた。その指示で僕は白いケースを2つ持って階段を上がる準備をする。上から木ノ本きのもとと佐久間さくまが下りてきている。降り切るのを待って僕た2階へ上がる。2階へ上がるとまっていた箕島みしまと留萌るもいと入れ替え。醒ヶ井さめがいが2階の部屋で荷物を置いているところに遭遇する。僕も荷

物を置くとまた下に下りる。下からは佐久間と木ノ本が上がっている。上がりきるのを待って、入れ替わりに僕が下に下りる。ずっとこの繰り返しだ。

2回この操作をやって下に下りると見慣れた顔がそこにあった。

善知鳥先輩とサヤ先輩とアヤケン先輩だ。

「サヤ先輩に善知鳥先輩にアヤケン先輩。どうしたんですか。」

「いやあ、私たち受験あきらめた組だから手伝いに来た。」

頭の後ろに手を当てて善知鳥先輩が言った。

「じゃあ。まずはこいつらを運ぶかあ。」

サヤ先輩はまだ残っている気の箱に目をやった。この箱の中には上野駅とその他S字モジュールが多数入っている。これらはそのまま持っていくには至難の業である。なので……。

「よし。お前ら1列に並べ。これから上野駅を運んでいくぞー。」

ということになった。並びは下から善知鳥先輩、木ノ本、留萌、醒ヶ井、サヤ先輩、佐久間、箕島、僕、アヤケン先輩の順。

「はい。まず上野駅13番線。」

「上野駅13番線。」

「上野駅13番線って……。「カシオ」と「北斗星」が来るころじゃん。」

「上野駅13番線かあ。」

「上野さんの上野駅。」

「……。」

「上野駅。」

「13番線ホーム。」

「ああ、上野さんのゴミだ。」

ただの伝言ゲーム状態。もちろん言葉のとおり伝言ゲームにもなっていないが……。

上野駅モジュールを運び終わると次はS字カーブ。

「次。S字のトップバッターは綾瀬川。」

「綾瀬川。」

「綾瀬川．．．まさか。」

「まさか．．．何。」

「アヤケンの綾瀬川。」

「．．．」

「綾瀬川。」

「綾瀬川。」

「あっ。俺の「特急ゴミ1号」。ダストボックス行き。」

こんな具合で運び上げた。最後に空になった箱は佐久間とアヤケン先輩が上まで運びまずはひと段落。次は山科先生が次のモジュールを持ってくるまでないが、長机を上に乗ぶという仕事があった。それが終わるとぼーっと外を眺めていることができた。

それから30分くらいたつと山科先生が戻ってきた。

「さあ。シナ先生が来たぞー。行くぞー。野郎どもー。」

（中には野郎じゃない人もいるが．．．）

下に下りて諫早、空河、朝風を迎える。それが終わったら上に運び上げる。今度は白いケースだけ。どんどん上に運んで仕事を終了させる。これが終わると空河と朝風を連れてまた学校まで戻っていた。今度来るのはまた1時間後ぐらいだろう。

今回からの登場人物

山科雄哉（シナ先生）

誕生日 8月1日 血液型 AB型

身長 169cm

暁鉄道職員 富士史崇

50列車 文化財へ（後書き）

この「暁鉄道」は地元の「天竜浜名湖鉄道」をモチーフ。というかそのままです。ただ社名を変えてるだけにすぎません。

51列車 違いを述べよ

その間・・・、

「永島^{ながしま}さん。今度持ってくる車両なんかいるものありますか。」
「諫早^{いさはや}がそう聞いてきた。」

「えっ。いる車両。・・・。諫早^{いさはや}って何持ってたっけ。」

「223系の2000番台のパンタを全部シングルにしたやつと223系6000番台の網干^{あほし}と宮原^{みやはら}。221系のモーターぶち抜いたやつ。後は313系の2500番台と211系5000番台。813系と285系「サンライズエクスプレス」14両とキハ85「ひだ」と383系「しなの」ですけど。」

全部どういのかはわかる。

「やっぱりエントリーは宮原^{みやはら}の223系6000番台かなあ。また8両でお願い。後は・・・。」

自分の中で考えを広める。

（いえには223系1000番台と2000番台の新快速^{しんかいそく}がそれぞれ12両である。だから223系のほうの問題はない。たけど大阪ならそれ以上も必要かあ。ならなおさら、207系と321系のエントリーも必要だけど、それは学校にあった。だから321系を持つてくる必要はない。他には253系「ネックス」とかのエントリーかあ。でも「ネックス」も学校の中にあったよなあ。ああ、待て。確か学校のは動かない。やっぱり家から持つてくるしかないかあ。後は寝台特急^{ブルトレ}軍^{ぐん}だけど・・・。何を持つてくるかなあ。迷うなあ。）

「あもう。他に必要なのは。」

「うーん。あつ。やっぱり網干^{あほし}の6000番台もエントリーして。」

「分かりました。じゃあ、自動的に221系もエントリーですね。」

「えっ。」

そう聞き返すとこの会話を聞いていた留萌^{るもい}が呆れたように話しかけてきた。

「永島ながしまはもうちょっと頭いいと思ってたけど、クソ天然じゃないか。いいか。網干あぼしにいる6000番台は性能を223系レベルから221系レベルの落としてあるの。そして、普段日常的に130出して新快速しんかいそくの仕業には就かずにもっぱら普通で運用されてるわけ。その熱愛キスする相手が221系なの。」

（キスはキスでも熱愛って・・・。）

（熱愛キスかあ。うまいこと言うかも留萌るもいさんって。）

「あっ。そうだった。思い出した、思い出した。」

「やけに223系に詳しいなあって思ってたけど詳しいのは1000番台と2000番台だけなのか。」

「いやあ。ほとんどの車両はどこがどう違うくらいしか分かんない。」

（こいつに313系の違いを行ったらパンクするよねえ。）

「だから100系も食堂車がついてたX編成エックスと小窓の試作車とカフェテリアのついたG編成ジーとダブルデッカー4つのV編成ブイと6両のK編成ケーと4両のP編成ピーがあることぐらいしか知らない。」

（・・・。十分知ってるじゃないか。100系だけでそれくらい知ってれば一時はOKだよ。）

「じゃあ、永島ながしま。当然のことを問うけど14系と24系の違いって何かわかる。」

これは寝台客車のことだ。

「14系は分散電源方式で、24系のほうは集中電源方式。」

「・・・。なら481系と483系と485系と489系の違い。」
すべて特急車両。そしてすべての形式において同じ顔をした車両がある。

「そりやもう簡単。481系が交流20000ボルトの60ヘルツで、483系が50ヘルツ。485系は60ヘルツと50ヘルツ両方に対応してて、489系は峠越えの時にEF63と協調運転するための機器が485系に追加されてること。」

「・・・。なら、ED75の700番台とED79の違い。」

「えっ。」

これは知らない。そもそもED75の700番台って何……。

「うーん。ATCエーティーシーがついてるかついてないか……。」

「……。ぶっちゃけたな。でも、言ってることは間違ってるわ。」

（さすがにEF65のP型とF型の違いまで言ったらわからないかなあ。）

「私が見る限り、少しは車両知識あるみたいだわ。基礎レベルの。」

「まあ。ナヨン先輩と話して詳しくなったようなもんだし。最初は313系の番台区分なんか言われても全然わからなかったけどなあ。でも今なら少しは分かるようになったおかげさまで。」

（こいつ。いったい何に詳しい。）

「とごめん。話脱線しすぎたなあ。」

僕は諫早いさはやとも話に戻した。

「じゃあ、家から持ってくるのは6000番台の網干あぼしと221系の網干あぼしと6000番台の宮原みやはらでいいんですね。」

「ああ。それでいいよ。」

諫早いさはやとも一件はこれで終了した。

「永島ながしま。」

この話が終わったら今度は木ノ本きののもとだ。

「何。」

「私これ買ったんだけどさあ。」

と僕にKATカトOの車両ケースを見せた。横に書かれている文字は「EF510-500番台 北斗星色」ほくとせいしよく。

「あっ。お前これ買ったんだ。」

「うん。使うかなあって思ってた。」

（これで家から「カシオペア」を持ってくる必要はなくなったなあ。持ってくるとすればEF81-133号機の「北斗星1号」ほくとせいし 札幌行さっぽろきのほうか。）

「ああ。出来れば使いたいね。」

「で、そのためにこれをくみ上げてほしいんだけど。」

と言ってきた。ということはこれの前面には4つの小さな穴が開いているということだ。

「しょうがねえなあ。でも、いまピンセットみたいなのないし、明日学校で渡すでいいか。」

「・・・。それでいいよ。」

木ノ本きのもとの了承を得たのでこれは家に帰って組み上げることにした。でも、まだ家には帰れない。次の仕事をシナ先生が持ってくるからだ。

それから50分後。シナ先生の運転するバンが到着。時間は5時を過ぎている。だんだん外も暗くなってきている。そんな中でも作業をする。白いケースに入ったモジュールを2階に上げて作業終了・・・ではない。まだ仕事がある。今度はさつき運び上げた机を並べる番。モジュールを運び込んだほうの机を凹おうの形にその隣を四角い形状にする。さつき運び込んだ机とは別に最初からここに置いてあった机もある。その机も一緒に並べる。またその作業の最中に佐久間さめがいと醒ヶ井さめがいは運び込んだ階段のところに「いらっしやいませ」の文字を張りに行った。はり終わったようさくまで佐久間たちが戻ってくるか、変に笑っている。

「どうした。」

「ちよつと永島ながしま来てみ。」

佐久間さくまに促されて階段の下まで降りてくる。すると上を見ると言われたので上を見てみた。すると「いらっしやませ」はさくま「らずしやいませ」になっている。

「なんじゃこりゃ。これじゃあ寿司屋じゃん。」

「だろ。やっぱりお前もそう思うだろ。」

（これで笑ってたのかよ。）

そんなこんなで18（6）時。

「あー。暑いー。」

醒ヶ井さめがいがブレザーをパタパタ動かして空気を入れ替える。制服の中

に熱がこもっているのだ。

「じゃあ、野球拳でもする。」

「・・・。じゃあ、最初はグー、ジャンケンポン。」

結果は醒ヶ井さめがいの負け。その後5連戦やって・・・、

「おい。早くパンツ1枚になれよ。」

「醒ヶ井さめがいここで脱ぐのか。それはもう変態だぞ。」

「あんたのパンツ1枚の姿なんか見たくないわ。」

「もういいんだよ。十分涼しくなったわ。」

その格好だが、ブレザーとワイシャツ以外脱いでいない。

「ねえ永島ながしま。醒ヶ井さめがいがパンツ1枚になってくれないんだけど。」

「女子の前でそんな格好できるか。」

（そういえば。この部活って女子いたんだな・・・。）

「醒ヶ井さめがい。ルールはちゃんと守らなきゃダメでしょ。」

「守りも何限度っていうもんがあるだろ。」

時間がだんだん19（7）時に近くなっていく、すると・・・、

「ねえ、アド先生。飯おごってくださいよ。」

「えっ。あ、もうこんな時間だ。」

時計を見たサヤ先輩が時間に驚いている。

「へえ。久しぶりにこの時間までいたような気がするなあ。」

アヤケン先輩も1学期の時間が懐かしそうな顔をした。

「アド先生飯ー。」

善知鳥うしろ先輩いう。それに続いてサヤ先輩もアド先生に飯をおごるよう迫った。

「・・・。」

善知鳥うしろ先輩もサヤ先輩も「アド先生飯ー。」と言いながら手を動かして作業を進行されている。何とも器用な先輩たちである。

「飯ーってなんだい。まずは仕事をしろ。仕事を。」

「やってますよ。だから飯ー。」

さっきから善知鳥うしろ先輩は飯ーとしか言わなくなってきた。そのあとは5秒に1回の単位で「アド先生飯ー。」と繰り返している。

僕らもそれに便乗して、

「アド先生。飯ー。」

佐久間が乗ってさらに留萌と木ノ本も乗った。それにつられるような形で僕も乗る。

なんだかんだで19(7)時。

さっきの攻撃が聞いたのかは知らないがアド先生のおごりで夕食のラーメンを食べた。その後……。

「永島君。君は遠江急行の鹿島駅に送ってあげばいいかなあ。」と聞いてきた。

「いえ。遠江急行の芝本まで送ってってください。」

「……。はい。分かりました。じゃあ、当日は遠江急行の芝本に迎えにすればいいですか。」

「いえ。その時は遠州鉄道の芝本駅の近くにサークルエーがありますからそっちにお願いします。」

「分かった。ちょっとまたあとでまとめてくるから、詳しいことはその時でいいか。」

「はい。」

しばらく走って遠江急行芝本駅に来る。ここに自転車置いてあるのだ。車を降りて、

「お疲れ様です。」

「永島。お疲れー。」

「永島。EF510。忘れないでよ。」

全員に見送られて、次は見送って別れた。

51列車 違いを述べよ（後書き）

このレも濃い。

模型の仕業を考える場合、妥協してはいけません。そもそも、模型
いじっている中で妥協して走らせているものほど格好悪いものはな
いのです。

52列車 マイナススパイラル

その日。家に帰ったらすぐに離れに引きこもった。ピンセットを片手にそして木ノ本のEF510きのもと北斗星色ほくとせいしよくを持って。

「ああ。面倒だなー。」

そう言ってクリアケースのふたをかける。中には衝撃吸収のマット。俗にいうプチプチマット。その下に青色の機関車が入っている。真ん中には流れ星。そして「EAST JAPAN RAILWAY イースト ジャパン レイルウェイ COMPANY」と書かれている。流れ星の隣にはほんの数ミリの穴が開いている。ここにナンバープレートをはめ込む。ほとんどの鉄道模型はこのようなになっていて、この穴に適当な部品をはめ込むという方式。当然部品もとても小さい。くしゃみとかで吹き飛ばしたら一巻の終わりである。

そんな部品をカッターで切りだして、側面と前面の横に長い穴にナンバープレートをはめ込む。これくらいは説明書を見なくても分かる。ナンバーはEF510-501号機。家にあるEF510が502号機だからだ。他にも505号機と506号機のナンバープレートもあったがなんか気に食わなかった。

ナンバーをはめ込み終わると次は前面に取り付ける手すりだ。この頃の模型はこの小さな部分まで別パーツになっているものが多い。そしてそのほとんどはユーザーが付ける。なくしてもいいように呼びの同じパーツがあるが、なくしたら一巻の終わりであることに変わりはない。慣れてない人ならこれには1分くらいかかる作業。これを15秒くらいでやってのける。全部で4つ。しめて1分だ。

「ふう。出来たー。」

すべてはめ終わるとため息が出た。本当にしんどい作業なのだ。今までにこういう経験は少なくとも20回ある。1回目はよく覚えてる。「寝台特急あさかぜ」の牽引を担当するEF66の前面の手すり、ナンバープレート、ヘッドマーク、そして模型の連結器「カ

プラー」を見栄えのいいものに換装かんそうしたことだ。2回目は「あさかぜ」の客車24系のカプラーすべてを見栄えのいいカプラーに換装かんそうしたこと。3回目は……。言っていたらきりがないか……。なお、この作業にはふつうに10分、5分はかかる作業。それを14両分やっていたら1時間などあつという間に立ってしまう。それほどツボになる作業ではないが、そうしないとあとあと困るのだ。「さてと。」

そう言っあかつきて椅子から立ち上がった。机の上に置いてあるごみを捨てて、次は暁あかつきフェスタに持っていく模型の選定である。

車両庫に言っしんかんせんて自分が走らせたい車両を決める。もちろんのことだが新幹線を持っしんかんせんていくことはできない。持っしんかんせんていける新幹線車両は400系「つばさ」とE3系「こまち」と「つばさ」。そしてEアイast Iだけだ。それ以外が在来線走るときは廃車か新車投入の時だけだ。

「えーと、「ネックス」と「北斗星ほくとせい」と……。」

箱の中をぐるっと見回してこの中にはもう目的のものが無いことを確認する。次の箱に行っしんかんせんてキハ181系「特急はまかぜ」を、次の箱にいつて「寝台特急はやぶさ」をその次の箱で223系2000番台を……。

「あれ……。」

ふと声が出た。

（あれ。1000番台どこだ。）

ふつうならこの箱に入っしんかんせんているはずの223系1000番台がどこにも見当たらないのだ。他の従兄の箱を探してもどこにもない。あつたのはコキ100形の1300トンt級貨物だけ。

（どこにあるんだよ。223系1000番台の新快速米原方面長浜行き12両……。仕方ない。1000番台の新快速姫路行き12両で我慢……。あれ……。新快速長浜行きだけじゃない。姫路めじ行きもない。駿兄しゅんちゃんのやついっしんかいそくながはまたどこにしまったんだよ。まさか、僕には走らせたくないから隠したのか……。いや、そん

なこと今までなかったか。それとも、自分の箱にしまっていないだけかなあ。」

そのあと30箱ある箱をすべて出して探してみたがどこにも駿兄しゅんちゃんの223系1000番台新快速姫路行きと米原方面長浜行きまいばらほうめんながはまは出てこなかった。

翌日。

「……。」

「永島。どうした。目の下にクマできてるぞ。」

宿毛すくもが心配そうに聞いてくると僕は顔を机に伏せた。

「い……いえにあるはずの223系1000番台が見つからない
1。」

（……。それだけ。それだけでこんなに落ち込むのか。）

「坂口さかぐちに聞いてみたらいいんじゃないか。あいつなら何か知ってる
だろ。」

「そうだな。そうしよう。」

「永島。携帯ながしま ケータイもってこい。」

前には四ツ谷先生よつやがそれをよこせというそぶりをしている。

（バカ……。）

「ホウエ。」

この声は自分でもどこから出たのか疑問に思った。

1時間後……、

「あー。今日俺ついてないー。」

「……。」

宿毛すくものほうはなんて話しかければいいのかわからないみたいだ。

（こういう時坂口さかぐちならなんて声かけていいか分かんだよなあ。あいつってこういう永島ながしまになんて会話するんだろうなあ。）

何かいい話ができるかどうか携帯ケータイを開いてうお座の占いを見てみた。
全体12位。

（ダメだ。とても話せるような順位じゃない。）

さらに話題に困った。

放課後・・・、

「ごめん。昼言い忘れてたけど、EF510出来た。」
そう話しかけてきたのは木ノ本きのもとだった。

「あつ。」

カバンの中に手を突っ込んでみる。今度はどこにもクリアケースが見当たらない。

「・・・。」

「忘れてきたのか。」

小さくうなずいた。

「そう。じゃあ、明日持ってきてくんない。」

「ああ。分かった。」

そう言っ僕は職員室に向かった。

（今日のあいづくらいなあ。どうしたんだろう。）

いつもと反応が違なう永島ながしまが少し不気味に思えた。

職員室けいむ經由しばもと芝本方面中瀬行き。家に着くと荷物を部屋に置き、私服に着替えて離れに行こうとした。かれこれ10年使っている勉強机の上に置いてある離れの鍵を持って離れに歩いて行った。

離れに來ると、中から物音がする。この離れの鍵を持っているのは宗一そういちじいちゃんたかのりと隆則父さんと駿兄しゅんちゃんと僕しゅんの4人。じいちゃんは遠江急行とうきゅうの経営で忙しいし、父さんも同じように忙しい。なら・・・。

「開いてるぞ。」

中からその人の声がする。ドアをあると中に駿兄しゅんちゃんがいた。

「よしす智とも。久しぶりだな。」

「駿兄しゅんちゃん今日は休みなの。」

「ああ。だからここにいろんじゃねえか。」

「・・・。」

さっきから「チャチャ。チャチャ。」と模型が線路の継ぎ目をたたいている音と「シャー。」と線路の家を走っている音がする。その方向に目を向けてみると、シルバーの車体の車両が走っている。そ

れだけで僕にはこれがなんなのか分かった。

「1000番台(223系)。」

「ああ。ようやく戻ってきた。こいつも長く出張してたなあ。」

「やっぱり駿兄ちゃんだったんだ。昨日探したけどなかった。」

「なんだ。使うつもりだったのか。そりゃごめん。こいつも今日パワーアップして帰ってきたばっかだから。」

「パワーアップ。」

その言葉が気になった。駿兄ちゃんの手持っている1000番台は全車に室内灯を装備している。それに方向幕もすべて貼り付けてある。もうパワーアップする余地はないはずだ。

「どこがどうパワーアップしたっていうの。」

「だよなあ。ふつうだったらもうパワーアップするところはないよなあ。でもあったんだよ。一か所。」

そういうと駿兄ちゃんは1000番台を止めて、4編成あるすべてのクハ222形(制御車)とクモハ223形(制御電動車)を背中合わせに並べて、

「今からパワーアップしたところを見せてやるよ。」
と言った。

いったいどういうことだろうか。クハ222が4両並んでいるほうに回ってみる。駿兄ちゃんがそれを確認して、

「これがパワーアップしたところだー。」

と言ってコントローラーのマスコンと常点灯を一気に最大出力にした。

「あっ。」

その違いにはすぐに気付いた。これまで黄色いライトだったクハ222のヘッドライトが本物と同じように黄色と白にはっきり分かれていたのだ。

「すぐに分かるだろ。これまでのライトとはもうおさらばだ。全部LEDに変えてもらったからなあ。」

「LEDって。これ駿兄ちゃんが家に持って帰って改造したの。」

そういうと駿兄ちゃんしゅんは笑って、

「そんなこと俺おれがするかよ。これ俺がネットで見つけた模型店の人にやってもらったんだ。1両1000円で。それが8両で8000円。送料とかも合わせて1万以上したぜ。」

(だから。だからなかったんだ。)

「それってどこの模型店。」

「大阪おおさかのやつだよ。ていうかこの人起用だよなあ。8両もこうしてくれたんだから。これで運転うんてん楽しもうぜ。」

「・・・。なんで教えてくれなかったんだよ。」

「本当はびっくりさせようと思ってな。」

「家に1000番台がないだけでも十分びっくりしたよ。」

「ハハハ。まあ、入って来い。久しぶりに二人で運転うんてんやろうぜ。」

僕はすぐに中に入った。

「うん。もちろんそのお詫わづらひびとして1000番台走らせるからな。」

「はいはい。じゃあ、俺は813系でも走らせるか。」

「直流の隣に交流の車両が走ってないでしょ。」

「模型だからできるでいいんじゃない・・・分かったよ。じゃあ221系にしとくわ。6両しんかいそくたす6両で新快速。」

「そんな組み合わせあるんですか。」

「昔はあったんだろうぜ。昔は。」

「じゃあ、2000番台も走らせる。その隣に「雷鳥らいちよう」走らせてやる。」

(ここは草津くさつから京都きょうとの間かよ・・・。いや。山科やましなから京都きょうとかあ。短みづかっ。)

そんな感じで車両を並べる。走る線路は外側から485系「特急雷鳥ちよう」、223系2000番台新快速姫路行き、221系快速米原まいばら行き、223系1000番台新快速米原方面長浜行きしんかいそく。それを30分間展開して・・・、

「満足したか。」

「うん。久しぶりにストレス発散したー。」

（そりゃ、よかったな。）

「で、2000番台（223系）の付属編成の行先を湖西線經由敦賀^{るが}行きにして、基本編成を近江今津^{おうみいまづ}行きにしてほしいんだけど。」

「はっ。お前。これ変えるだけでも結構時間かかるんだぞ。」

「こら。そういうこと言わない。」

（チェー。智^{とも}に付け込まれたなあ。当分はこれで雑用で扱われそうだ。）

「この野郎。後で覚えとけよ。」

「ヤダー。」

これで1000番台の一件も落着。次は暁^{あかつき}フェスタだ。

52列車 マイナススパイラル（後書き）

今まで出てきた脇役のフルネームを考えました。

たまな

玉名

えみ

恵美

しんしろ

たかあき

新城

隆彰

のぞみ

ひかる

希望

輝

わだやま

としひこ

和田山

俊彦

報告します。お気に入り登録が2になりました。なかなか調子がい
いとは言えませんが、頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0514x/>

MAINE TRAFFIC

2011年11月21日16時45分発行